

日本語教育文法における「言いさし」の研究

「一橋大学審査博士学位論文」

「2016年10月」
一橋大学大学院言語社会研究科
博士後期課程
LD122005
田昊

目次

第一部 本研究の前提.....	1
第1章 序論.....	2
1.1 研究背景.....	2
1.2 日本語教育現場における「言いさし」.....	3
1.2.1 中国日本語教育現場における「言いさし」の扱い方.....	3
1.2.2 市販の日本語教科書における「言いさし」の「けど」類の扱い方.....	4
1.3 研究目的及び課題.....	5
1.4 研究方法.....	6
1.4.1 本研究の研究方法の特徴.....	6
1.4.2 研究データの概要.....	6
1.5 本論文の枠組み.....	8
第2章 本研究における「言いさし」の捉え方.....	12
2.1 話し言葉の「文」.....	12
2.2 従属節で終了する表現.....	15
2.3 「言いさし」の位置づけ.....	19
2.4 「言いさし」の形成要因.....	26
2.5 本研究の研究対象.....	30
2.5.1 本研究で取り上げる「言いさし」.....	30
2.5.2 「言いさし」の種類.....	33
2.5.3 研究対象の範囲.....	35
2.6 本章のまとめ.....	41
第3章 日本語教育文法と「言いさし」に関する先行研究.....	42
3.1 日本語教育文法の概観.....	42
3.1.1 「日本語教育のための文法」から「日本語教育文法へ」.....	42
3.1.2 日本語教育文法に関する本論文の立場.....	43
3.2 「言いさし」に関する先行研究.....	46
3.2.1 定義・機能について.....	46
3.2.2 出現理由について.....	53
3.2.3 学習者の習得について.....	54
3.3 本章のまとめ.....	55

第二部 コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察.....	57
第4章『名大会話コーパス』における「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴.....	58
4.1 導入.....	58
4.2 先行研究.....	59
4.3 研究目的及び課題.....	60
4.4 考察対象.....	60
4.5 考察データ.....	61
4.6 データの分析.....	62
4.6.1 「けど」類のバリエーションの使用頻度.....	62
4.6.2 接続助詞の「けど」類及び「言いさし」の「けど」類.....	63
4.6.3 「言い終わり」及び「言い残し」の使用実態.....	65
4.6.4 各接続助詞による「言いさし」.....	67
4.7 データの考察.....	68
4.7.1 「言いさし」の「けど」類の発話機能.....	68
4.7.2 「言いさし」の「けど」類との共起頻度の高い述語.....	69
4.7.3 「けど」類と「のだ」.....	72
4.7.4 共起する終助詞.....	74
4.8 日本語教育への示唆.....	75
4.9 まとめおよび今後の課題.....	76
4.10 本章のまとめ.....	77
第5章 現代中国語コーパスにおける中国語の「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴.....	78
5.1 導入.....	78
5.2 中国語の複文の分類.....	79
5.2.1 中国語の複文.....	79
5.2.2 転折複文.....	79
5.2.3 因果複文および無標識複文.....	80
5.3 先行研究.....	81
5.4 中国語における「けど」類の「言いさし」の使用実態.....	82
5.4.1 考察の枠組み.....	82
5.4.2 データの分析.....	84
5.4.3 まとめ.....	91

5.5	中国語における「有標識言いさし」および「無標識言いさし」	91
5.5.1	「有標識言いさし」および「無標識言いさし」	91
5.5.2	研究目的及び課題	92
5.5.3	用語の規定	93
5.5.4	自然会話における日中両言語の「因果言いさし」の発話機能	94
5.5.5	「有標識因果言いさし」と「無標識因果言いさし」との待遇上の特徴	99
5.5.6	まとめ	104
5.6	本章のまとめ	105
第6章	『日本語話し言葉コーパス』における「言いさし」の音声的な特徴	106
6.1	導入	106
6.2	先行研究	107
6.3	考察対象	108
6.4	研究課題および仮説	109
6.5	研究方法	111
6.5.1	考察データ	111
6.5.2	CSJ-RDBにおける「けど」類の抽出	115
6.5.3	継続型・終了型の分類	115
6.6	結果および考察	116
6.6.1	CSJにおける2種類の「けど」類の生起数	116
6.6.2	発話の階層構造 Break Index (BI) の分布	118
6.6.3	句末音調の割合の分布	119
6.6.4	発話末の下降 (final lowering)	120
6.6.5	句末の長さ	123
6.7	まとめおよび日本語教育への示唆	133
6.8	本章のまとめ	133

第三部 「言いさし」の知覚処理状況に関する実験調査.....	135
第7章 中国人学習者における「言いさし」の視覚情報処理状況に関する調査	136
7.1 導入.....	136
7.2 先行研究.....	136
7.3 研究課題.....	137
7.4 調査の仮説.....	138
7.5 調査の基本情報.....	139
7.5.1 調査方法.....	139
7.5.2 調査対象.....	140
7.5.3 調査時期・場所.....	140
7.5.4 調査内容.....	141
7.6 調査の結果.....	143
7.6.1 記述式質問調査の結果.....	143
7.6.2 フォローアップ・インタビューの結果.....	148
7.7 結果に関する考察.....	148
7.8 日本語教育への示唆.....	151
7.9 本章のまとめ.....	151
第8章 中国語母語話者が母語での「言いさし」の認知・産出状況に関する調査	152
8.1 導入.....	152
8.2 断り行為における「言いさし」.....	153
8.3 先行研究.....	155
8.3.1 ポライトネス理論に関する先行研究.....	155
8.3.2 「言いさし」に関するポライトネス視点からの先行研究.....	155
8.3.3 断る言語行為に関する先行研究.....	157
8.4 研究目的及び課題.....	158
8.5 研究方法.....	158
8.5.1 予備調査.....	158
8.5.2 本調査.....	159
8.6 結果の分析・考察.....	164
8.6.1 「言いさし」の全体的な使用頻度.....	164
8.6.2 相手と関係性による影響.....	166
8.6.3 用件の内容による考察.....	169
8.7 日本語と中国語における「言いさし」の相違.....	171
8.8. まとめおよび日本語教育への示唆.....	173

8.9 本章のまとめ.....	174
-----------------	-----

第9章 中国人学習者における「言いさし」の聴覚情報処理に関する実験	175
---	------------

9.1 導入.....	175
9.2 先行研究.....	176
9.3 研究課題.....	177
9.4 実験仮説.....	178
9.5 実験の流れ.....	179
9.5.1 発話データの収集.....	179
9.5.2 ExperimentMFC ファイルの準備.....	179
9.5.3 実験の実行.....	180
9.6 実験結果の分析.....	183
9.6.1 一回目及び二回目の回答結果統計.....	183
9.6.2 学習者の正答率.....	184
9.6.3 日本語母語話者の知覚特徴.....	185
9.6.4 学習者と母語話者との判断のずれ.....	188
9.6.5 学習者の誤判断から見る知覚特徴.....	190
9.7 考察.....	195
9.7.1 母語話者の知覚状況の考察—仮説 1 の検証.....	196
9.7.2 学習者による実験結果の考察—仮説 2 の検証.....	197
9.7.3 習熟度と知覚判断との関係に関する考察—仮説 3 の検証.....	201
9.8 まとめおよび日本語教育への示唆.....	202
9.9 本章のまとめ.....	204

第四部 本研究のまとめ.....	206
-------------------------	------------

第 10 章 結論および日本語教育への示唆.....	207
10.1 本研究のまとめ.....	207
10.2 日本語教育への示唆.....	210
10.3 今後の課題.....	216
謝辞.....	218
付録.....	220
本稿の各章と既発表論文・口頭発表との関係.....	227
引用文献.....	228

第一部 本研究の前提

第一部では、本研究の目的、先行研究と本研究の位置づけおよび日本語教育現場における「言いさし」の扱いについて述べる。

第1章

序論

本章では、本研究の研究対象と研究目的について述べた上で、本論文の構成を説明する。

本章の構成は以下の通りである。まず、1節では研究背景を提示する。2節では日本語教育現場における「言いさし」を紹介する。3節では研究目的及び課題を述べる。4節では研究方法を提示する。5節では本論文の枠組みを述べる。

1.1 研究背景

近年、日本語教育において、「コミュニケーション」というキーワードが頻繁に使われるようになっており、「学習者の主体性を重視し、学習者が日本語を使って生活することができるための日本語教育」という新しい発想が、次第に認められるようになってきた。それに応じるように、文法研究においても、「日本語学から出発した文法研究」が批判されるとともに、日本語教育における文法研究の在り方に関する論文が数多く発表されている。今研究は、「日本語教育の役に立つ」文法研究(庵 2011a,2011b,2012)を目指して「言いさし」の「けど」類¹を取り上げ、統語的・意味的・音韻的な面から考察を行う。

「言いさし」は、(1)のように、日本人母語話者の日常会話において頻出する表現であり(岡田 1991、水谷 2001、白川 2009)、「使えなかったんですけど」という発話は、一見不完全文であるにもかかわらず、最後まで言い切らなくても意味はきちんと伝わる表現である。また、聞き手のAは、言語化されていない意図を察し、「じゃ、よかったじゃん。」という発話をしており、円滑なコミュニケーションが行なわれている。

- (1) A: え、スーツ着て撮ったの、ちゃんと。
B: あの、ほんとは就職ガイダンスの時のあれに使おうと思ったら、スピード写真禁止だったんで。
A: あ、そうなんだ。
B: はい。使えなかったんですけど。
A: じゃ、よかったじゃん

(名大会話コーパス)

¹ 「が」・「けど」・「けれど」・「けども」・「けれども」を含む。

このような表現は、コンテクストに依存した表現であり、日本語母語話者であればその場の状況などで相手の言語化されていない意図を読み取ることができるが、異なる文化背景で育った日本語学習者にとっては、理解するのは困難である。

また、現在の日本語教育現場において、学習者にとっては、命題のみ構成された表現の習得よりも、文末、あるいは発話末の表現を適切に使用することのほうが難しいことが指摘されている（池田 1995、水谷 2001）。特に日本語学習者の中で一番数が多い中国人日本語学習者(国際交流基金「2009年海外日本語教育機関調査」)は、文末表現、発話末表現の適切な使用が特に困難であるとされている（彭 2004）。

さらに、日本語文法教育に関する研究において、「言いさし」は日本語学習者にとって習得が難しいと指摘されており、教授法の重要性も主張されるようになってきている（山本 1989、生駒・志村 1993、柏崎 1993）。また、文法シラバスの視点からの指摘もみられる。小林（2005）は、これまでの文法シラバスが、実際のコミュニケーションでの頻度や用法とかけ離れていたことを指摘し、「言いさし」、「話の切り出し」、「言いよどみ」とった話し言葉に必要な表現について、「それらは、文法項目を教えるために付随的に取り入れられているだけであり、話しことば教育のシラバスとして、体系的に整理されているわけではない」（2005:39）という問題点を追及した。その上、「このような現状を改善し、効果的な教育を行うためには「教え方」を工夫するだけでなく、「教える内容」について抜本的に見直すことが必要である」（同上）と指摘している。

そこで、上記のような問題は、石川(2005)で「文末表現「けど」等の研究がまだ充分とは言えない」と指摘されているように、日本語教育現場における「言いさし」に関する分析が十分に進んでいないということを意味しているといえる。

1.2 日本語教育現場における「言いさし」

1.2.1 中国日本語教育現場における「言いさし」の扱い方

中国においては、数多くの大学で日本語教育が積極的に行われているものの、日本語の運用力（特に会話力）は十分ではないというのが現状であろう。学習者からは、日本語でコミュニケーションを行う際に自分の意図をスムーズに伝えることができず、日本語によるコミュニケーション能力を高めたいという声も以前にも増して出てきている。

特に、日本語において述語が存在する文末は極めて重要な部分であるため、中国の日本語教育の現場では、文末まで明確に言うことを要求されることが多い。最後まで言い切らなかったり、ポーズを入れたりすると、「言語の適性が低い」「言語能力が不十分である」と言われる学習者も多く見られるため、多くの中国人日本語学習者にとって文末の習得はかなり重要であるといっても過言ではない。

さらに、多くの中国人日本語学習者にとって難しいと考えられる大きな理由は、中国語に「言いさし」にあたる言い方の形式が違うため、中国人学習者が日本人

母語話者と会話する際に、日本語母語話者は発話を中止してターンを渡したつもりでいるのに対し、中国人学習者は発話の続きがまだあると判断してじっと待っているケースもある。

よって、本論文は、中国の大学での日本語学習者の「話す」能力を高めることに繋がる試みとして、「言いさし」について分析し、その実態を明らかにする必要がある。

1.2.2 市販の日本語教科書における「言いさし」の「けど」類の扱い方

このように、「けど」類の「言いさし」が学習者に十分使用されていない原因を探るべく、教科書における「『言いさし』の『けど』類」の扱い方を調査した。なお、教科書の選定基準は次の通りである。まず、初級は、岩田（2011）で取り上げられている10冊の教科書と、中国でよく使用された教科書2冊、合わせて12冊を対象とした。一方、中級と上級は、教育現場でよく使われている教科書を取り上げた。

その上、野田（2014:3）が「日本語教育では、言語の構造や体系に関するものであるかどうかではなく、実際の言語活動にとって重要かどうかを基準に教授内容を決めるべきなのに、そうになっていないことが多い。」と指摘しているように、市販の日本語教科書の初級12冊、中級2冊及び上級2冊を調べた結果、「言いさし」の「けど」類はいずれも教科書においても文法項目として取り上げられていないことがわかった。なお、会話文の中で「言いさし」の「けど」類が使われていない教科書も見つかった。（『初級日本語 げんき』、『日本を話そう—15テーマで学ぶ日本事情』）

表1-1は考察した市販の日本語教科書をまとめたものであり、表1-1から、「言いさし」の「けど」類は、日本語教科書の会話文においてわずかに提示されているものの、特に日本語母語話者の使用頻度が極めて高い「けど」類が文法項目としてはあまり取り上げられていないことがわかる。これは、中国で日本語を習得した学習者が上級まで行っても「けど」類による「言いさし」をうまく使いこなせない現象と関係があるのではないだろうか。

表 1-1 市販の日本語教科書における「けど」類の「言いさし」の扱い方

	教科書	文法項目	会話文
初級	『語学留学生のための日本語』	×	○
	『初級日本語』	×	○
	『初級日本語 げんき』	×	×
	『新文化初級日本語』	×	○
	『中日交流標準日本語』	×	○
	『はじめのいっぽ』	×	○
	『日本語初級1 大地』	×	○

	『日本語初歩』	×	○
	『みんなの日本語 初級』	×	○
	『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE』	×	○
	『JAPANESE FOR EVERYONE』	×	○
	『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』	×	○
中級	『総合日語第三冊』	×	○
	『An Integrated Approach To Intermediate Japanese 中級の日本語』	×	○
上級	『人を動かす！実戦ビジネス日本語会話』		
	『日本を話そう—15 テーマで学ぶ日本事情』		

1.3 研究目的及び課題

Chomsky (1965:5) は、現実には産出される自然発話は、言い淀み、途中でのプラン変更など、言語運用に伴うエラーやノイズとみなされるような逸脱的現象が数多く含まれているため、言語能力を直接反映していないものとしてとらえ、文法研究の対象から排除すべきであると主張しているが、一見すると単なるエラーやノイズのように見えるそれらの現象も、決してランダムに生起しているわけではなく、それ自体一定の秩序のもとで生起していると Biber 他(1999)が指摘しているように、「逸脱的現象」である「言いさし」も一定の規則に従って使用されているのではないかと推測できる。

また、庵 (2000) で「教育文法にとって重要なことは、それをを用いて学習者が文を正しく産出できるように、規則が操作的に記述されていることである」と指摘しているように、本論文は、話し言葉において言語運用に伴うエラーやノイズとみなされるような逸脱的現象の「言いさし」に焦点を当て、そのうち一番使用が多いと考えられる「けど」類の「言いさし」を例にして、日本語教育の現場で使える形に記述することを目的とする。

具体的には、中国人学習者および日本語母語話者における統語的・形態的・意味的・音韻的な使用実態および知覚処理状況を明らかにして日本語教育の現場で使える形に記述して検証する。中心となる研究課題は以下の通りである。

- ① 「言いさし」の「けど」類が、日本人母語話者の実際の会話において、どのように現れているか。形態的、統語的、意味的、及び音韻的にどんな特徴があるか。接続助詞として使用される「けど」類とどんな相違点が見られるのか。
- ② 「言いさし」の「けど」類が、中国人母語話者の実際の会話において、どのように表れているか。
- ③ 「言いさし」の「けど」について、日本語母語話者と中国人学習者とが、それぞれどのように知覚しているのか。接続助詞として使用される「けど」

類に比べ知覚上にどのように判別しているのか。①でわかったルールは、実際に判別する際に検証できるのか。

最後に、「中国で現在のような形の本格的な日本語教育が行われるようになってからすでに 30 年以上になる。日本語学の成果にとらわれなくて、日本語教育の目的を十分に考えた教授内容を作り直すことが求められる時代になってきていると言える。」(野田 2014:4)と指摘されているように、本稿の研究成果が、中国の日本語教育への提案ができることを望んでいる。

1.4 研究方法

1.4.1 本研究の研究方法の特徴

森 (2011:14-43) は、日本語教育文法のための研究手法として、次の七つをあげている。

- ①. 日本語教科書調査
- ②. コーパス調査
- ③. 文法に関連する語彙の意味領域調査
- ④. アンケート調査
- ⑤. 言語使用調査
- ⑥. 実験調査
- ⑦. 統計的検定の考え方と方法

本論文は、森 (2011) が指摘している七つの研究手法のうち、「コーパス調査」「アンケート調査」、「実験調査」、「統計的検定の考え方と方法」を用いる。話ことばは時間の流れの中で一瞬にして消えてしまう音声によって表現されて書き言葉のような空間的な推敲は不可能である (佐藤 1994:70) ため、本研究では話しことばを中心に形態的・意味的・統語的・音韻的に分析する。

また、従来「言いさし」に関する研究では、小説の会話文やコミックのセリフ、あるいは劇やドラマのシナリオといった文芸作品を研究データとして用いるものが多くみられるのに対し、本論文では、「けど」類の「言いさし」がどのような「規則」にしたがって産出されているかを検討するために、発話産出の正確なタイミング、発話が埋め込まれている前後文脈、発話に伴うプロソディやパラ言語要素、音声的な特徴などを捨象せずに分析に含める必要があると考え、日本語の自然会話データを用いて分析を行う。取り上げる自然会話データは、現在日本語及び日本語文法教育研究で多く使用されているコーパスである。さらにコーパス研究が進んできた現在において、さまざまな言語資源が活用できるようになってきており、本稿は、その中でより幅広く使用されており、音声特徴も含まれる 4 つのコーパスをデータとして考察をすすめていきたい。

その上、自然会話に関する分析結果が明らかになったら、音声ソフト **praat** を

使用して聴取実験を設計し、その規則の適切さに関する検証および学習者の知覚処理状況を観察する。

1.4.2 研究データの概要

I. 名大会話コーパス

平成 13-15 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「日本語学辞書編纂に向けた子化コーパス利用によるコロケーション研究」(研究代表者:大曾美恵子)の一環として構築されたものである。首都圏、名古屋近辺、北海道、新潟などで録音された、初対面の人の会話から親しい者同士の雑談までが含まれ、約 100 時間、120 件の雑談を収録したコーパスである。それをデータとし、2002 年の C A S T E E L/J において発表されたコロケーション抽出ツールを改良した「茶漉一般公開版」を使って用例を抽出した。

II. 日本語話し言葉コーパス

丸山(2007:57-58)は「文法研究が話し言葉を対象とする場合、理想的な「文」はそもそも研究対象にはなり得ず、しかしそれでもなお、研究対象としてなるべく「文」に近い単位を取り出す必要があるというわけである。ここに、話し言葉の文法研究にとっての一つの壁がある」と指摘しているように、話し言葉を分析するには、「文」を超える範囲で捕らえることが適切ではないかと思われる。

また、「現代の書き言葉では、句点「。」で文の切れ目を示すわけだが、話し言葉では「。」に相当する位置に何か音声上の特徴がある」郡(1996)で指摘されているように、文の切れ目で現れる音声情報も考察必要があるだろう。

また、話し言葉において、明示的な文末表現以外に、文末に相当する意味的まとまりを持った単位に区切りながら発話していると考えられており、丸山他

(2006)は、原則として「節(clause)」の終端位置で発話分割することによって得られる文法的、意味的まとまりを有する言語的単位、すなわち「節単位」を提案している。

そこで、本論文の分析資料として、「文」という概念の代用として談話レベルの情報を付与するための基本単位として設計された「節単位(Clause Unit)」という独自の言語単位を設計し、国立国語研究所、通信総合研究所、及び東京工業大学の三者が共同で開発した日本語自発音声の音声言語コーパス、『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese:以下 CSJ と記す)を用いた。

CSJ は、約 661 時間、752 万語の日本語音声からなる自発音声が含まれ、1417 人の話者による 3302 の「講演」から構成されている(インタビューのような対話音声は 10%である)。その大半は学会講演と模擬講演と大別される自発的な独話である。学会講演とは日常的なテーマ(「今までの人生を振り返って楽しかった出来事」、「あなたの住んでいる町や地域について」など)に関する 10 分程度のスピーチを録音したものである。一般的に学会講演では改まったスタイルの発

話が多く、模擬講演では比較的リラックスした発話が多い。すべての講演は「転記テキスト」によってフィラーや語断片、不明瞭な発音、咳などを含むすべての言語・非言語情報が忠実に書き起こされている。

1.5 本論文の枠組み

本論文の枠組みは、以下の通りであり、フローチャートにまとめたものが図 1-1 である。

本研究は、四つの部分に分けて展開してきた。第一部は、「第 1 章」、「第 2 章」、および「第 3 章」からなり、第二部は、「第 4 章」、「第 5 章」、「第 6 章」からなり、第三部は、「第 7 章」、「第 8 章」、「第 9 章」の三章からなり、第四部は、第 10 章である。各章の概要は、次の通りである。

第一部 本研究の前提

まず、「第一部 本研究の前提」には、以下のような内容が含まれている。

第 1 章では、日本語話し言葉における「言いさし」の多用と日本語教育現場における「言いさし」の扱い方を述べ、本研究の動機と問題の所在を指摘し、研究目的及び課題を記述した上で、本論文の構成、概要、本研究の意義を述べる。

第 2 章では、本研究の前置きとして、「言いさし」の捉え方、定義、範囲、分類、形成理由、文法論・意味論・音韻論における位置付けについて具体例をあげながら示す。それから、「言いさし」の形成要因を論じ、「言いさし」の文法論における位置付けを述べた上で、本研究の研究対象を明示する。

第 3 章では、「日本語教育文法」及び「言いさし」に関する先行研究を述べる。具体的に、「日本語教育文法」に関する研究をまとめた後、まず、定義・機能に関する先行研究を明確にし、それから出現理由に関する先行研究を述べ、最後に、で学習者における習得状況に関する先行研究をまとめる。

第二部 コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察

次に、「第二部 コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察」には以下のような内容が含まれている。

第 4 章では、日本語における「言いさし」の「けど」類の統語的・意味的な使用実態を明らかにするために、『名大会話コーパス』を使用して考察を行う。

第 5 章では、中国語における「言いさし」の「けど」類の使用実態を明らかにするために、日本語の会話文に使用された「けど」類による「言いさし」は、中国語において、同じ文脈でどのように扱われているかについて中国語のコーパスを使用して考察を行う。

第 6 章では、日本語における「言いさし」の「けど」類の音韻的な使用実態を明らかにするために、『日本語話し言葉コーパス』を使用して「けど」類の「言

いさし」の音声的な特徴、「接続助詞」の「けど」類との音韻的な相違を考察する。

第三部 「言いさし」の知覚処理状況に関する実験調査

さらに、「第三部 中国人日本語学習者に対する「言いさし」の認知処理状況に関する実験調査」には以下のような内容が含まれている。

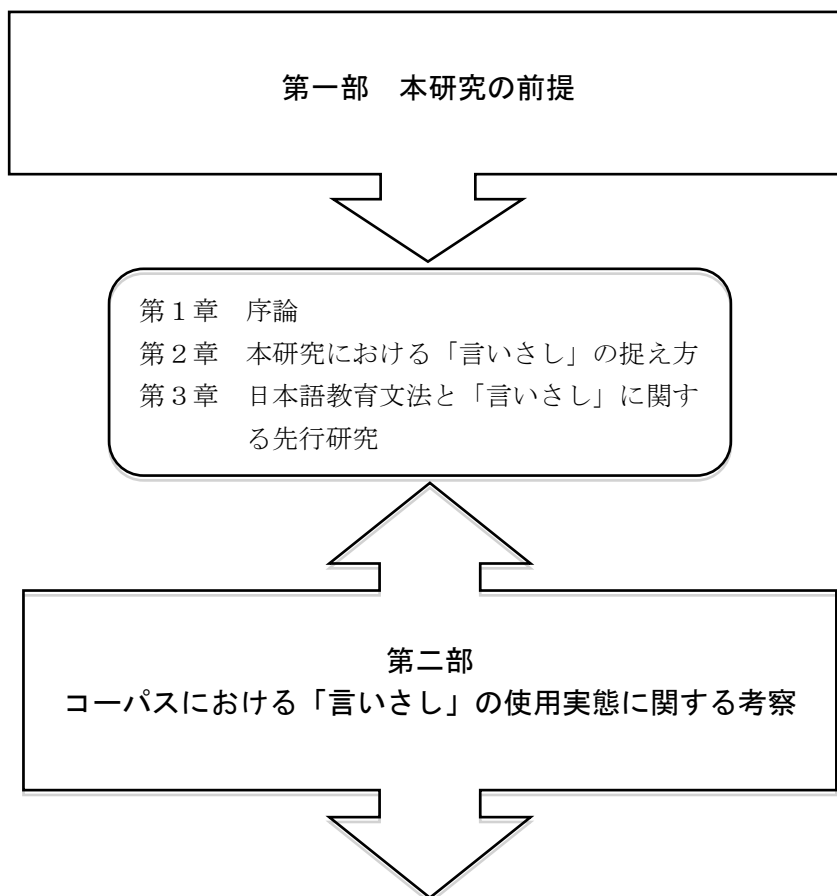
第7章では、中国人学習者・日本語母語話者の形態的・統語的・意味的な視覚情報処理状況を明らかにするために、「言いさし」の「けど」類の視覚情報処理状況・理解状況を全体的に把握するための記述調査を実施するとともに、アンケートでは捉えきれない学習者の個別的な側面を補完するためにフォローアップ・インタビュー調査も実施した結果をまとめる。

第8章では、中国語及び日本語の両言語使用者が具的なコミュニケーション場面における「言いさし」の知覚・使用状況の相違を明らかにするために、中国語と日本語とそれぞれの言語で談話完成テストを実施した結果を述べる。

第9章では、中国人日本語学習者における「言いさし」の「けど」類の聴解情報処理状況を明らかにするために、音韻的な聴取実験を実施した結果を述べる。

第四部 結論

最後に、第四部（第10章）は、全体のまとめと今後の課題について述べる。



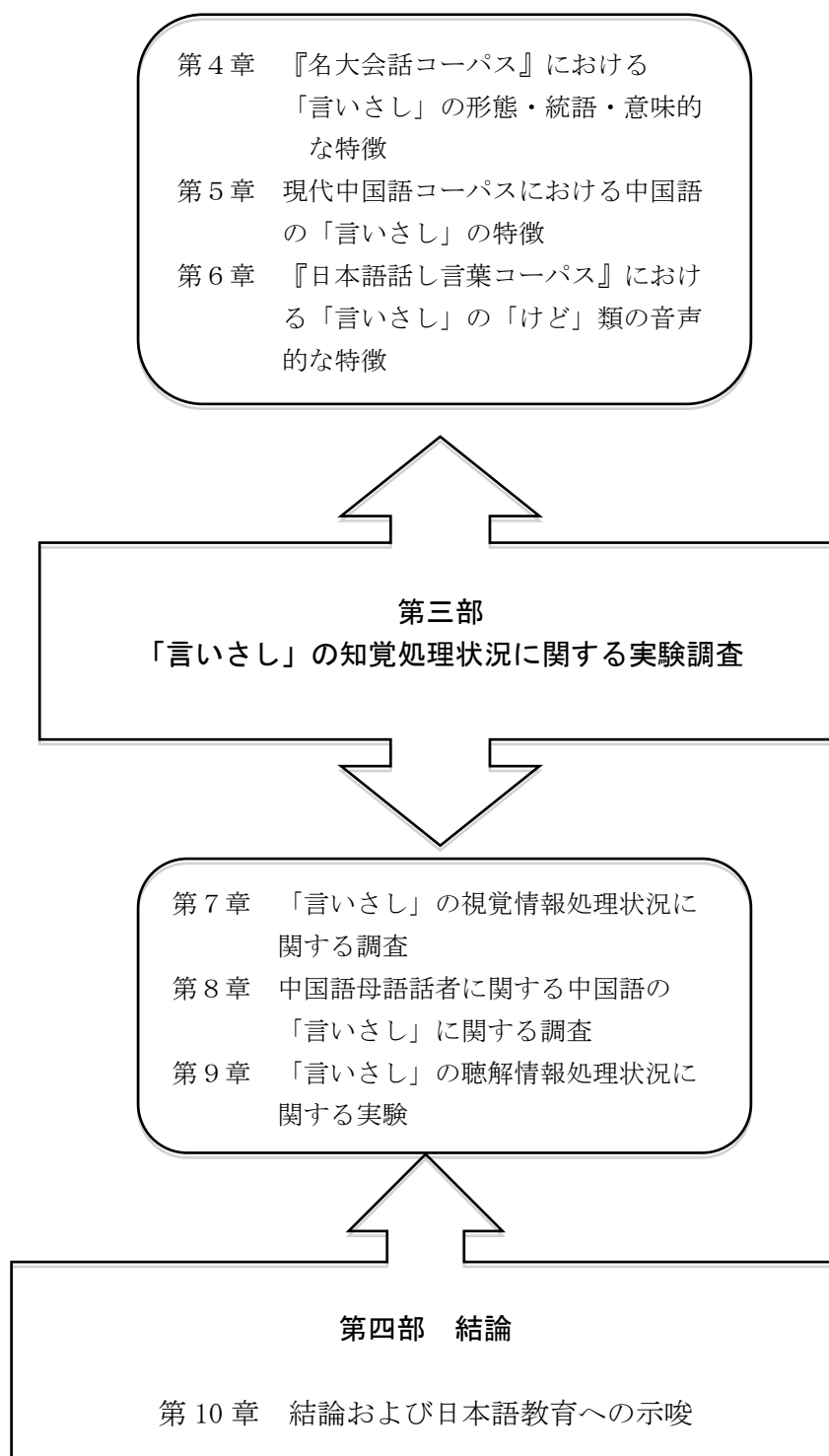


図 1-1 本論文の枠組み

本章では、本研究の研究対象と研究目的について述べた上で、本論文の構成を説明した。

具体的に、まず、1 節では研究背景、2 節では日本語教育現場における「言いさし」、3 節では研究目的及び課題、4 節では研究方法、5 節では本論文の枠組みについて述べた。

次章では、本研究における「言いさし」の捉え方をまとめる。

第2章

本研究における「言いさし」の捉え方

本章は、「言いさし」の捉え方、定義、範囲、分類、形成理由、文法論・意味論・音韻論における位置付けについて具体例をあげながら示す。

本章の構成は以下の通りである。1 節および 2 節で先行研究をまとめた上で本研究における話し言葉の「文」の定義を明確にし、3 節で「言いさし」と「文」の関係を述べる。また、4 節で「言いさし」の形成要因を論じる。最後に 5 節では、「言いさし」の文法論における位置付けを述べた上で、本研究の研究対象を明示する。

2.1 話し言葉の「文」

丸山 (2007) は、理想的な「文」と話し言葉の「文」の関係について、以下のように述べている。(丸山 2007 : 57)

今仮に「文」を「文法的に適格な構造を持ち、話し手の完結した思想を表す言語表現の単位」と定義するとしたら、現実の発話を文に切り分けるということ自体、本質的に矛盾した考え方であると言わざるを得ない。なぜならば、一回的・個別的な行動の結果である「発話」は、言い誤りや言い直しなどの非流暢現象や語順の混乱、話線の混淆など、多くの非文法性・非流暢性を含むものであり、理想的な「文」とは異質なものであるからである。

文法論において、「文とは、その下位の言語的単位である『語 (word) 』が文法規則に従って連結されることにより、文法的に適格な構造を持ち、かつ意味的な完結性を備えた単位として具現化したものである」(丸山他2006:255)と特徴付けることができる。また、文の概念について最初に明確に記したものに高津 (1891)、大槻 (1897) が挙げられ、「一の主詞と、一の処置詞とより成り立てる文章」(高津1891)が単文であることも明記されている。さらに、主語と述語とが文の必要条件である(大槻1897)との主張も確立された。

「文」は、語とともに、言語表現を構成する最も基本的な単位として捉えられてきた。書き言葉では書き手自身によって文末位置に句点が付与されるため、「文」の範囲を取り出すことは比較的容易であるのに対して、話し言葉では話し手自身が文末位置を明示的に示すということはない。そこで、話し言葉の中から「文」の範囲を取り出すためには、何らかの手がかりをもとに「文」の範囲を認定しなければならない(丸山他 2006)。

丸山他（2006）で指摘されているように、文は、かなり抽象的理論的なものであり、従来「主語と述語とのあるもの、ファイナイト・バーブをもっているもの」（大岩 1949:1）とされた文の定義は、「述語や動詞のないもの、感動や呼びかけのことばなどは、文と呼ばなければならないと誰でも感じながら、文と称することができなくなる」と大岩（1949:1）で指摘されている。

また、時枝（1941）は、文が具備する性質として、「具体的な思想」の現し、「統一性」、「完結性」の三つを挙げており、文末に現れる辞は完結性に関与していると指摘している。その中で、思想を「客体的なもの、主体的なものとの結合」として捉えているが、これは、発話を他の論理的形式に置き換えることなくそれ自体として捉え、その意味内容を一般化したものであるとしている。

さらに、思想の「具体性」、「統一性」だけでは文として認定はできず、表現の「完結性」という要素が必要であるとし、「完結」ということと「完全」との区別について、以下のように示している。

「完結と完全との根本的相違は何処にあるかといへば、完全とは主観的基準に於てのみいひ得ることであって、完結とは客観的に規定された事実である。従つて文の完結とは客観的に妥当する事実に基づくのである。」（時枝 1941:358）

すなわち、完結は、文の不可欠の要素と考えられる主語述語補語等の有無とも関係がないと言えるだろう。例えば、

(2) A：誰と一緒に映画を見に行くの？

B：妹と一緒に行く。

この会話において、Bの発話には、「映画を」という目的語を必要とするのであろうが、それはこの「文の完全不完全」には関係があるが、「完結」には関係がない。この場合は、目的語が形式上はないものの、先行文脈に存在する「映画を見（る）」と同じことを指すため、格枠組みに関する原理（庵 2012a:64）によれば、この文は「発話の先行文脈に存在する、あるいは状況からわかる」（庵 2012b:64）ため文法的であり、「完結」していると判断できる。また、発話に「充足性」があるため、話し手にとっても聞き手にとっても完結しているものと言える。

時枝は、話し言葉に限定せず文の特徴を論じているが、「完結性」に関する主張は規範文法から離れて「一方において饒舌で長たらしく無駄が多いと同時に、他方において舌足らずで、短すぎて説明不足であるという両面を持っている」（畠 1987）話し言葉における文を判断する時の手掛かりを示している。

さらに、時枝（1941）を踏まえ、国立国語研究所（1960）は、「従来の文法論上の文は、抽象的に規定され、その規定の結論に至るところの推論の過程は、客観的に認められるものでなければならないが、その弱点は、文の特徴的形式や、特徴的意義内容を説き、それに応じた文の大まかな分類を行うことに終始して、それによって具体的な話しことばの処理に際しては十分に有力ではない」と指摘している。

また、文という文法論上の単位を定める場合、その基盤となるものは、大きく分けて「言語意識」「文法体系」の2つあるとしている。さらに、国立国語研究所は、「文」という語を術語に使う際に、「言語意識」との因縁をたち切ることができないと述べ、「言語現象が人間の精神的肉体的両面での全人間的活動の結果である以上、その言語意識を無視することは、言語現象の真実を探求する方法ではあるまいため、文法体系を基盤とする文の規定も、言語意識という直観的・非分析的要素を包含しつつ、客観的・分析的に推論を重ねてゆかねばならぬものであろう」（国立国語研究所 1960:56）としている。

それから、話し言葉の文の定義について、「陳述を負う述語または独立語1つを持ち、社会習慣として、ひとまとまりの意味をあらわして言い切ることば」（国立国語研究所 1960:77）としている。その基準に従い、自然談話資料を分析する際に、「論説委員としては…」 「なるだけ店員が…」 「何か こう…」 「じゃー今日はお彼岸ですので仏さまのお話で」のような発話は、文の成立条件である陳述を負う述語・独立語を欠いており、かつそのような意義を社会習慣として常に表すとは言えないため、文ではないとしている。

国立国語研究所（1960）の認定基準を見ると、構文的に「陳述を負う述語または独立語1つを持つ」こと、意味的に「社会習慣として、ひとまとまりの意味をあらわして言い切る」ことの二つの条件を満たす発話を文と認定することができる。と推論できる。

また、社会習慣として、ひとまとまりの意味をあらわして言い切るという条件は、「文の境界について、素朴な母語話者の直感に訴えるのは、それがまとまった意味内容を有しているかどうかという点である。」と沖（2008）で指摘されているように、文を認定する際に不可欠なポイントとなっているといえる。さらに、この条件に関連し、文は、たとえ構文上の不完全であっても、庵（2012b:64）で指摘された「その文に存在する」、「先行文脈に存在する」、「発話状況からわかる」のいずれかを使用してまとまった内容を表すものとなるのである。

そこで、本研究は、時枝（1941）、国立国語研究所（1960）庵（2012b）を踏まえ、話し言葉における文を「構文的に陳述を負う述語または独立語1つを持ち、機能に社会習慣によって完結性を有して言い切る発話」と定義する。

この定義に従い、話し言葉には、独立語一つとなる発話、述語のない発話、主節のない発話が見られ、「文を認められるかどうか問題になるところである」（丸山 1996a）が、それを判断する基準は、「機能的に社会習慣によって完結性を有するかどうか」となる。この基準は、日本語の話し言葉を分析する時に一つの手掛かりとすることができる。

2.2 従属節で終了する表現

序論において、実際の話し言葉では、下記の (3a) の下線部のように、理想的・規範的な「文」の定義から逸脱したと見られる発話がよく観察されることを述べた。

- (3a) A : そこまで出ない。(あら)でも口が (<笑い>)
あ の、開けるとよけい空気に触れてスースーする。
B : なんか、鼻に来ない? こう。スーっていうのが。
A : ちよっとはするけど。
(名大会話コーパス)

- (3b) A : そこまで出ない。(あら)でも口が (<笑い>)
あ の、開けるとよけい空気に触れてスースーする。
B : なんか、鼻に来ない? こう。スーっていうのが。
A : ちよっとはするけど、口ほどじゃない/あんまり感じない。
(作例)

接続助詞「けど」は、ある節を「主節に関する理由や原因を表す副詞節」(益岡・田窪 1992) としてマークする標識とされているため、(3a) において A の発話「ちよっとはするけど」は、単なる「副詞節」と認識されて、規範的な「文」からの逸脱するものと見られる。それに対して (3b) における「ちよっとはするけど、口ほどじゃない。」もしくは、「ちよっとはするけど、あんまり感じない。」という発話は、規範的な「文」の定義に一致しているが、(3b) のような発話は、本章 p12 で引用した丸山 (2007) の「理想的な「文」」に近い文であり、実際の話し言葉では多くは見られていない。

(3a) のような従属節で終了する表現は、これまで数多くの研究者によってさまざまな視点から名付けられてきた。その用語は研究分野によって以下のように分類することができる。

- ①. 統語論・語用論による研究 : 「接続助詞由来終助詞終止文」、
「省略」系、「言いさし」系

「接続助詞由来終助詞終止文」は国立国語研究所 (1960)、「主節の省略」は、益岡・田窪 (1992) および高橋 (1993) ² また、「中断文」は、大石 (1971) に記述されている。

² 「省略ののべかけ形式」としている。

それに対し、「言いさし」という用語が一番よく使用され、白川 (1996,2009)をはじめ、曹 (1998)、荻原 (2000)、朴 (2005)、林 (2008)、上村 (2014)、永田 (2015)、森 (2015)、三牧 (2015)、劉 (2015) が挙げられる。

②. 談話論による研究：「中途終了型発話」系

宇佐美 (1995)をはじめ、生駒・志村 (1993)、陳 (2002)、元 (2005)、李 (2008)、高木 (2012)、Taguchi (2014)、楠本 (2015) が挙げられる。

③. 認知意味論による研究：「中断節」「接続助詞の文末用法」

「中断節」という用語は、Ohori (1995)、大堀 (2000) が挙げられるが、一方、「接続助詞の文末用法」という用語は、横森 (2005) が挙げられる。

④. 言語類型論による研究：「insubordination」

「insubordination」という用語は、Evans (2007) が挙げられるが、堀江・パルデシ (2009) では「従属節の主節化」、加藤 (2013) では「非従属化」のように翻訳されており、言語類型論の視点から考察が行われている。

また、用語に関して「言いさし文」や「言いさし表現」などのように同じ分類に属しても細かな相違点が存在し、あるいは、同じ呼び方にもかかわらず定義の範囲も異なる場合も見られる。

さらに、先行研究での用語と定義を整理するため、各研究における用語、定義および記述を表 2-1 にまとめた。

表2-1 先行研究における用語と定義³

分野	系列	用語	論文名	定義・記述
	終助詞化 接続助詞の	接続助詞 由来終助 詞終止文	国立国語 研究所 (1960)	「ちょっと今席を外しておりますが」などのような接続助詞で言い終え、接続助詞としての用法から終助詞的用法に転用される表現。

³ 劉 (2015) を参考して田修正。

統 語 論 ・ 語 用 論	省 略	しり切れ	大石 (1971)	文法的に文として不完全であり、述語の省略、陳述になうべき述語を欠くものである。
		主節の省略	益岡・田 窪(1992)	従属節だけを述べれば、結論が推測できる場合、主節を省略することができる。自分が結論を出すより、相手に出させる方が丁寧になる場合、結論を曖昧にしたい場合、結論部分が慣用的に決まっている場合等に使われる。
		省略ののべ かけ形	高橋 (1993)	省略ののべかた形式のなかでいちばんおおいのは、接続助辞まででおわっている文である。つぎに、条件形、第二中止形（「～して」のかたち）、引用助辞でおわる文。そのほかのまとまったものとしては、疑問詞または陳述副詞でおわる文、「～ように」でおわる文などがある。
	言 い さ し	「言いさ し」文	白川 (1995,2 009)	主節を言わずに従属節だけで終わる文。広義の言いさし文を「関係付け」、「言い尽くし」、「言い残し」に分類している。
		言いさし表 現	曹 (2002、 2004)	文の形態によって「文の途中であってまだ文が続くような形式で終わっているもの」 ⁴ を「言いさし」として判断し、また、「言いさし」の必要条件は、次のような二つがあると述べている。 1. 形の上で、文を最後まで言わずに途中で終わっている発話である。 2. 相手の割り込みではなく、話者の意志により完結している発話である。
		「言いさ し」	荻原 (2008, 2015)	文の途中で話を終えてしまい、最後まで文を完結させない省略、表現形式として、倒置、省略の質問、名詞のみ、述部抜け、副詞・接続詞・助詞終わりなど、文としての形式が完全でないものをすべて言いさしとする。
		言いさし文	林 (2008)	
		「言いさし 表現」	朴 (2010)	形式上最後まで言い切らず複文の主節が省略されおり、それにもかかわらず情報伝達においては完全文と同じ機能を果たしている発話である。
		「言いさし 文」	上村 (2014)	白川（2009）に従い、主節を言わずに従属節だけで終わる文。
		「言いさし	永田	

⁴更に、曹（2002:81）は「言いさし表現」の定義について、「相手の発話の継続を促す『うん』『はい』のようなあいづち的な発話以外の発話で話者が交替した場合」と補足している。

談話論		表現」	(2015)		
		「言いさし」	森 (2015)	「完全文」となるものを想定した上でその一部が欠けている表現。	
		「言いさし」	三牧 (2015)	述部が省略された場合や、複文の場合、従属節のみで主節が省略されたりする発話、すなわち、最後まで言い切っていない発話	
			「言いさし」文	劉 (2015)	
	中途終了型発話	中途終了型発話	中途終了型発話	宇佐美 (1995)	述部が省略された場合や、複文の場合、従属節のみで主節が省略されたりする発話、すなわち、最後まで言い切っていない発話
			「中途終了型」発話	陳 (2000, 2001)	文法的には言い切っておらず不完全な発話であるが、情報伝達においては不完全なところは何もなく、言い終わっているもの。 具体的に、次の 3 種類がある。(1) 複文の主節が省略されている発話: 「テ形」表現、「接続助詞」表現、「条件形」表現。(2) 述部が省略されている発話: 「引用」表現、「トピック呈出」表現、「例示」表現、その他。 (3) 形式は「ダ体発話」に見えるが、音声的には「ダ体」と認められない発話。
			中途終了文	元 (2005)	何らかの目的で主節、述部が省略されいながら、情報の伝達を終了している文。具体的には、接続助詞、接続語尾のついた形で終わる文とその他(引用助詞、疑問詞、陳述副詞などで終わる文)の二種類に分ける。
中途終了型発話			李 (2010)	宇佐美 (1995) の定義に従うが、聞き手にたまたまオーバーラップされたり、遮られたりしたために言い切れなかったものを含めない。	
中途終了発話文			高木 (2012)	(1) <形態・統語論>—主節や主節の述部(終止形語尾)が、文の末尾に現れていない発話文; (2) <話者交替と音声>—話者の交替が起こる直前に現れる場合も、そうでない場合もあるが、非言語情報や音声、意味によって区切りが明らかである発話文; (3) <発話 意図伝達>—発話上には現れない言語形式、およびその発話者の意図が対話者に推測可能な場合もあれば、そうでない場合もあるが、発話者の主体的選択の結果として終了した発話文。	
中途終了発話文	金 (2002)	「非意志的中途終了発話文」(同時発話や割り込み発話による中途終了)と、「意志的中途終了発話文(言い淀みによる中途終了や、自分の意志で中止する中途			

				終了、述部のない発話、従属節の述部で終了する発話文)に分類される」」
		incomplete sentences	Taguchi (2014)	宇佐美 (1995)の定義に従う。
		中途終了型発話文	楠本 (2015)	構文的には主節が言語化されていない、つまり省略されている文。
認知意味論	中断節	中断節構文	Ohori (1995,1997)	あたしはさっきも話したんだけどー」のような依存関係をもった節が主節を伴わずに出る構文。
言語類型論	Insubordination	Insubordination	Evans (2007)	The conventionalized main clause of use, of what, on prima facie grounds, appear to be formally subordinate clauses.
		非従属化	Kato (2014)	Evans (2007)に従う
		従属節の主節化	堀江 (2009)	Evans (2007)に従う

2.3 「言いさし」の位置づけ

I. 「言いさし」と「文」

「言いさし」を一つの文法形式としてとらえるなら、統語論・意味論・音韻論における位置付けについて論じなければならない。それに関する一番根本的な問題は、「言いさし」は、どんな単位として捉えられるかということではないかと考えられる。

「発話の単位として何を認めるべきか」という問題が、それぞれの研究分野・目的に大きく依存する問題である。まず、音韻レベルでは、現在最も広く認められている発話の単位は、「ポーズやためらいの声、ピッチの立て直しなどの統合的検討から抽出される音調上の固まり」(定延 2006)、すなわちイントネーション句 (intonation phrase、以下 IP と略す) であると考えられている。

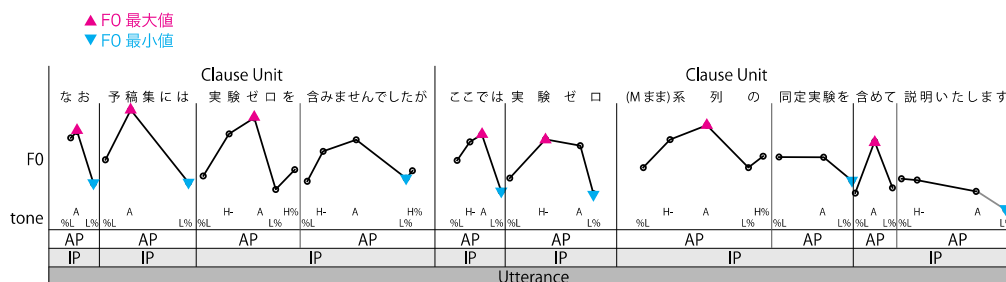


図 2-1 「予稿集には実験ゼロを含みませんでした」という発話のトーン情報
(石本・小磯 2013:161)

そこで、図 2-1 のように、「実験ゼロを含みませんでした」というように、従属節が、音韻論レベルにおいて、発話中のアクセント句 (AP) が連続するとダウンステップが起こり、境界にピッチ曲線が大きな変化や呼気の見られ、ダウンステップがリセットされるため、「言いさし」は一つの IP として位置付けられることができる。

一方、統語論レベルでは、従来書き言葉に対する係り受け構造、談話境界などの情報付与などにおいて、その単位として「文」が使用されてきた。自発的な話し言葉を対象とする場合、文は必ずしも自明な単位ではない。書き言葉では書き手自身が句点によって区切りを確定するのに対して、話し言葉では句点情報がなく、また文法的に明確な文末形式が頻繁に用いられるとは限らない (高梨 2004) ため、自発的な話し言葉研究において、「文」の定義および範囲について様々の立場によって議論されている。

そこで、話し言葉の特有な表現である「言いさし」は、統語論・意味論のレベルにおいて、「文」としてとらえるかどうかということは、位置付けを考える際のポイントとなる。「文」の定義及び概念づけに関する説がさまざまな観点から論じられており、「文」の実体はなかなか見えない現状でありながら、2.1 では、話し言葉における「文」の定義および認定基準について本研究における立場を論じた。それを踏まえ、日本語の自然談話に (4) のような「言いさし」とされるものを文と認めるかどうかの問題となる (丸山 1996) が、これは 2.1 節で述べた話し言葉における文の定義に従い、文としてとらえることができる。

- (4) F143 : だけ?九州とかじゃなくて。
 F156 : うん、長崎。どこ?
 F143 : えー、なんか、たぶん海外になったとは思っただけど。
 F156 : まじで、いいなあ。

(名大会話コーパス)

(4) の「たぶん海外になったとは思っただけど」という「言いさし」は、形式上に主節にあたるものは存在しないが、「海外」というキーワードが前文脈の「長崎」と関連性を持っているおり、言語化されていない部分は、「発話状況からわ

かる」(庵 2012b:64) ため、完結性を有する発話であると考えられる。話し言葉における文の定義に従って文としてとらえることができる。例えば、「たぶん来年になったとは思うんだけど。」と発話されると、理解不能になり、「完結性」も失ってしまうと考えられる。つまり、この発話が「文」だと理解できるのは、「海外」という語が先行発話内の「長崎」と関連性を持っているためであり、それさえ満たしていれば、形式的に従属節で終わるかどうかは「文」の定義には関わらないといえる。

つまり、本研究は、「言いさし」は、統語的には「文」として「未完成」であっても、機能的には「文」として「完結性」が十分あるという立場をとる。

II. 「従属節」の独立性

「言いさし」を一つの文として捉えるなら、「言いさし」と従属節の関係を論じる必要がある。本節では、「従属節」の独立性を述べる。

Iwasaki (1993) は、時枝学派やハリデーの機能主義言語学の考察を踏まえ、「機能的」な観点から、日本語の文節が文と基本的に似ていることを指摘している。Iwasaki (1993) の結論は、従来から広く認識され記述されてきた下記のような三つの現象とも合致する。

- (1) 文節末に現れる間投助詞と文末に現れる終助詞に類似している
- (2) 文節末に現れる接続助詞と、文末に現れる終助詞の類似している。
- (3) 判定詞が文末だけでなく文節末にも現れることである。

また、上記の (2) について、田中 (1973:213-214) が「こちらは少々お高くなりますけど」「もっと早く言ってくればよかったのに」といった「けど」「のに」の例を挙げ、従属節と主節の類似性を示している。本研究における「言いさし」を機能的に「完結性」を備えて「文」としてとらえる裏付けは、「従属節と主節の類似性」であると考えられる。

さらに、同じような主張は、白川 (2008,2009,2015) にも見られる。統語的に文末満である「言いさし」が、話し言葉では、談話のコンテキストとの関わり合いにより、独立文と同等の完結性を得る仕組み有することは、「独立文と従属節との平行性」との関わりも見られるとしている。また、その理論付けについて、野田 (1989) を挙げている。

野田(1989)は、下記のような「たい」が含まれた文は典型的なモダリティを表していないことを述べている。

- (5) 大空を飛んで、自分の住んでいる街を見てみたい。そんな思いから、愛媛県喜多郡内子町川中、農林業西谷一徳さん(四一)は、自宅前の山林と農地七千平方メートルをつぶして... (後略)

(野田 1989:131)

野田は、(5)の「大空を飛んで、自分の住んでいる街を見てみたい」という発話は、では、一般的に「発話・伝達モダリティの中で発話時における話し手の意志・希望の感情表出に関わるもの」(仁田 1989)として使用されるのに対し、独立した文として成立しているように見られたり、発話時における話し手の意志・希望の感情を表したりせず、むしろ、下記の(6)のように次の文に従属できることにより、機能的には従属節であるとしている。

- (6) 大空を飛んで、自分の住んでいる街を見てみたいという思いから、愛媛県喜多郡内子町川中、農林業西谷一徳さん(四一)は、自宅前の山林と農地七千平方メートルをつぶして... (後略)

(野田 1989:131)

さらに、発話時における話し手の心的態度を直接表明するモダリティを「真性モダリティ」と呼び、真性モダリティを持たない文と従属節との平行性に関する考察を行い、従属節を文らしさの程度に応じて、低い順に「格成分」「従属句」「独立性の低い従属節」「独立性の高い従属節」「引用節」に分類し、独立性の低い従属節の中では、丁寧形が現れにくく、独立性の高い従属節や引用節の中では丁寧形が現れると述べ、文に近い性質をもった独立性の高い従属節(三上が硬式、南がC類と呼ぶ)の特徴付けをしている。そうした基準により、また、それぞれに真性モダリティを欠く文との平行性があることを指摘し「たら」節のような条件節を独立性の低い従属節として分類しており、「けど」節は、独立性の高い従属節であるとしている。

- (7) a.雨があがったら、出発しよう。
b.頻繁じゃ困るけど、いいさ。(野田 1989: 149, 151)
- (8) a.*雨があがる。そうしたら、出発しよう。
b.頻繁じゃ困る。だけど、いいさ。(同上)

(7a)の従属節「雨があがったら」には相当する文(8a)が存在しない。(7b)の従属節「頻繁じゃ困るけど」には相当する文(8b)が存在する。ここから、(7b)の従属節はもともと文に近い性質を持っていることが分かり、独立性が高いと判断される。また、(8b)の「頻繁じゃ困る」が独立性の高い従属節といえる。これに対し、(7a)の条件節は独立性の低い従属節となる。

しかしながら、上と下を比べると、その差は微妙であるが、(8b)の「頻繁じゃ困る」の方に話し手の主張が強く感じられるのに対して、(7b)は、「頻繁じゃ困る」ことを主張するというより、「いい」ことを主張する前提として示されているという感じが強いことも指摘している。

- (9) a. 先週ワープロを買ったよ。
b. 先週買ったワープロがもう故障したよ。

(野田 1989: 141)

(9a) における「買った」は、事実であることの主張なのに対し、(9b) の従属節を形成する「買った」にそうした主張は存在しておらず、話し手の主張は「故障した」ことであることから、真性モダリティを欠く文も主張は表さず、従属節に近い機能を持つことが推測できると指摘している。

- (10) たった一人の抵抗で、老朽マンションが建て直せない。薄気味わるい暴力団のおにいさんを追い出すことができない。そんな苦情を解決するために、マンション法改正案が出された。

(野田 1989: 142)

さらに、上記の(10)において、第1文と第2文の「建て直せない」ことや「追い出すことができない」ことを事実として話し手が主張しているわけではないとしている。

また、従属節の独立性が低くなるに従って、その中に現れるムード形式の制限が強くなるとともに、その中に現れたムード形式が表すモダリティが弱くなると考えられる。「おいしいあまえびが食べたいけれど、このへんでは売っていない。」ような独立性の高い従属節のモダリティは、虚性モダリティと言っても、単文の文末に現れる真性のモダリティに近く、そこに連続性が認められる(野田 1989:155)と述べ、常識的に文と言われているものの中には、句と節に相当するものもあるという。そうして、文と、句・節を絶対的に区別する根拠はなくなってしまふ(野田 1989:155)ということを示している。

野田(1989)は、統語的な完全文が、自然談話において他の文に依存した不完全文として現れる用例が見られることから、独立文と従属節の平行性を主張しているが、それを受け、白川(2008)は、「独立文は従属節に似た面を見せ、逆に、従属節は独立文と似通ってくる」ということが言えるとしている。

従属節と独立文の類似性が存在することから、「言いさし」は主節が欠如していても独立性を有して一つの文としてとらえることができると考えることができる。

Ⅲ. 「言いさし」の境界性

丸山他(2006)は、自発的な話し言葉を対象とする場合、言い直し、言い換え、言いやめなどで文の範囲が確定しにくい場合、および語・文の断片だけで発話が構成される場合があり、句点情報および文法的に明確な文末形式が頻繁に用いられるとは限らないため、文は必ずしも自明な単位ではないと指摘した上で、

発話を分割する位置として、述語を中心としたまとまりで統語的にも意味的にもある程度完結した単位である「節」を取り上げる。

また、SOV 言語である日本語において、基本的に述語句の出現によって統語的・意味的な完結点が生じるため、様々な形態を取る述語句の末尾 (=節境界) の位置と種類を認定し、発話の分割点として柔軟に利用することで統語的にも意味的にもまとまりを持つ単位を取り出すことができるとしている。

そこで、丸山他 (2006) は、発話中からさまざまな種類の節境界を検出し、その統語的・意味的特性を考慮してから分割位置を特定した上で、認定されたひとつひとつの単位を「節単位」と呼び、「文」の代わりに話しことばにおける基本単位としてとらえている。それは、ポーズで区切られた文の断片より、係り受け構造付与、重要文選択、談話境界付与のための共通単位の認定という目的により合致する。

丸山他 (2006) が述べるような、ある種の節境界が統語的に大きな切れ目として文を分割する日本語記述文法における理論基礎は、従属節の種類とその従属度との対応関係を論じた三上 (1953,1959,1963) や南 (1974,1993) が挙げられる。

三上 (1953:182) は、従属節の種類と文中の切れ目の大きさとの関係として、下記のような対応を示唆した上で、「連用補語を食止めるか否か」「連体として収まるか否か」「普通体を丁寧体に変更することがふさわしいか否か」という統語的テストにより、従属節 (三上の言う「活用形」) の各種類を「単式」「軟式」「硬式」という 3 つのクラスに割り当てている。

中止連用形 何々シ (テ) 1/4

連体形 何々シタ 1/2

仮定形 何々スレバ 3/4

終止形 何々シタ,セヨ 1

一方、南 (1974,1993) は、これらのクラスは「句切りの力」の違いに対応づけられた従属節の分類に引き継ぎ、従属節が備える「文らしさ」という観点から、従属節を下記のような「A 類」「B 類」「C 類」「D 類」という 4 種類に分類している。

A 類:

つつ、て (様態)、ながら (継続)、連用形反復…

B 類:

て (理由・原因)、と、ながら (逆接)、ので、連用形…

C 類:

が、から、けれど、し、て、連用形…

D 類:

対人モダリティは直接引用節で現れる

丸山他（2006,2010）は、三上（1953,1959,1963）や南（1974,1993）を踏まえ、具体的に、主に節末の表現形式に従って「文」の切れ目を認定し、切れ目の強さに応じて節単位を「絶対境界」、「強境界」、「弱境界」の三種類に分類している。

それぞれの定義を説明すると、絶対境界は「いわゆる形式上明示的な文末表現に相当する境界であり、その直後には発話の完全な切れ目があると見なされる」。強境界は「いわゆる文末表現ではないが、構造的に大きな切れ目を成すと考えられる」であり、弱境界は「通常は発話の切れ目になることはないが、稀に発話の切れ目になり得る従属節の境界である」（丸山 2008: 86）。

また、丸山他（2004）形態素解析された日本語のテキストから「節境界（clause boundary）」の位置と種類を自動的に検出するという節境界解析の機能を持つ「節境界検出プログラム CBAP（Clause Boundary Annotation Program）」というプログラムを開発することにより、具体的な表現と関連させつつ次のようにまとめている。

[絶対境界]

文末、文末候補

/強境界/

並列節ガ、並列節ケド、並列節ケドモ、並列節ケレド、並列節ケレドモ、
並列節シ

<弱境界>

タリ節、タリ節-助詞、テカラ節、テカラ節-助詞、テハ節、テモ節、テ節、
テ節、助詞、トイウ節、トカ節トイウ節、トカ節、トカ節-助詞、ノニ節、
フィラー文、ヨウニ節、引用節、引用節-助詞、引用節トノ、感動詞、間接疑問節、
間接疑問、節-助詞、条件節タラ、条件節タラバ、条件節ト、条件節ナラ、
条件節ナラバ、条件節レバ、並列節ダノ、並列節デ、並列節ナリ、理由節カラ、
理由節カラ-助詞、理由節カラニハ、理由節ノデ、連体節テノ、連用節

本研究は日本語教育文法という視点から「言いさし」を考察するため、文法論レベルの考えにより、話しことばにおける基本単位を「文」として「言いさし」を位置付けるが、しかし、従属節で終わる発話に境界の強弱があることに關して、丸山他（2006）と同じ立場をとる。

具体的な「言いさし」の境界性を述べると、まず、形式上明示的な文末形式がないため、絶対境界の「言いさし」はないと言える。それから、「シ」「カラ」類、「ケド」類の「言いさし」は、「強境界」にあたる。最後に、「弱境界」にあたる「言いさし」は、「バ」、「タラ」、「テ/デ」、「ト」、「ノニ」で終わる「言いさし」である。

「言いさし」の境界性はデータ分析の際にも使用する。なぜなら、「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」において情報を付与するための単位として取り上げられるのが、「節単位」である。

また、CSJ での節単位認定は、形態論情報を入力とする自動節境界解析の結果を、人手で修正するという手順が採られ、節境界解析によって検出される節境界は 49 種類あり、「絶対境界」「強境界」「弱境界」という 3 段階の別が設けられている（丸山他 2006）。

そこで、本研究は、「言いさし」の境界性に配慮しながら CSJ を使用して「言いさし」を抽出し音韻的な特徴を考察する。

2.4 「言いさし」の形成要因

本節では、「言いさし」の形成要因を述べる。

「言いさし」の形成要因は、さまざまな視点から論じられてきたが、本研究では、劉 (2016b) と同じ立場をとり、「言いさし」の形成要因は、「主節の省略」と「終助詞の付加」との二つであると考えられる。下記で詳しく述べる。

I. 主節の省略による「言いさし」

Evans (2007) は、従属節が主節になる過程を「従属節→主節の省略→省略の習慣化→主節としての再分析」という四つのプロセスにしている。これは、言語類型論レベルの主張とされているが、「言いさし」の形成過程に関して極めて重要な指摘である。さらに、主節の省略についての日本語学的な研究は、益岡・田窪 (1992) があげられる。

益岡・田窪 (1992) 「田中ですけど、(山田君いますか)」を例文として取り上げ、「山田君いますか」が推測できる主節のため、発話者によって省略されると指摘している。確かに電話や訪問の場合において、「田中ですけど」という発話から、後件に主節が伴うのであれば「～いますか」のような発話しか来ないと推測できるだろう。ただし、「田中ですけど」という従属節から、どのようなプロセスにそって「山田君いますか」という結論に至るのか、そのプロセスにおいてどのような機能を果たしているのか、などの明記はない。

そこで、コミュニケーションにおいて主節が省略できる要因について、岡田 (1991) および水谷 (1993) の「共話」に関する研究を取り上げる。

岡田 (1991) および水谷 (1993) は、日本人同士の会話のやり取りの特徴を分析することにより、聞き手が話し手の発話意図を察して結論を推測することが不可欠であることが言えると述べている。そのうち、岡田 (1991) は、会話のやり取りの型を「対話型」と「共話型」に分けている。「対話型」とは、キャッチボールのように、2 人が向き合って、相手のボールを受け取って投げ返すような話し方である。「共話型」とは、バレーボールのように、2 人が同一の方向を向いて互いに相手の意図を相手の立場に立ってくみ取りながら話をするという話し方である。

さらに、日本語は、「共話的」姿勢で話されることが多く、英語や中国語ならばどちらかといえば「対話的」な会話のほうが多いと指摘している。日本人は、

文を最後まで聞かなくても、相手が意図を察してくれることを期待し、直接相手をめがけてボールを投げるような話し方はせず、相手の自由な判断にまかせ、キャッチのような投げ方をするのであると述べている。

また、水谷 (1993)は、共話の特徴について、「共通の理解を前提にし、いちいち相手の聞く意思をたしかめながら話すことであった」(1993:9)と指摘しており、また、日本人は、「途中まで言うことによって、聞き手に結末をつけさせる、あるいはその意思を理解させることができる」と考えている。相手に発話完成の機会を与えることがプラスとされ、すべてを言い尽くす話し方はむしろ『切り口上』としてうとまれる」と述べている。

岡田 (1991)及び水谷 (1993)から分かるように、日本語母語話者の会話が「共話型」であるため、「主節の省略」の使用が好まれるのではないかと判断できるだろう。けれども、「主節の省略」と「結論が推測できる」とは完全な対応関係ではない。主節が省略されない場合においても、従属節から主節を推測することも可能である。

さらに、このような主節の省略による「言いさし」は「言い残し」のタイプに属している⁵。つまり、「言い残し」の形成要因は、主節の省略にあたると言える。

II. 終助詞の付加による「言いさし」

Kato (2014) は、「言いさし」について「additional insubordination」という付加により成立することを指摘している。つまり、完全文の文末に「言いさしのマーカー」を付けることにより、「言いさし」を形成することができる。この時の「言いさしのマーカー」は、劉 (2016b) では接続助詞としているが、本研究は劉 (2016b) と異なる意見を持ち、「終助詞」としてとらえることができると考えられる。

このような考え方は、国立国語研究所 (1960) にも見られる。

国立国語研究所 (1960:55) では、電話対応の場面で使用された「こちらは山本と申しますが」や「ちょっと今席を外しておりますが」などのような接続助詞「が」で言い終える表現は、曖昧な言い終え方であるものの、聞き手がその発話に対して「何か言い残されている」や「何が言いつづけられるはずだ」などの期待を持って待っているということはないことから、「それなりに言い終わりだと思ふ習慣がある」としている。

また、その理由に関して、接続助詞としての「が」の用法から、終助詞的用法に転用されているとしており、「接続助詞由来終助詞終止文」と名付け、「けど」や「から」などの接続助詞に広く使用されている用法としている。

さらに、「よくわからないけどね」のように、「ね」がつくことで文としての完結度が増していると述べている。

国立国語研究所 (1960) は、「言いさし」を節レベルを超えて文としてみよう

⁵ 2.5.2 で述べる。

とする一番早い示唆といえるだろう。従属度が最も低いとされる「けど」「から」節の従属節と主節の境界を薄め、副詞節のマーカである接続助詞を「終助詞化」して「接続助詞由来終助詞終止文」のマーカとなることに関する指摘は、極めて重要だと考えられる。

「言いさし」における「接続助詞」の働きについて、国立国語研究所（1960）で指摘された「接続助詞の終助詞用法」が一般的な解釈となるが、それに対して白川（2009:60）では、「聞き手が何かをするために参考になる情報として提示していると解釈できる点では今までの例と共通しているので、接続助詞の延長線上に位置づけることは可能である」と述べられており、終助詞用法として扱われることに対して「否定的な立場であるように読み取れる」（三枝 2011）。

また、白川（2009:168）では、「から」、「けど」のような「言いさし」のマーカは、モダリティ性が示されるため独立性が高いと述べた上で、以下の（11）における発話①と発話②のように、終助詞と言い換えられることを指摘している。

（11）信吾「福島から、電話なかったか？」

①香織 「なかったけど」

②香織 「なかったよ」（白川 2009:168）

白川では、「接続助詞終助詞化」（国立国語研究所 1960）を否定しているものの、終助詞と言い換えられることを指摘しており、「終助詞と言い換えられることを根拠に独立文と並行していると主張するのは説得力に欠ける」（三枝 2011:142）。そこで、本研究は、国立国語研究所（1960）で指摘された「接続助詞の終助詞化」という立場に立ち、「接続助詞由来の終助詞終止文」を「言い終わり」としてとらえる。

また、このような「言いさし」は、単なる「主節の省略」として解釈されることができず、そもそもそこで完結している「言い終わり」のタイプに属すると述べた。つまり、「言い終わり」は、「接続助詞由来の終助詞」の付加によって形成されると言える。

Ⅲ. 双方向の「機能拡張」現象

I、IIでは、「言いさし」の二つの形成要因を述べたが、では、どうして省略と付加によって「言いさし」が形成されるのか。本研究では、堀江（2014b）に関連があると考えられる。

堀江（2014b:674）は、複文に関する日本語学の研究蓄積と言語類型論の研究成果を踏まえ、主節と従属節という2つのカテゴリーの間に（I）（II）に示す双方向の「機能拡張」現象が生産的に行われることが、他言語と比べた場合の日本語の特徴であることを主張している。

- (I) 「主節→従属節」という方向の機能拡張現象：「主節現象」
- (II) 「従属節→主節」という方向の機能拡張現象：「従属節の主節化」

まず、堀江 (2014b) は、これは日本語において「主節」と「従属節」の境界が確定しがたく、主節から従属節への「拡張」が容易であることを示唆していると述べている。



図 2-2 主節から従属節への機能拡張（主節現象） (2014b:678)

また、堀江 (2014b:680) では、南 (1974,1987,1993) が観察しているように、日本語における丁寧形の生起は、B 類～C 類の従属節 (12a,b)、引用節 (D 類) (12c) はもとより、(13a,b) のような従属度の高い名詞 (修飾) 節においても、実際には生起可能である。それは、ポライトネスの表示を主節のみならず従属節内でも行うことによってポライトネス効果を強化するという語用論的な動機づけがその背後にあると述べている。

(12)

- a [雨が降りまして]、試合は延期されました。(B 類)
- b [雨は降りましたが]、池面はあまり濡れていませんでした。(C 類)
- c 「困りました」と男はぽつりと言った。(D 類)

(南 1987:123)

(13)

- a [昨日差し上げました海老] は、もうお上りになりましたか。
- b [こちらからお送りします用紙] に御署名御捺印のお返しくだけさいませ。

(南 1987:123)

- c [お申し込みになりました] カードを発行させていただきます。

(堀江 2014b:680)

さらに、堀江 (2014b) は「いや、知らないけど。」のように、「主節現象」と逆の方向で、「従属節」が「主節」に転じる現象も日本語において生産的に観察されるとしている。つまり、本研究における「言いさし」である。

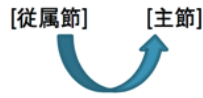


図 2-3 従属節から主節への機能拡張（従属節の主節化）（堀江 2014b:685）

「言いさし」的な現象は、堀江（2014b）において「従属節の主節化」と命名され、類型論的な観点から体系的な研究が行われている。また、「従属節の主節化」は「主節現象」と逆に、「従属節」から「主節」への機能拡張現象であるとされている。

さらに、機能拡張現象の原因について、堀江（2014b）は、特定の語用論的・談話的効果を達成する、文法形式の語用論化のために従属節を主節化し、ポライトネス・臨場感のために、主節に特有の語用論・意味論的現象を敢えて従属節内で実現しようとするために、従属節を主節化すると指摘している。

「言いさし」は、「主節の省略」と「終助詞の付加」によって形成する表現とされるが、「特定の語用論的・談話的効果を達成する、文法形式の語用論化のために従属節を主節化する」（堀江 2014b）という裏付けがあると考えられる。そうしたことにより、「言いさし」は、「完全文」の従属節と異なる機能を果たすことができる。

2.5 本研究の研究対象

2.5.1 本研究で取り上げる「言いさし」

本研究は、「産出のための規則」を記述する日本語教育文法（庵 2011a, 2012, 2013）の視点から、意味機能の教育現場への結び付きという研究目的により、コミュニケーションにおける意味伝達のものとして「言いさし」という用語を使用する。

「言いさす」という言葉を辞書で引いてみると、「言いかけて途中でやめる」（広辞苑第 6 版）、「途中まで話してやめる。言いかけてやめる」（デジタル大辞泉）という意味であり、「言いさし」の「～さし」は、「食べさし（のパン）」、「読みさし（の本）」のように、最後までせず途中で終わっていることを意味することがわかる。本研究は、特に白川（1996, 2008, 2009）を踏まえ、「自然会話において主節が欠いた統語的に不完全な文による発話」（白川 2008）を「言いさし」と呼ぶことにし、ある接続助詞の用法を「言いさし」用法と認知する統語的・意味的な基準を、次のように定める。

- a. 発話末で使われる。
- b. 文脈に依存しなくても、単独で意図した意味を表すことができる。

さらに、文を最後まで言い切らず複文の主節が現れていない発話でありながら、話し手と聞き手の間で、伝達が滞りなく行われるということが、「言いさし」という言語形式の特徴であると考えられる。

その上、「言いさし」の基本形について、劉 (2016b) は言いさし文の基本形を「AX,B」と仮定した上で、「X」を「言いさし文のマーカー」、「A」を「『言いさしのマーカー』以外の部分」、「B」を「文法と文脈によって追加可能な主節」としてとらえている。しかし、「文法と文脈によって追加可能な主節」である「B」は、形式上で存在しておらず、また (14) (15) のように後件を補おうにも補うべき主節が考えにくい場合 (白川1990,1996) もあるため、本研究は、「言いさし」の基本形を「AX」とする。また、劉 (2015) と同じく「X」を「言いさしマーカー」、「A」を「完結文としての性質を持っている『言いさしマーカー』の以外の部分」とする。

(14) こずえ「ほかにつきあってる女の子いるの かしら?」

響 子「さあ-あなただけみたいですけど。」

こずえ「ほんとですか!!」

響 子「ええ。」

(『めぞん』②,188 白川 1996:15)

自然発話の非流暢性を対象とした研究において、「今日…」と言いかけて途中で終わってしまったり、「カフェ」と言おうとするものの「カ…」だけ言って話をやめたりするように、短時間に発話を打ち切ってしまうような言語現象をすべて「言いさし」として認識される (白川 2008) が、本研究は、(15) ~ (22) のように、従属節で終わる発話のみを「言いさし」としてとらえるため、形式上、主節欠如で「バ」「タラ」「テ/デ」「ト」「シ」「ノニ」「カラ」類⁶、「ケド」類⁷によって終了する発話に限定する。

(15) F089 : 第 8 学区とか。

F011 : そうです。でも、わたしのころまだ5つしか学区がなかったころですけど。

F089 : あっ、そうなんですか。じゃあ、わたしらとかもおなし学区になってたんですかねー。

(名大会話コーパス)

(16) F057 : ま、いろいろあるから、よくわかんないけど。

F093 : うん、何かいろいろあるからね。

F057 : そうなんだ。

⁶ 「から・ので」を含む。

⁷ 「が・けれど・けども・けれども・けど」を含む。

(名大会話コーパス)

- (17) F128 : 私もなんかレポートをやろうと思ってここにいるはずなのに。
＜笑い＞ごめんね、F037 ちゃん。
F037 : いや、うん、いいよ。(ほんと) 私やる気ないもん。
＜笑い＞) <笑い>おっきな声で言うけど。
(名大会話コーパス)
- (18) F004 : 特にねー、イルミネーションに弱くなってきた。
F029 : ふーん。
F004 : だからそのクリスマスの一点灯式でも泣きそうになったし。
＜笑い＞)
F029 : 家の電気がつくと泣きそうになる。
(名大会話コーパス)
- (19) F128 : うん。もうどうせキャンセル料は出るし、どうせ。
F107 : うん。出るし。私はまだ出ないじゃんね。でも40日前、でも
11月の中旬ぐらいまでに何とか決めないとね。(うーん)
F128 : でもね、あの一、またさあ、JALのホームページで予約、空
席調べたけど、4日の日はやっぱりねみんなキャンセルしてな
いみたいで、普通に埋まった。
(名大会話コーパス)
- (20) F033 : 何か、字づらで読めば何となくわかるんだけど、(うん)何か具
体的に聞かれてからじゃ、この段落で書いてあることで一番重要
なのは何かさ、(うん)この段落では何を言いたいのか聞か
れるとさあ、結局自分の言葉にならなくて。(あー)あーあ、
と思って、最後の方だまっとった。＜笑い＞
F056 : じゃあさ、40分くらいに戻ってきてって言われてさあ、戻っ
てきたんだけどさあ、何か入っていいのかなと思って。あ、かわ
いい。
F033 : あー、ほんとだ。
(名大会話コーパス)
- (21) F128 : <笑い>5～6月じゃん、6月かな。わかんない。とにかく水遊
びして遊んでた。プールに、プールっていうか泳いでたわけじ
ゃないんだけど。
M023 : ま、そや気合いいればな。
F128 : うんそう。何かこう魚とか捕まえたりしながら。ちょうど、そう、
ちょうどいいね、そうそうそう、さわやかな天気だったわ。

(名大会話コーパス)

(22) F128 : もしもーし。F128 ですが、今 M023 ちゃんと 28 日のことを相談しています。何かご希望などございましたら。

M023 : 絶対ない。

F128 : えーと電話などしてください、ませ。それでは。

(名大会話コーパス)

2.5.2 「言いさし」の種類

本研究は、白川 (2009) の分類に従って考察を行う。

白川 (2009) は「従属節だけで言いたいことを言い終えているかどうか」という基準により、「言いさし」を「言い残し」と「言い終わり」の二種類に分類している。

①. 「言い残し」は、「言うべき後件を言わずに途中で終わっている文」と定義され、言うべき「後件」(主節)を言語化せずに途中で言い残しており、すべてを語らないことで暗示的意味を聞き手に理解させる「言いさし」であるとされている。このようなタイプの「言いさしマーカ―」は、「ケド」類、「カラ」類が見られる。例えば (32) では、話し手の「慎平」は「そうしたいんだけどね」という節の後に「泊まることができない」などのような後件(主節)を言わず「言葉を濁して」おり、表現されなかった後件の内容は、聞き手の「正樹」が検討をつけなければならない。

(23) 正樹「今日泊って行けよ。」

慎平「そうしたいんだけどね(溜息をつく)。」「

(言いさし)

(発話意図)

(鎌田敏夫『男たちによろしく』 p.29 白川 2009:8)

②. それに対し、「言い終わり」は、「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」と定義され、従属節だけで言いたいことを言い終わっており、純粹にそこで完結している「言いさし」のことである。このようなタイプの「言いさしマーカ―」は、「カラ」類、「ケド」類、「シ」、「バ」、「タラ」、「テ／デ」、「ノニ」、「ト」が見られる。例えば、(33) では、話し手の「早苗」が聞き手に伝えたかった内容は、「会議がもう始まるそうだ」ということに限られており、「～してください」や「～ですか」など、後件で言いたいことを言わずに言葉を濁していると考えなければならない理由は全くないため、「早苗」は「ケド」という形で文を終えているのである。

(24) 早苗が入ってくる

早苗「失礼します。会議が、もう始まるそうですけど.....」

(言いさし・発話意図)

正樹「え? (と、時計を見る)あ..... (忘れていたのだ)」

(鎌田敏夫『男たちによろしく』 p.45 白川 1996:9)

さらに、「言い終わり」を「後件に相当する内容、すなわち、従属節の内容と関係付けられるべき内容が文脈上に存在するか否か」、すなわち主節の再現可能性により、さらに「関係づけ」と「言い尽くし」という二つの下位分類に分けている。

①. 「関係づけ」は、関係づけられるべき事態が文脈上に存在しており、語用論的推論から、主節の再現が可能であるタイプである。例えば、(25)では、文脈から、「後ちょっとで出来上がりだったのに」の後続部分は、「引っ繰り返してしまった」、「何すんのだよ」、「ひどい」などが考えられる。このタイプの「言いさしマーカ―」は、「カラ」類、「シ」、「テ/デ」、「ノニ」が挙げられる。

(25) 永尾「悪いー」

リカ「あー、後ちょっとで出来上がりだったのに」

(柴門ふみ『東京ラブストーリー』 p.62 白川 2009)

②. 一方、「言い尽くし」は、(24)のように、関係づけられるべき事態が文脈上に存在しておらず、主節の再現が不可能かつ、不必要であるタイプである。例えば、(26)では、「おやつ、アイスクリームが冷蔵庫に入っているからな」という前件のみで言い尽くしており、主節の再現が不必要であり、その直後に相手である聞き手が会話のターンを取る場合が多い。このタイプの「言いさしマーカ―」は、「カラ」類、「ケド」類、「レバ」、「タラ」が挙げられる。

(26) (大樹が出て行く)

大樹「行ってきます」

正樹「うん」

(慎平が自分の部屋から出てきて、)

慎平「おやつ、アイスクリームが冷蔵庫に入っているからな」

大樹「うん、行ってきます」

(鎌田敏夫『男たちによろしく』 p.69 白川 2009:10)

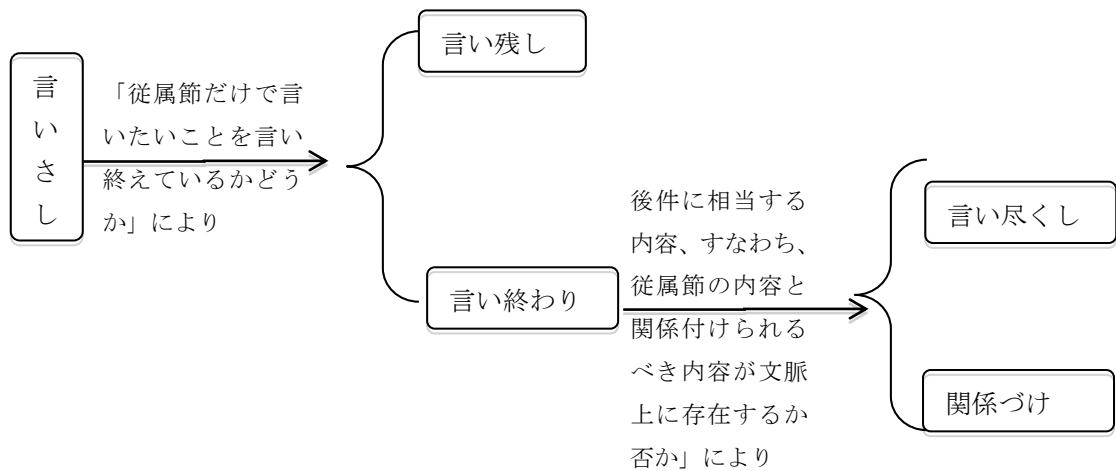


図 2-4 白川 (2009)による「言いさし」の分類 (田作成)

以上により、白川 (2009)は「言いさし」を以下のような三つの下位カテゴリーを設けていることがわかる。

- a. 言い残し：言うべき後件を言わずに途中で終わっている文。
- b. 言い尽くし：関係づけられるべき事態が文脈上に存在しない文。
- c. 関係づけ：関係づけられるべき事態が文脈上に存在する文。

2.5.3 研究対象の範囲

2.5.3.1 研究対象となるもの

本研究では、「言いさし」の中、とりわけ、「けど」節 (が・けれど・けども・けれども・けど) で終わる「言いさし」を取り上げ、「言いさし」の「けど」類とし、それに対応する逆接を表す複文の従属節マーカである接続助詞の「けど」を文法的・意味的・音韻的に対照させながら、それぞれの形式の間に見られる類似点と相違点を浮き彫りにし、更に学習者の習得状況も明らかにしたい。

「言いさし」の「けど」類は、自然会話の中で最もよく現れる。また、「けど」類で終わる文が「言いさし」であるかどうかを判断する際には、「けど」類がなくても、話者の実質的情報が伝わるかどうかという点を基準とする。

さらに、コーパス上で「～けど、」で表記されているもの、及び「けど」類の後に句点なしで主節が後接する場合を「接続助詞の『けど』類」とし、「～けど。」で表記されているものを「『言いさし』の『けど』類」とする。

例えば：

「黒でもいいけど、あんまりきれいじゃないでしょう。」→接続助詞の「けど」類

「言っていていいかどうかわかりませんが。」→「言いさし」の「けど」類

「言いさし」の「けど」類は、接続助詞「けど」（が・けれど・けども・けれども）の機能が一方的に拡張し、接続助詞から終助詞へ変化するという文法化現象として捉える観点もみられるが、ただし、「脱語彙化」する典型的な文法化ではなく、もともと機能語であるものが多機能化する（「多機能性の発達」）周辺のケース（大堀 2002:186）である。

つまり、接続助詞「けど」（が・けれど・けども・けれども）は、逆接を表す機能を喪失し、それと同時に統括命題を伴わなくなってしまう、意味論的特徴がなくなったのではないかと思われる。

2.5.3.2 対象外とするもの

本稿において、研究対象の考察分析にあたって、以下のような「けど」類によって終わる発話は、分析対象外とする。

I. 「けど」類の単独発話

下記の(27)の「けど」類で終わる発話のように、同じく発話末に「けど」類が使用されているが、機能語ではなく独立語であるように見られ、普通の接続詞とみなすため、対象外とする。

(27) F032：世代も違うけれども、それこそ、こそあどのあれが結構違ってるのよ。それはたぶんさ、(うん) 3人ぐらいだともう、どこが何かっていうのはすぐわか、わかるわけよ。(うん) だけど。

F098：あれでいいと。

F032：そうそうそうそう、(うん) あのね、いや。

F098：ええ？

(名大会話コーパス)

II. 「けど」類の倒置

i. 倒置の定義および特徴

自然会話において、構造上に最後まで言い切らない発話は、「言いさし」以外に、(28)の「ちょっとトロそうだけど。」のような「倒置」もよく観察される。

「倒置」とは、ある「述部的部分以外の成分」が「述部的部分の要素」（南 1993:96-97）の後ろにあり、「その前の成分と要素より低いイントネーションで発話される現象」（ザトラウスキー2005:159）である。例えば、(28)において、「ちょっとトロそうだけど」という「述部的部分以外の成分」が、「若くてかわいーじゃない」という「述部的部分の要素」の後ろに現れており、完全文に復元すると、「ちょっとトロそうだけど、若くてかわいーじゃない。」となる。

(28) 三鷹の叔父：「（見合いの写真を見せながら）どうだ。

なかなかの美人じゃないか」

一 ノ 瀬：「へー、若くてかわいーじゃない。ちょっとトロそうだけど。」

（『めぞん』 p.120, 白川 2008）

また、倒置は、「話しことばが時間的な制約を受けるという特徴から現れるものであり、重要度の高い情報から伝達し、より正確に表現するために情報を補っていく過程で生成される」（佐藤 1994:75）ものとして考えられており、丸山（1996b）は、「書き言葉の倒置が修辭的な機能を担っているのに対して、話しことばの倒置は補いの意味が濃い」ことを指摘している。すなわち、倒置として成立できる一つの大きなポイントは情報の補足であるといえる。

倒置に関する研究は、倒置の機能や定義に関する分析が多くなされているが、使用される場面との関連性が強いため、話し手と聞き手の相互作用を中心にし、その場面における話し手の倒置の使用理由に関する研究が多く見られる。ここでは、Kuno (1978)、Hinds (1982)、森岡 (1973) を挙げる。

まず、倒置の起こる主な原因について、Hinds (1982) は、発話における話者の文要素の省略の修正によるものだとしている。すなわち、話者は、発話の最中に文の要素を省略し、聞き手がそれに対して理解できていないことに気づき、その要素を述語の後に補うものであるというわけである。これによれば、「後置」の機能は、省略によって生じたあいまい性を修正するというものである。

そして、Kuno (1978) は、倒置された要素は、「右方転位」ではなく「後で考えたこと」だと述べている。また、その倒置の部分は、「談話から予測できる」もの、及び「補足的」なものであり、前の部分の解釈を変える場合には倒置が用いられないと指摘している。

また、Hinds (1982) は、Kuno (1978) を踏まえ、具体的な場面における「後置」を分析し、「談話から予測できる」もの、及び「補足的」なものの他に、前の部分の解釈を変えるものも後置されると指摘している。さらに、その中で、あいまい性をなくすための「後で考えたこと」以外に、前の部分を「目立たせる」もの、明確にするもの、前の部分の理由を説明するものも多く見られるとしている。

以上の先行研究をまとめると、倒置は、話し手が情報を伝達する際に時間の制約によって本来省略しようと考えた情報を、重要度の高い情報を伝えてから、補

足として用いる表現である。そこで、倒置された部分は、「可逆性」（国立国語研究所 1960）を備えており、前置された部分と一つの文を構成することができるといえる。例えば、(29)のように、「ちょっとトロそうだけど」という倒置の部分は、「若くてかわいいじゃない」という評価の補足として機能し、話し手である一ノ瀬が本来省略しようと考えた情報であるといえよう。また、完全文に復元すると、「ちょっとトロそうだけど、若くてかわいいじゃない。」となる。

(29) = (28)

三鷹の叔父「（見合いの写真を見せながら）どうだ。

なかなかの美人じゃないか」

一ノ瀬「へー、若くてかわいいじゃない。ちょっとトロそうだけど。」

（『めぞん』 p.120, 白川 2008）

ii. 本論文における「倒置」と「言いさし」の相違

国立国語研究所（1960）は、(30)の「この本じゃないかもしれないけど。」のような後置成分の可逆性のものを倒置としており、不可逆性のものを単独の省略文または独立の一文と認めることを指摘している。そこで、本論文の研究対象となる「言いさし」に可逆性があるかどうかについて、白川（2008）に言及がある。白川（2008）は、「言いさし」において、ケド節を複文の従属節として主節の前に移動させ、「完全文」に還元しようとしても、前件のケド節と後件の主節との間にズレが生じて、文全体として「やや不自然になる」としている。つまり、「けど」類の「言いさし」は、主節の補足として現れる「倒置」ではないと判断できる。

(30) F073：あっ、そうかあ。でもかわいいよね、ギャラクシー。

でも緑もかわいいんだって。

F092：うん、かわいいねー。（うん）しかもどっかに載ってたよ、

この本じゃないかもしれないけど。

F073：緑？

F092：っていうか、ギャラクシー自体。

F073：あっ、ギャラクシー。

F092：新色が出たっていって。

（名大会話コーパス）

さらに詳しく述べる。完全文の形式を「P「けど」類 Q」とすると、「けど」類で終わる形式には、構造上で下記の二つのタイプが考えられる。

「けど」類の完全文 P「けど」類 Q。

「けど」類で終わる文 ①. Q. P「けど」類。 ⇒倒置 (例 33)

②. P「けど」類。(Q) ⇒「言いさし」(例 31)

倒置とは、下記の例 (33) (34) のように、Q の部分が前に言語化された場合である。また、先行研究の結論からいうと、本来省略される従属節の再現であると言えるだろう。それに対し、(31) (32) のような「言いさし」は、最後まで言い切らずに主節が省略されているように見える発話であり、主節が完全に「省略されている」言語形式である。

本論文では、次の (31) (32) のような主節が言語化されていない場合を「けど」類の「言いさし」と呼ぶことにし、(33) (34) のような明らかな従属節の倒置とみられる形式は接続助詞「けど」類の倒置とみなし、研究の対象外とする。

(31) F042 : そのこの話はしないって言って、結局はそのこの話してるのに。

<笑い>

F050 : そう、困るところあったら別に切れるからね。

F042 : だからあえてあんまり出さないようにして。でも、話、今してんだけど。

F050 : 名前はアルファベットになるしね。(うん) その場所のところも絶対出さないからね。(うん) うん、OK。あーあ。(うーん) しょうがないね。

F042 : 時間になったらヨガをやらないかんね。テープで。

F050 : 少しね、ほぐしておかないとね。

F042 : うん、うん、うん、うん。あとで。

(名大会話コーパス)

この会話において、「でも、話、今してんだけど」という従属節だけ現れ、「でも、話、今してんだけど、ほんとうによくないね/しょうがないね」という完全文形式の「言いさし」であり、「自分を責める」という語気を和らげる機能を果たしている。

(32) F140 : <笑い> え、だ、でも方言じゃない方がいいんだよね、たぶんね。

F024 : うん。どうなんだろうね。

でも出身地とか書くところがあったらしいけど。

F140 : マジで? でも文字起こしとかすっごいにくい。

やりにくい<笑い>でしょう？

F024：ああ、だいじょぶだ。ああ、置いてきちゃった。
置いてきた、車の中に。

(名大会話コーパス)

この例において、「でも出身地とか書くところがあったらしいけど」という発話は、「でも出身地とか書くところがあったらしいけど、方言も出てくる可能性もあるんだ。／方言も必要とされているんじゃないか」のような発話の「言いさし」形式であると想定され、事実だけを述べてその結論を聞き手の理解に委ねるというような話し方により、相手のフェイスを保つことができると考えられる。ここでは、「どうなんだろうね」という発話は、完全に独立した発話であると判断できる。

それに対し、以下の(33) (34)は、「倒置」として本論文の研究対象外とする。

(33) F128：ほんと潤ってないもんね。(ねえ)潤ってる？

F037：潤ってる？<笑い>

F128：どうなんだろう？潤ってないよー。

なんかねえ、この正月は潤ったような気がしたんだけど。

F037：一瞬だったね、だったら。

F128：うん。一瞬だよ、ほんと。

F037：また現実に。

F128：ほんと現実に戻されちゃった。(うん)難しいよね。(うん)ね、もうほんとに。

F037：でもさー。(ね)恋がしたいわ、恋が。*み*たいわ。恋すると。

(名大会話コーパス)

この会話において、「この正月は潤ったような気がしたんだけど。」という発話は、「潤ってないよー」という主節がすでに言語化されており、「この正月は潤ったような気がしたんだけど、潤ってないよー。」という完全文の従属節の後置と考えられ、補足の機能を果たしている。

(34) M025：ばあちゃんは(F015も嫌なの?)グジュグジュが好き。

M012：干し柿食えるん?(ふーん)好きやねん。

F021：あのグジュグジュなのが嫌なの?干し柿が嫌いなのはわかるけど。

F015：干し柿大嫌い。

M025：干し柿の方がまだ食える、俺。

F021：何で?サクサクの方がおいしいじゃん

M025：あの一、お菓子感覚。

ここでは、F021の発話「あのグジュグジュなのが嫌なの？ 干し柿が嫌いなのはわかるけど、」は「干し柿が嫌いなのはわかるけど、あのグジュグジュなのが嫌なの？」という発話の倒置であると考え、主節「あのグジュグジュなのが嫌なの？」はQに相当し、前に言語化されていると判断できる。

これは、前件と後件の位置が交替しただけであり、主節と従属節が整っているため、不完全文とは言えない。本稿の研究対象である「けど」類の「言いさし」とは別物だと考えられる。

2.6 本章のまとめ

以上、「言いさし」の捉え方を述べた。具体的に、2.1 および 2.2 で先行研究をまとめた上で本研究における話し言葉の「文」の定義を明確にし、2.3 で「言いさし」と「文」の関係を述べた。また、2.4 で「言いさし」の形成要因を論じた。最後に 2.5 では、「言いさし」の文法論における位置付けを述べた上で、本研究の研究対象を明示した。

次章では、本研究の研究対象に関する先行研究をまとめる。

第3章

日本語教育文法と「言いさし」に関する先行研究

近年の日本及び中国の日本語教育研究では、文末、或いは発話末の表現形式に注目するようになってきており、「待遇上の積極的な意味を持っている」（岡田 1991:12）、「話し手と聞き手の関係、聞き手との情報の共有関係、聞き手へどう働きかけるかなどの聞き手への態度などが含まれている」（峯 1995:65）ということが言われている。対人関係の調整機能を担っている文末表現は、日本語の会話において重要な役割を果たしており（池田 1995）、適切な文末表現を選択することによって「遠慮」と「察し」を特徴（古田 1996）とする日本語によるコミュニケーションをより円滑に進めることができる。

本章では、日本語教育文法、および「言いさし」に関する先行研究を概観する。具体的に、1 節では日本語教育文法に関する先行研究をまとめた上で、日本語教育文法に関する本論文の立場を述べる。2 節では「言いさし」の定義・機能、出現理由、学習者における習得状況に関する先行研究をまとめる。

3.1 日本語教育文法の概観

3.1.1 「日本語教育のための文法」から「日本語教育文法へ」

日本語を「外国語」とする教育、すなわち日本語教育の歴史は、記録上 15 世紀にまで遡ることができるが、現在に近い形の日本語教育が日本国内で本格的に行われるようになったのは 1960 年代からであると言える（庵 2012a）。日本語教育の「黎明期」（庵 2014）に伴い、寺村秀夫、森田良行、佐治圭三を中心に「日本語教育のための文法」に関する研究が始まり、「日本語教育のための文法」という用語は使用されるようになって盛んになった。

また、「日本語教育のための文法」は、国語学に対して日本語学に関する研究の重要性が主張され、日本語学の創成期（1970 年代）から発展期にかけて寺村秀夫を中心に盛んに行われた。そこで、寺村文法の三本柱は「日本語の記述的研究」、「対照研究」、「日本語教育のための研究」とされている（庵 2013、野田 2011）。しかし、寺村は 1990 年に「日本語の記述的研究」だけを遺して急逝し、寺村の指導・影響を受けた多くの研究者は、「日本語の記述的研究」のみを継承したため、寺村の死後、日本語学と日本語教育の関係は疎遠になっていった（庵 2012a, 2014）。

そのような状態を変えようとして、日本語学と日本語教育との関連性を主張し、日本語学の知見を日本語教育現場へ提供するという考えの下で、ループ・ジャマ

シイ（1998）や庵・高梨・中西・山田（2000）などのようないくつかの文法参考書や野田（2001）や白川（2002）などの指摘が現れた。

野田（2001）は、「教養のため」、「関連分野への応用のため」、「言語学のため」という三つを日本語学の目的とした上、「関連分野への応用のため」に日本語教育への応用が含まれている。一方、白川（2002）は、記述的研究の目的を、下記のようにまとめている。

- ①. 理論やモデルを構築するデータとして使うため（言語学的研究）
- ②. 日本語を母語としない人たちに説明するため（語学的研究）
- ③. 言語研究以外の研究に応用するため（関連領域の基礎研究）

さらに、白川（2002:65）は、「日本語を母語としない人たちに説明するため（語学的研究）」について、「単に「無意識的に使っている母語のしくみを探ること自体が目的の純知的な謎解き」ではなく、「非母語話者である学習者がその言語を使えるようになる（する）ための道しるべ（つまり、寺村（1982:15）のいう「実用文法」）」」であると示唆している。

このように日本語記述文法と日本語教育が乖離である状況において、「日本語教育のための文法」（日本語教育文法）という考え方が生まれてきたのである（庵2011a）。この時期は、日本語学の研究者の中で日本語教育への志向性が強い研究者が日本語学の知見を日本語教育の現場へ提供する必要性を強く感じて行動したという意味で、庵（2012a）で「日本語教育文法第1期」と呼ばれている。しかし、この時期における考え方は、既存の文法シラバスの枠組みを使用しているため、野田（2005）では、「日本語学的文法に依存した日本語教育文法」と呼ばれている。

日本語学に関する研究の発展、コミュニカティブ・アプローチをめぐる議論の深化および学習者の多様化に伴い、そうした日本語教育文法第1期の問題点の克服を目指し、野田編（2005）の「コミュニケーションのための日本語教育文法」という新しい主張が生まれた。具体的に、「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」（白川2005）、「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」（井上2005）などがあげられ、日本語教育文法第2期の幕が開いた（庵2012a）。野田編（2005）の「コミュニケーションのための日本語教育文法」について、庵（2012a）は「体系主義・形式主義の悪影響からの脱却」、「4技能それぞれに特化した文法の構築」、「母語別の文法への提唱」を特徴づけた上で、それらを推進していく上で、「データベースに基づいた議論」、「「やさしい日本語」の推進」「文法シラバスの解体」の三つを示唆している。

3.1.2 日本語教育文法に関する本論文の立場

ここでは、野田（2005）および庵（2011a）をまとめた上で、日本語教育文法に関する本論文の立場を述べる。

まず、野田（2005:18）は、学習者の多様化という背景から、以下のような方針を提出している。

- ①. 聞く・話す・読む・書く、それぞれの余力を育成するために、聞く・話す・読む・書く、それぞれの文法と別々に作る。
- ②. コミュニケーション活動が成功することを目的として、教える文法項目を選ぶ。
- ③. 一律の教材を前提にしないで、それぞれの学習者に応じたオーダーメイドの文法が作れるようにする。

さらに、「日本語学に依存しない日本語教育文法」という背景から、下記のような方針を示唆している野田（2005:18）。

- ①. 相手とのコミュニケーションに直接関わる伝達部分や社会言語的な能力を重視する。
- ②. コミュニケーションの目的が先にあり、その機能を果たすための文法を作る方法にする。

野田（2005）の「日本語教育文法」に関する主張について、これに対して、庵（2011a:9）は、「日本語記述文法との距離を大きくとる日本語教育文法上の立場もある」と述べ、「可能であれば、両者の距離が再び近いものになることが望ましい」と主張している。さらに、「聞く・話す・読む・書く 4 技能に特化した日本語教育文法」について、庵（2011a:10）では、「文法」に関する一般性が見えないと指摘した上、「こうしたやり方ではストラテジーは身についても、知識は身につかない（つきにくい）可能性がある。」こと、「どういう例を取り上げるかについてのフォーマットが定まっていなように見えた」ため、「研究への参入可能性を低くしている」と評価している。最後に、「「日本語教育文法」が学問分野として独立したものとして認められるためには、研究上の定式化が必要であると考えられる。」と述べている。

そのうえ、庵（2011a）は、日本語教育文法についての見方はさまざまであることを認めた上で、「日本語教育における必要度に応じて文法記述を行う」という共通点があることを指摘している。つまり、日本語母語話者のためでなく、日本語を母語としない多様化しつつある日本語学習者の立場から出発し、文法記述を行うことであるだろう。本研究は、庵（2011a, 2014）と同じ立場をとり、「日本語教育の役に立つ」文法研究を目指す試みとして「言いさし」を取り上げ、考察する。

さらに、庵（2011a）は、言語表現（文法・語彙）には、意味がわかればいいもの（理解レベル）と、意味がわかった上で使える必要があるもの（産出レベル）があるとしており、日本語教育文法は、産出レベルに着目した「産出ための文法」とされている。さらに詳しく言うと、「理解レベル」である表現は、母語話者のために抽象に記述されて理解にとどめる程度で十分である一方、「産出レベル」

である表現は、「意味がわかる」かつ「使える必要があるもの」であり、当該の場面でいずれを使えばいいのかについて学習者のためにわかりやすく記述される表現であると解釈できるだろう。

その上、(庵 2011a:9) は、「日本語教育の役に立つ」文法研究について、テキストの実時間内処理可能性 (庵 1998) に関する記述の必要性も示唆した上で、「予測の実相をより多角的に研究し、その内実を明らかにし、それを日本語教育の現場で使える形に記述する」必要があると述べている。認知処理の視点から母語話者および学習者の知覚処理状況を明らかにすることにより、学習者の頭の中の認知状況・知覚モードを踏まえた上で適切な文法記述をすることも不可欠である。

特に、言語コミュニケーションの一形態である話し言葉に関する日本語教育文法研究を行う際に、「音声を媒体とするやりとりである」「双方向のやりとりである」「前に準備されたやりとりでないこと」(小林 2005) という三つの特徴を有する自然談話の表現を対象とする際に、音声的な知識が発話意図などに関連するため、第2言語習得における「知覚が産出の前提となる」(Flege 1987) という指摘により、音声的な使用実態およびそれに関する知覚状況などもパラメーターとして考察する必要がある。

さらに、庵 (2013:55) は、現在の日本語文法教育における「とらわれ」(外国語教育は一般的 (generic) にしなければならない) 現象を批判し、「シラバスは何語の話者に対しても使えるように作らなければならない、特定の話者に対する教育ということは考えるべきである」とした上、「日本語学習者の7割を中国語話者が占めるという現実に鑑みれば、母語をタブー視しないで母語の転移を積極的に利用することが重要なのである」と指摘しているが、話し言葉について中国人学習者に対する日本語教育研究を行う際に、中国人学習者が問題視している困難点から出発し、彼らの中間言語段階の特徴を明らかにした上で、ふさわしい文法記述を考える必要がある。

そこで、以上の記述を踏まえ、庵 (2011a) に従い、本論文では話し言葉に関する日本語教育文法を下記のように捉える。

学習者の母語や知覚モードを考慮した、日本語教育の現場で使える形に記述すること。

中国語母語話者は、日本語による聴覚情報処理が困難であると言われており(日本国際協会・国際交流基金 2004)、喬 (1997) は、日本語を主専攻とする中国の大学生を対象に意識調査を行い、最も困難だと感じていることは「聞くこと」とであると指摘しているため、本研究から得られた「言いさし」の知覚情報処理および「接続助詞」との使い分けに役に立つ音響的・統語的・意味的・形態的なパラメーターによって、聞く面から「言いさし」に関する知覚トレーニングが改善され、日本語教育の現場で使える形にし、学習者に理解やすい産出のための文法

記述が開発されることを期待している。

3.2 「言いさし」に関する先行研究

3.2.1 定義・機能について

「けど」類の「言いさし」の定義・機能に関する先行研究は、管見の限りで、高橋（1993）、三原（1995）、Ohori（1995,1997,2000）、大堀（2002）、曹（1998,2002,2004）、朴（2008）、白川（2009）、楠本（2015）、永田（2015）が挙げられる。

高橋(1993)

高橋（1993）は、益岡・田窪（1992）を踏まえ、「言いさし」を主節の省略としてとらえる同時に、「固有の機能をもつ表現」であると主張している。また、「言いさし」について、「接続助辞で文がおわっていて、本来あるべき主節の省略されている文が非常にたくさんある」（高橋 1993:21）と述べた上、「それぞれの接続助辞でむすばれる従属節の主節に対する関係的意味の性質」（高橋 1993:21）が、基本的に残っていることを指摘している。

- (35) 「いらっしゃいませ」L字型のバー。雰囲気はわるくない。
「はじめてだけど」
「どうぞ」

（阿刀田『他人同士』高橋 1993:21）

さらに、（高橋 1993）は、「が、けれども、から、れば」などの接続助詞による「言いさし」について具体的に分析し、完全文における接続助詞としての機能からは単純に解釈できない用法や特徴があることも指摘している。特に「けど」や「が」で終わる文は、その従属節時代の第二の意味を引き継いで、(35)のように前提を表すことも多いとしている。

それから、「そう言われりゃ、それまでだけどさー」のように、終助辞がついた時に、文はここで終わっているという実感は一層強まると指摘している。

- (36) 「今晚は、何か予定があるかね？」（中略）
「特別に予定はありませんが」

（清水一行『乗っ取り』高橋 1993:21）

さらに、(36)のように、「けど」類の「言いさし」は、文の内容としての、ことごとの論理関係を表すだけでなく、話し手の聞き手に対するやり取り関係にかかわるといふ従属節時代にはなかった役割を演じることになる」と述べている

(高橋 1993:22)。

(37) 仙吉「そこ、座れ！」

たみ「座ってますけど。」 (『あ・うん』高橋 1993:22)

最後に、(37)のような話し手と聞き手のやり取りにかかわる文末の「けど」類は、自身が終助辞のようになるのである。終助詞化した接続助詞の意味・用法は、こういう転成は、従属節の述語から、文の述語へという機能の変化の結果として生じたものであるという認識が必要であると示唆している。

三原 (1995)

三原 (1995) は、日本語教育のためのビデオ教材を分析資料として取り上げ、「ケレドモ」で終わる「言いさし」に現れる機能を考察した結果、「依頼、要望や断り、また自分の意見を述べること等、表わされた内容が、聞き手に対して何らかの負担 (実際的あるいは心理的負担) をかけてしまう、または話し手が相手に負担をかけてしまうと推測するような場合に使われることが多い」(三原 1995:87)と述べている。

また、三原 (1995) は、「ケレドモ」で終わる「言いさし」が談話の中で使用される場合は、下記のように、「聞き手に対し、話し手の意見や願望、また聞き手にとって行動を起こすきっかけとなるような情報を提示し」、「どうですか」「いかがですか」「どうしましょうか」などのようなニュアンスを聞き手に与える用法でよく使用すると指摘している。

(38) 麻子：わさびふりかけ？

久司：うん。彩りにっていうことだったら、
それもぜひ屋台に出してほしいんだけどな。

麻子：美味しいの？

久司：試作品試したけどさ、これ、いけますよ。

おれも、ちょっとね、アイデア出してんの。

(『青春家族』 三原 1995:81)

Ohori (1995,2000)・大堀 (2002)

Ohori (1995,2000)は、「あたしはさっきも話したんだけどー」のような発話を、依存関係をもった節が主節を伴わずに出る構文と認識し、中断節構文 (suspended clause constructions) と呼び、単なる主節の省略ではなく、独自の機能をもった構文と見なしている。また、このような構文が、相手の「推論を積極的に働かせる作業を含む意味関係」をもち、「相手の理解・共感をうながす」機能があるとしている。

さらに、「から」及び「けど」の「言いさし」を例として取り上げ、下記によ

うに英語と比較して構造化し、高橋(1993)と同じように、「言いさし」に本来的用法からは予測されない固有の機能があることを認めている。

X-KEDO,Y(Though X,Y)→X-KEDO,φ

(Though X,that's not the whole story)

X-KARA,Y(X,so Y)→X-KARA,φ

(X,so you know what or X,so it concerns me/you)

さらに、Ohori (2000)、大堀 (2002) では、「私もいい歳ですし」のような「し」の考察も行っている。大堀 (2002) は、中断節として用いられる「し」は、「並列」ではなく、「理由」という解釈であり、聞き手の推論を求める方向へ解釈が限定されると指摘している。結論として、「中断節構文」は、一般に意味論的特徴（ここでは「理由」）が「推論集約的」(inference-intensive)であり、語用論的特徴が「対人機能」(interpersonal)であると述べている。

さらに、中断節という構文的枠組みが与えられると、元来幾通りかの解釈をとりうる接続が、一定の解釈に限定されるということも指摘している。例えば、「私もいい歳ですし」という中断節は、中断節とならない時には、(39)のように理由の解釈をもつ場合と(40)のように並列ないし緩やかな対照を表わす場合がある

(39) 私もいい歳ですし、この仕事は引き受けられません。

(40) 私もいい歳ですし、主人は間もなく定年です。

ただし、「私もいい歳ですし」のような中断節構文においては、構文的意味として「理由」が与えられ、解釈がより限定される。「私もいい歳ですし」を(39)と関係づけることはできても、(40)とは無理がある。それは省略の推論による復元においても、構文的知識が解釈の際にはたらいっているためであると述べている。

最後に、それに関連し、大堀 (2002) は、「一般的に言って、開かれたクラスの語彙項目が閉じられたクラスの文法的要素に変化する過程を言う」(秋元 2001:1) という「文法化」の定義について、開かれたクラスから閉じられたクラスへの変化のみならず、その周辺的ケースとして「多機能性(「もともと文法形式であったものがさらに拡張されて異なる機能をになうようになるプロセス」(大堀 2002:186))の発達」も文法化の対象となるとしている。さらに、文末表現については、「文法のほかの部分との相互作用に乏しいために文法化の枠内に入れないこともある」が、「会話体では対人機能や談話構成のために多くの手段が動員されており、その中でも文末表現はある程度まで閉じたクラスをなすこと、音韻の縮約があること、語用論的機能を獲得すること、などの特徴から広義の文法化に含めてよい」(大堀 2002:186) と述べている。

けれども、大堀は、中断節構文について、それが果たす語用論的効果は、形式そ

のものによって担われているという点を強調しているが、形式に頼りすぎるように感じられる。例えば、下記の(41) (42)において、果たす語用論的効果は、いずれも婉曲的に相手への働きをかけて暖房を再設定してもらうことと考えられるが、形式は異なっている。

(41) ちょっと寒い気がしますけど。

(42) ちょっと寒い気がしますけど、何度かな？

語用論的効果は、発話の形式との関連がないと言いがたいが、そのものによって担われているという主張は、中断節構文の機能を拡大しているように見える。そのため、更に自然の談話データを調査する必要がある。

曹英南(1998,2002a,2004)

曹(1998)は、「言いさし」の「けど」類に「非実現を表わす」・「不納得を表わす」・「相手に対する働きかけを表わす」という三つの談話機能があるという考えに基づき、日本語自然会話を資料として分析し、フォーマルな場面とインフォーマルな場面に分けてそれぞれの機能における使用場面の相違点を明らかにした。その結果、「相手に対する働きかけを表わす」機能と「不納得を表わす」機能を果たす時には、場面に応じて使い分けがなされているが、「非実現を表わす」機能を果たす時には、場面に応じて使い分けがなされていないことを述べている。

また、曹(2000)は、映画のシナリオを使用して「言い終わり」の「けど」類を考察し、「発話緩和」・「発話補完」・「発話断定回避」という三つの機能があることを指摘したうえで、場面(公的な場面/私的な場面)、および対人関係(遠慮が必要な関係/遠慮が必要でない関係)に分けてデータを分析した結果、「『発話緩和』『発話補完』はくつろいだ状況で使われている傾向があるのに対し、『発話断定回避』はあらたまった状況で使われている傾向がある」(曹2000a:99)と述べている。

さらに、曹(2002:27-28)は、より広い範囲で「言いさし」をとらえ、言いさし表現は形式上、述部が省略されていると見られる発話を「言いさし表現」として

「言いさし表現」の必要条件には、次のような二つがあると述べている(2004:104)。

1. 形の上で、文を最後まで言わずに途中で終わっている発話である。
2. 相手の割り込みではなく、話者の意志により完結している発話である。

さらに、述部の有無により「述部有り」と「述部無し」の二種類に分類しており、それぞれ以下のように定義している。

(1) 「述部復元」の「言いさし」：話の前後関係または状況から省略されていると見られる述部を補って考えなければ、発話内容が分からない「言いさし」。

(43) AがBに飲み物を勧める場面である。

A：これ、どうぞ。

B：あ、ありがとうございます。

(映画「ラブレター」曹 2002a:27)

曹(2002)は、「これ、どうぞ」という発話は、「飲んで下さい」という述部が省略されており、Bは省略された述部まで補って考えなければ、Aの意図した発話内容が伝わらない。このような発話は述部を補って考えなければ発話内容が分からない「言いさし」としている。

(2) 「非述部復元」の「言いさし」：話の前後関係または状況から述部を補って考えなくてもそれだけで発話内容が分かる「言いさし」。

(44) Aから質問を受け、それに答えている場面である。

A：なぜ、音楽が好きですか？

B：説明しにくいんですけど。

(韓国映画「接続」曹 2002:27)

曹(2002)は、Aからの質問に対し、Bは「説明しにくいんですけど」と答えているが、「説明しにくい」という話者の発話内容に実質的情報は伝わっていると考えられる。このような発話は述部を補って考えなくてもそれだけで発話内容が分かる「言いさし」（「言い切り表現」）としている。

朴(2008)

朴(2008)は、テレビドラマ及び映画の会話文を分析資料として、「けど」の「言いさし」の機能を考察した結果、「けど」には、「『誘い』や『申し出』等の働きかけをする用法」・「『断言』を和らげる用法」・「自分の意見をぼかすための曖昧的な用法」という三つの機能があることを述べている。

内田(2001)

内田(2001)は、「けど」で終わる文の特性を、談話機能の視点から見ることを目的とし、「どのような談話機能を持つときにどの特性が見られるのか」について談話機能と特性を提示している。また、会話のやりとりの始めに使われる場合と返答に使われる場合に分けて分析し、前者は質問・要請・提案の前置き・情

報提供であり、後者は情報要求の質問に対する応答であると指摘している。

白川(2009)

白川 (2009) は書き言葉のデータに基づいた文法論の分野での「言いさし」の包括的な研究である。白川 (2009) は、主節欠如の文を「言いさし文」と定義した上で、統語論で主節を欠いていると見なすことができるものの、談話において内容的には完結性が強く、途中でやめているというよりも、言い切りの様を呈する表現としている。

また、以下のような三つの問題点から「言いさし文」を考察している。

- (1) 「言いさし文」が独立文と同等の完結性を持つのはなぜか
- (2) 「言いさし文」はどのような機能を持つか
- (3) 日本語の文法体系の中で従属節をどのように位置づけたらよいか

白川 (2009) は「言いさし文」を網羅的に扱い、「ケド節」「カラ節」「タラ節」「レバ節」「シ節」「テ形節」をそれぞれの語用レベルの機能について詳細な記述に取り組んでいるだけでなく、日本語文法での位置づけについても論じている。

さらに、「主節を欠いた統語的に不完全な文による発話」を「言い残し」と「言い終わり」に分け、「言い終わり」を「関係付け」と「言い尽くし」の二種類に分類した上で、「ケド」節・「カラ」節・「タラ」節・「レバ」節を「言い尽くし」の例として、「カラ」節・「シ」節・「テ」形節を「関係づけ」の例として、考察を行った。

「けど」類の「言いさし」については、「言い尽くし」の「けど」類を取り上げて考察を行っている。「言い尽くし」の「けど」類は、本来の機能は「聞き手に条件（聞き手に何かするための情報）を提示することである」と述べ、「終助詞的な用法」「倒置的な用法」「挿入的な用法」に分けることができると指摘している。

① 終助詞的な用法

(45) 響子「あの...三鷹さん私、アパートに電話したいんですけど。」

三鷹「は？ どうしてですか？ 子供じゃあるまいし。」

(高橋留美子『めぞん一刻 13』p.82 白川 2009:25)

ここでは、「あの...三鷹さん私、アパートに電話したいんですけど。」の「けど」は、「～から」「～よ」といった他の文末表現より柔らかい感じがすると指摘している。

② 倒置的な用法

- (46) 響子 「まあ！！」
こずえ 「あたしが一方的に懂れてただけなんだけど。」
(高橋留美子『めぞん一刻2』p.193 白川 2009:20)

ここでは、「あたしが一方的に懂れてただけなんだけど。」は、先行する文で話し手自身が言った「あたしの初恋の人にそっくりなんですよ。」ということの補正である。聞き手が先行する文から導き出すかもしれない含意をキャンセルするための発話だと指摘されている。

③ 挿入的な用法

- (47) そうしているうちに、いつの間にか中学で一番か二番になるまで速くなっていったのです。長距離をやって、マラソン——いまのフルマラソンではないですが——をやって、いつも校庭を出て最初に戻ってるのは私だったのです。
(篠田正浩『日本語の語法で撮りたい』p.41 白川 2009:17)

この「が」節には、主節を伴わなくてもそれ自体に参照情報を提示する機能があると指摘されている。

白川 (2009) は、「言い尽くし」の「けど」類の位置づけについて、「主節なるものが初めからない」(白川 2009:34)としているが、「言い残し」の「けど」類について機能や位置づけについて言及していない。また、考察のデータは小説やシナリオであり、自然な日常会話と認められることができないため、自然な日常会話について再考察する必要があると考えられる。さらに、「言いさし」の「けど」及び接続助詞の「けど」が、句末音調には異なりがあるかどうかという音声的な分析については触れられていない。

楠本 (2015)

楠本 (2015) は、「注意・要求・断り」という場面における「けど」および「ので」の「言いさし」を対象とし、両者に現れる待遇上の表現効果の違いを明確にするために考察を行った結果、「けど」による「言いさし」は、「聞き手への能動的な要求が含意される」ため、「聞き手の感情的反応を誘発し待遇性が低められた表現効果をもたらす」のに対し、「ので」による「言いさし」は、「事情説明を表すというノデの機能」が含まれるため、「聞き手の理解を求めるといった懇願的行為が暗示され、聞き手の認識改変を求めるケド文と比べ談話効果として待遇的に高められたものとなる」(楠本 2015:56)と指摘している。

永田 (2015)

永田 (2015) は、日本語の自然会話に最も多く現れる「接続助詞ケドの言いさし表現」が談話展開にどのように関わるかについて、「トピック展開」と「ターン・テークング」という二つの観点から考察している。その結果、「トピック展開」について、「開始部」・「主要部」(更に「開始位置」・「主要位置」・「終結位置」に下位分類されている)・「終結部」に分けた後に、「接続助詞ケドの言いさし表現」は「開始部」と「主要位置」に用いられてトピックの継続に関わることを指摘している。

また、「ターン・テークング」について、「接続助詞ケドの言いさし表現の後にはすべての場合においてターンの移行が見られ、談話中でターンを明示的に譲渡する指標としての役割を果たしている」(永田 2015:23)と指摘した上、「接続助詞ケドの言いさし表現」の後に、明示的なターン譲渡の指標が伴われる形で再びターンが現れるため、「接続助詞ケドの言いさし表現」によるターン譲渡は、「その後の談話展開を相手に委ねるかたちでのターンの譲渡である」(永田 2015:23)と示唆している。

3.2.2 出現理由について

「けど」類の「言いさし」の出現理由に関する先行研究は、荻原(2008)があげられる。下記でまとめる。

荻原 (2008)

荻原(2008)は、「言いさし発話」の解釈を可能にするスキーマの探求を目指し、「文末部分が省略されているために文としての形式が完全でないものをすべて」研究対象とし、主流の「言いさし」に関する研究とは異なり、聞き手側という視点から発話解釈のメカニズムを構築している。ただ、書き言葉の文章のように句読点が見えないことから、文の切れ目と語句の切れ目が明確に区別できない場合があるため、取り上げる調査では、話者の言い終わりがはっきりわかるターン末で完全文かどうかの判断を行っている(荻原 2015:52)。

また、「言いさし」の成立について、コミュニケーションにおける推量の基準を示すものとして「会話目的達成スキーマ」に基づく解釈理論(荻原 2008)を示し、次の5点を基に理論構築している。

- ①人々は会話の目的を常に意識してコミュニケーションをしている。
- ②コミュニケーションが行われる時、その目的は、明確に示される場合もあれば、示されずに会話が始まることもある。

③人間が生得的に持っているコミュニケーションのニーズと発話に対する生得的な反応行為により、人々は会話目的達成のために期待されていることに応えようとする。それは、個人的な経験の差に関係なくほとんどの社会・文化において共通する。

④解釈上、個々の発話を解釈する前から、相手発話への対応として期待されているものがあると考えなければ説明できない事象がある。

⑤全く同じ発話でも会話目的が異なる場合には異なる対応しており、会話目的が発話解釈に大きく影響している。

また、②については、「ちょっとかがいたいのですが」のような切り出しの場合において聞き手は情報の獲得が目的であり、「面接会場」などのような場合において応募者はその会社に入社すること、面接官は良い人材を採用することが目的であると言えるように、ほとんどのコミュニケーションは、明示的な発話や、社会習慣や社会行動によって、その目的が明確になる（荻原 2015:60）としている。

3.2.3 学習者の習得について

「言いさし」について、文末省略の使用状況及び機能について考察する研究が多く見られ、「言いさし」に関する学習者の習得状況及び原因を扱った研究はわずかである。

まず、佐藤（1993,1994）は、日本語教材の会話文を分析資料とし、「けれども」や「が」による「言いさし」を考察した結果、「明示的情報要求のサインの送信」、「明示的情報要求に伴う忌避侵犯の回避」、「敬語の過剰使用の回避」、「依頼や勧誘における目的達成の方略としての明示的情報要求の回避」、「討論での Turn 譲渡における turn-taking 強制の回避」という五つの機能を指摘している。

また、金城（2002）は、佐藤（1993,1994）を批判的に検討した上で、「けれども/が」で終わる表現を「言いさし」ではなく「終助詞化したもの」として捉え、話題を提供する場合を除き、質問に対する答えの形として現れる「S けれども」に限定し、『Situational Functional Japanese』という日本語教科書における例文を資料として考察した。その結果、「けれども/が」で終わる「言いさし」に、「相手に対して情報提供が十分ではなく、そのために相手に迷惑をかけるおそれがあるかもしれない、相手の質問の動機を満足させるものではないかもしれない」（金城 2002:97）という話し手の意識があることを述べている。

鮫島（1998）は、中国人学習者はレベルが上がるにしたがって、「言い切り」表現の使用が漸減し、「ので/から/て」などの理由・説明の表現や、「けど/が」で終わる「言いさし」表現の使用が漸増し、「断り」を和らげようとする傾向が見られると述べている。

陳文敏（2001・2004）は、台湾人上級日本語学習者と日本語母語話者の「中途

終了型発話」の使用目的を比較した結果、日本語母語話者は、「同じ情報の繰り返し回避」、「直接的な質問回避」、「明言の回避」及び「スピーチレベルぼかし」の四つの理由で「中途終了型発話」を使用することに対し、台湾人上級日本語学習者は、「言語能力の不足による述語使用の回避」、「模倣使用」の二つの理由で使用していることが分かった。また、台湾人上級日本語学習者は、「中途終了型発話」をまだ十分に使いこなせないと指摘している。

さらに、陳美玲（2002）は、「けど」類の「言いさし」のそれぞれの機能が及ぼす習得上の影響について、日本語母語話者、学習暦5年以内の台湾人日本語学習者、及び学習暦5年以上の日本語学習者に調査し、学習者は「けど」類の「言いさし」と「言い切り」の選択基準が分からなく、また、学習年数と習得度の間にバラつきがあり、学習年数にともなって、習得が進んでいるわけではないことも指摘している。

石川（2005）は、OPIデータを用いて、ポライトネスの観点から日本語学習者と日本語母語話者の文末表現の「けど」を分析した結果、学習者の日本語能力が上級と超級へ向上するにともない、文末の「けど」の使用状況が日本語母語話者に近づき、意見や感情を述べる際、及び聞き手の意見を否定する際に、話し手のためらいを示すなどの心的態度を表出する例が多くなっていると指摘している。

一方、「日本語能力が低い者は、十分に文末表現の「けど」が表すポライトネスを理解し、自由に会話に応用して使用するレベルに達していない」（2005:359）と述べている。また、超級話者に比べ、日本語能力の低い学習者がまだ十分に文末表現の「けど」を理解していない理由について、石川は、「文末表現の「けど」等の研究がまだ充分とは言えない」、「日本語教育の中でこのような表現に関する指導法が十分に確立されていないことがあげられる」（2005:360）と述べている。そのうえ、「会話において、このような表現が果たす役割は小さくなく、さらなる研究と日本語教育の中での指導法が検討されることが必要であろう」（同上）と指摘している。

最後に、陳宜萱（2013）は、「文末省略としての「が」「けど」「から」」を考察対象にし、日本語母語話者及び中上級台湾人日本語学習者にアンケート調査及びフォローアップ・インタビューをし、文末省略の選択基準と選択要因について分析した結果、台湾人日本語学習者は、選択基準が見られず、文末省略の非用及び誤用が多かったと指摘している。

上記の研究において、使用面における学習者の習得状況を扱う研究が多く見られ、学習者は、「言いさし」の「けど」類に関して、まだ十分に使いこなせないといえるだろう。

3.3 本章のまとめ

以上、本研究の「けど」の「言いさし」に関する先行研究を述べた。具体的に、3.1で日本語教育文法に関する先行研究をまとめた上で、日本語教育文法に関する本論文の立場を述べた。3.2で「言いさし」の定義・機能、出現理由、学習者

における習得状況に関する先行研究をまとめた。これらの先行研究には、研究データが小説や映画のシナリオが多くて自然談話から離れていること、限られた母語の学習者における習得状況が明らかになっていないこと、音声的な分析が足りないことなどの問題点が存在する。

そこで、次章では、中国人学習者を教えるための考察を行う前置きとして、現在の教育現場における「言いさし」の「けど」類の扱い方をまとめる。

第二部

コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察

第二部では、『名大会話コーパス』、『BCC 現代中国語コーパス』および『日本語話し言葉コーパス』を使用し、「言いさし」に関する形態的・統語的・意味的・音韻的な考察を行う。

第4章

『名大会話コーパス』における

「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴

近年、現実のコミュニケーションに基づいた日本語の使用実態調査が求められてきており、「話しことばに話しことばの独特の、それなりに完全とされるべき形のあることを認めなければならない」（国立国語研究所 1960:37）と言え、本章では、コーパスを用いて、話しことばにおける「言いさし」の「けど」類の使用実態および形態・統語・意味的な特徴を考察する。

本章の構成は以下の通りである。まず、1節では問題のありかを提示する。2節では先行研究を紹介する。3節、4節、5節では研究目的、課題、対象およびデータを述べる。6節と7節考察結果を述べる。8節では日本語教育への示唆を提示する。9節で今後の課題を述べる。最後に10節で、本章のまとめをする。

4.1 導入

近年、日本語学に基づいた日本語教育文法に対して、コミュニケーションという観点から批判や提案が行われている。日本語教育文法ではコミュニケーションという基本から出発し、各文法項目が実際のコミュニケーション場面でどのように使われているかに基づいた文法記述が求められていると言える。

本章では、上記の観点から考察を行う題材として「言いさし」の「けど」類を取り上げる。

「言いさし」とは、従属節のみで統語論的には不完全文であるにも関わらず、内容的には完全文と同じような機能を果たしている表現である。白川（2009）では、「従属節だけで言いたいことを言い終えているかどうか」という基準により、「言いさし」が「言い残し」と「言い終わり」に分類されている。本章は、「言いさし」の「けど」類を対象にし、白川の分類にしたがって日本語母語話者の日常会話を考察することにより、「言いさし」の「けど」類の現れ方、特に「言いさし」の「けど」類と共起する形態的、統語的、及び意味的な特徴を明らかにする。

ある文法形式の出現状況について、コーパスが包括するレジスターごとに考察して分析することにより、その文法形式が実際のコミュニケーションにおいて使用される場面、共起する表現などの実態を明らかにすることができる。これは、コミュニケーションに役立つ日本語教育文法の理念につながるものである。

4.2 先行研究

本節では、本章の内容に関連性が高い三つの先行研究について述べる。

まず、吉本（1996）は、「そちらまでどうやって行ったらいいかお尋ねしたいんですが…」のような質問文・依頼文の言い切らない形式は、丁寧に発話する時にはむしろ普通で無標の形式であることを指摘している。また、「そちらまでどうやって行ったらいいかお尋ねしたいんですが…」の発話を言い切って質問を丁寧に行うという意味を持つのは、文は言い切り形によって締め括られるものだという文法的規範意識がまずあって、これをあえて破って疑問の伝達を最後までは行わないことによって敬意を表現しているためであるとしている。文が会話において果たすこの規範的側面がどのように保たれ、また時に一部破られるかを研究することは会話産出のメカニズムを研究する上で一つの重要なキーとなるものと考えたと述べている。

また、白川（2009）は、（48）のように「文を従属節のみで言い終わる表現」を「言いさし」の文と定義している。

（48） 「ねえ先生、この茶碗ヒビが入ってますけど……？」（白川 2009:141）

白川は、このような「言いさし」の文は、談話レベルにおいて、終助詞、接続詞やノダなどのような談話的な要素を持つ独立文と同等に位置づけることができるため、意味的に「言い切り」の文と同等の完結性を有していると主張している。その上で、完全文の従属節と異なり、「ケド節」の「言いさし」の文は、聞き手の認識に何らかの改変を促すような「参照情報の提示」という談話機能を持つと述べている。

さらに、白川（2015）は、「けど」類の「言いさし」の聞き手の認識の改変を促す機能は、終助詞「よ」の機能とよく似ており、実際、「けど」類を「よ」で言い換えることが可能な場合が多く、このようなケドの使い方が終助詞用法とされることがあるのは、両者の統語的・機能的な類似性に着目したものであると指摘している。

（49） 慎吾「福島から、電話なかったか？」
香織「なかったけど」（＝「なかったよ」）
慎吾「そうか」

（山田太一『思い出づくり』 p185 白川 1996:9）

白川（2009,2015）は、「言いさし」を網羅的に扱った研究であるが、このような分析及び結論は、「言いさし」に関する研究において、極めて重要な地位を

占めているが、取り扱っているデータが自然な日常会話とは認められないという二つの問題点が存在していると考えられている。そこで、本章では、とりわけ、終助詞機能を果たす「言いさし」の「けど」類を取り上げ、それに対応する接続助詞の「けど」類と対照させながら、それぞれの形式の間に見られる類似点と相違点を浮き彫りにしたい。

三枝(2007)は、発話中の「接続助詞」の「けど」類及び発話末の「言いさし」の「けど」を含んだあらゆる「けど」類を研究対象とし、話し言葉のデータを用いて使用頻度、共起する要素及び用法について包括的に使用実態を考察している。

本章は、三枝の考察結果を参考としつつも、特に「言いさし」の「けど」類に焦点を当て、話し言葉におけるその現れ方、特に共起する要素の形態・統語・意味的な特徴について考察する。

4.3 研究目的及び課題

「教育文法にとって重要なことは、それをを用いて学習者が文を正しく産出できるように、規則が操作的に記述されていることである」(庵 2000)。そこで、本章は、「コミュニケーションに役立つ文法教育」という観点から、実際の談話資料の考察を通して結論まで進めていく。

また、コミュニケーションに役立つ日本語教育文法の視点から、「けど」類の「言いさし」を研究対象とし、日本語母語話者の実際の会話における使用実態、共起する形態的、統語的、及び意味的な特徴について分析を行う。

具体的には、日本語母語話者の実際の発話における使用実態について分析することで、「けど」類の「言いさし」の定義と用法を再分析し、中国の日本語教育現場における「が」「けど」類の「言いさし」の提示の仕方について提唱することを目的とする。

中心となる研究課題は以下の通りである。

① 「けど」類の「言いさし」が、日本人母語話者の実際の会話において、どのように現れているか。共起する形態的、統語的、及び意味的な特徴は何か。(使用実態の考察)

② 中国の日本語教育現場において、学習者が「が」「けど」類の「言いさし」を理解して使えるようになるにはどのように提示したらいいか。

4.4 考察対象

本章は、自然談話コーパスに現れる「けど」類の「言いさし」を抽出して分析することにする。なお、「けど」類で終わる文が「言いさし」であるかどうかを判断する際には、「けど」類がなくても、話者の実質的情報が伝わるかどうかという点を基準としている。

また、コーパス上で「～けど、」で表記されているもの、及び「けど」類の後に読点なしで主節が後接する場合を「接続助詞の『けど』類」とし、「～けど。」で表記されているものを「『言いさし』の『けど』類」としている。

例えば：

「黒でもいいけど、あんまりきれいじゃないでしょう。」→接続助詞の「けど」類

「言っていないかどうかわかりませんが。」→「言いさし」の「けど」

その上、三枝（2007）では、話し言葉データの発話とは「意味のまとまりがある」「ポーズ」「他者のさえぎりが無い」とされているが、「発話者の意図は文字化した資料からは十分わからず、また、相手が『うん』『はい』とあいづちを入れた場合には談話は区切られる。」と指摘しているように、「うん」「はい」とあいづちが現れる時に、ターンが変わると見なすことにする。例えば、以下の(50)において、「F005：作るっていうのはやったことあるんですけど。」の後に、「F113：作ったんですよ、1回。」という実質的な発話で話者が交替しているので、「F005：作るっていうのはやったことあるんですけど。」という発話を本研究の分析対象とする。

(50) F113：豆腐って安いでしょう。あのね、お豆腐作ったことある？

F034：ない。

F005：お豆腐はな一いすねー。（にが、にがり）

F034：あの一、汁になってるのから一（ああ）

F005：作るっていうのはやったことあるんですけど。

F113：作ったんですよ、1回。

（名大会話コーパス）

4.5 考察データ

話し言葉のデータとして、首都圏、名古屋近辺、北海道、新潟などで録音された、初対面の人との会話から親しい者同士の雑談までが含まれている「名大会話コーパス」（120件・茶漉一般公開版）を使用した。

「名大会話コーパス」は、平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）「日本語学辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（研究代表者：大曾美恵子）の一環として構築された、約100時間の雑談を収録したコーパスである。「茶漉」は2002年のCASTLE/Jにおいて発表されたコロケーション抽出ツールを改良したものであり、高速に検索を行うことができるツールである。

4.6 データの分析

4.6.1 「けど」類のバリエーションの使用頻度

表 4-1 は、コーパスに現れた「言いさし」の「けど」類のバリエーションの使用頻度をまとめたものである。表 5 から、「けど」が最も使用頻度が高く、次に使用頻度が高い「けども」と「けれど」の使用頻度は、それぞれ 1.8%、1.5%に過ぎないことがわかる。また、市販の日本語教科書で最もよく取り上げられている「が」は、実際の日常会話における使用頻度が 0.6%しかない。

表 4-1 「けど」類のバリエーションの使用頻度

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
頻度 (%)	29 (0.6%)	4803 (95%)	91 (1.8%)	40 (0.8%)	77 (1.5%)	5040

以下は、「が」「けど」類による「言いさし」のそれぞれのバリエーションの例である。

- (51) F151 : なんでだろうね、中央線。
F072 : 高円寺、中野、阿佐ヶ谷、吉祥寺も高いじゃん。(うん)
三鷹まで行かないと。
F151 : あの辺、好きなんだけどな。
F072 : 中央線いいよね。(うん) 井の頭線もいいな。
F151 : あそこがすごい、あこがれなんだ。
(名大会話コーパス)

この会話は、大学の同級生の会話である。場所は大学の食堂であり、参加者 F072 と F151 は 20 代前半の女性である。

- (52) F132 : もう向こうというか、全然日本だけは、日本で就職することは、日本で職見つけるってことは全然考えてない。
F098 : へーえ。
F132 : それだけは考えてない。
F098 : ふーん。
F132 : うん。中国なのか、アメリカなのか、はたまたどこなのか、ヨーロッパなのか知りませんが。
F098 : じゃあ、彼は日本語ができるってメリットを生かせばいいじゃない。
(名大会話コーパス)

この会話は、大学時代の同級生の会話である。場所はレストランであり、参加者の F098 と F132 は 60 代前半の女性である。「が」による「言いさし」は、フォーマルなイメージを与えることができるが、(52) のように、丁寧形と共起する機会が多いので、普通形が多く使用されている自然談話においてはあまり見当たらなかった。よって、過剰使用になってしまうと自然な会話とずれが生じる恐れがある。

したがって、中上級レベルの学習者が円滑なコミュニケーションが習得できるように、「けど」類の導入も考えたほうがいいのではないかと考えられる。

4.6.2 接続助詞の「けど」類及び「言いさし」の「けど」類

名大会話コーパスで用いられている「けど」類の出現回数を表 4-2 にまとめた。表 4-2 からわかるように、「けど」類の文は、合計 9454 文で、そのうち、「言いさし」の「けど」類が 5040 例で接続助詞の「けど」類より多い。このことから、日本語学で「言いさし」の「けど」類を接続助詞の「けど」類に比べ、周辺的なものとする見方は、自然談話のデータからは妥当であるとは言えない可能性が高い。

表 4-2 「けど」類の文の合計数（単位は実数）

接続助詞の「けど」類	「言いさし」の「けど」類		合計
	話者交替のある場合	話者交替のない場合	
4414 例	2183 例	2857 例	9454 例
	5040 例		

次に、「言いさし」の「けど」類及び接続助詞の「けど」類の共起頻度の上位 4 位までの述語を出現回数順によって表 4-3 にまとめた。表 4-3 からわかるように、「言いさし」の「けど」類と接続助詞の「けど」類は、いずれも特定の述語に偏っており、前接語の出現回数が異なる。

表 4-3 「言いさし」の「けど」類と接続助詞の「けど」類の述語の前接語の比較
(単位は実数)

「言いさし」の「けど」類				接続助詞の「けど」類					
述語		出現回数		述語		出現回数			
1	思う	肯定形	483	571	1	思う	肯定形	317	324
		否定形	88				否定形	7	
2	いい	肯定形	258	355	2	いい	肯定形	187	187
		否定形	97				否定形	0	
3	わかる	肯定形	32	288	3	言う	肯定形	154	160

		否定形	256				否定形	6	
4	言う	肯定形	134	152	4	わかる	肯定形	37	83
		否定形	18				否定形	46	

その上で、それぞれの述語の出現回数についてカイ二乗検定を行った結果、「思う」：「 $\chi^2(1) = 36.87, p < .01$ 」、「いい」：「 $\chi^2(1) = 60.39, p < .01$ 」、「わかる」：「 $\chi^2(1) = 45.48, p < .01$ 」、「言う」：「 $\chi^2(1) = 6.09, p < .05$ 」であった。このことから、表 4-3 の 4 つの述語のうち、「言う」以外では、「言いさし」における否定形の使用頻度が「接続助詞」における使用頻度より有意に多く、「言う」の場合は肯定形の使用頻度が「言いさし」において「接続助詞」より有意に多いことが分かる。

表 4-3 に示されているように、「けど」による「言いさし」は「わかる」、「と思う」のような主観的な意味を表す表現と共起することが多く、断定回避、納得がいかないことの表現、発話緩和などの機能を果たしており、相手に対して遠慮しているという発話意図が存在しているのではないかと考えられる。

一方、日本語教科書においてよく現われる「すみません、郵便局に行きたいですけど……」のように、「けど」が「たい」と共起する文は、「名大会話コーパス」においてはほとんど見られなかった。

以下は、「言いさし」と共起する頻度が高い述語の例である。

- (53) F032 : でも、さい、最後は全然関係ないんだもん。
あ、あ、私の今追ってるのはね。
F098 : でも (むしろ) ねの場合は (うん) 間投詞と終助詞とかなり違うと思うけど。
F032 : そ、だから終助詞のねっていうのは (うん) 今全部オミットしてるわけなの。
(名大会話コーパス)

この会話は大学時代に先輩と後輩だった 2 人の会話である。場所は F032 の自宅であり、参加者の F098 は 60 代前半の女性で、F032 は 60 代後半の女性である。ここでは「けど」が使われることにより、後輩である F098 の意見をばかす効果があり、聞き手の感情を害するような発話を避ける機能がある。

- (54) F050 : 感じはしますよね。
F040 : んー、だから、なんかほんとに子どもは大変。
翻ろうされて。いきなり、(なんか***) 変わったり。
F050 : はー、もう 2 度と高校に戻りたいなんて思ったことはないですね。
F040 : ねえ、そういうことだね。結構。
F050 : 大学からは戻ってもいいけど。

F040：大学は戻りたいね。

F050：戻りたいですね。（んー）やっぱり一番、楽しかったから。

F040：んー、いい時期だったわ。＜笑い＞

（名大会話コーパス）

この会話は職場における同僚の会話である。参加者 F050 と参加者 F040 は 20 代後半と 40 代前半の女性である。F050 の「大学からは戻ってもいいけど」という発話に対し、F040 は「大学は戻りたいね」と同感の意を表している。

(55) F037：うん、なんかその、長い休みってものすごい、
なんか嫌な気がするー。

F057：そうね。＜笑い＞

F037：まだ学校があった方がいい。

F057：わかるけど。

F037：精神的なプレッシャーが。

F057：そうだねー。どうすんだろう、みんな。
ちょっとみんなの様子が気になる。

（名大会話コーパス）

この会話は院生室における大学院の同級生の会話である。参加者 F037 と参加者 F057 は 20 代前半と 30 代前半の女性である。F057 の「わかるけど。」という発話の言語化していない部分について、F037 が「精神的なプレッシャーが。」と言い出している。

(56) F001：英語を生かした仕事ととか、いろいろ言ってるけど。

M033：英語を生かした仕事はもう就いたもん。

F001：いろいろ言ってるけどー。

M033：だって、もう社長からよ。君は海外、海外勤務とかしたくない？とか言うんだよ。

（名大会話コーパス）

この会話は F001 の部屋における高校時代の同級生の会話である。参加者 M033 と参加者 F001 は 20 代前半の男性と女性である。F001 の「いろいろ言ってるけど」という不満が含まれている発話に対して、M033 は「だって、もう社長からよ。」と違う意見を出している。

4.6.3 「言い終わり」及び「言い残し」の使用実態

白川（2009）は広義の言いさし文には「言い終わり」と「言い残し」という 2 種類のタイプがあると指摘している。本章では「発話意図が言語化されているか

どうか」という基準により「けど」類の「言いさし」を「言い終わり」と「言い残し」に分け、数を集計した。

例えば、以下の(57)は「日本茶でいいんだ」という発話意図が明らかに文字上に表現されているので、「言い終わり」の例だと言え、(58)は「今週一緒に飲む」ので、「紹介するよ/紹介していい?」というような発話意図が隠れているので、「言い残し」の例だと判断される。

- (57) F098: へー。ウーロン茶とか飲んでないの?最近。
 F032: ウーロン茶あるわよ、***から。
 F098: いや、いらぬ、いらぬ、わたしは日本茶でいいんだけど。
 F032: 高山茶っておいしいのよ。
 (名大会話コーパス)

- (58) F128: ブラジル?あ、そっか。あたし、その人紹介してよ。
 M018: うん。今週一緒に飲むけどね。
 F128: まじで?
 (名大会話コーパス)

すべての「けど」類の「言いさし」を例(57)と例(58)のように分類し、使用実態をまとめると、それぞれの出現回数は、次の表8および図5のようになる。

表 4-4 「けど」類の「言い終わり」と「言い残し」の出現回数

「言い終わり」	「言い残し」	合計
4687 (93%)	353 (7%)	5040

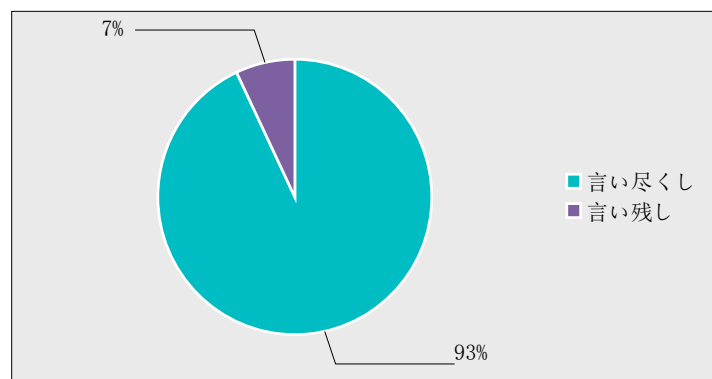


図 4-1 「言い尽くし」と「言い残し」の比率

表 4-4 および図 4-1 から、自然の会話においては、「言い終わり」の「けど」類の使用頻度が 93%であり、かなり高いことがわかる。白川 (2009) では、広い意味での言いさし文には「言い終わり」と「言い残し」という 2 種類のタイプがあると指摘しているが、「けど」類で終わる言いさし文と考えられる「言い終わ

り」と「言い残し」に関しては、「言い終わり」の機能と用法は考察されているものの、自然談話における使用頻度及び比率については触れていない。また、除外した「言い残し」に関しては、「残された課題」として扱い、「結論と矛盾しない形で説明できることが望ましい」白川(2009:198)と述べるに留まっており、「言い残し」と「言い終わり」の境界線が明確であるとは言いがたい。

しかし、今回の調査結果では、「けど」類の「言いさし」の場合において、「言い終わり」の方が「言い残し」より使用比率が相当高いことがわかった。

4.6.4 各接続助詞による「言いさし」

名大会話コーパスにおいて、よく「言いさし」として使用されている接続助詞は「けど」類、「て/で」、「から」、「のに」、「し」である。使用状況を表4-5にまとめた。

表 4-5 各助詞の接続助詞用法及び「言いさし」用法の出現回数

	接続助詞用法	「言いさし」用法	合計
て/で	7172 (66%)	3695 (34%)	10867
「けど」類	4414 (46%)	5040 (54%)	9454
から	2956 (59%)	2054 (41%)	5010
し	927 (49%)	963 (51%)	1890
のに	170 (61%)	108 (39%)	278

表から、「し」及び「けど」類による「言いさし」が多く使用されていることがわかる。一方で、「のに」及び「て/で」による「言いさし」の使用頻度数は低いこともわかる。また、各助詞の文中に現れる接続助詞用法と文末に現れる「言いさし」用法の比率を見ると、「けど」類の「言いさし」用法の比率が最も高いこともわかる。

また、表 4-5 の各助詞の接続助詞用法と「言いさし」用法の出現回数のデータをカイ二乗検定で分析した結果は 1%水準で有意であった ($\chi^2(4) = 827.16$, $p < .01$)。なお、残差分析の結果、「けど」類及び「し」による「言いさし」が有意に多いのに対し、「て/で」及び「から」による「言いさし」は有意に少なく、「のに」は有意差がないという結果となった。したがって、「けど」類による「言いさし」は（「し」以外の）他の接続助詞より有意に多いと判断できる。

以上から、「けど」類の「言いさし」は、日常会話で頻繁に使用されており、「言いさし」の研究の中で重要度が高く、日本語教育文法の研究対象として意義があると言える。

4.7 データの考察

4.7.1 「言いさし」の「けど」類の発話機能

三枝(2007)は、話し言葉における接続助詞の「けど」類の基本的な意味を「異なる側面があること」かつ「後続節焦点化」としている。また、「けど」類に共通する機能として、「発話の切り出し」「対比」「言い切りの回避」「注釈」の四つがあると指摘している。

本研究では、「言いさし」の「けど」類には三枝(2007)が指摘している「言い切りの回避」と関連する「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という二つの発話機能があると考えられる。以下それぞれの発話機能について述べる。

まず、「主張を和らげる機能」とは、反対の意見表明、反論及び相手の意見の修正のような相手のフェイスを脅かす発話を行う場合に、主張を和らげ、断定を避ける機能である。

(59) = (53)

F032: でも、さい、最後は全然関係ないんだもん。

あ、あ、私の今追ってるのは

F098: でも(むしろ)「ね」の場合は(うん)間投詞と終助詞とかなり違うと思うけど。

F032: そ、だから終助詞のねっていうのは(うん)
今全部オミットしてるわけなの。

(名大会話コーパス)

(59)の会話は大学時代に先輩と後輩だった2人の会話である。場所はF032の自宅であり、参加者のF098は60代前半の女性で、F032は60代後半の女性である。ここでは発話者F032とF098は日本語の「ね」について意見交換を行っている。先輩であるF032の「最後は全然関係ないんだ」という意見に対し、後輩であるF098は「ねの場合は間投詞と終助詞とかなり違う」という異なる意見を持っている。上下関係などの要素を配慮したうえで「と思う」という述語と「けど」を結びつけて用いることにより、後輩である自らの主張を和らげる効果があり、「かなり違う」という断定の意味を回避している。

もう一つは、「相手の反応を引き出す機能」であり、話し手が自分の発話に対する聞き手の反応を促す場合に使われる。

- (60) F064 : あー、あり、ありました、ありました。うん。
 F141 : あそこのさ、目の前にさ、鳥`加夢・ドリカムっていうさー、
しょうもない名前の (うん) 焼鳥屋さんがあるんだけど。
 F064 : うん。おいしい？

(名大会話コーパス)

(60) の会話は大学における同級生の会話である。参加者 F141 と F064 は 20 代前半の女性である。F141 は「しょうもない名前の焼鳥屋さんがあるんだけど。」という発話で「焼鳥屋」のことを持ち出し、情報を提示して聞き手である F064 の反応を引き出している。

4.7.2 「言いさし」の「けど」類との共起頻度の高い述語

表 4-6 は、「言いさし」の「けど」類との共起頻度の上位 5 位までの述語を表したものである。表に示されているように、「言いさし」の「けど」類は「思う」や「いい」などのような判断を表す述語と共起することが多いことが分かる。

表 4-6 「言いさし」の「けど」類との共起頻度の高い述語 (実数と割合)

述語	出現回数		
	思う	肯定形	483 (85%)
	否定形	88 (15%)	
いい	肯定形	258 (73%)	355
	否定形	97 (27%)	
わかる	肯定形	32 (11%)	288
	否定形	256 (89%)	
言う	肯定形	134 (88%)	152
	否定形	18 (12%)	
知る	肯定形	10 (9%)	108
	否定形	98 (91%)	

また、それぞれの動詞について「肯定形」と「否定形」の使用傾向を明らかにするため、これらの述語が発話末で現れる場合の数を集計した。結果は表 4-7 の通りである。

表 4-7 発話末で現れる場合の各述語の出現回数 (実数と割合)

述語	出現回数		
	思う	肯定形	1125 (97%)
否定形		33 (3%)	

いい	肯定形	1174 (98%)	1197
	否定形	23 (2%)	
わかる	肯定形	35 (27%)	131
	否定形	96 (73%)	
言う	肯定形	491 (73%)	677
	否定形	186 (27%)	
知る	肯定形	59 (22%)	264
	否定形	205 (78%)	

以上の表 4-6 のデータと表 4-7 のデータを比較するため、それぞれの述語を以下の表 4-8 のようにまとめてカイ二乗検定を行った。

表 4-8 「けど」類の「言いさし」と発話末の場合における各述語の使用実態
(単位は実数)

述語	「けど」類の「言いさし」			発話末			合計出現回数
	肯定形	否定形		肯定形	否定形		
思う	肯定形	483	571	肯定形	1125	1158	1729
	否定形	88		否定形	33		
いい	肯定形	258	355	肯定形	1174	1197	1552
	否定形	97		否定形	23		
わかる	肯定形	32	288	肯定形	35	131	419
	否定形	256		否定形	96		
言う	肯定形	134	152	肯定形	491	677	829
	否定形	18		否定形	186		
知る	肯定形	10	108	肯定形	59	264	372
	否定形	98		否定形	205		

述語のカイ二乗値の結果はそれぞれ次のようであった。

まず、「思う」： $\chi^2(1) = 90.80$ 、 $p < .01$ 、「いい」： $\chi^2(1) = 244.10$ 、 $p < .01$ 、「わかる」： $\chi^2(1) = 5.18$ 、 $p < .01$ 、「言う」： $\chi^2(1) = 15.52$ 、 $p < .01$ 、「知る」： $\chi^2(1) = 7.85$ 、 $p < .01$ であり、このことから、「言う」以外の述語は、発話末では肯定形が有意に多く、「けど」類の「言いさし」では否定形が有意に多いことがわかる。

その中で、「わかる」と「知る」は、森田(1988)で「『わかる』は『知る』に近い意を表す」(p.235)と述べられているように、類義語であるため同じような分布をしているのだと考えられる。また、「思う」「いい」は、「けど」類の前では否定形をより多く取ることもわかる。

以上の結果から、「言いさし」の「けど」類の発話機能と共起する動詞の意味と深く関わっていると思われる。

まず、「言いさし」の「けど」類が肯定形の「思う」などと共起する場合、多くの場合が意見や主張を述べる場合であり、共起することによって断言を和らげるものとして機能している。これは、白川（2009）の言う、聞き手の認識に何らかの改変を促す「参照情報の提示」という談話機能に繋がっていると思われる。

例えば、例（59）においては、上下関係などの要素を配慮したうえで「と思う」という述語と「けど」を結びつけて用いることにより、聞き手 F032 に対して「柔らかく持ちかけるような表現効果」（白川 2009）があり、「かなり違う」という主張を和らげている。

それと同じように、次の（61）は肯定形の「いい」と「言いさし」の「けど」類との共起例である。F143 は「けど」を使うことにより、「ずっと 2 人でおればいいんだ」ということについての相手の反応を引き出そうとしている。

(61) F156 : それなんか、うーん、どうやる。

F143 : 籍入れて一、あの、別、何、別にさー、
ずっと 2 人でおればいいんだけどさー。

(うん) えっ同棲とか許されそう？

F156 : 親？

(名大会話コーパス)

「言いさし」の「けど」類は否定形の「思わない」「よくない」「分からない」「知らない」と更に多く共起するが、これは、会話者間では、発話者が相手のフェイスを犯すような発話行為をする場合、「けど」類を使うことにより、発話が及ぼす悪影響を最小限にすることができるためであると解釈できる。

そこで、「けど」類の「言いさし」がよく使用されている例を見てみると、例えば、「言わない」が判断を述べるのではなく、否定の意志を表すのに対し、「思わない」「よくない」「わからない」「知らない」は判断を述べる表現である。これらの否定形述語が「けど」類の「言いさし」に有意に多いという事実は、話し手の強い断定を表す語気を「けど」類の「言いさし」が和らげるためであると解釈できる。

例えば、（62）で M005 は元同僚 F057 に共通のかなり年上の知人について話す際に、「M005 の家の付近に引っ越してくる」ということに対し、M005 は「あんなでかい家に住みたいと思わない」という発話と「けど」と結びつけて用いることにより、自分と F057 に共通する、かなり年上の知人のフェイスを犯す発話の影響を最小限にしている。

(62) M005 : 何か今は住まないけど、3月になったら引っ越してくるって。
で、今、何か一生懸命庭をさ、あの、花を植えてた。

F057 : ふーん。いいですねえー。

M005 : 信じられない。あんなでかい家に。
でも僕は住みたいと思わないけどね。

F057 : そうですか。

(名大会話コーパス)

次の(63)は否定形の「わからない」が「言いさし」の「けど」類と共起する際の例である。「ああいう就職のときのってデマも多いからどれだけほんとかわかんない」のような他者に不快感を与えそうな発話をする際に頻繁に「言いさし」の「けど」類が使われる。

(63) F048 : へー、成績見るんだ、ちゃんと。

F001 : でもー、ああいう就職のときのってデマも多いからどれだけほんとかわかんないけどー。

F048 : うん。大学の成績なんてねー。

(名大会話コーパス)

野田(2014:12)では、「自分に対する相手の印象を左右する要因は実際の「話す」活動では非常に重要であり、その研究は「話す」教育には不可欠である。」と述べているように、「けど」類の「言いさし」は、発話機能からみると、「自分に対する相手の印象を左右する要因」の一つとなる表現であり、今後の「話す」教育においては更に重視されるべきではないかと思われる。

4.7.3 「けど」類と「のだ」

「けど」類が発話中及び発話末に現れる際に、同じ述語でも、「述語+「んだ/んです」+「けど」類」、及び「述語+「けど」類」という二つのパターンが見られた。それぞれの出現回数を表4-9で示すが、両者の分布に有意差はなかった($\chi^2(1) = 0.79, n.s.$)。

表 4-9 「けど」類と「のだ」の出現頻度数

	述語+「んだ/んです」+「けど」	述語+「けど」
発話中	1728 (39%)	2686 (61%)
発話末	1608 (32%)	3432 (68%)

ノダとケドそれぞれの機能が問題となり、双方がどのように共起し意味を生じさせているのかの分析が必要とされる(横森 2006:74)。三枝(2007)では、「のだ」が入るかどうかについて「そもそも『のだ』に求められるものか、あるいは、『けど』がその選択に作用している部分があるのかは明らかでない」と指摘されているが、関連性からみると「のだ」が入ることにより、関係づけが強く見られるのではないかと考えられる。例えば、例文(64)は「いいんだけど。」が先行文脈の中の「F149さんの運転期待してない」ということに関連しているので、(65)より先行文脈との関連性が強く感じられる。

- (64) F069 : だから冬だつうの。で、今度Eちゃんとドライブ行こうって話しとってん、みんなで。紅葉見に行こうとか言って。
 F149 : ほーほー、紅葉、紅葉だと私、もう遅いじゃん。
 F069 : 要するに F149 さんの運転期待してないよ。
 F149 : あ、いいの？ あ、じゃ、いいんだけど。
 F069 : だってもう4人もいるもの。
 (そうね、じゃ) 1人仲間入りしたもん。
 (名大会話コーパス)

- (65) F156 : なんか1年生の子とか、なんか言え、言えてない子とかおり
 そうでさー、(あー)書いてもー。
 F143 : なんかちゃんと。
 F156 : でも、たぶん何百円のあれやっでさー、また、聞けばいいけど。
 (名大会話コーパス)

また、「述語+「んだ／んです」+「けど」類」というパターンによく現れる述語及び出現回数を検索してみると、以下の結果が得られた。

表 4-10 「述語+「んだ／んです」+「けど」類」というパターンによく現れる述語及び出現頻度数

発話中		発話末	
思う	137	思う	203
ある	102	いい	88
いい	76	ある	84
行く	46	言う	32
言う	41	行く	25

一方、最も多く使われている「思う」の場合、表 4-11 で示すように、発話中及び発話末を問わず、「思う」では「のだ」を入れず「けど」類と共起する方がより多く存在しており、「思った」では「のだ」を入れてから「けど」類と共起するケースが多く見られる。

なお、「けど」類の文において準体助詞ノ（縮約形でん）を含むノダがケドに前接し「～ のんだけど」（口語では「～ んだけど」）となることが多い。準体助詞ノの有無はケド文のニュアンスを変える。例えば、「失礼ですけど…」と「失礼なんですけど…」では発話態度が微妙に異なる（楠本 2015:48）。

このことは、過去の認識を表す「思った」の方が先行文脈との関連性をより強く要求するというふうに解釈できそうであるが、その詳細な考察は今後の課題としたい。

表 4-11 「けど」類の文における「思う」の使用状況（単位は実数）

	発話中	発話末
思うんだけど	63	119
思うけど	78	216
思ってたけど	4	6
思ってるけど	6	22
思ってたんだけど	0	17
思ってたけど	15	9
思ったんだけど	58	61
思ったけど	50	33

4.7.4 共起する終助詞

下の表 4-12 は「言いさし」の「けど」類と共起する終助詞をまとめたものである。表 4-12 に示すように、共起する終助詞は「ね/ねえ」と共起する場合であることがわかる。一方、日常会話でよく現れる「よ」「よね」は一度も共起していないこともわかる。その理由は、「よ」と共起することにより、投げやりな態度や非好意的態度を表してしまうため、使われにくいのであろう。また、「よね」と共起すると確認になるので、「言いさし」の文を終わらせるという特徴に矛盾すると思われる。その詳細な考察は今後の課題としたい。

表 4-12 共起する終助詞と出現頻度数

	が	けど	けども	けれども	けれど
ね/ねえ	0	301	5	2	3
さ/さあ	0	101	0	0	0
な/なあ	0	46	0	0	0

以下は実際に終助詞と共に使われている例である。

(66) F162 : あーあー、仕事する人はねー。(うん) そうだね。そう、だから

仕事に行く人の方がかえって家にいるより涼しくていいよね。
(うん) 移動が暑いけどね。

F026 : そうだね。でも移動なんて朝と夕方だから、そんなに汗かくほど暑くはない。

(66) の会話は喫茶店における高校時代の同級生の会話である。参加者 F162 と F026 は、20 代後半の女性である。

- (67) F123 : うん、トム・クルーズがうわさになってて、今日、成田に来たんだって。(うんうんうん)で、すごいご機嫌で。
F093 : なんかね、それ読んだ、インターネットで。
F123 : 私も読んだんだけどさ。
F093 : でも、なんか、あの女の人がなんか過労でダウンか何とかって書いてあった。

(67) の会話はレストランにおける高校 2 年からの友人同士の会話である。参加者 F093 と F123 は 20 代後半の女性である。

- (68) F128 : うーん。いや案外 F はね、そういうの好きなんだよ。きっと。
M023 : そうかあ。ほんとに好きには見えないけどな、俺は。
F116 : 勉強の方が好きそうだよな。

(68) の会話は M023 の自宅における友人と両親との会話である。M023 と F128 は高校時代からの友人であり、F116 と M026 は M023 の両親である。

4.8 まとめおよび日本語教育への示唆

本章の考察から、次のことが明らかになった。

まず、「言いさし」の「けど」類は「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という二つの発話機能を果たしている。

次に、実際の自然会話において、「言いさし」の「けど」類は、従来の知見とは異なり、接続助詞の「けど」類より使用頻度が高い。

また、「言いさし」の「けど」類の中で、「言い終わり」の「けど」類は「言い残し」の「けど」類に比べ、使用頻度が高い。

以上の結果から、現在の日本語教育における「言いさし」の「けど」類の扱いは見直す必要があると思われる。

日本語教育文法は「コミュニケーション活動に必要な文法にする必要がある」(野田 2005:7) と指摘されるように、各文法項目が実際のコミュニケーションの場面でどのように使われているかに基づいて文法項目の指導をすべきであろう。本研究との関連から言えば、従来の知見とは異なり、実際の自然会話では「言いさし」の「けど」類の方が接続助詞の「けど」類より多く現れていることから、「言いさし」の「けど」類の導入及び定着練習の重要度は高いと言える。

さらに、「言いさし」の「けど」類を日本語教育の現場に導入する際には、次の二点に重点を置くべきだと考えられる。

第一に、「言いさし」の「けど」類、特に「言い終わり」の「けど」類は非

常に使用頻度が高いため、「言いさし」の「けど」類を文法項目として導入したほうがよいと考えられる。

第二に、「言い終わり」と「言い残し」の使用頻度が違うことから、先に「言い終わり」を導入し、定着した段階で「言い残し」を導入するのがより効果的だと思われる。

最後に、接続助詞の「けど」類と「言いさし」の「けど」類は、共起する述語の出現頻度が異なり、「けど」類による「言いさし」においては述語が特定の語に偏っている傾向が見られる。共起しやすい述語と同時に導入することで、学習者はさらに理解しやすくなると考えられる。

本章の調査結果はこれからの教育現場における「言いさし」の指導、及び、「言いさし」の「けど」類に対する学習者の理解と運用に役立つであろう。

4.9 今後の課題

小林（2005）は現在の日本語教育現場の初級文法シラバスは実際の言語運用を十分に反映していないと指摘している。本研究の結果は、こうした指摘を踏まえた上での新しい文法シラバスの再構築に繋がる可能性を持つものである。

しかし、日本語教育における「けど」類による「言いさし」の研究は、名大会話コーパスを用いた文字面上の研究だけでは十分と言えない。その理由は次の通りである。まず、20代の若者同士の雑談が多く含まれている名大会話コーパスは全年齢層をカバーしているわけではないため、職場の会話及び40代～60代の中高齢層の談話資料も必要となってくる。

次に、『名大会話コーパス』は雑談が中心となっており、発話場面や発話者の背景などが限られているため、考察された使用実態の傾向が偏っている恐れがある。そのため、考察の結果を日本語教育へ応用するには若干の修正が必要である。したがって、今後は、より多様なデータを収集し、さらに考察を行うことが課題である。

また、庵（2011b:79）が日本語教育文法について、「日本語記述文法と比較した場合の日本語教育文法の最大の特徴は、後者が（第一義的には）産出を目的とするものであるという点にある。産出を目指す場合、記述は使いこなしやすいものである必要がある。」と述べているように、本研究の研究結果を具体的にいかに関する指導現場につなげればいいのかという問題も今後の課題として解決する必要がある。

最後に、戸田（2008:209-210）が「音声を媒材としたコミュニケーションにおいては、イントネーション・プロミネンス・ポーズなどの韻律特徴が話者による表現意図の伝達に重要な役割を果たしている。しかし、これらの韻律特徴は表記に現れないことから、意識化されにくい。特に、日本語を母語としない日本語学習者にとっては、表現形式的側面と音声的側面の両側面からの習得は、意識化なしにはありえない。」と指摘しているように、「言いさし」の「けど」類の音声

面の研究も極めて重要であろう。今後は、音声面の研究もあわせて行っていききたい。

4.10 本章のまとめ

近年、現実のコミュニケーションに基づいた日本語の使用実態調査が求められてきている。本章はそのような観点から「言いさし」の「けど」類を取り上げ、コーパスを用いてその使用実態を考察した。

調査の結果、従来よく使われると考えられている接続助詞の「けど」類に比べ、「言いさし」の「けど」類がより多く使われていること、「言いさし」の「けど」類と接続助詞の「けど」類はいずれも特定の述語に偏っているものの、前接語が違っていること、「言いさし」の「けど」類の中で、「言い終わり」の「けど」類が「言い残し」の「けど」類より使用頻度がかなり高いことが明らかになった。

「言いさし」の「けど」類は、教育現場で以前より扱われるようになってきたものの、文法項目として取り上げられていないのが現れである。本調査の結果から、「言いさし」を明示的に取り上げていない現在の日本語教育は見直す必要があると言える。

しかし、中国人学習者に「言いさし」に関する指導を行うためには、中国語における「言いさし」のあり方も考察する必要がある。そこで、次章では、現代中国語コーパスにおける中国語の「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴を明らかにする。

第5章

現代中国語コーパスにおける

中国語の「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴

近年、学習者の母語を考慮する日本語教育が求められてきている。本章はそうした観点から「言いさし」を取り上げ、コーパスおよびアンケート調査を用いて中国語における扱い方を考察する。

本章の構成は以下の通りである。まず、1節では問題のありかを提示する。2節では中国語の複文の分類を述べる。3節では先行研究を紹介する。4節、5節では考察結果を述べる。最後に6節で、本章のまとめをする。

5.1 導入

「言いさし」とは、以下の(69)のような、文の途中で話を終えてしまい、最後まで文を完結させない表現である。このような表現は、統語論的には不完全文であるにも関わらず、内容的には完全文と同じような機能を果たしており、日本語のコミュニケーションではしばしば現れる。一方、孤立語である中国語では、接続表現が形態的に拘束されずに使われるため、日本語のような従属節のみで使用される「言いさし」現象は存在しないと考えられている。(以下では便宜上、誤解される恐れのない限り、中国語の表記では読点「，」であるが、本章では「、」を用いる。)

(69) 程さん：あけっぱなしで、だれもいねえのかい？

祥子：門は錠をおろしてきたけど。

我把大门给锁上了。

『駱駝祥子』

近年、日本語文法教育において、コミュニケーションという観点から批判や提案が行われ、「けど」類による「言いさし」は日本及び中国の教育現場において、重視されるようになってきた。それにもかかわらず、このような高コンテクストな表現は、中国語を母語とする学習者にとって難解であり、理解面も産出面も問題が出てきている。こうした現状は、母語である中国語の影響も関わっているのではないかと思われる。

そこで、本章では、中国語コーパスを考察してアンケートを行うことにより、日本語で考えられた「言いさし」の使用場面において、中国語でどういう言語形式で表れているかを明らかにし、中国語を母語とする学習者に対する「言いさし」に関する指導の一助としたい。

5.2 中国語の複文の分類

5.2.1 中国語の複文

中国語では、「二つまたは二つ以上の意味上関連のある単文から構成される文」(劉他 1991)を「複文」と呼んでいる。また、複文は、「節と節とが対等の資格、つまり連合関係で結合した『等立・聯合複句(連合複文)』」、及び「いずれかの節が主要で、他の節が付属的な関係、つまり主従関係で結合した『主従・偏正複句(主従複文)』」に大きく分類されている(鳥井 2004)。

さらに、鳥井(2004:79-80)では、「連合複文」及び「主従複文」はそれぞれ以下のように分類できるとされている。

I 「連合複文」は、次の四種類に分類されている。

- i 並列複文
「他去、我也去(彼が行き、私も行く)。」
- ii 時系列複文
「他首先去、然后我去(彼がまず先に行き、その後で私が行く)。」
- iii 累進複文
「不仅他去、而且我也去(単に彼が行くだけでなく、かつ私も行く)。」
- iv 選択複文
「他去、或者我去(彼が行くか、あるいは私が行く)。」

II 一方、「主従複文」は、次の五種類に分類されている。

- i 因果複文
「因为我去、所以他去(私が行ったので、彼は行った)。」
- ii 逆接複文(「転折複文」)
「虽然我去、但是他没去(私が行ったが、彼は行かなかった)。」
- iii 假定複文
「如果我去、他就会去(もし私が行ったら、彼は行くだろう)。」
- iv 条件複文
「只要我去、他就会去(私が行きさえすれば、彼は行くだろう)。」
- v 連鎖複文
「我去哪里、他就去哪里(私がどこかへ行けば、
彼はそのどこかの同じ所へ行く=彼は私の行くところへ行く)。」

5.2.2 転折複文

中国語において、逆接関係を表す複文は「転折複文」と呼ばれている。劉他(1991)では、従属節が「ある事実を叙述し」、主節に「この事実に基づいて誰も

が納得するような結果は述べられず、むしろ、それとはまったく反対、または、部分的に反対の事実を述べる」（劉他 1991:734）と特徴付けられている。

また、転折複文は、以下の i、ii、iii の三種類に分類されている。（鳥井 2004）

i 接続表現「虽然・尽管……、但是・可是・却……」が前後の両節にあるもの。

黄（1990）では、「讓歩転折複文」と定義されている。

(70) 虽然他年纪大、但是身体很健康。
(彼は年をとっているが、身体は健康だ。)

ii 接続表現「……、然而・但是・可是・却……」が後の主節にのみあるもの。

従属節に逆接を示す接続表現（「虽然」など）を提示せず、主節にのみ接続表現（「但是」、「可是」など）を用い、重い転折を表す。黄（1990）では、このような転折複文は「一般転折複文」と定義されている。

(71) 我以前看过这部电影、可是内容记不得了。
(昔、この映画を見たことがあるが、内容はもう覚えていない。)

iii 接続表現「……、只是・不过・倒……」が後の主節にのみあるもの。

従属節には逆接を示す接続表現（「虽然」など）を提示せず、主節にのみ接続表現（「只是」、「不过」、「倒」など）を用いるが、軽い転折を表し、ii の「然而・但是・可是・却」より柔らかいと考えられている。黄（1990）では、「軽い転折複文」と定義されている。

(72) 川菜很好吃、不过有点儿辣。
(四川料理はおいしいが、少し辛い。)

5.2.3 因果複文および無標識複文

中国語と日本語は、言語の類型が異なるため、複文におけるさまざまな相違点が見られる。具体的に言うと、日本語においては、文を接続する場合に、何らかの形態変化、或いは形式の付加が必須であるが、中国語においては、接続を表す形式の付加は、任意（或いは不必要）である（水野 1985）。

中国語の因果複文は、接続表現が使用されるかどうかにより、(73) (74) (75) のような「有標識複文」と(76)のような「無標識複文」に分類できる（新田 2007）。

- (73) 因為天氣不好、所以我們沒去頤和園。
(天氣がよくなかったので、私たちは頤和園に行きませんでした。)
- (74) 由于路太遠、病人在半路不幸去世了。
(道のりが遠かったために、病人は不幸にも途中でなくなった。)
- (75) 由于他優柔寡斷、以致鑄成大錯。
(彼が優柔不斷であったために、大きなあやまちを犯すことになった。)
- (76) 吳広被殺害、革命力量受到很大損失。
(吳広が殺害されたために、革命勢力は大きな損失を被った。)
- (劉他 1991:732-733 により)

5.3 先行研究

「けど」類の「言いさし」に関する先行研究は、三枝 (2007)、白川 (2009)、荻原 (2011) などのように、日本語の自然会話のデータを分析して使用実態を明らかにする研究が多く見られる。

一方、日中対照研究の視点から行われた、日中両言語における「言いさし」の使用実態に関する研究は、調べた限りで陳美玲 (1993)、李 (2008) しか見当らなかった。

まず、陳美玲 (1993) では、「けど」「が」の用法を「逆接」「前置き」「終助詞的用法」「対比・対照」「時間的推移」に分け、中国語の「転折復句」を表す「但是」(dànshì)系(「虽然」「但是」「可是」「不过」「却」「其实」等)との比較を行っている。

考察の結果として、「けど」「が」は、「但是」(dànshì)系より多く用いられ、「けど」「が」の五つの用法のうち、対応しやすいのは「逆接」であり、対応しにくいのは「前置き」「終助詞的用法」であると結論づけている。また、話し手の気持ちや発話態度を表す文末の「けど」「が」は、「中国語ではほとんど訳すことができないといっても、過言ではない」と判断している。

上記のような結論から、中国語における「けど」類で終わる「言いさし」は、ある程度存在していると推測できるが、話し言葉に現れているかについて明らかになっていない。その上、話し手の気持ちや発話態度を表す文末の「けど」「が」が中国語でほとんど訳せないという結論から、中国語においては、文末の「けど」「が」の発話意図はどのように伝わるかについて、更に考察が必要だと思われる。

次に、李 (2008) では、「言いさし表現」を、以下のように分けている。

I 標識ありの言いさし表現：

「けど」系や「から」などの接続助詞で終わる「言いさし表現」、及び格助詞「と(引用)」「って」などで終わる「言いさし」表現

II 標識なしの言いさし表現：

述部が省略される言いさし表現、及び副詞や感動詞で終わる「言いさし表現」(例えば：「何が……」「ちょっと」)

更に、発話機能とスピーチレベルの観点から、映画・ドラマのシナリオをデータにし、日中両言語における上記のような二種類の「言いさし表現」の使用状況を考察している。

結論としては、「標識ありの言いさし表現」では、日本語においては「丁寧体」レベルと「普通体」レベルに関わらず、「意志表示」「情報提供」の機能で多く使用されるのに対し、中国語においては「丁寧体」レベルではほとんど使用されず、「普通体」レベルでは「情報要求」の使用率が高いことが明らかとなった。この結果から、李（2008）の定義で「標識ありの言いさし表現」に属する本研究で捉える「言いさし」は、「丁寧度の低いもの」として捉えられ、特に「意志表明」の機能はほとんど果たさないものであるということが言えよう。本章では、その判断もデータの分析によって検証してみたいと考える。

5.4 中国語における「けど」類の「言いさし」の使用実態

5.4.1 考察の枠組み

5.4.1.1 考察対象

本稿は、日中両言語の会話文において、「けど」類の「言いさし」と同じ文脈で使用された中国語の用例を考察対象とする。

5.4.1.2 考察目的

日本語の会話文に使用された「けど」類の「言いさし」が、中国語において、同じ文脈でどのような表現が現れているか、どのように使われているかについて考察することにより、中国語における「けど」類の「言いさし」の扱い方を明らかにする。

5.4.1.3 分析資料

分析資料としては、以下のようなデータを使用している。

I 小説（日本語・中国語）及び翻訳版の会話の部分

II 映画とドラマ（日本語・中国語）及び翻訳版

III 『中日対訳コーパス（第一版）』（2003 北京日本学研究センター編）

以上のデータから「けど」類で終わる「言いさし」の用例を取り出して分析する。

5.4.1.4 分析方法

I. 分類基準

本章は、白川（2009）の分類基準に従って考察を行う。

白川（2009）では、「従属節だけで言いたいことを言い終えているかどうか」という基準により、「言いさし」は、(77)のような「言い残し」と(78)のような「言い終わり」に分類されると指摘されている。

- (77) 正樹「今日泊まって行けよ」
慎平「そうしたいんだけどね（ため息をつく）」
(白川 2009:8)

(77)の「そうしたいんだけどね（ため息をつく）」という発話において、「表現されなかった内容は、聞き手の側で見当をつけなければならない」（白川 2009:8）ため、「文字通りの言いさしであり、内容的に未完結である」（白川 2009:8）。このような発話は、「言うべき後件を言わずに途中で終わっている文」（白川 2009:7）とされ、「言い残し」として分類されている。

- (78) こずえ「ほかにつきあっている女の子いるのかしら？」
響子「さあ……あなただけみたいですけど。」
こずえ「ほんとですか!!」
響子「ええ。」（白川 2009:10）

(78)の「さあ……あなただけみたいですけど。」という発話において、発話者の伝えたい内容は、「前件のみで言い尽くされている」（白川 2009:10）ため、「母語話者であればこの後続くべき後件を待っている人はいないだろう」（白川 2009:10）。また、その発話の直後を注目すると、聞き手であるこずえが「ほんとですか!!」と会話のターンを取っていることに対し、「『相手の発言の途中で割り込んでいる』と感じる母語話者はいないだろう」（白川 2009:11）。このような発話は、「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」（白川 2009:7）とされ、「言い終わり」として分類されている。

II. 「けど」類による「言いさし」の出現数

表 5-1 は、考察対象としたすべてのデータにおける「けど」類による「言いさし」（「言い残し」と「言い終わり」）の出現数をまとめたものである。すべてのデータにおいて、全部で 699 の「けど」類による「言いさし」が確認できた。

表 5-1 全部の「けど」類による「言いさし」の出現数（単位は実数）

	「言い残し」	「言い終わり」	合計
『日中対訳コーパス』	222 (44%)	284 (56%)	506 (100%)

『ホントの愛は今のうちに』	25 (36%)	45 (64%)	70 (100%)
『ノルウェイの森』	16 (28%)	40 (72%)	56 (100%)
『アテンションプリーズ』	9 (28%)	23 (72%)	32 (100%)
『人間失格』	9 (33%)	18 (67%)	27 (100%)
『駱駝祥子』	3 (75%)	1 (25%)	4 (100%)
『レッドクリフ』	4 (100%)	0 (0%)	4 (100%)
合計	340 (48%)	359 (52%)	699 (100%)

表 5-1 から、「言い終わり」と「言い残し」のいずれも多く使用されることが分かる。さらに、「言い終わり」と「言い残し」は、使用回数（「359」と「340」）に大きな差が見られず、同じ頻度で使用されている。

5.4.2 データの分析

5.4.2.1 中国語における「けど」類による「言い残し」に関する分析

表 5-2 は、同じシチュエーションにおいて、中国語の「けど」類による「言い残し」の扱い方をまとめたものである。

表 5-2 中国語における「けど」類による「言い残し」（P「けど」類。）の扱い方
（単位は実数）

接続表現の 不使用	「省略型」(P……)	113 (33%)	196 (58%)
	「終了型」(P。)	83 (24%)	
接続表現の 使用	「省略型」(接続表現 P、接続表現…… ／P、接続表現……)	98 (30%)	144 (42%)
	「中途終了型」(接続表現 P。)	46 (13%)	
合計		340 (100%)	

表 5-2 から、同じシチュエーションにおいて、日本語では接続助詞「けど」類が使用されており、中国語では接続表現の使用及び不使用という二つ場合が観察される。

中国語と日本語は、言語の類型が異なるため、接続表現におけるさまざまな相違点が見られる。最も根本的な相違点は、日本語は、膠着語的特徴として接続表現は従属節への後接が要求されるため、従属節の構文要素への配慮が極めて重要であるに対して、中国語は、孤立語であるため、接続表現は形態的に拘束されずに使われるということであろう。

そこで、形態を重視して形態的な標識が豊かな日本語と、語順を重視して形態的標識に乏しい中国語とでは、同じ場面で使用され、焦点の位置が同じであって

も、言語の種類が異なるため、マーカーの位置で相違が生じてくることが予想される。そのため、「けど」類の「言いさし」が使用された同じシチュエーションにおいて、中国語の場合は逆接接続表現の不使用及び使用という二つのパターンが見られるだろう。

以下では、それぞれのパターンについて具体的に分析していく。

パターン1 接続表現の不使用

接続表現がない場合には、更に「P……。」という「省略型」、及び「P。」という「終了型」が観察される。下記で分析していく。

I 「省略型」（「P……」）

「けど」類による「言い残し」が使われる場面において、データの中で、文末に省略号（「……」）が付く文が 113 例見られ、一番よく見られるパターンである。省略号の使用により、省略や発話の途切れが示され、原文の「言い残し」に対応している。

(79) 弥生：どこかってどこ？

関山：あのう、タクシー降りた時ありましたけど。

下出租的時候還有……。

（『アテンションプリーズ』）

この会話において、関山は、弥生の質問に対し、「タクシー降りた時ありましたけど」を使い、「今は無くなってしまった」という内容を言い残していると推測できる。同じシチュエーションの中国語の場合、「下出租的時候還有」という平叙文に省略号（「……」）が使われ、句末音調が下がっていることも伴っている。

同じような使い方は、『日中対訳コーパス』においても反映されている。

(80) まだお若い、きれいな人ですけど。

那么漂亮的女人，又年紀輕輕的……

（日中対訳コーパス・『金閣寺』）

(81) おいしいものはたべたい。お酒は飲みたい。わたしにはいい着物を着る。—これだけならまだいいけれど。

又要吃好，又要酒喝，又要我穿好衣服—光是這些倒也罢了……

（日中対訳コーパス・『あした来る人』）

II 「終了型」(「P。」)

一方、接続表現が使用されていない場合には、発話内容が形式上で終了していることを示した中国語の用例が 83 例見られ、本研究で「終了型」と名付ける。また、中国語の訳文は、直訳されない傾向が見られる。

- (82) 木下：いつまで持ちますかね、あの子。
太宰：落後者ゼロで行きたいですけどね。
好像会成才の様子。

『アテンションプリーズ』

(82) は、教官である木下と訓練部部長である太宰は、三咲という訓練生について話す時の会話である。太宰は、木下の「いつまで持ちますかね、あの子。」という評価に対し、「落後者ゼロで行きたいですけどね」と婉曲的に自分の意見を表明している。「諦めないでほしい。」という内容が言い残されているが、一方、原文通りに直訳されていない訳文「好像会成才の様子。」は、何か言い残されているように感じないと思われる。

ここでは、原文と訳文の異同を比較するため、岡田(1991)及び水谷(1993)の「共話」に関する研究を取り上げる。

岡田(1991)は、会話のやり取りの型を「対話型」と「共話型」に分け、日本語は、「共話的」姿勢で話されることが多く、英語や中国語ならばどちらかといえば「対話的」な会話のほうが多いと指摘している。日本人は、文を最後まで聞かなくても、相手が意図を察してくれることを期待し、直接相手をめがけてボールを投げるような話し方はせず、相手の自由な判断にまかせ、キャッチのような投げ方をするのでであると述べている。

また、水谷(1993)は、共話の特徴について、「共通の理解を前提にし、いちいち相手の聞く意思をたしかめながら話すことであった」(1993:9)と指摘しており、また、日本人は、「途中まで言うことによって、聞き手に結末をつけさせる、あるいはその意思を理解させることができると考えている。相手に発話完成の機会を与えることがプラスとされ、すべてを言い尽くす話し方はむしろ『切り口上』としてうとまれる」と述べている。

そこで、日本語の「言い残し」は、「対話的」な会話しかできない中国語に訳される際に、意味から「残された」内容も訳されているのではないだろうか。

同じような使い方は、『日中会話コーパス』においてもみられる。

- (83) こんな見苦しい処で御座ますけれど。
瞧我们家这个脏劲儿。(日中対訳コーパス・『破戒』)

パターン2 接続表現の使用

(劉他 1991:735) では、転折複文について、転折意味の重さにより、次の2種類に分けられると述べられている。

i 重い転折。

二つの分句の意味がまったく反対のもので、常用の関連語句は「虽然P、但是(可是) / 否则 / 不然Q」などがある。従属節には「虽然」などを用いず、主節だけに「但是 / 但 / 可是 / 然而」などを用いるものもあるが、このような転折複文は口調が和らげられる。

ii 軽い転折。

常用の関連語句には「不过 / 却 / 只是 / 就是」などがある。そのため、中国語の訳文について、「虽然P。」、「虽然P、但是(可是) / 否则 / 不然……」、「P、但是(可是) / 否则 / 不然……」、「P、但 / 可是 / 然而……」、「P、但是 / 但 / 可是 / 然而……」の五つのパターンがすべて「転折複文」の主節の省略と考えられる。

また、陳美玲(1993)では、本研究の「けど」類による「言いさし」に相当する「終助詞的用法」について、「譲歩転折複句」、及び「軽い転折複句」の一部が「終助詞的用法」の「けど」「が」との対応が見られると指摘しているが、本研究の考察では、「けど」類による「言いさし」は、「譲歩転折複文」、「一般転折複句」及び「軽い転折複句」という三種類の複文において「けど」類による「言いさし」との対応が見られた。

I 「省略型」(接続表現P、接続表現…… / P、接続表現……)

- (84) 美咲：三人一緒じゃなきゃ！
弥生：それはそうなんだけど。
虽然是那样，不过……

『アテンションプリーズ』

(84) の会話において、弥生は、美咲の提案に対し、「それはそうなんだけど」を使い、「今回は一緒じゃなくていい」という反対の意見を言い残していると推測できる。同じシチュエーションの中国語の場合、「虽然是那样，不过……」という複文が使用され、「不过」という主節において発話内容が省略されている。このような「省略型」は、フェイスを脅かす行為(FTA)を軽減する機能を果たしていると考えられる。

同じような例文は、『日中対訳コーパス』の中においても見られる。

- (85) そりゃあ規則は規則ですけども。
规章是规章、可是……

(日中対訳コーパス・『破戒』)

- (86) 年期があけて、挨拶廻りに来ましてな。よく売れた子でしたけれども。
到期来辞行了。虽然她曾是个红人儿、可是……

(日中対訳コーパス・『雪国』)

II 「中途終了型」(接続表現 P。)

- (87) 沙織：ねえ、本当にエビのために頑張ってたの？

弥生：そう思いたくなかったけど。

虽然不想这么想。

『アテンションプリーズ』

この会話は、美咲洋子さんの「試験に合格したら、エビの天ぷらがもらえるので、頑張っていた」という発話に対するクラスメート達の会話である。弥生さんの「そう思いたくなかったけど。」という発話に、「実はそうかもしれません」という内容が言い残されている。同じシチュエーションの中国語の場合に、「虽然不想这么想。」という「譲歩転折復句」の従属節のみが使用されている。同じような例文は、『日中対訳コーパス』の中においても見られる。

- (88) 何もございませんけど。

虽说没什么东西。

(日中対訳コーパス・『斜陽』)

以上の分析により、「言うべき後件を言わずに途中で終わっている文」(白川 2009:7)という「言い残し」(P けど類。)を表す場合、省略や発話の途切れを示す省略号「……」で終わる文、及び発話内容が句点で終わる文を頻繁に使用していることがわかる。

5.4.2.2 「けど」類による「言い終わり」の対応関係に関する分析

表 5-3 は、中国語における「けど」類による「言い終わり」の扱い方をまとめたものである。

表 5-3 中国語における「けど」類による「言い終わり」(M「けど」類。)の扱い方

(単位は実数)

接続表現の不使用	「終了型」(M。)	176 (49%)
	「省略型」(M……)	129 (36%)
	語気助詞の使用 (M 啊/呢)	54 (15%)

接続表現の使用	0
合計	359 (100%)

表 5-3 から、同じシチュエーションにおいて、日本語の原文では接続助詞の「けど」類が使用されており、中国語の訳文では接続表現は使用されていないことがわかる。以下では、詳しく分析していく。

I 「終了型」 (M.) 176 例

「けど」類による「言い終わり」と同じようなシチュエーションで使用された中国語の場合、「けど」類の以外の部分のみ陳述する例文が多く見られる。

(89) 三神：ところで美咲さん、ご自分の服どう思われます？

美咲：いいと思いますけど。

我觉得很好。

『アテンションプリーズ』

この会話は、三神教官と訓練生の美咲との会話である。スーツを着てない美咲は、教官の質問に対し、「いいと思います」という断定の会話に「けど」を加えることによって語気を和らげることができる。一方、同じようなシチュエーションで使用された中国語の会話においては、「我觉得很好。」という断定文が使用されている。

同じような例文は、『日中対訳コーパス』においても数多く見られている。

(90) 絶対に許さなかったですけど。

我可绝对不答应。

(日中対訳コーパス・『あした来る人』)

(91) という訳で、瀬川さんにも御話したのですが。

因此，我已把这个打算告诉了濂川君。

(日中対訳コーパス・『破戒』)

II 「省略型」 (M……) 129 例

「けど」類の「言い残し」が使われる場面と同じように、「けど」類の「言い終わり」において、省略号「……」が付く文が多く見られ、句末音調が長くピッチが緩やかに下がっているという音声的な特徴を示している。

(92) 社長：当社で勤務されてどのくらいになりますか？

社員：ええと、12年になります。

呃……12年了……

『ホントの愛は今のうちに』

この会話は、社長が社員を辞めさせる際の前置きの会話である。実情を知らない社員は、「12年になりますか。」という発話により、社長の次の発話を聞きたいという、発話を引き出す意図を表している。それに対し、中国語の場合においては、文字上で省略号が使われ、相手の発話を引き出す機能を果たしている。同じような例文は、『日中対訳コーパス』においても数多く見られている。

(93) うんと高いのでしょうか。少しなら、私、持っているんですけど。
贵吗，钱不多的话，我有……

(日中対訳コーパス・『斜陽』)

(94) 実は——僕は、あの友達を助けて頂きたいと思って、
こうして貴方に御話しているような訳ですが。
实话说，我这样和你说话，无非是希望你能够帮忙这位朋友……

(日中対訳コーパス・『破戒』)

Ⅲ 語気助詞の使用 (M 啊/呢) 54 例

文末に置かれる語気助詞は、「話し手の表現意図や情意を示す語調」を表すことができ(劉他 1988)、「啊」(前の音節の影響により、「呀」、「哪」などの音声形式も現れる)、「吧」、「呢」、「么」などが挙げられる。また、平叙文の文末に使用される「啊」、「呢」は、語気を和らげることができ、それぞれ「注意喚起」、「対比」という機能を果たしている(劉他 1988)。

本研究の考察により、「けど」類による「言い終わり」は、「啊/呢」に訳される例文が多く見られ、「けど」類による「言いさし」の「主張を和らげる」という発話機能を果たす場合に対応しているのではないかと思われる。

(95) お客様のスコップなら、そっちにありますけど……
客官您用的铁铲、就在您身边呀

(日中対訳コーパス・『砂の女』)

(96) その信念が先生の心に好く映る筈だと私は思いますが。
我觉得这种信念，应该明显地反映在先生的心里呀

(日中対訳コーパス・『ころも』)

5.4.3 まとめ

日本語の会話文に使用された「けど」類による「言いさし」は、中国語におい

て、同じ文脈でどのように扱われているかについて考察を試みた。

さらに、考察に基づき、以下の結論が得られた。

まず、日本語の会話文を全体的にまとめると、全部で 699 の「けど」類による「言いさし」が確認でき、そのうち、「言い終わり」と「言い残し」とは、ほぼ同じ頻度で使用されていた。

次に、同じ文脈で使用された中国語の会話文を考察してみると、「けど」による「言い残し」の場合は、「けど」類の代わりに、接続表現を使用しない「省略型」及び接続表現を残す「省略型」の用例が多く見られた。一方、「けど」類による「言い終わり」の場合は、「言いさし」のマーカを除いて命題のみ述べる以外、語気助詞「啊/呢」を使用する例文も存在することが明らかになった。

考察により、陳美玲 (1993) の「話し手の気持ちや発話態度を表す文末の「けど」「が」は、「中国語ではほとんど訳すことができないといっても、過言ではない」という判断は不十分ではないかと思われる。

本節では、訳文をデータにして考察を行ったが、訳者の言語習慣によって言語形式も変わるといった問題点が残っている。今後日本語と中国語のそれぞれの言語における「言いさし」の使用実態についてさらに考察していきたい。また、中国語における接続表現の機能、「けど」類と語気助詞との対応について、今後も課題として考察していきたい。

5.5 中国語における「有標識言いさし」および「無標識言いさし」

5.5.1 「有標識言いさし」および「無標識言いさし」

中国語の自然会話において、因果複文は、以下の (97) (98) のような主節が省略されていると見られる形式が観察される。(以下、[]内は補填解釈される内容を表す。)

(97) 楊千嬅：〈自分が描いたドラえものの絵を見ながら〉太胖了那個叮当。

(太すぎますね。そのドラえもん。)

陳魯豫：你說完以後、你說完以後我覺得。

(あなたが言ってから、私はそう思うようになった。)

楊千嬅：不好意思、好久没画画。[所以画得不好]

(すみません、しばらく絵を描かなかった。[だから、うまく描けなかった。])

(National Broadcast Media Language Corpus・談話番組『魯豫有約』)

(98) 陳魯豫：你不覺得你坐那沙發、有一个地是凹下去的。

(座っているそのソファは、座面に凹んだところがあると感じないか。)

吳秀波：我覺得。

(そう感じた。)

陳魯豫：再往旁边、那个沙發是高起来了嗎？

(更にヨコへ座ったらそのソファは高くなってこないか。)
呉秀波：我覺得。
(そうだと思う)
陳魯豫：因為那个凹的地儿，是被很多人坐的。
[所以有一个地是凹下去的。]
(その凹んだところには、たくさんの人が座っていた。
[だから、座面に凹んだところがあるんだ。])
(National Broadcast Media Language Corpus・談話番組『魯豫有約』)

上記(97)(98)では、「好久没画画」(しばらく絵を描かなかった)「因為那个凹的地儿，是被很多人坐的」(その凹んだところには、たくさんの人が座っていたのだから。)は、すべて最後まで言い切らない発話と判断することができ、日本語の「言いさし」と同じように、文の後半や主節が省略されていると見られ、さらに、文としての完結性も備わっている表現と言えるだろう。

本章では、このような発話を中国語のもう一つの「言いさし」として捉え、「主節と見られるものが言語化されているかどうか」ということを中国語の「言いさし」の判断基準とする。さらに、「因為那个凹的地儿，是被很多人坐的」(その凹んだところには、たくさんの人が座っていたのだから。)のような接続表現が使用される発話を「有標識言いさし」と定義し、「好久没画画」(しばらく絵を描かなかった)のような接続表現が使用されていない発話を「無標識言いさし」と定義する。

5.5.2 研究目的及び課題

本節では、理由表現マーカーとしての「因果言いさし」を取り上げ、中国語の「因果言いさし」の使用実態、「断り」場面における待遇上の特徴、ならびに日中両言語の「因果言いさし」の意味解釈メカニズムについて考察することにする。

そこで、以下のような研究課題を設ける。

研究課題一：中国語の「因果言いさし」は、自然会話においてどのように使用されているのか。

研究課題二：中国語の「断り」場面において、「有標識因果言いさし」(以下、「因為P」)と、「無標識因果言いさし」(以下、「P。」)とは、どのような相違が見られるか。

研究課題三：以上のような「言いさし」の用法差の背景はどのようなことが考えられるか。

5.5.3 用語の規定

多く使用される用語または両言語では呼称が統一されていないものについて、

本研究における定義を確認しておく。

I. 依頼

「依頼」とは、「自分から自覚的な意図を持って相手の行動展開を促す『行動展開表現』行為の一種であり、自分の利益になることを相手の行動によって実現する行為」（高木 2003）である。

II. 誘い

「誘い」とは、「自分がいいと思うこと、あるいは自分が行おうとしている行為に相手も共に参加するよう働きかける行為」である（川口他 2002）。

III. 断り

「断り」とは、相手の「依頼」や「誘い」などの要求に対して、「その意に沿えない」という意図を表明し、相手に理解してもらうための発話行為であり、相手との関係維持と「断り」意図の伝達という両方に配慮が求められる言語行為とも言える（尾崎 2006）。

IV. 接続表現

「接続表現」とは、「文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文の接続語、接続句に対する概念」（佐久間 2002）である。本研究は、佐久間（2002）に従い、日本語の「接続詞」・「接続助詞」、中国語の「関聯詞」をすべて「接続表現」とする。

V. 明示的因果関係

因果関係の接続表現によって因果関係を意味する。

日本語：「から」、「ので」、中国語：「因為」、「所以」など

VI. 暗示的因果関係

従属節と主節の因果関係は、因果接続表現によって表すのではなく、表現内容から読み取るという意味である。

VII. 因果関係の度合い

接続表現の機能や構文要素などによって、従属節と主節の因果関係が明示であるか暗示であるか、もしくは強調されたか否かといった因果関係の強弱。

5.5.4 自然会話における日中両言語の「因果言いさし」の発話機能

5.5.4.1 「因果言いさし」のマーカ

因果関係である二つの文を接続する際に、日本語は、用言の活用形、接続助詞及び接続詞の使用があるのに対し、孤立語である中国語は、用言の活用形及び接続助詞が存在しておらず、使用も義務付けられるものではなく、「むしろ使われる場合は逆に使わなければならない条件があるといわねばならない」（大河内 1976:5）。

そこで、日本語と中国語の自然会話における「言いさし」を見てみると、以下

の例が観察される。

(99) M023 : YHAとかだったら自分たちで料理すればいいしさあ。(あー)
それはキッチンがついているわけではない？

F107 : じゃない。

F023 : 全然。それはBBというのはベッド・アンド・ブレイクファストだから。

M023 : あー、そうですね。BBはそうですね。

(『名大会話コーパス』)

(100) 陳魯豫 : 他(梁朝偉) 首先对自己, 对你对你们, 都需要有特别大的信心, 和很大的包容力, 这个是很難做到的。

(彼(梁朝偉、劉嘉玲の夫) はまず、自分、あなた、あなた達に対して強い自信と包容力を持つ必要がある。それを実現するのはとても難しいことだ。)

劉嘉玲 : 对对, 我挺幸運的。

(そうそう、私は運がいいんだ。)

陳魯豫 : 僅僅就是幸运吗？

(ただ運がいいんだけなの？)

劉嘉玲 : 当然不是了, 我觉得你也很懂我的。

因為我做了很多事情, 可能別人都看不到的。

(もちろん違うのよ。あなたも私のことをよく知っていると思う。たくさんのかんことをやっいて他の人がすべてのことを見るなんてできないんだから。)

陳魯豫 : 我明白。

(分かっている。)

劉嘉玲 : 因為他(梁朝偉) 是一个万人迷吧。

(彼(夫の梁朝偉) は人気者だからだろう。)

陳魯豫 : 你也是万人迷。

(あなたも人気者だ。)

(National Broadcast Media Language Corpus・談話番組『魯豫有約』)

(101) F023 : 1時間かからないぐらいだね。4、50分で。

F107 : そうそう。ほいでさあ、ずっと歩いていたんだけど、そうすと上から、なんか町の中が見れるじゃん。あるよね。ほいでさあ、なんか途中でワンちゃんに会ったんだね。(ふーん) 散歩をしてるワンちゃんに会ったんだ。

F023 : 城壁の上をやっば観光客なんだけど、ワンちゃん連れてきてる人たち結構多くて。

F107 : で、こう、そのワンちゃんと2人を、なに、お父さんとお母さ

んと歩いて、ワンちゃんに会ったんだ。

(『名大会話コーパス』)

- (102) 梁文道：看那麼多版本、這故事就能用不同的角度用不同的人物的不同的遭遇、来把他做的丰富一点。

(そんなにたくさんのバージョンを読むことによって、このストーリーを異なる視点、異なる人物の異なる経験を使ってさらに豊富にできるものだ。)

連麗如：对，开卷有益啊。

(そう、読書をすれば有益になるからだ。)

(National Broadcast Media Language Corpus・談話番組『鏘鏘三人行』)

上記の(99)－(102)において、前文脈に対して原因・理由を説明する際に、「言いさし」が使用されており、言語化されていない部分は聞き手の判断に委ねられている。その四種類の「言いさし」を、それぞれ「から」の「言いさし」(以下「P から。」「有標識因果言いさし」(以下「因為 P。」「テ形」の「言いさし」(以下「P て。」「無標識因果言いさし」(以下「P。」)と名付けることにする。

5.5.4.2 日中両言語における「言いさし」の発話機能

日本語と中国語の「言いさし」は、「表される事態が文脈上のほかの事態と関係付けられることによって話し手の言いたいことが補完される」(白川 2009:162) 表現として使用され、いずれも、事態の理由の捉え方を表す対事的モダリティに近い機能と、聞き手に対する働きかけを表す対人的なモダリティ形式に近い機能が見られる。以下では、用例を挙げて説明していく。

I 対事的な「言いさし」

対事的な「言いさし」は、話し手自身が前文脈の事態の理由への解明プロセスを示し、その理由に対する捉え方を表す用法である。例えば：

- (103) M029：母語というか、母語じゃないですね、(ええ)、あの、機能言語ですけど。

F098：ああ、はい。

M017：はああ。

M029：母語はインディアンの、クリーだったり、チップマンだったりするんですが、(うーん)、でも英語の方がうまいんですね。

M017：うーん。教育受けていくと。

F098：は一。

M029： 語彙数が英語の方がはるかに多いですから。／詞彙量英語多得多。／因為詞彙量英語多得多。

F098： ああそうですよね。

(『名大会話コーパス』)

(104) (あるキャラクターについて話している。)

A： ものすごくすごくムーミン大好きなのです！

B： 可愛いですからね。／好可愛啊。／因為好可愛啊。

(作例)

(105) = (100)

劉嘉玲：当然不是了，我覺得你也很懂我的。

因為我做了很多事情，可能別人都看不到的。

(もちろん違うのよ。あなたも私のことをよく知っていると思う。たくさんのをやっていて他の人がすべてのことを見るなんてできないんだから。)

陳魯豫：我明白。

(分かっている。)

劉嘉玲：因為他（梁朝偉）是一個萬人迷吧。／

??他（梁朝偉）是一個萬人迷吧。

(彼（夫の梁朝偉）は人気者だからだろう。)

陳魯豫：你也是萬人迷。

(あなたも人気者だ。)

(National Broadcast Media Language Corpus・談話番組『魯豫有約』)

(106) (北京にいる母親は日本に留学している娘に電話している。)

母親：東京天氣怎麼樣？

(東京の天気はどう？)

娘：今天又是雨天。

(今日も雨だ。)

母親：每天都下雨啊。

(毎日雨みたいだね。)

娘：現在是梅雨嘛。／因為現在是梅雨嘛。

(今は梅雨だからね。)

(103)・(106) は、話し手は、聞き手の発話に対して、その事態の理由を表明する際に、「言いさし」を使用している。(103) (104) (105) のように、話し手の確言及び判断を表す際、日中のすべての「言いさし」形式は使用できるが、(106) のように、話し手の推量を表す際に、「無標識因果言いさし」の形式の産出は難しくなることがわかる。井上 (2003) では、因果複文は「接続形式」がなくても自然な文として成立するが、これも「原因・理由」ということが基本

的に「倫理」レベルの関係だからである」と指摘されているように、話し手が前文脈の聞き手の発話を「因果」の「言いさし」必然的な帰結として捉えているはずである。しかし、推量の形式が使用されることにより、「必然的な帰結」が結びにくくなり、関係付けのバランスが崩れるのではないかと思われる。

Ⅱ 対人的な「言いさし」

対人的な「言いさし」は、話し手が前文脈の事態に対して理由を列挙し、何か聞き手に命令、依頼、要求、断りなどの働き掛けを行おうとする時によく使用されることがわかる。例えば：

(107) A：この度は、〇〇シンポジウムへご参加くださり、誠にありがとうございます。土曜日にシンポジウムが終了いたしましたら、懇親会もご用意しておりますが、ご都合はいかがでしょう。

B：こちらこそ、色々ありがとうございました。懇親会、お邪魔したいんですが、シンポジウム後は他の予定が入ってまして…
因為論壇後有別の安排…／論壇後有別の安排…

(アンケートの発話例)

(108) (A、Bは、友達である。)

A：今年は、初詣は？

B：一応、喪中ですから。あなたは？

因為那時是服喪期間／那時是服喪期間

(渡辺淳一『失樂園』)

(109) 周冲：我正想見你呢。你，你愿意——跟我拉拉手么？（把右手伸出去）。

（ちょうど会いたいと思っているところです。あ、あなた、私と握手していただけませんか？（右手を出す））

大海：我不懂得外国規矩。／??因為我不懂得外国規矩。

（外国のルールは知らないから）

（曹禺『雷雨』）

(110) 李 平：你還沒有走？

（まだ帰っていないの？）

夏彭年：我等你呢。我們去喝杯卦咖啡好嗎？

（あなたを待っていた。コーヒーを飲みに行かない？）

李 平：時間已經很晚了。／因為時間已經很晚了。

（もう時間が遅いから。）

（亦舒『嘆息橋』）

上記の(107) - (110)は、「断り」場面における「因果言いさし」の使用例である。このような発話行為は、「その意に沿えない」という意図を表明し、相

手に理解してもらうための発話行為であり、相手との関係維持と意図の伝達という両方に配慮が求められる言語行為とも言える(尾崎 2006)。この時、「シンポジウムの後は他の予定が入ってまして…／因為論壇後有別の安排…／論壇後有別の安排…」 「一応、喪中ですから。／因為那時是服喪期間／那時是服喪期間」 「我不懂得外国規矩。／因為我不懂得外国規矩。／外国のルールは知らないから。」 「時間已經很晚了。／因為時間已經很晚了／もう時間が遅いから。」)のように、中国語と日本語の両言語において、「ダメ」を表す主節まで言わず、残りは相手の判断に委ねる表現が用いられることが見られる。

また、「有標識言いさし」と「無標識言いさし」の使用は、聞き手との関係、前文脈、用件の重さ及び因果関係の度合いに左右されるのではないかと思われる。以下で、更に分析していく。

(111) 「ええ、でも、何も、津軽のことなんか知らないの」と私はしどろもどろになり、「何か、いい参考書でもないでしょうか。」「さあ、」と兄は笑い、「わたしも、どうも、郷土史にはあまり興味がないの。」

(我对郷土史也不太感興趣。／??因為我对郷土史也不太感興趣。)

(太宰治『津軽』)

この用例では、「わたしも、どうも、郷土史にはあまり興味がないの。」という「言いさし」は、話し手の兄が、親しくて目下である弟に対する雑談での発話である。複文に復元すると、「わたしも、どうも、郷土史にはあまり興味がないので、よく分からない。」、中国語の場合、「我对郷土史也不太感興趣、(所以)我也不知道。」となるが、「因為我对郷土史也不太感興趣、所以我也不知道。」と接続表現を入れると、この文脈でやや不自然な感じがする。「郷土史にはあまり興味がない」と「よく分からない」との間に基本的に「倫理」レベル(井上 2003)で因果関係が存在するため、接続表現は使用されていなくても発話者の意図が伝わると考えられる。

そこで、マーカがなく、従属節と主節の関係が明示されていないものの、理由を際立たせる必要がないため、「無標識言いさし」のほうがより自然であると考えられる。

下記の(112) (113)も、聞き手との関係、話し手の気持ち及び用件の重さから判断すると理由を際立たせる必要がないと考えられる。

(112) (年齢差があるルームメイト同士の会話である。)

A: もう帰ろうよ。

B: 駄目だよ。

A: だって、面接用のスーツ忘れて来ちゃったじゃないか。

B: すぐに新しいのを買ってやるから。

(我馬上給你買新的。／??因為我馬上給你買新的。)

(作例)

- (113) 母親：星期六去逛街吧。給你買好看的衣服。
(土曜日買い物に行こうね！かわいい服、買ってあげるから。)
子供：這周六我約朋友啦！／??因為這周六我約朋友啦！
(今週土曜日友達との約束があるから。)

(アンケートの発話例)

原田（1985）では、中国語の接続表現について、話し言葉において「因為 P、所以 Q」と表現することの方が珍しいと指摘し、「二つの接続詞のうちの何れかの一方のみを用いるか」、もしくは「何れの接続詞も用いない」という形式の方がより多いと述べられている。また、無標識「P、Q」複文について、「因果関係を表す本来の形」として捉え、「何らかの特にきわだって因果関係を強調する必要がある場合のみ、接続詞を用いるのである。特に、口頭語においては顕著である。」と指摘されている。以上の(163) (164)においても、「因為 P。」という「有標識言いさし」が不自然と感じられるのは、原因を際立たせる必要がないとすることができるだろう。

5.5.5 「有標識因果言いさし」と「無標識因果言いさし」との待遇上の特徴

上記の分析を証明するため、中国語母語話者へ「有標識因果言いさし」と「無標識因果言いさし」の待遇上の認識について選択式のアンケートを実施した。

5.5.5.1 アンケートの概要

I 予備調査

予備調査は、四名中国語母語話者に調査紙を用いて選択式のアンケートを実施した。調査紙調査の後、フォローアップインタビューも行った。予備調査の結果から、コミュニケーションにおいて「無標識言いさし」（「P。」）の使用範囲が「有標識言いさし」（「因為 P。」）よりはるかに広いことがわかった。

II 本調査

i. 実施方法

調査紙を用いて実施した。調査紙の配布と回収は、日本にいる被調査者に対して留置調査法を行い、中国にいる被調査者に対して郵便と電子メールで調査を行った。

ii. 調査対象者属性

調査対象者は、20歳代から50歳代の北京語を母語とする中国語母語話者であり、平均年齢は35歳7ヶ月（標準偏差は3歳3ヶ月）である。回答は40名から得られた。

回答の内訳は表19のとおりである。男女比は約1対1で、世代別では20歳代・30歳代・40歳代・50歳代はほぼ同数である。20歳代から50歳代は社会を構成する代表的な世代であり、中国の言語的・文化的規範を反映していると言えよう。

表 5-4 有効回答の内訳

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	合計（名）
男性	5	4	5	5	19
女性	6	6	4	5	21
合計	11	10	9	10	40

iii. 調査方法

中国語母語話者の「有標識因果言いさし」と「無標識因果言いさし」への許容度を見るため、中国語母語話者を対象にした選択式アンケートを用い、分析を行った。

選択式アンケートを使用した理由は、以下にあげる。

まず、「無標識複文」及び中国語における「言いさし」の使用は、議論されている課題であり、一定の見解が得られているとは思われない。そこで、母語話者の言語感による判断を考察したく、記入式ではなく、選択式を使用することにした。

それから、アンケートの設問は文脈付きのため、調査協力者がすべての文脈に遭遇したことがあるとは限らない。よって、自分が通常使う表現だけではなく、話し手として使える表現であるかどうか、及びその表現の使用によってどのような印象を受けるかということも見るためである。

5.5.5.2 調査内容

本調査は、中国語談話番組コーパス『National Broadcast Media Language Corpus』及び『BCC 現代中国語コーパス』において、「言いさし」と見られる形式が一番よく使用された断り場面を取り上げる。断り行為において、要求される内容、または相手との上下・親疎関係によって心的負担の度合いが異なるため、「断り」と言っても用件内容と相手との関係性の違いによって心的負担の度合いは大きくなり、さらにそれに伴って表現の形式やそのパターンも異なっていくと推測できる。そこで、調査内容に関して下記の要素を配慮して考えた。

ア. 要素一：関係性

本研究では、話者同士の関係を細かく具体的に設定する。

I. 社会的、あるいは年齢的に目上か同等か目下か

(以下、[上]、[同]、[下]で表記)

II. 親しいか親しくないか (以下[親]、[疎]で表記)

III. ウチ(家族)であるか、ソト(家族以外)であるか

の3×3=9通りの相手を設定する。その際、それぞれの状況の特質上、家族や親戚以外で、今現在同じ団体に所属している人かどうかについては設定していない。表記上、例えば、「上家族」は目上で家族の人、「上親」は目上で親しい人、「下疎」は親しくなく目下の人を表す。

そして、今回のアンケートで上記のような関係性によって許容度の違いがみられるかを調査するため、相手との親疎関係、地位の高低関係、身内対他人の関係を考慮し、以下のように設定した。

表 5-5 関係性の概要 (括弧 本稿における関係の略称)

	ウチ	ソト	
	家族	親	疎
目上	母親(上家族)	上司(上親)	初めて会う取引先の社長(上疎)
同等	配偶者/恋人(同家族)	友人(同親)	初めて一緒にチベットに行く旅とも(同疎)
目下	弟(下家族)	後輩(下親)	初めて行くレストランの若い店員(下疎)

さらに、表 5-5 の「疎遠」と「友人」については、以下のように説明する。

まず、「疎遠」な相手の基準は「ほとんど話すことのない人」とする。

(表 5-5 では「疎」、以下「疎」とのみ記す)

次に、「友人」はよく話す仲の良い友人とする。

イ. 要素二：用件内容

それぞれの「用件の重さ」に関連があると考え、「重い用件」と「軽い用件」に分けて基本的に場面を設定した。設定した場面は被調査者にとって日常生活で遭遇しうるものであり、想像しやすい場面である。すべての依頼場面は中国の社会・文化において起こりうるような自然な場面を選んだ。

以上のような要素を配慮し、以下の 18 個の場面を設定し、「なんとなくやりたくない」という理由で断るように指示し、状況に応じて自分が断る立場だった場

合、「有標識言いさし」と「無標識言いさし」との「どちらがより使いやすい」について回答者に判断してもらった。

表 5-6 場面設定

相手	用件	略称	場面番号
母親	日曜日なのに「早く起きなさい」と言われた。	上家族・軽	場面 1
	「明日お見合いに行きなさい」と言われた。	上家族・重	場面 2
配偶者／恋人	映画の鑑賞に誘われた。	同家族・軽	場面 3
	相手の両親との同居を提案された。	同家族・重	場面 4
弟	一緒にゲームをやることを頼まれた。	下家族・軽	場面 5
	代わりに宿題をやることを頼まれた。	下家族・重	場面 6
上司	残業を頼まれた。	上親・軽	場面 7
	10年間の海外赴任について尋ねられた。	上親・重	場面 8
友人	パーティーへの参加を誘われた。	同親・軽	場面 9
	旅先で特定の買い物を頼まれた。	同親・重	場面 10
後輩	ノートを見せることを頼まれた。	下親・軽	場面 11
	歓迎会の司会を頼まれた。	下親・重	場面 12
初めて会う取引先の社長	飲み会への参加を誘われた。	上疎・軽	場面 13
	商品の値下げを頼まれた。	上疎・重	場面 14
初めて一緒にチベットに行く旅とも	北京から列車で行くことを尋ねられた。	同疎・軽	場面 15
	1万円を貸すことを頼まれた。	同疎・重	場面 16
初めて行くレストランの若い店員	会員カードを作成しないかと言われた。	下疎・軽	場面 17
	アンケートへの記入を頼まれた。	下疎・重	場面 18

また、本研究では、断りをするかどうかは議論の対象ではなく、「有標識因果言いさし」及び「無標識因果言いさし」に対する許容度を考察するため、断る時に「言えるかどうか」についてアンケートの項目を設定した。

さらに、取り上げる場面の順番が回答に影響を与える可能性があると考えられるため、場面の順番を変えたものを作成した。

最後に、「言いさし」の言語形式に関する相違が本当に言語の類型によるか文化の背景によるかという判断を下すため、被調査者にフォローアップインタビューを行った。

5.5.5.3 調査結果

調査結果は、以下にまとめる。

表 5-7 調査結果（実数）

場面番号	略称	「無標識言いさし」「P。」	「有標識言いさし」「因為 P。」
場面 1	上家族・軽	40	0
場面 2	上家族・重	26	14
場面 3	同家族・軽	40	0
場面 4	同家族・重	29	11
場面 5	下家族・軽	40	0
場面 6	下家族・重	29	11
場面 7	上親・軽	38	2
場面 8	上親・重	20	20
場面 9	同親・軽	37	3
場面 10	同親・重	25	15
場面 11	下親・軽	38	2
場面 12	下親・重	28	12
場面 13	上疎・軽	24	16
場面 14	上疎・重	10	30
場面 15	同疎・軽	28	12
場面 16	同疎・重	11	29
場面 17	下疎・軽	28	12
場面 18	下疎・重	25	15

表 5-7 の「無標識言いさし」と「有標識言いさし」の実数のデータをカイ二乗検定で分析した結果は 1%水準で有意であった ($\chi^2(17) = 175.075, p < .01$)。なお、残差分析の結果、「P。」の「上家族・軽」、「同家族・軽」、「下家族・軽」、「上親・軽」、「同親・軽」、「下親・軽」、及び「因為 P。」の「上親・重」、「上疎・重」、「同疎・重」が有意に多いのに対し、「上家族・重」、「同家族・重」、「同家族重」「同親・重」「下疎・軽」、「下疎・重」、「同疎・軽」、「上疎・軽」、「下親・重」は有意差がないという結果が得られた。したがって、「有標識因果言いさし」は目上で疎い相手に重い用件を断る際に多用する傾向があると判断できる。

5.5.5.4 待遇上の用法差の背景

中国語の接続表現に関する先行研究において、接続表現の使用・不使用による発話効果に関する研究が極めて少ないが、邢 (2001:31-37) では、複文における接続表現 (中国語で「関連詞語」) の機能について以下のように述べられている。

关系词语的作用有四种：一是显示，二是选示，三是转化，四是强化。“显示”

“选示”“转化”或者“强化”，指的都是由语里到语表的动态过程。

（関連詞語の機能には 4 種類ある。それは「顕示」、「選択表示」、「転化」、「強化」である。「顕示」「選択表示」「転化」もしくは「強化」はいずれも言語の内面から外面へという動態過程を指している。）

また、邢（2001）では、中国語では、句点接続の複文に接続表現の付加、もしくは、既にある表現形式を用いた上に、さらに接続表現を加えるといった表現方法は、従属節と主節の意味関係を一層強めることができると述べられている。。

「つまり、一文では、接続表現の数が多ければ多いほど前後節の関係が強められ、一層明らかになるということであろう」（新田 2007）。そこで、「P、Q」複文に接続表現を加えて「因為 P、所以 Q」という形式にすることにより、従属節 P と主節 Q の関係を明示的に示すことができる。

したがって、「因果言いさし」の場合、「聞き手の上下親疎」「要件の重さ」という要素の程度が高ければ高いほど、理由を際立たせる必要が高まっていき、「有標識因果言いさし」の使用頻度が高くなるということがわかる。

5.5.6 まとめ

本節では、理由表現マーカーとしての「因果言いさし」を取り上げ、中国語の「因果言いさし」の使用実態、「断り」場面における待遇上の特徴、ならびに日中両言語の「因果言いさし」の意味解釈メカニズムについて考察を行った。

日中両言語における自然会話の分析、及び待遇上の認識に関する選択式のアンケートを行うことにより、1) 中国語の「言いさし」は、接続マーカーの使用が必ず必要ではなく、「有標識言いさし」と「無標識言いさし」との二種類が見られること。2) 対事的機能を果たす場合では中国語の「言いさし」は推量モダリティと共起しにくく、日本語と比べると使用範囲が狭いこと、3) 対人的機能の場合では中国語の「言いさし」は、相手との親疎上下の関係及び事態の重さに敏感に反応し、「有標識因果言いさし」は理由を際立たせる際に使用頻度が高まることがわかった。

しかし、データ分析及びアンケート結果の考察についてまだ不十分であり、今後さらに分析を加え、逆接を表す「転折言いさし」の意味解釈メカニズムと比べながら、研究をすすめていきたい。

また、本発表は、中国語話者のための文法教育の視点から考察を試みたものである。中国人学習者に対して日本語の「言いさし」を取り上げる際には、円滑なコミュニケーションを図るための 1 つのポライトネス・ストラテジーとして学習者に再認識させる必要があると考えられる。また、「断り」場面における会話を導入する際には、日中両言語における「言いさし」の相違を関連させて指導するのが効果的であると思われ、今後の課題として指導方法について研究していきたい。

5.6 本章のまとめ

本章では、中国語話者に「言いさし」をさらに順調に提示できるように、中国語における「言いさし」の扱い方を考察した。

その結果、まず、同じ文脈で使用された中国語の会話文を考察した結果、「けど」類による「言い残し」の場合は、「けど」類の代わりに、接続表現を使用しない「省略型」及び接続表現を残す「省略型」の用例が多く見られた。一方、「けど」類による「言い終わり」の場合は、「言いさし」のマーカーを除いて命題のみ述べる以外、語気助詞「啊/呢」を使用する例文も存在することが明らかになった。

さらに、膠着語である日本語は従属節の構文要素への配慮が極めて重要であるのに対し、孤立語である中国語は、接続表現は形態的に拘束されずに使われるため、中国語の「因果言いさし」は「有標識因果言いさし」と「無標識因果言いさし」との二種類に分けられる。日中両言語の「因果言いさし」は、いずれも複文の従属節のみで現れる形式であるが、日本語に比べて中国語の「因果言いさし」の用法はかなり限定される。事態の理由の捉え方を表す場合、中国語の「因果言いさし」は推量モダリティと共起しにくく、日本語に比べると使用範囲が狭い。また、「断り」のような聞き手への働きかけを表す場合、中国語の「因果言いさし」は、相手との親疎・上下関係及び事態の重さに敏感に反応し、特に「有標識因果言いさし」は理由を際立たせる際に使用頻度が高まることがわかった。

しかし、話し言葉の表現に関する考察は、音声情報が非常に重要視されている。大石（1971）は、話し言葉では、「...ケド」「...ガ」「...ノニ」「...テ」「...タラ」などの接続表現で終わる「言いさし」は、文末かどうかの認定にはイントネーションやポーズなどがよりどころとなることを指摘しているように、学習者が音声コミュニケーションを行う際に、どういう基準で「言いさし」を理解したらいいのかという問題を解くために、「言いさし」の音声・韻律的な特徴を解明する必要がある。

次章では、「言いさし」の音声・韻律的な特徴を明らかにする。

第6章

『日本語話し言葉コーパス』における

「言いさし」の「けど」類の音声的な特徴

大石 (1971:244) で「表出音相によってはじめて文法的構造や意味がはっきりする、それらが規定される、ということが多い。」と指摘されているように、ある表現を特徴付ける際に、音声情報が判断基準として決定的に重要であることが言える。また、聞くための教育文法を目指して考察を行う際に、どのような音声特徴を有するのが、それをどのように学習者に提示すればいいのかを考えなければならない。

そこで、本章では、「言いさし」の「けど」類の音声的な特徴を接続助詞の「けど」類に比べながら解明していく。構成は以下の通りである。まず、1節では問題のありかを提示する。2節では先行研究を紹介する。3節、4節、5節では研究目的、課題、対象およびデータを述べる。6節では考察結果を述べる。7節では日本語教育への示唆および今後の課題を提示する。最後に8節で、本章のまとめをする。

6.1 導入

話し言葉において、「けど」類が現れる発話は、「言い切り」であるかどうかにより、以下のような2種類に分けられると考えられている。(白川 2009)

(114) 「黒でもいいけど、あんまりきれいじゃないでしょう。」

(115) 「言っていていいかわかりませんが。」

(114) のような発話における「けど」類 (以下、継続型の「けど」類) は、発話の継続を表し、従属節と主節を接続する接続助詞 (益岡・田窪 1992) であると考えられているのに対し、(115) のような発話における「けど」類 (以下、終了型の「けど」類) は、発話の終了を表し、「言いさし」の「けど」類 (荻原 2008; 白川 2009) として捉えられることが多い。

前の章では、実際のコミュニケーションにおいて、日本語母語話者は、この2種類の「けど」類をある程度把握していながら談話を進行させているのに対し、日本語学習者は、発話末の「けど」類の理解に困難があり (田 2013)、この2種類の「けど」類の判別が更に難しいと予想されることを述べた。

そこで、「けど」類の「言いさし」を明らかにし、2種類の「けど」類を判別するためのモデル構築を試みるために、それぞれに現れる意味的・統語的・韻律

的要素を考察することを目指すことを目指し、第5章では、日本語教育文法の視点から、話し言葉における継続型の「けど」類及び終了型の「けど」類の意味的・統語的な特徴について考察を行ったが、それぞれ韻律的な特徴及び判別するためのモデルがまだ明らかになっていない。

そのため、三枝（2011:142-143）で「『言いさし』がそれ自体独立した文であることを言うためには、終助詞との言い換えではなく『完全文』とイントネーションの違いをあげた方がいい」と指摘されているように、本章では、学習者に「言いさし」を提示する方法を探るため、韻律情報などの音声情報に焦点を当て、終了型の「けど」類と継続型の「けど」類の韻律などの音声的な情報について考察し、両者の相違および「けど」類の「言いさし」の特徴を明らかにする。

6.2 先行研究

文の音声特徴に関する先行研究は、大石（1971）、郡（1996）が挙げられるが、「言いさし」の音声特徴を取り上げ、考察を行う研究は、管見の限り、まだ見当たらない。

大石（1971）

大石（1971:244）は、以下の用例（116）に対して、「～ですけど」を文末と認めるか、条件接続と認めるかを、イントネーションやポーズの状況に関する判断に任せようとするのが重要であることを示している。しかし、どういうイントネーションと共起するかについて解明していない。

（116）（職場安定所面接）

A：何か今お好きでやっていらっしゃることはございません。

B：別に今何もやっていないんですけど これからタイプ習おうかと思っ
っているんです。

（大石 1971:244）

それを踏まえ、小磯（2008:98）は、「今日はもう帰らないといけないんだけど」という発話に対し、「末尾の音調が句末を強調するような上昇調や上昇下降調で発話される場合には、そのあとにまだ文が続く（主節が後続する）ことを予感させるのに対し、末尾の音調が下降調で特に一定以上のポーズが後続する場合には、必ずではないものの相対的にそこで発話が終了したと感じられる傾向にある。」と述べている。

大石（1971）および小磯（2008）から、文末で現れる「けど」類の「言いさし」を判断する際に、イントネーションやポーズが重要な手掛かりとなると言えるだろう。そこで、本章では、実際に、イントネーションを一つのパラメータとし、「けど」類の「言いさし」を特徴づけるために考察する。

郡 (1996)

郡 (1996) は、実際の講演音声を対象に韻律的な特徴のみ残して意味内容が分からない音声を作成し、被験者に文末の判断をさせる、あるいは日本語を知らない外国人を対象に現音声のまま文末の判断をさせるという実験を実施した結果、文の音声的な特徴を下記のようにまとめている。

- ① 文の切れ目にはポーズがある。文の切れ目のポーズは常に長いとは限らないが、長いポーズは文の切れ目に特有なものであり、文の途中で長いポーズを入れることはない。
- ② 文末以外で、ポーズ直前の文節末短母音を伸ばすことがある。これはそのポーズが文の切れ目でないことを示す印になっている。
- ③ 文末以前では音が長くなるが、それは耳に感じられるほどの伸びではない。
- ④ 音の高さは、あまり短くないポーズには挟まれた単位ごとに高い山で始まり、低く終わるのが普通である。一般に信じられているように平叙文の末尾に顕著な下降音調があるということは実際にはないし、文末だけが著しく低いということもない。
- ⑤ 「尻上がり」音調が文末以外の文節末でよく使われる。これは次が文の切れ目でないことを知らせる補助的な印になっており、文がまだ続くことがいっそうわかる。
- ⑥ 文末では音が弱まるが、発音が曖昧化して内容が聞き取れないこともある。

郡 (1996) は、文を判断する際の音声的な基準を示しているが、データ数が少ないこと、および独話音声しか取り扱わないという問題が存在する。「言いさし」を教えるための基準を探るために、実際の音声データを使用して独話および対話音声で検証する必要がある。

6.3 考察対象

本章は、話し言葉における「けど」類の「言いさし」を日本語学習者に提示するために、使用実態を全面的に考察し、「独話」および「対話」をすべて射程に入れて検討する。「独話か対話か、自発性が高いか低いか（発話内容が事前にどの程度準備されているか）、発話スタイル（改まりの程度）が高いかなど」（小磯 2008:101）のような談話の種類の違いは、「けど」類のあり方に影響を与えることが予想されるため、談話の種類毎に「言いさし」の「けど」類と「接続助詞」の「けど」類を比較することにより、二種類の「けど」類の相違および「言いさし」の「けど」類の音声的な特徴を推測する際の手掛かりが得られる可能性がある。

具体的に、『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』から抽出いた発話をデータに
とする。出現した「けど」類の「言いさし」の例を、以下に挙げる。

(117) あれですね (F まー) 籠の中の小鳥のような (F まー) 本来なら自分
達で決めれると思える (F まー) 生き物だと思っんですけども
(S06M0795)

(118) それをきっかけに (F あーの一) たまたまクリスマス音楽会っていう
ので 衣装を作らさせる幼稚園だったんですけど
(S07F13366)

(117)と(118)はいずれも、話が途中で終わってしまったものの、意味がきちんと
伝わった「けど」類の「言いさし」である。そこで本章では、CSJ から「けど」
類の「言いさし」を広く収集し、その出現状況および韻律特徴について分析と考
察を行う。

6.4 研究課題および仮説

「統語とイントネーションの関係を考える時、統語の情報が韻律構造上の制約
や統語構造以外の情報とどのように作用しあうのか、という点に注目する必要が
ある」(石原 2014: 18)と指摘されているように、本章では、「言いさし」の「け
ど」類、つまり「終了型」の「けど」類の特徴を明らかにするために、二種類の
「けど」類の音声的な特徴を比較する。具体的に、以下の四点をパラメータとし
て考察する。

パラメータ 1: 発話末の下降 (final lowering)

Pierrehumbert & Beckman (1988) は、発話を、F0 declination (発話に要す
る時間の関数として単純に F0 が低下する現象)が見られる範囲と定義し、その
末尾で「final lowering」という、平叙文末尾で F0 が局所的に急激に下降し発話
の終了を示す現象が生じる傾向があるとしている。このことから、「けど」類の
発話末の下降音調 (L%) の最小 F0 値を観察することにより、発話が終了してい
るかどうかを判断することができる可能性が考えられる。

そこで、終了型の「けど」類に「final lowering」が見られることが予想される
が、しかし、「final lowering」に関する研究例が限られているため、朗読音声と
自発音声における「final lowering」の相違点、及び対話音声と独話音声における
「final lowering」のあり方について、明確になっていない点はまだ多く残ってい
る。

関連研究の中で、Umeda (1982) は、F0 下降がスタイルに依存しており、「final
lowering」は朗読音声に限られる可能性があると指摘している。それに対し、前

川 (2013) では、「final lowering」が自発音声にも観察されることが検証されたが、スタイルの異なる対話においては「final lowering」が生じない可能性も十分にあると述べられている。

但し、石本・小磯 (2013b, 2014) では、対話音声の発話末において「final lowering」が生じない可能性があるとは指摘されているが、『～けれども』『～が』などの接続表現に「final lowering」などが生じるかどうかについてまだ明らかになっていない。

以上の分析から、日本語対話音声の「けど」類における「final lowering」の存在に関して考察することにより、まだ不明瞭である「final lowering」の実態を明らかにすることができるとともに、二種類の「けど」類の判別、および「終了型」の「けど」類の特徴付けにも一助となるといえよう。

パラメータ 2 : 句末音調

大石 (1971) は、話し言葉において、「～けど」や「～が」などのような接続表現が文末を示すのに転用されることを指摘しており、更に文末か否かに関する認定には、イントネーションがより重要になるとしている。

また、郡 (1996) は、文の中、特に文節の末に現れた上昇調や上昇下降調は、大きな意味の区切りに現れることが多く、またその後にポーズが置かれることも多いことにより、これらの句末境界音調には、文の意味の区切りを明らかにすることで伝達効果を高め、ポーズがあっても発話がまだ続くことを示す機能があると指摘している。

さらに、Koiso et al.(1998)は、対話における話者交替と相づちに関する分析を通し、上昇下降調にが発言の継続性と強く結び付いていることを示している一方、下降調は、逆に文の終わりらしさが相対的に強いことを意味すると述べている。

郡 (1996) 、Koiso et al.(1998)の指摘に従えば、継続型の「けど」類では、上昇調 (H%) 及び上昇下降調 (HL%) が多く観察されることが予想される。そこで、2種類の「けど」類の句末音調の型を比較し、それぞれの発話末に生じる上昇調、下降調、及び上昇下降調と発話の終了・継続との関係を考察し、それぞれの韻律特徴を明らかにする。

パラメータ 3 : 句末の長さ

日本語では、発話末になどの強い統語境界における語末の長音化 (final lengthening) という現象が見られ、韻律境界を明示する機能を持っている (森 2001) 。森 (2001) の指摘に従えば、終了型の「けど」類の末尾のモーラが、継続型の「けど」類より長いことが予想される。

一方、大島 (2013) は、上昇下降調 (HL%) は、発話中に区切りがある場合に発話の継続を示す標識として使用され、その最終モーラが長く発音される傾向があると述べている。大島 (2013) によると、継続型の「けど」類の句末は、終

了型の「けど」類より長い可能性もある。

そこで、分析では、「けど」類の末尾のモーラは「が」、「ド」（「けど」、「けれど」）、「モ」（けれども、けども）、「ネ」（終助詞）であり、それぞれの長さを見ることにする。

パラメータ 4：韻律境界の強さ

Pierrehumbert and Beckman (1988) は、「発話—イントネーション句 (IP) —アクセント句 (AP)」という韻律的階層構造を仮定している。アクセント句 (AP) は、第 1 モーラから第 2 モーラ付近にかけての F0 の上昇と句末への緩やかな下降を有し、アクセント核による下降を最大ひとつ持ちうる単位と定義している。IP は AP の上位階層に位置し、AP のピッチレンジを指定する単位と定義されている (石本・小磯 2013a)。

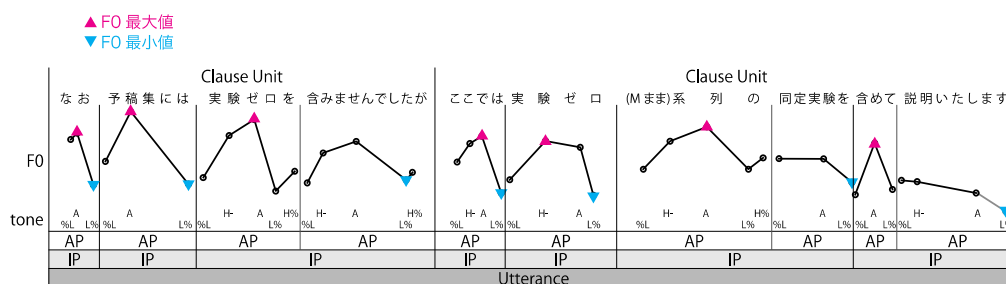


図 6-1 韻律的階層構造 (石本・小磯 2013a:335)

さらに、日本語の韻律句のピッチレンジを決定する要因の一つとして、アクセント句のピッチレンジを縮小させるダウンステップ (downstep) という現象があると指摘している。Pierrehumbert and Beckman (1988) によれば、イントネーション句 (IP) は、アクセント核が後続するアクセント句 (AP) の F0 ピークを反復的に低下させるダウンステップの生じる領域と定義され、イントネーション句 (IP) の境界でピッチレンジのリセットが生じる。

そこで、階層構造 Break Index (BI) の分布について、終了型の「けど」類発話は、韻律の終了を表すため、イントネーション句の境界 (BI=3) が多く観察され、継続型の「けど」発話は、発話の継続を表すため、アクセント句の境界 (BI=2) が多いことが予想される。

6.5 研究方法

6.5.1 考察データ

6.5.1.1 考察データの選定背景

岡崎・岡崎 (2001:55-61) は、同じ内容について、論文のような書き言葉にした場合、及び同僚同士の日常会話場面に持ち出した場合との比較により、「文形式」、「会話当事者間のやりとり」、及び「音声面」という話し言葉の特徴を指摘している。

岡崎・岡崎 (2001:55-61) の指摘により、話し言葉の研究は、音声面に関する考察が欠かせない存在であるため、音声情報が含まれたデータが望ましい。特に、本章では、接続助詞で終わる文をイントネーションなどのパラメータによって「言いさし」をマーカーにするため、現実の場面と近い空間と時間の制約の中で行われる音声を伴った資料が必要である。

6.5.1.2 『日本語話し言葉コーパス (CSJ) 』

本章の分析資料として、「文」という概念の代用として「節単位(Clause Unit)」という独自の言語単位を設計され、国立国語研究所、通信総合研究所、及び東京工業大学の三者が共同で開発した日本語自発音声の音声言語コーパス、『日本語話し言葉コーパス』(Corpus of Spontaneous Japanese:以下 CSJ と記す)を用いた。

CSJ は、約 661 時間、752 万語の日本語音声からなる自発音声が含まれ、1417 人の話者による 3302 の「講演」から構成されている(インタビューのような対話音声は 10%である)。その大半は学会講演と模擬講演と大別される自発的な独話である。学会講演とは日常的なテーマ(「今までの人生を振り返って楽しかった出来事」、「あなたの住んでいる町や地域について」など)に関する 10 分程度のスピーチを録音したものである。一般的に学会講演では改まったスタイルの発話が多く、模擬講演では比較的リラックスした発話が多い。すべての講演は「転記テキスト」によってフィラーや語断片、不明瞭な発音、咳などを含むすべての言語・非言語情報が忠実に書き起こされている。いずれも一定時間を持つ発話者の「独話」であります。朗読のような発話スタイルである「学会講演」、及び即興的な発話スタイルである「模擬講演」の二つを観察することができる。

6.5.1.3 CSJ-RDB

CSJ は、音声データと音声を文字化したテキストの他に、二種類の単語情報(短単位・長単位)や節の情報、話者の性別・生年代・出身地などの情報が含まれている。さらに、これらの情報を統合して表現したデータとして、RDB (コアのみ)と XML (全体)に基づく二種類のデータを提供している。

その中、RDB とは、相互に関連付けられた複数のテーブルから構成されるデータベースである。その中で含まれたコアと呼ばれる 45 時間のデータには、転記テキストの他に講演者に関する情報である「講演者属性のデータ」、人手で付与・修正された精度の高い二種類の「形態論情報」(長単位、短単位)、「節単位情報」、「係り受け構造情報」、文節音情報、韻律情報、「イントネーションラベル」、

「談話構造情報」などの実に多様な研究用情報が付与されている。

また、RDBは、図6-2のように、短単位や文節音といった単位ごとにテーブルが用意されており、品詞情報などのような短単位情報や、母音・子音の別や無声化の有無などのような文節音情報などが、それぞれのテーブルに記されている。さらに、短単位テーブルから品詞が名詞のものを抽出するといったように、一つのテーブルに関わる情報を検索することもできるし、短単位と文節音のテーブルを結び合わせ、二つ以上のテーブルに関する情報を検索することもできる（小磯2014）。

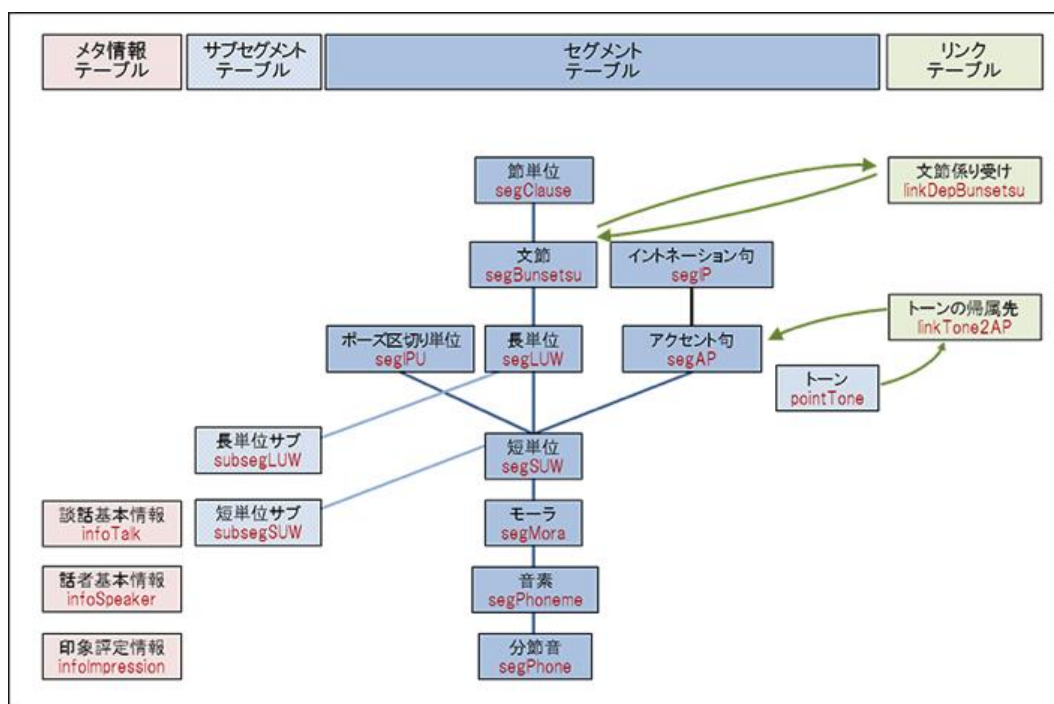


図6-2 基本データベースのデータ表現方式

8

そこで、本章の分析には、RDB（コアのみ、以下CSJ-RDB）を用い、コアのうち、韻律情報が付与されている、約604.3時間2702ファイルの独話資料（学会講演、模擬講演）、約8.6時間42ファイルの対話資料（学会講演インタビュー、模擬講演インタビュー、課題指向対話）をデータにし、考察を行う。RDBを対象にこうした操作をするには、SQLと呼ばれる問い合わせ言語を用いる必要があるが、考察を行う際に、SQLiteというデータベース管理ソフトを使用する。

⁸国立国語研究所『CSJ-RDB Version2.0 の構成』

<http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/rdb-str.html>（最終アクセス2016年9月20日）

6.5.1.4 CSJ-RDB の句末音調の型

CSJ-RDB には、句末音調の型について、下降調 (L%)、上昇調 (H%)、上昇下降調 (HL%)、低ピッチ区間を伴う上昇調 (LH%) 及び上昇下降上昇調 (HLH%) の 5 つの音調が定義されている (五十嵐他 2006)。また、上昇調 (H%)、上昇下降調 (HL%)、及び下降調 (L%) の発話の句末音調を、直線近似する際の屈折点に関する音韻情報が細かくラベリングされている (図 6-3)。

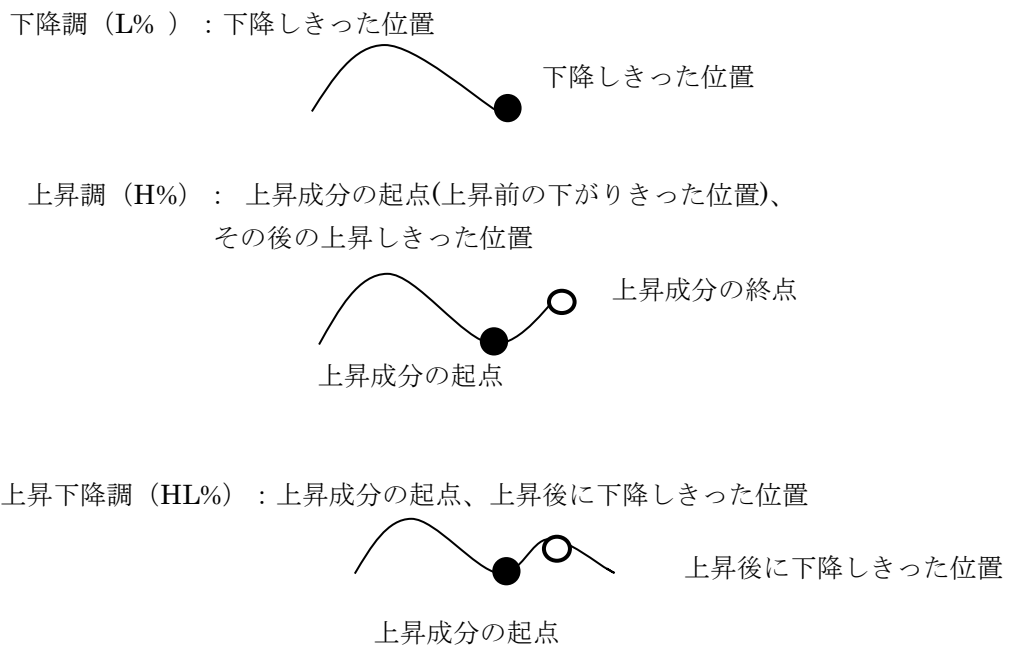


図 6-3 句末音調の音韻情報

6.5.1.5 CSJ-RDB の韻律ラベリング体系

さらに、韻律ラベリング体系として、X-JToBI (eXtended J_ToBI) が用いられている (前川他 2011)。CSJ の韻律情報に含まれている Break Index (以下 BI) は、「韻律特徴からみた発話の階層構造を表現する情報」 (前川他 2011:3) である。また、BI=3 はイントネーション句 (IP) の境界、BI=2 はアクセント句 (AP) の境界、BI=1 は単語の境界に相当し、数字が大きいほど、韻律上の切れ目が強い (上位階層である) ことを示している。

6.5.1.6 CSJ-RDB における文単位の認定

まず、CSJ における文単位の認定方法について述べていく。CSJ は、「述語を

中心としたまとまり」(益岡・田窪 1992)と定義され、統語的に、及び意味的にある程度完結した単位を「節」と見なし、「文」を採用せず、「節単位」という「基本的に、特定の節(*clause*)の終端境界で発話を分割することによって得られる、文法的・意味的なまとまりを備えた」(丸山他 2006)独自の言語単位を設計し、談話研究用の情報をすべて「節単位」として付与している。

そこで、CSJにおいて、付与されている節境界ラベルを使用して文単位を認定している。具体的には、寺村(1981)や益岡・田窪(1992)における従属節の種類を参考に49種類の節境界に分類した上で、「節境界直後の構造的な切れ目の大きさという観点から」、下記のように、「絶対境界」「強境界」「弱境界」の3段階の節境界レベルを設定している(丸山他 2006: 267)。

- ・絶対境界：いわゆる文末表現に相当する境界であり、その直後には発話の完全な切れ目があると見なされる。
- ・強境界：いわゆる文末表現ではないが、構造的に大きな切れ目を成すと考えられる節境界である。「並列節ガ」や「並列節ケレドモ」などがこれに相当する。
- ・弱境界：通常は発話の切れ目になることはないが、稀に発話の切れ目になり得る従属節の境界である。「理由節ノデ」「条件節タラ」などがこれに相当する。

6.5.2 CSJ-RDBにおける「けど」類の抽出

そこで、CSJに付与されている節単位情報から、強境界ラベルが「並列節ガ」、「並列節ケド」、「並列節ケレド」、「並列節ケドモ」及び「並列節ケレドモ」であるものを独話2586例、対話288例(韻律情報の付与されていない話者(インタビュー)の発話を除いて211例)抽出し、分析対象とした。

6.5.3 継続型・終了型の分類

その上で、当該節単位および後続する節単位、及び発話の音声資料によって判断し、「継続型の『けど』類」と「終了型の『けど』類」の別を日本語母語話者によって分類した。「継続型の『けど』類」と「終了型の『けど』類」の例を、(119)と(120)に示す。

(119) R: 本当にね 自分でも不思議なんですけど どうしてその
(F ええ) 年まで二十六七にもなって 行ったことなかったのか
(D01F0023)

(120) L: 主張が激しい (F うん) (F うん)
R: そうですね。びっくりしましたけどね

6.6 結果および考察

6.6.1 CSJにおける2種類の「けど」類の生起数

まず、独話データを見よう。人手で分類した結果、「継続型の『けど』類」が 2380 例、「終了型の『けど』類」が 206 例得られ、発話末に比べて発話中に現れる場合がより多いことがわかる。内訳を表 6-1 に示す。

表 6-1 独話データの内訳
(数は件数 **は有意に多いことを示す。以下同じ。)

「けど」類	継続型	終了型	全体
ガ	969**	66	1035
ケド	242	42**	284
ケドモ	303	22	325
ケレド	34	5	39
ケレドモ	832	71	903
全体	2380	206	2586

カイ二乗検定の結果、1%水準で有意であった ($\chi^2(4) = 23.499, p < .01$)。残差分析の結果、継続型の「が」と終了型の「けど」が有意に多く、他の項目は有意差がないという結果が得られた。

また、独話データにおいて、継続型の「ガ」、終了型の「けれども」が一番使用されるのに対し、継続型と終了型の「けれど」が一番使用されていないことがわかる。石黒 (2014) は、人文科学系の 4 本の講義をデータとし、接続助詞「が」「けれども」と「その変異形 (ガ・ケド類とする)」の使用実態を考察し、「講義におけるガ・ケド類は 26 秒に 1 回程度出現している」と述べているが、「けど」類のバリエーションについて言及していない。本章で同じ独話である CSJ を考察することにより、「けど」類において「けれども」が一番使用されることが言えるであろう。

また、表 6-2 表 6-3 で示しているように、二種類の講演を詳しく見ると、継続型と終了型の「けど」類は、いずれも模擬講演データでよりよく使用されることがわかる。学会講演の資料における「けど」/「けれど」で終わる「言いさし」は、一文も使用されていない。

「けど」類は、「けれども」、「けれど」、「けども」、「けど」の順により、丁寧さが薄くなっていく (田頭 2013) ため、今回の考察結果は、「けど」類の丁寧さと関連していると考えられる。小磯 (2008:127) は、「学会系独話では明示

的文末表現なしに韻律的区切りのみを置くような発話」という話し方は「学会発表のような改まり度の高い場における発話スタイルの1つの特徴と言えるかもしれない」と述べ、「明日はお休みなんですけど…」のように明示的な文末表現を置かずに発話が終わった場合、何か含みがあるように感じられることもあるため、客観的説明という学会発表の場ではあまり好まれないことを指摘している。本節の考察結果は、小磯（2008:127）の指摘と一致している。

表 6-2 学会講演データの内訳⁹

「けど」類	継続型	終了型	全体
ガ	619	31	650
ケド	20	0	20
ケドモ	75	1	76
ケレド	9	0	9
ケレドモ	276	14	290
全体	999	46	1045

表 6-3 模擬講演データの内訳¹⁰

「けど」類	継続型	終了型	全体
ガ	350	35	385
ケド	222	42**	264
ケドモ	228	21	249
ケレド	25	5	30
ケレドモ	556	57	613
全体	1381	160	1541

CSJにおいて、学会系の独話は、「発話内容が学術的、客観的な物であり、聞き手も多く、相対的に発話の場の改まり度が高い傾向にある」のに対し、模擬系の独話は、「発話内容が日常的、個人的な物である同時に、聞き手も2~4名程度の同年代ないし年下ということもあり、相対的に改まり度の低いくだけた発話となっている」（小磯 2008:102）ため、「言いさし」の使用は、発話の改まり度に関わることが検証されるとともに、「けれども」は「が」より改まったスタイルの発話に多く見られ、談話中において改まった度が高い表現であることも確認された。

一方、対話データにおいて、「継続型の『けど』類」が147例、「終了型の『けど』類」が64例得られ、発話中に現れる場合がより多いことがわかる（表6-4）。

⁹ Fisher 検定の結果、有意ではなかった ($p>.05$)。

¹⁰ カイ二乗検定の結果、5%水準で有意であった ($\chi^2(4)=12.420$ $p<.05$)。

表 6-4 対話データの内訳

「けど」類	継続型	終了型	全体
ガ	28**	3	31
ケド	98	53**	151
ケドモ	9	5	14
ケレド	1	2	3
ケレドモ	11	1	12
全体	147	64	211

カイ二乗検定の結果、5%水準で有意であった ($\chi^2(4)=12.697, p<.05$)。残差分析の結果、独話資料と同じく、発話中の「が」と発話末の「けど」が有意に多く、他の項目は有意差がないという結果が得られた。

対話データには、「学会系の対話」と「模擬系の対話」が含まれるが、「学会系の対話」は「専門性の高い内容であるため、多くの場合、質問とその応答の連鎖といった一般的インタビューの形式に近いもの」（小磯 2008:102）である一方、模擬系の対話は、「話題が日常的なものでありインタビュアーにとっても身近な内容であることから、相対的に雑談に近いものとなっている」（小磯 2008:102）が、いずれも「けど」で終わる「言いさし」が圧倒的に使用されることがわかる。

「けど」類の「言いさしマーカー」の中、「けど」の改まり度が一番低いことがわかる。

6.6.2 発話の階層構造 Break Index (BI) の分布

CSJ の独話データを調査した結果を表 6-5、対話データを調査した結果を表 6-6 にまとめる。予想した通り、終了型の「けど」類発話においては、アクセント句境界が観察されず、すべてイントネーション句境界であることがわかる。また、対象データ全体を見ると、アクセント句境界の割合が低く、イントネーション句境界と異なり、すべて継続型の「けど」類に属している。何故なら、アクセント句境界の場合は、まだダウンステップが起こっているところを意味し、韻律的にかなり途中であり、発話が更に継続していることが示されるため、継続型の「けど」類により多く現れると裏付けられる。

表 6-5 独話データにおける発話の階層構造 Break Index (BI) の分布 (数は件数) ¹¹

BI	継続型	終了型	全体
アクセント句境界(2)	77	0	77
イントネーション句境界(3)	2303	206	2509

¹¹ カイ二乗検定の結果、 $\chi^2(1)=5.795, p<.05$ で有意であった。残差分析の結果、継続型のアクセント句境界 (2)、終了型のイントネーション句境界 (3) は有意に多かった。

全体	2380	206	2586
----	------	-----	------

表 6-6 対話データにおける発話の階層構造 Break Index (BI) の分布 (数は件数) ¹²

BI	継続型	終了型	全体
アクセント句境界(2)	8	0	8
イントネーション句境界(3)	139	64	203
全体	147	64	211

6.6.3 句末音調の割合の分布

表 6-7 に独話データにおける 2 種類の「けど」類節の音調を示す。上昇下降上昇調 (HLH%) 及び低ピッチ区間を伴う上昇調 (LH%) は、それぞれ 3 件、7 件と件数が極めて少ないため、対象外とする。

表 6-7 から、終了型の「けど」類と継続型の「けど」類を比較すると、下降調 (L%) の割合は、終了型の「けど」類が大きく、上昇調 (H%) と上昇下降調 (HL%) の割合は、継続型の「けど」類が大きいことがわかる。

表 6-7 独話データにおける句末音調別の例数 (数は件数) ¹³

句末音調	継続型	終了型	全体
上昇調 (H%)	1123	90	1213
上昇下降調 (HL%)	971	0	971
下降調 (L%)	281	111	392
全体	2375	201	2576

一方、表 6-8 に対話データにおける 2 種類の「けど」類節の音調を示す。上昇下降上昇調 (HLH%) 及び低ピッチ区間を伴う上昇調 (LH%) は、それぞれ 1 件、2 件と件数が極めて少ないため、対象外とする。

表 6-8 からわかるように、対話の場合も終了型の「けど」類と継続型の「けど」類を比較すると、下降調 (L%) の割合は、終了型の「けど」類が大きく、上昇調 (H%) と上昇下降調 (HL%) の割合は、継続型の「けど」類が大きい。

表 6-8 対話データにおける句末音調別の例数 (数は件数)

fbt	継続型	終了型	全体
H%	84	39	123
HL%	53**	5	58
L%	8	19**	27

¹² Fisher 検定の結果、 $p>.05$ で有意ではなかった。

¹³ Fisher 検定の結果、 $p<.05$ で有意であった。

全体	145	63	208
----	-----	----	-----

カイ二乗検定の結果、1%水準で有意であった ($\chi^2(4)=36.914, p<.01$)。残差分析の結果、継続型の「けど」類発話の上昇下降調 (HL%) と終了型の「けど」類発話の下降調 (L%) が有意に多く、他の音調は有意差がないという結果が得られた。

今回の分析結果は、郡 (1996) の「上昇調や上昇下降調は、意味的・統語的に大きな切れ目で出現しやすい」という指摘と一致している。

さらに、上村 (1989) は、文末の末尾上げについて「高圧的に、あるいは叱責的に自分の言明 (断言、命令、質問など) を、相手に強くおしつける」とする一方で、文節の末尾上げについて文の途中の構文論的な切れ目に目印を与え、非完結性を示すことを主たる機能とするイントネーションと述べている。

その上、小磯 (2015) では、「複合境界音調 (Boundary Pitch Movements, BPM)」 (小磯 2015:62) と呼ばれた上昇調や上昇下降調のような上昇成分を伴う句末境界音調は、置かれることによって発話の意味的・統語的な区切りが明らかになる。また、そこで発話が中断するのではなく、関連した発話が継続することを示す役割を担っていると指摘されている。

そこで、今回のデータを観察してみると、上昇調 (H%) と上昇下降調 (HL%) の場合は次につながる確率が高いため、「けど」類は接続助詞としての機能を果たし、後の主節に相当する発話を導いていると推測できるだろう。

6.6.4 発話末の下降 (final lowering)

今回の分析において、独話および対話における2種類の「けど」類発話の下降しきったところの音の高さを比較するため、2種類の「けど」類の下降音調 (L%) の最小 F0 値 (下降調 L% の下降しきった点、及び上昇調 H% と上昇下降調 HL% の上昇成分の起点、) を抽出し、話者ごとに正規化して標準得点の Z スコアで求めた。

その結果は、図 6-4 および図 6-5 にまとめる。終了型の「けど」類発話は発話の終了を表す急激な F0 の下降を伴う可能性があるため、継続型の「けど」類発話に比べ、最小 F0 値がより低いと予想されるが、考察結果を t 検定で分析した結果、独話の場合では、 $p < 2.2e-16$ で有意差あったが、対話の場合では $p=0.13$ 有意差はなかった。

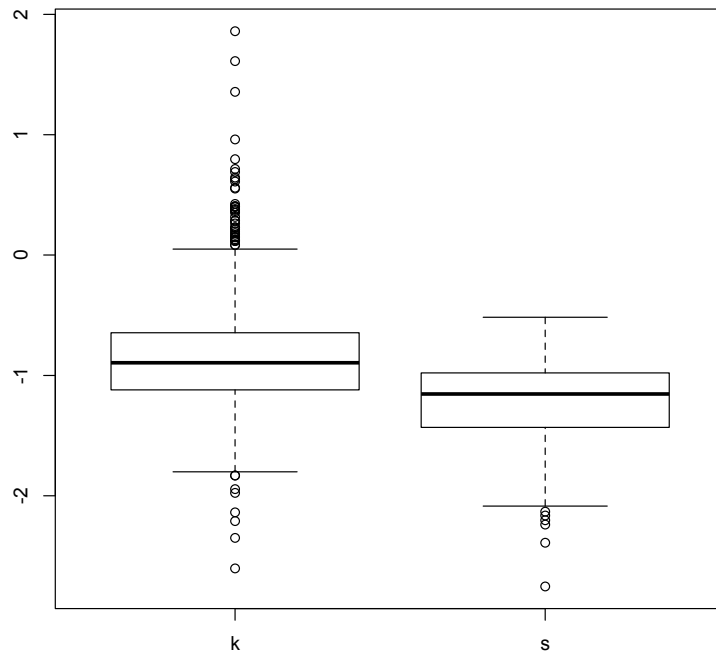


図 6-4 独話データにおける継続型の「けど」類発話 (k) と終了型の「けど」類発話 (s) における発話末の F0 (Z スコア) の基本統計値 (縦 F0zSubj : F0 の Z スコア)
 $(t(2584)= 12.70, p < 2.2e-16)$

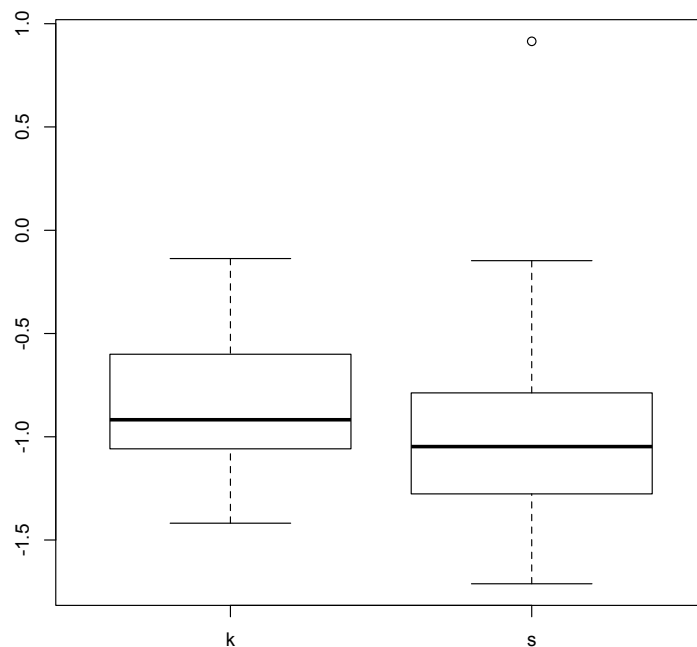


図 6-5 対話データにおける継続型の「けど」類発話 (k) と終了型の「けど」類発話 (s) における発話末の F0 (Z スコア) の基本統計値 (縦 F0zSubj : F0 の Z スコア)
 $(t(45)= 1.54, p > .05)$

図 6-4 および図 6-5 の具体的な分布から見ると、終了型の「けど」類の F0 値は、継続型の「けど」類の F0 値に比べ、低く現れることがわかる。小磯 (2010) は、「千葉大学 3 人会話データ」を用いて会話の韻律情報を分析した結果、長い発話単位の途中より、末尾の方は F0 平均値が低いという共通した傾向があると指摘している。また、用言終止型や接続助詞については、交替型と比べ、継続型発話は、相対的に F0 平均値が高い傾向を持つとしている。今回の考察結果から、話者交替型の発話が含まれている終了型の「けど」類発話は、継続型の「けど」類発話より低く発音される傾向が検証される。

さらに、図 6-4 および図 6-5 の終了型の「けど」類の発話末の F0 最小値を観察すると、**final lowering** と見られる局部で急激な下降が生じているのに対し、継続型の「けど」類発話末においては、このような現象が見られないことがわかる。小磯・石本 (2012) は発話末の絶対境界と発話中の強境界とにおける最小 F0 値比較したことにより、**final lowering** の存在を示唆していることから、今回 t 検定で独話の場合では有意差あったものの、対話の場合では有意差はなかったという結果は、独話の場合では **final lowering** が影響していると結論づけることができ、独話音声の「強境界にあたる『～けれども』『～が』などの接続表現に **final lowering** などが生じて発話の終わりとなることもある」(石本・小磯 2012:240) という指摘と一致している。

その上、今回の考察により、それにしても、実際の図 6-5 の F0 値の Z スコアの分布を観察すると、終了型の「けど」類発話の F0 値の Z スコアは、継続型よりやや低いことがわかる。それは、局所的な下降が伴う発話が緩やかに分布すると言えるだろう。

そこで、前川 (2013) は、スタイルの異なる対話においては「**final lowering**」が生じない可能性も十分にあると指摘しているが、今回の考察結果により、対話における終了型の「けど」類発話には、存在する傾向があると結論付けることができるだろう。

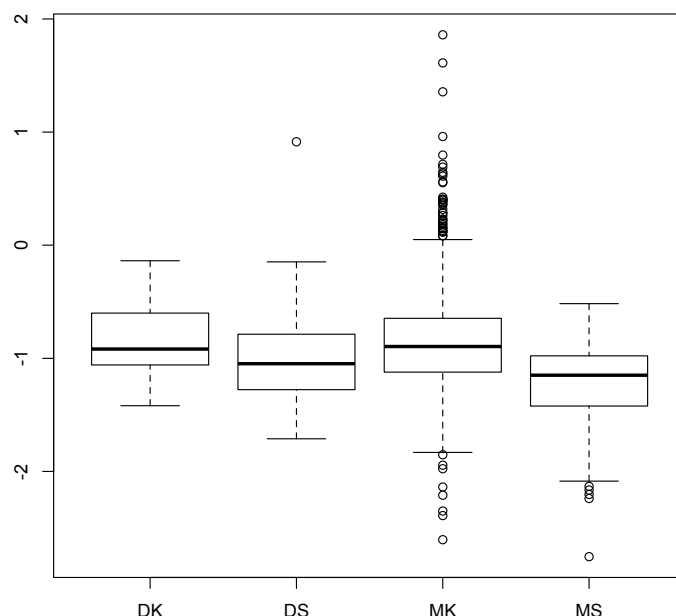


図 6-6 対話データにおける継続型の「けど」類発話 (DK) と終了型の「けど」類発話 (DS)、および独話データにおける継続型の「けど」類発話 (MK) と終了型の「けど」類発話 (MS) の発話末の F0 (Z スコア) の基本統計値 (縦 F0zSubj : F0 の Z スコア)

四種類の「けど」類の発話末の F0 (Z スコア) の基本統計値を図 6-6 にまとめる。発話末の F0 (Z スコア) に与える発話スタイルと「けど」類のタイプの影響を分析するために、二要因分散分析を行った。その結果、発話スタイルと「けど」類のタイプの影響が有意であった ($F(1,2688)=0.626, p<.05$)。Umeda (1982) では、F0 下降がスタイルに依存しており、「final lowering」は朗読音声に限られる可能性がある指摘されているが、原稿付きの朗読音声と違い、話し言葉における自発音声、特に会話や対話の場合において、「話し手は発話内容や具体的な言語形式を考えながら漸次的に発話生成」(小磯 2008: 96)を行い、さらに「聞き手の反応を見ながら発話プランを適意修正することもあるだろう。」(小磯 2008: 96)。それにより、朗読音声においては、発話の終了をより自由にコントロールすることができるのに対し、会話及び対話においては、発話の終了や継続に関する認知的、知覚的な要素は、朗読音声ほど働いていないということも存在するが、今回の考察結果から、自発音声において、「言いさし」の「けど」類に final lowering が観察されることがわかる。それは、「言いさし」の「けど」類の重要な音韻的な特徴となり、完全文と同じ機能を果たす裏付けとなるといえる。

6.6.5 句末の長さ

表 6-9 から、独話の場合、「けど」類の末尾において、「ネ」は下降調および上昇調の発話で観察され、「ガ」と「ド・モ」は下降調、上昇下降調および上昇調の三種類の音調ですべて出現することがわかる。一方、表 6-10 から、対話の場

合、「けど」類の末尾において、「ネ」は上昇調しか現れず、また、「ド・モ」が一番よく出現することがわかる。なお、独話の場合の下降調の「ネ」、および対話の「ガ」の用例が極めて少ないため、分析の対象から外す。

表 6-9 独話データにおける「けど」類のそれぞれの音調に現れる最終モーラ
(数は件数)

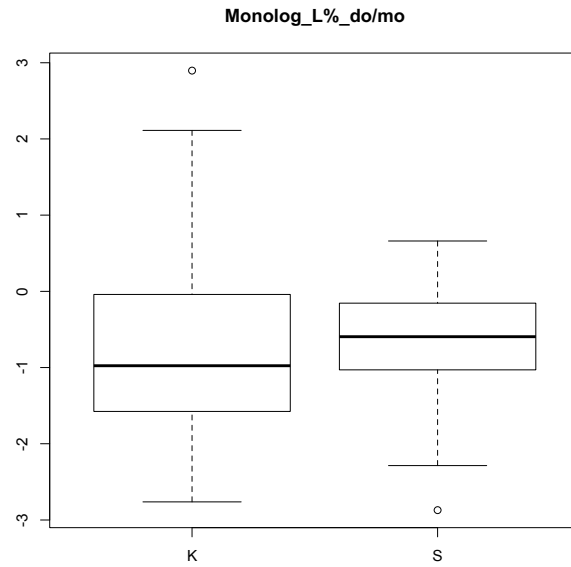
	タイプ	「ネ」	「ガ」	「ド・モ」
下降調 (L%)	終了型	1	34	76
	継続型	1	91	189
上昇下降調 (HL%)	終了型	0	0	0
	継続型	5	336	630
上昇調 (H%)	終了型	11	29	50
	継続型	28	541	554

表 6-10 対話データにおける「けど」類のそれぞれの音調に現れる最終モーラ
(数は件数)

	タイプ	「ネ」	「ガ」	「ド・モ」
下降調 (L%)	終了型	0	0	7
	継続型	0	0	6
上昇下降調 (HL%)	終了型	0	0	4
	継続型	0	1	26
上昇調 (H%)	終了型	7	1	13
	継続型	8	10	21

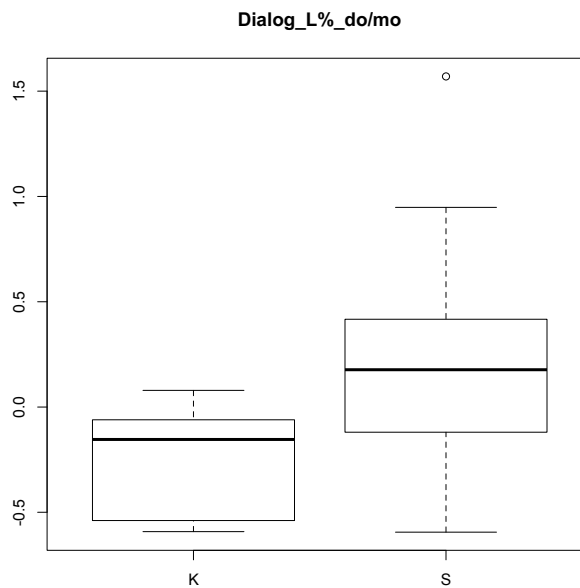
さらに、分析において性差・個人差の影響を小さくするために、最終モーラ長は話者ごとの平均モーラ長・標準偏差によって Z スコアへ変換して比較する。以下、それぞれの句末音調における最終モーラ長の考察を行う。

I. 下降調 (L%) の場合



$t(200) = -1.56, p > .05$

図 6-7 独話における下降調 (L%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」の最終モーラ長 (Zスコア) の基本統計値
(縦:最終モーラ長の Zスコア)



$t(21) = -2.28, p < .05$

図 6-8 対話における下降調 (L%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」の最終モーラ長 (Zスコア) の基本統計値
(縦:最終モーラ長の Zスコア)

図 6-7、図 6-8 に示すように、下降調 (L%) の場合、対話データにおいて、t 検定の結果は有意であった ($t(21) = -2.28, p < .05$)。そこで、予想した通り、下降調 (L%) の場合、継続型に比べ、終了型の「けど」類の最終モーラの持続時間がより長い傾向があるといえる。その理由は、文末などの強い統語境界における統語境界末での音の延伸現象である (郡 1996) 語末の長音化 (final lengthening) の影響が存在するのではないかと考えられる。

しかし、一方、独話データにおいて、t 検定の結果は有意ではなかった ($t(200) = -1.56, p > .05$)。つまり、継続型と終了型とは、最終モーラ長に差がほぼないと言える。その理由は、講演という話し方の特徴に関わると考えられる。講演という独話音声は、聞き手が眼前に存在するにもかかわらず、話者交替が存在しないため、1 人の話者は連綿と語り続けると、内容の掴めない可能性が高い。そこで、「～けど」類を使用し、ポーズを多くに置いて発話や文節の境界を示して必要があるとされている。その時ポーズ直前での母音延伸が生じるかもしれない。

また、講演をしている間に、発話者は内容を考えながら発話しているため、最終モーラが引き延ばされることで、「実時間的に感情や認識を持続的に経験するという意味になることもあるが、模索などの情報処理プロセスが実時間的に進行中である」 (森山 2004:248) ことを表し、談話標識としての機能を果たすと考えられる。

それに対し、図 6-9 に示すように、「が」の最終モーラ長 (Z スコア) に有意差が見られた ($t(93) = -2.71, p < .05$)。

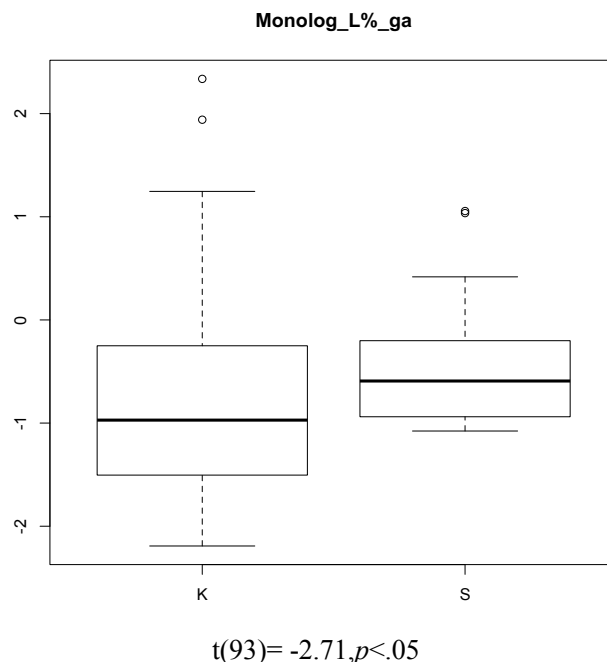


図 6-9 独話における下降調 (L%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「が」の最持続時間 (Z スコア) の基本統計値 (縦: 持続時間の Z スコア)

独話データの「ガ」は、対話データの「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」と同じように、下降調 (L%) の場合、継続型に比べ、終了型の「けど」類の最終モーラの持続時間がより長い傾向がある。それは、文末などの強い統語境界における統語境界末での音の延伸現象である (郡 1996) 語末の長音化 (final lengthening) の影響が存在するのではないかと考えられる。下降調が多く生じる終了型の「けど」類は、最終モーラが発話内部においてほとんど延伸せず、発話末で延伸して発話の完結を示す役割を果たしている。

II. 上昇下降調 (HL%) の場合

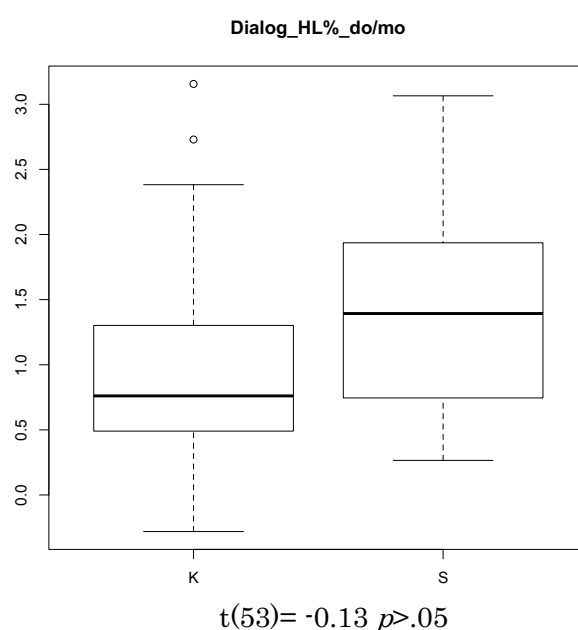
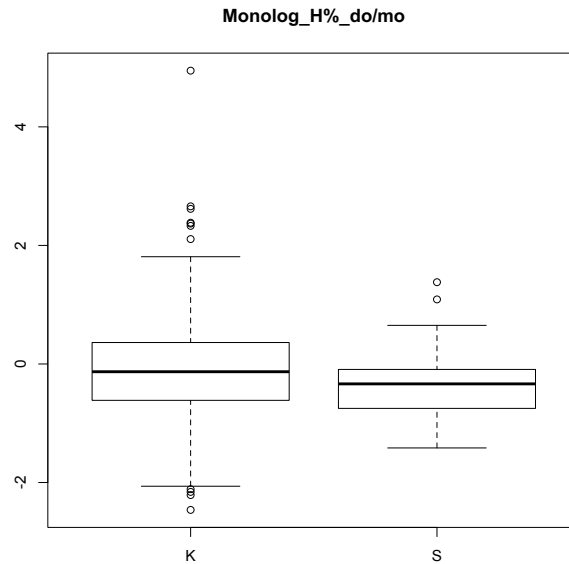


図 6-10 独話における上昇下降調 (HL%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」の最終モーラ長 (Z スコア) の基本統計値 (縦:最終モーラ長の Z スコア)

図 6-10 に示すように、上昇下降調 (HL%) の場合は、t 検定の結果、有意差はなかった ($t(53) = -0.13$ $p > .05$)。小磯 (2014) は、発話者が聞き手に対して、「発話が継続することを強く伝える」 (小磯 2014: 33) ために、上昇下降調を長く発音して目立たせるように発話を進めることであるとしている。そこで、特に今回の考察で、継続型の「けど」類における外れ値が多いことから、上昇下降調 (HL%) の場合、結果的にモーラが引き延ばされて継続音調となるのではないかと考えられる。郡 (1996) は、短めのポーズの直前で文節末を伸ばすことは、そのポーズが文の切れ目ではないことを示す印になっており、実際に文法・語彙的な情報から文末でないことはだいたいわかるとしても、文節末の母音延伸はそのことを明示する役割をしていると指摘している。それも関連していると考えられる。

Ⅲ. 上昇調 (H%) の場合

図 6-11、図 6-12 に上昇調 (H%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」の最終モーラ長 (Z スコア) を示す。t 検定の結果、いずれも有意であった。(t(66)= 2.58 $p<.05$; t(26)= -2.46 $p<.05$)



t(66)= 2.58 $p<.05$

図 6-11 独話における上昇調 (H%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」の最終モーラ長 (Z スコア) の基本統計値 (縦: 最終モーラ長の Z スコア)

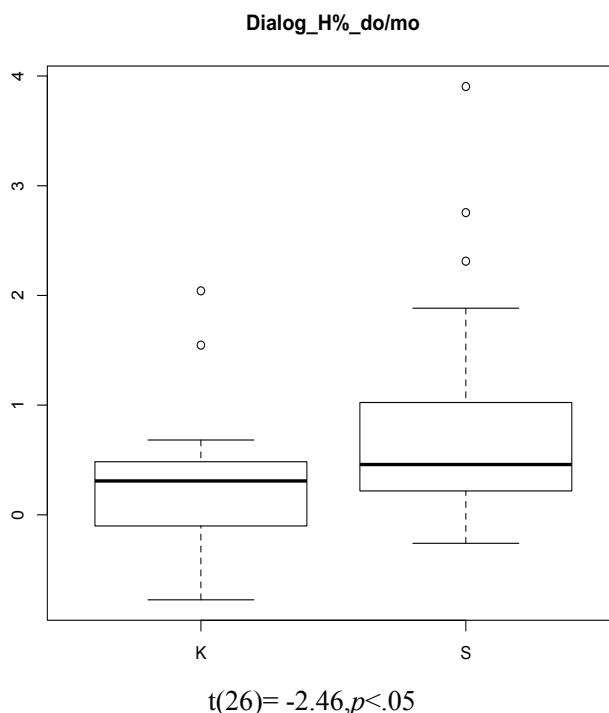


図 6-12 対話における上昇調 (H%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」の最終モーラ長 (Z スコア) の基本統計値
(縦: 最終モーラ長の Z スコア)

図 6-11、図 6-12 から、予想と違い、独話の場合では、継続型 (S) の「けど」・「けれども」・「けれど」・「けども」の最終モーラ長はより長いのに対し、対話の場合では、終了型 (K) の最終モーラ長はより長いことがわかる。

なぜそのような相違が生じるのだろうか。「独話と対話では、話し手と聞き手との間のインタラクションの程度やその性質に差があることから、必然的に話し手の発話生成のストラテジーも異なる可能性もある」(小磯 2008:128) で指摘されているように、まず、独話の場合、今回の上昇調のデータは、村中 (1995) で取り上げられた「講義調」と同じレジスターであると考えられる。このような言い方における句末の上昇は、「句ごとに相手が聞いていることを確認しながら話すもの」であり、「相手の反応を要求しているが、発話を要求しているわけではない」(村中 1995:56)。分かりやすさが求められているため、節末の最終モーラの引き伸ばしも生じると考えられる。

さらに、森山 (2004) で指摘されているように、「おいしかったけれど…」のような文の内部において、「ど」の部分を引き伸ばし、継続部分を考えるような場合もありうるため、学会講演や模擬講演の場合、発表者が言葉探しをしている際に使用される。

一方、対話の場合、村中 (1995) で「末尾の母音が伸びた場合は、他のニュアンスが加わる。すなわち、判断を保留するような、途中で言いさしたような感じとなる。」と指摘されているように、話者交替が生じて発話参加者のインターア

クッションが求められているため、相手に対する待遇上な配慮も発話に現れている。

対話における上昇調と待遇面との関係について、森山（1989）があげられる。森山（1989）は、「上昇調は聞き手の反応を伺う意味」と述べ、反応伺いの上昇調の方が柔らかく丁寧な待遇になると指摘した上、上昇する方が柔らかく丁寧だというのは、根本的には上昇調が聞き手の反応を伺うということが自分を強く押し出さないことにつながると裏付けている。そこで、対話音声では文末の「けど」類に上昇調の使用により、相手の反応を伺ってインターアクションを促すという機能を果たし、結果的に最終モーラが引き伸ばされると考えられる。

それに対し、図 6-13、図 6-14 に上昇調（H%）の継続型（K）と終了型（S）の「けど」類と共起する終助詞「ネ」のモーラ長（Zスコア）を示す。予想と違い、t検定の結果、いずれも有意ではなかった（ $t(37)=0.095$ $p>.05$; $t(18)=-1.3$ $p>.05$ ）。

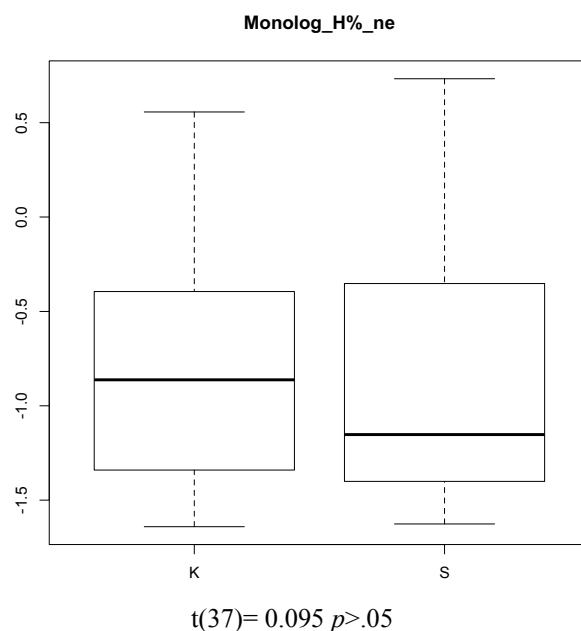
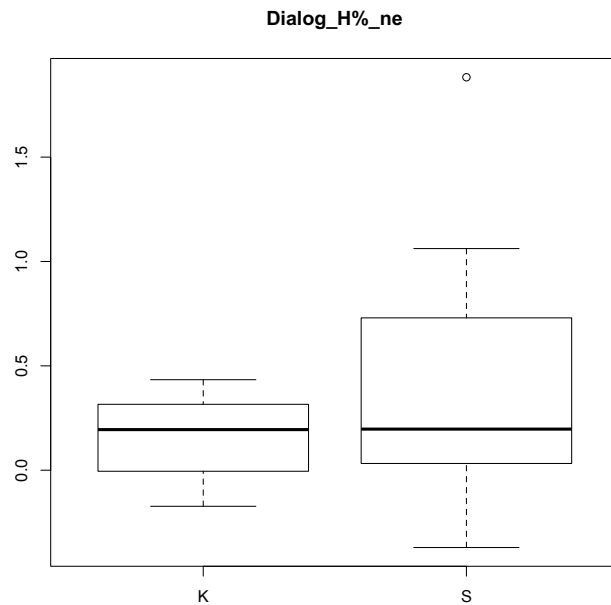


図 6-13 独話における上昇調（H%）の継続型（K）と終了型（S）の「けど」類と共起する終助詞「ネ」のモーラ長（Zスコア）の基本統計値
（縦：最終モーラ長の Zスコア）



$t(18) = -1.3 \quad p > .05$

図 6-14 独話における上昇調 (H%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「けど」類と共起する終助詞「ネ」のモーラ長 (Zスコア) の基本統計値
(縦: 最終モーラ長の Zスコア)

上昇調 (H%) の場合、まず、終助詞「ネ」が現れる際に、終了型が継続型より持続時間が長いと予想されたが、図 6-13、図 6-14 から、終了型の「けど」類に現れる終助詞「ネ」の持続時間の基本統計値は、外れ値が多いことがわかる。一方、継続型の場合は、集中的に分布していることがわかる。しかし、データを t 検定で分析した結果、有意差はなかった ($t(37) = 0.095 \quad p > .05$; $t(18) = -1.3 \quad p > .05$)。

なぜ、継続型の「けど」類と終了型の「けど」類の終助詞「ネ」の持続時間に差がないのだろうか。「けど」類のアクセントから理由を探ってみる。「けど」類は、一つのアクセント句として基本的に「け」から「ど」或いは「モ」にかけてアクセントを持つが、単独で使用されることは少ないため、動詞や形容詞、名詞に後続して使用されることが多く、前接要素に続いて低く下がる下降調で出現したことが多い (秋永 2002)。さらに、上昇調の終助詞「ネ」が後続することにより、「けど」類のアクセントは影響され、持続時間が引き伸ばされるのではないかと考えられる。また、ポーズがあっても自分の発言はまだ続くということを相手に主張したいため、アクセント句末の「ネ」を長呼することも推測できる。また今度の課題にして詳しく分析していきたい。

最後に、対話には観察されていないが、独話に現れる継続型 (K) と終了型 (S) 「が」の持続時間を比較する。図 6-15 に示すように、予想とは違い、両者はほぼ同じような分布しており、継続型 (K) の方は外れ値が多いことがわかる。しかし、データを t 検定で分析した結果、有意差はなかった ($t(568) = 0.17, p > .05$)。

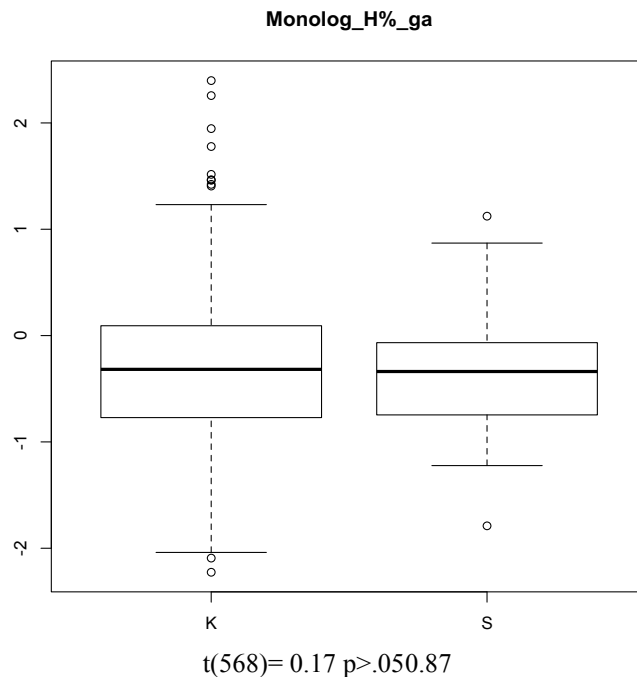


図 6-15 独話における上昇調 (H%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「が」の持続時間 (Z スコア) の基本統計値 (縦: 持続時間の Z スコア)

上昇調 (H%) の継続型 (K) と終了型 (S) の「が」の持続時間は差がないということも、「講義調」(村中 1995) の特徴と関連すると考えられる。「が」上昇調で使用されると、「聞いているというしるし(うなずき、興味を感じているといった表情、目線の合致など)を求める機能、つまり軽い注目要求の機能」、および「文の中の切れ目を示して、全体の構造を分かりやすくするという役目」を持っており、いずれも、まとまりのあるかなり長いほぼ一方的な談話であることから、分かりやすさが特に求められるからである(村中 1995:56)。そういう機能を果たす際に、結果的にモーラが引き伸ばされ、持続時間が長くなる可能性がある。

そこで、以上をまとめると、独話と対話における 2 種類の最終モーラ長の全体的な分布を観察する結果、対話の場合、終助詞「ネ」が付かない下降調 (L%) 及び上昇調 (H%) の発話において、「言いさし」機能を果たす終了型の「けど」類発話は、接続助詞の機能を果たす継続型の「けど」類に比べてより長く、外れ値が多く存在する傾向が見られるが、それに対し、独話の場合、下降調 (L%) の発話において対話の場合と同じであるが、上昇調 (H%) の発話において、対話と違い、接続助詞機能を果たす継続型の「けど」類発話は、終了型の「けど」類に比べてより長く、最終モーラ長に外れ値が多く存在することがわかる。

6.7 まとめおよび日本語教育への示唆

「会話における韻律情報の役割を幅広い視点で明らかにするための一つの方法は、会話だけでなく独話も含めて調査し、両者の類似点・相違点などを明らかにした上で総合的に検討することである。」(小磯 2013) で指摘されたように、本章では、学習者に二種類の「けど」類の聞き分けに関する規則および「言いさし」の「けど」類の音韻的な特徴を提示するために、CSJ を使用して独話データと対話データを比較しつつ、その形式の分布、談話内の機能及び韻律情報について考察を行った。

その結果、(1) 話し言葉では、ある種のイントネーションが加わることによって文末に相当する切れ目が生じることがある(小磯 2008) ため、継続型の「けど」類発話は上昇下降調(HL%)、終了型の「けど」類発話は下降調(L%)を伴うことが多いこと、(2) 終了型の「けど」類の発話末に final lowering に相当する著しい下降が見られ、発話の終了を意味していること、(3) 対話の場合、終助詞「ネ」が付かない下降調(L%)及び上昇調(H%)の発話において、「言いさし」機能を果たす終了型の「けど」類発話は、接続助詞の機能を果たす継続型の「けど」類に比べてより長く、外れ値が多く存在する傾向が見られるが、それに対し、独話の場合、下降調(L%)の発話において対話の場合と同じであるが、上昇調(H%)の発話において、対話と違い、接続助詞機能を果たす継続型の「けど」類発話は、終了型の「けど」類に比べてより長く、最終モーラ長に外れ値が多く存在することがわかった。更に分析を加え、平均モーラ長やポーズなどの要素について考察していきたい。

以上のような要素は、発話の継続・終了を予測するためのリソースとして、会話参加者に利用されている可能性は十分にあるといえよう。

文末における「けど」の適切な使用は確かに発話を和らげるなど、円滑に会話を進めさせる上で重要な働きを果たしている。しかし使用状況と場面によっては、相手に押しの強さを感じさせたり、相手を問いただすようなニュアンスが含まれ、「かなりきつい調子を帯びた発言になる」(佐藤 1994:24) 可能性が生じる。したがって、日本語教育の現場では、言いさし表現を導入する場合、それぞれの接続助詞で終わる言いさし表現の機能などを十分に考慮して音声面の指導も配慮して指導しなければならない。

6.8 本章のまとめ

また、近年、『日本語話し言葉コーパス』に代表される音声資料が含まれるコーパスの作成に伴い、話し言葉を対象とした音声言語処理の研究が進展しているので、日本語教育文法のための「けど」類の「言いさし」の音声的な特徴に関する研究及び記述は、更客観的に分析できるようになってきた。庵(2000)で「教育文法にとって重要なことは、それを用いて学習者が文を正しく産出できるよう

に、規則が操作的に記述されていることである」が指摘しているように、「けど」類の「言いさし」は、テキスト上だけでなく音声的な特徴も明らかにすることにより、学習者の習得についての知覚実験及び合成言語の作成に貢献でき、学習者がより自然な会話文の産出につながるのではないかと考えられる。

本章の考察により、句末音調、最終モーラ長などの要因が「けど」類の判別に関与するという結果が得られた。

次章から、学習者の習得状況を考察する。

第三部

「言いさし」の知覚処理状況に関する実験調査

第三部では、調査・実験を実施することにより、学習者における「言いさし」の知覚処理状況を日本語母語話者に比べながら考察する。

第7章

中国人学習者における

「言いさし」の視覚情報処理状況に関する調査

「話者は文法的に正しい「文」を作る能力はあっても、実際の会話の場面においては、話者および聞き手の記憶の限度などの認知的制限やコミュニケーションに関わる様々な要因により」（岩崎・大野 1999:138）、「正しい文を作る」能力がかなり影響を受ける。文法的に正しい「文」しかインプットされない中国人学習者の場合、実際の会話場面における正しい「文」からの逸脱を、きちんと理解しているのだろうか。

そこで、本章では、学習者における「言いさし」の「けど」類の文脈理解状況を日本語母語話者に比べながら解明していく。構成は以下の通りである。まず、1節では問題のありかを提示する。2節では先行研究を紹介する。3節研究課題、4節では調査の仮説、5節では調査の基本情報を述べる。6節では調査結果の分析を述べる。7節では考察を述べ、8節ではまとめおよび日本語教育への示唆を論じる。最後に9節で、本章のまとめをする。

7.1 導入

日本語母語話者の自然談話では、発話末の表現に言い切りの形をとらない場合が多く、最多の型は「～なんですけども」などの「言いさし」形で、発話末を伸ばすような発話の仕方であった。そのような言い切らない形で発話を終える「言いさし」は、柏崎（1993）で日本語の談話の特徴と見られ、自然な談話の一要素として位置付けられている。

「言いさし」は、日本語母語話者なら、使用の効果を意識することなく、だれでも状況に応じて使うことができるが、日本語学習者は、状況に応じて的確に使うことや、「言いさし」に込められた相手の意図を理解することに困難を覚えることがある（兪 2015）。

7.2 先行研究

これまで「言いさし」について、様々な観点から研究されてきた。しかし、第二言語習得の視点から、日本語の学習者に関わる自然会話をデータとして「言いさし」に特化して分析した研究は、管見の限り、ほとんど見当たらない。それに近い研究は、峯（1995）、Taguchi（2014）、伊藤（2016）があげられる。

まず、峯（1995）は、25名の日本語学習者を対象にし、8ヶ月間にわたり文末

表現の習得過程を観察した結果、「けど」類のような接続助詞で終わる表現は、習得の際に、汎用及び誤用が尙え、8ヶ月目にかかなり増えている傾向が見られたと指摘している。

また、Taguchi (2014) は、宇佐美 (1995) に準じ「中途終了型発話」に焦点を当て、日本国内 JSL の日本語学習者 (留学生) 18 名を対象とし、留学開始時と留学後 12 週間経過した時点での二度渡り、学習者同士のペアで行われた自由会話を録音して文字化し、その中に現れる「中途終了型発話」の量及び質を考察した。その結果、18 名 9 組の会話に見られた中途終了型発話の総数の全発話数に占める割合を開始時と 12 週間後とで比べ、5.3%から 16.7%へ有意に増加したことがわかった。しかし、どういう「中途終了型発話」が増加したのかについて詳しく述べられていない。

最後に、伊藤 (2016) は、日本語の「言いさし」の習得のプロセス解明するために、OPI で中級、上級レベルに判定されたメキシコ人日本語学習者各レベル 2 名、計 4 名と日本語母語話者 2 名を研究対象とし、各自同じ日本語母語話者を会話相手とスカイプで約 20 分の自由会話をさせ、そのデータを文字化して使用された「言いさし」を考察した。その結果、中級話者の発話では、「言いさし」があまり使用されず、上級に上がるに従い、使用されることが観察された。さらに、「けど」類の「言いさし」は話者の話し癖と思われ、終助詞的に過剰使用が行われたことを指摘している。

7.3 研究課題

「現実の話し言葉において、一文を文法的に完成させないまま途切れる場合もあれば、一つの文を言いかけてやめて、別の文を始めようというような場合もある。」(郡 1996) ため、母語話者は、相手の発話を予測・理解・処理して、連続音声から音韻や音節を認識し、単語または形態素を切り出し、何万もの語から構成される心的辞書を引いて語彙とその文法的機能を求め、文構造を解析し、「投射」や「係り受け未定文節数」を推定することをしなければならない(市川 2011) が、異なるコンテキストや言語構造で生まれ育った中国人日本語学習者の場合も、母語話者と同じような理解メカニズムを有することが求められているが、なかなか意味理解に問題を抱えており、コミュニケーションに支障も生じている。学習者は、どのように相手の発話を意味理解をしているのだろうか。

そのような問題意識により、本章は、「言いさし」の「けど」類に焦点を当て、中国人学習者を研究対象とし、日常会話で遭遇する各場面における「言いさし」と完全文をどのように意味的・統語的・形態的な情報を手掛かりとして区別しているのか。および「言いさし」の「けど」類についてどのように理解しているか、という問題を解明したい。

そこで、筆者は第 4 章・第 5 章における考察結果を踏まえ、日本語教科書の会話の一部、ドラマの台詞及び小説のシナリオなどを参考にしてアンケートの質問を作成し、日本語母語話者と中国語母語とする学習者という 2 つの被験者グルー

プに提示して記述式の質問紙調査を行うことにした。具体的に、本章では、以下の研究課題を解明する。

- (1) 「言いさし」の「けど」類に対して、日本人母語話者と中国人学習者とはそれぞれどのように意味解析・意味理解を行っているか。
- (2) 二種類の「けど」類に対して、中国人日本語学習者はどのように区別しているか。日本語母語話者と何か相違点があるか。
- (3) 習熟度により、中国人学習者における理解のカテゴリーは異なるか。

7.4 調査の仮説

上述した 3 つの研究課題に基づいて、以下のように 3 つの実験仮説が立てられる。

(1) 第 3 章・第 4 章では、日本語および中国語の自然会話データを用いて二種類の「けど」類、特に「言いさし」の「けど」類の形態的・意味的・統語的な特徴を考察し、「言いさし」の「けど」類は「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という二つの発話機能を果たしていた。同じ文脈で使用された中国語の会話文を考察してみると、「けど」による「言い残し」の場合は、「けど」類の代わりに、接続表現を使用しない「省略型」及び「不过」や「但是」などのような逆接を表す接続表現を使用した用例が多く見られた。一方、「けど」類による「言い終わり」の場合は、「言いさし」のマーカーを除いて命題のみ述べる以外、語気助詞「啊/呢」を使用する例文も存在することが明らかになった。そこで、日本語母語話者は前後文脈を統合的に分析し言語化されていない情報も手掛かりとして理解しているのに対し、中国人学習者は「不过」や「但是」などにあたる逆接を表す接続表現として「けど」類をとらえ、逆接の意味として理解することが予想される。

(2) 現在の日本語教育現場において、学習者にとっては、命題だけの表現の習得よりも、文末、或いは発話末の表現を適切に使用することのほうが難しいと指摘され（池田 1995）、特に、日本語において述語が存在する文末、発話末は極めて重要な部分であるため、中国の日本語教育の現場では、文末まで明確に言うことを要求することが多い。最後まで言い切らなかったり、ポーズを入れたりすることで、「言語の適性が低い」「言語能力が不十分である」と言われる学習者も多く見られるため、多くの中国人日本語学習にとって文末の習得はかなり難しいといっても過言ではない。そのため、「接続助詞」の「けど」類より、「言いさし」のほうがさらに理解しにくく、二種類の「けど」類の判断基準が分からないことが予想される。

(3) 学習者の目標言語音に対する知覚様式には、母語ばかりでなく、目標言語の学習経験も影響を与え、目標言語の学習が深まるにつれ、目標言語の音範疇が新たに構築され、知覚様式に変化をもたらす (Best and Tyler 2007) ため、言語学習には、習熟度と学習環境により影響を与えられることが多いと考えられている。そこで、「言いさし」の「けど」類に対しても習熟度が高いほど中国人学習者の理解度が高くなることが予想される。

7.5 調査の基本情報

7.5.1 調査方法

本調査では、「言いさし」の「けど」類の情報処理の特徴に関するアンケート、フォローアップ・インタビューの二つのタスクを実施した。中国人学習者と日本語母語話者の「言いさし」の「けど」類の理解状況を全体的に把握するための量的調査としてアンケート調査を実施するとともに、アンケートでは捉えきれない学習者の個別的な側面を補完するためにインタビュー調査も実施した。

アンケート調査は、調査方法は質問紙法を使用した。「言いさし」の「けど」を用いた文についてその意味を問い、日常会話において「言いさし」の「けど」類の発話機能を考えさせるものであった。実際の自然談話に近づけようとするならば、音声や映像で話しかけ文を提示したり、自由会話をさせて理解状況を観察すべきであるが、それらの調査方法を使用するとさらに状況が複雑になり、結果を一般化することが難しくなると考えられるので、ここでは不満足ながら、あえて記述式の質問紙によって調査を実施した。具体的な回答方法は次のようになる。

(鈴木さんは、王さんのお家で食事をしています。)

鈴木：このケーキ、王さんが作ったんですか。

王：ええ。料理の本に書いてあるとおりに作ったんですけど。

【 ※質問：王さんは、ここで何を言いたいですか。】

質問文は、「言いさし」の「けど」類の用法を問うものを中心に、ダミーも含んだ 15 問を用意した。本稿では、このうち、ダミーを除いた 12 の文について特徴的な部分を取り上げながら検討する。

一方、フォローアップ・インタビューは、アンケートの実施後に、調査協力者へのフィードバックを兼ねて実施した。インタビューでは、アンケートの確認に加え、なぜアンケートでこの回答をしたのかという理由と、「言いさし」の「けど」に対する意識、「言いさし」と接続助詞の相違に関する理解について質問した。

調査者は、調査開始から終了まで立ち会い、目的と手順について簡単に説明した後、「言いさし」の「けど」類のアンケートを実施した。その後、学習者に個別的にフォローアップ・インタビューを行った。調査全体に要した時間は、全体

で約一時間程度であった。なお、調査中の学習者には辞書や参考書の使用を禁止し、各調査協力者に関するデータは、すべて ID 番号を使用して処理された。

7.5.2 調査対象

調査は、中国江蘇省江南大学外国語学部の日本語学科に在学している中国人日本語学習者 80 名（日本語能力試験の N2 合格者の 40 名（下記 CHN2）、及び N1 級合格者の 40 名（下記 CHN1））の調査協力を得た。

また、調査協力者は、18 歳から 22 歳までの日本語学科に在籍する学部 2、3、4 年生であり、いずれも中国語を母語としている学習者である。さらに、大学で日本語を専攻しているまた過去に日本への旅行経験者、日本語講習・語学研修のため日本に滞在した学習者は、含まれていない。

日本語の学習状況という点、初級時に使用した日本語教科書は『新編日語（中国語タイトル）』（周平・陳小芬 2009 上海外語教育出版社）である。また、学習時間は、二年生 1800 時間程度、三年生 2700 時間程度である。

詳細は、下記の表 7-1 にまとめる。

表 7-1 調査対象の基本情報

学年	二年生	三年生
人数	40 人	40 人
使用教材	『新編日語』 1-4 周平・陳小芬 2009 上海外語教育出版社	『新編日語』 1-4 周平・陳小芬 2009 上海外語教育出版社
		『高級日語』 1-2 吳侃・村木新次郎 上海外語教育出版社
学習時間	二年 1800 時間	三年 2700 時間
日本語レベル	N2	N1
母語	中国語	中国語

なお、「言いさし」の「けど」類の使用が適切かどうかについて基準を定めるため、日本語母語話者（年齢層 30-60 の社会人 40 名）にも質問紙調査を実施した。日本語母語話者の回答で「言いさし」の「けど」類の選択率が高かったものについて、日本語学習者はどのように判断しているかに注目し考察を行う。また、日本語母語話者の理解が一致していない質問を除いて 10 問となり、それぞれ学習者はどのように判断したのか詳しく考察する。

7.5.3 調査時期・場所

学習者への調査は、2014年6月30日から2014年7月5日にかけて中国江蘇省江南大学の外国語学部の日本語学科において、学校の正規授業時間以外に行われた。日本語母語話者への調査は、2014年8月から2014年10月にかけて日本で行われた。

7.5.4 調査内容

7.5.4.1 記述式の質問紙調査

最近の日本語教科書の会話の一部、ドラマの台詞及び小説のシナリオなどを参考にしてアンケートの質問を作った。

まず、記述式の調査は、ダミー質問と日本語母語話者の理解がかなり一致していないものを除いて10問となっている。応答調査の形で設問され、調査協力者に「けど」類の「言いさし」の意味及び発話者の発話意図を書いてもらった。また、予測・理解の手掛かりとなった語句や内容、なぜそのような理解をしたのかの理由も書かせた。質問は、以下のものである。（学習者が質問についてより分かりやすくするため、各質問に中国語の訳文をつけている。）

- ①. (田中さんと小林さんは友達である。今話している。
田中和小林是朋友、他们在聊天。)
田中：沖縄とか行ってみない？
小林：沖縄？
田中：なんか、予想外かもしれないね。イギリスとかでもいいけど。
【※田中さんは、下線部の話で何を言いたいですか。】
【划线的话里、田中想说什么？】
- ②. (鈴木さんは、王さんのお家で食事をしている。鈴木在小王家吃饭。)
鈴木：このケーキ、王さんが作ったんですか。
王：ええ。料理の本に書いてあるとおりに作ったんですけど。
【※王さんは、ここで何を言いたいですか。】
【小王在这里想说什么？】
- ③. (田中さんと友人は、求人サイドを見ている。
田中和朋友正在看招聘网的信息。)
友人：ほら、この会社は、20代の女性を募集してるんだよ。
君、20代だろ？
田中：すぐ30歳だけ。
【※田中さんは、ここで何を言いたいですか。】
【田中在这里想说什么？】

- ④. (母親と娘は結婚について話している。妈妈和女儿在聊关于结婚的话题。)
 母：だけどね、お金がたっぷりあって結婚する人なんてないと思う。
 うちのお父さんだって、私と一緒にになったときに、あの当方で貯金が5万円あっただけだよ。
 娘：<笑い>貯金が5万円って、
どれくらいだか全然わかんないけど。
 【※娘は、ここで、何を言いたいですか。】
 【女儿在这里想说什么？】
- ⑤. (花子と美紀は友達である。花子和美紀是朋友。)
 花子：あつ、目が...
 美紀：大丈夫？鏡あるけど。
 【※美紀は、ここで何を言いたいですか。】
 【美纪在这里想说什么？】
- ⑥. P：辻さんはいらっしゃいますか。
 Q：今席を外しているんですが。
 【※Qは、ここで何が言いたいのですか。】
 【Q在这里想说什么？】
- ⑦. キム：今晚10時から日本と韓国のサッカーの試合がありますね。
 松本：ああ、そうですね。ぜひ見ないと。
 キムさんはどちらが勝つと思いますか。
 キム：もちろん韓国ですよ。
 松本：でも、最近日本も強くなりましたよ。
 キム：ええ、私もそう思います。あ、もう帰らないと。
 【※キムは、ここで何が言いたいのですか。】
 【キム在这里想说什么？】
- ⑧. A：今晚時間がありますか。
 B：はい、あります。
 A：明日パーティーをするんですが。
 【※Aは、ここで何が言いたいのですか。】
 【A在这里想说什么？】
- ⑨. (有田と小林は同僚である。有田和小林是同事。)
 有田：小林さん、忘年会いくつ出てるんですか。
 小林：さあ、いくつかな。
 有田：ほんとにもう。ゆうべはあれからどうしたんですか。
 小林：あれから3軒はしごしたよ。

今晚、一次会だけならつきあえるだろ？
有田：小林さん強いからいいけど。
【※有田は、ここで何が言いたいのですか。】
【有田在这里想说什么？】

⑩. (田中は電話している。田中在打电话。)

受付：はい、東京藤木本屋です。
田中：あの、李さん、お願いします。
受付：あの、失礼ですが。
【※受付は、ここで何が言いたいのですか。】
【受付在这里想说什么？】

7.5.4.2 フォローアップ・インタビュー

ネウストプニー (1994:7) は、「フォローアップ・インタビュー」を「具体的な行動に際してその行動の参加者にどのような意識があったかを明らかにしようとする手続きである」と定義している。

本調査では、ネウストプニー (1994 : 7) によるフォローアップ・インタビューの実施方法を参考に、「言いさし」の「けど」類の伝達、学習者の「言いさし」の「けど」に対する理解、「言いさし」の「けど」の使用当時の学習者の動機の探索、また「言いさし」の「けど」類の使用効果、接続助詞の「けど」類との相違などについてインタビューを行った。

また、学習者に対するインタビューは基本的にアンケート調査の直後に実施し、質問と映像再生の時間を合わせて、1人に15分程インタビューし、計1200分間(80名の学習者)のインタビュー資料が得られた。また、日本語母語話者へのインタビューもデータ収集の直後に実施し、計600分間(40名の母語話者)のインタビュー資料が得られた。

7.6 調査の結果

7.6.1 記述式質問調査の結果

7.6.1.1 学習者の回答における一致率

調査後、すべての調査紙を回収した。調査用会話文における「けど」類発話に関して、白川 (2009) の「従属節だけで言いたいことを言い終えているかどうか」という基準に従い、「言い残し」(5問)と「言い終わり」(5問)の二種類に分類し、学習者の回答は、どのぐらい母語話者に一致しているかを考察することにした。

そこで、日本語話者と学習者の回答の比較をおこない、使用する表現が違って

いてもよいが、母語話者の回答と同じ内容を含むものなら一致した回答として集計する。表 7-2 に、日本語母語話者の回答との一致率を示す。

表 7-2 母語話者と一致した回答の割合（括弧の中の数：件数）

	「言い終わり」に関する項目	「言い残し」に関する項目
CHN1	75% (150)	68% (136)
CHN2	64% (128)	49% (98)

カイ二乗検定の結果、 $\chi^2(1)=0.732$ で有意ではなかったが、表 7-2 に示すように、CHN1 は、CHN2 より日本語母語話者の回答に一致しており、日本語レベルの上達に従い、理解状況は日本語母語話者に近いことがわかる。また、すべての学習者は「言い終わり」に関する項目が「言い残し」に関する項目より理解度が高いこともみられた。それは、「言い終わり」は「言い残し」より、発話意図の言語化の度合いが高いことに関連すると考えられる。

7.6.1.2 学習者および母語話者の理解手がかり

人が文字を見て理解するまでの過程には、文字認知・音韻符号化・単語の意味理解・統語処理（低次処理）・意味処理・文脈処理・スキーマ処理（高次処理）といった様々な処理過程が含まれる（SUGIURA・NAKANISHI 2011）ため、学習者が与えられた「言いさし」の「けど」類発話に対して、どのようなプロセスで理解しているのか、およびどの標識を手がかりとして処理しているのか、それは、母語話者と何か相違点が見られるか、という問いを解くため、調査協力者が書いた回答は、設問の中で発話者の提供された情報について、どのように扱われているかという基準により、回答の内容を分類した。

具体的に、回答は、「けど」類発話の命題内容をそのまま使用した「命題型」、直前先行文脈の主語や述語に関連しつつ隣接ペアを再完成させる「先行文脈型」、「けど」類を中国語に訳したり会話の場面を連想したりしてスキーマを活性化して予測を加えた「スキーマ型」という三つのパターンに分類することができる。

例えば、下記の質問に対する回答は、この基準によって、以下で述べるようにパターン分けをすることができる。

(121) (田中は電話している。田中在打電話。)

受付：はい、東京藤木本屋です。

田中：あの、李さん、お願いします。

受付：あの、失礼ですが。

【※受付は、ここで何が言いたいのですか。】

「受付は、ここで何が言いたいのですか。」という質問に対し、学習者の回答

は、「名前を知らない・名前を聞きたい」、「自分は李さんじゃない」、「話が分からない」という三種類が見られる。その中、「名前を知らない・名前を聞きたい」という回答は、「田中：あの、李さん、お願いします。」という先行文脈から応答としてあり得るため、直前先行文脈の主語や述語に関連しつつ隣接ペアを再完成させる「先行文脈型」と分類できる。一方、「自分は李さんじゃない」、「話が分からない」という回答は、「あの、失礼ですが。」という発話を中国語の「不好意思」と訳して場面を代入して予測した回答となるため、スキーマを活性化して予測を加えた「スキーマ型」と分類できる。

以上のような分類方法により、母語話者と学習者の解答状況を表 7-3 に示す。

表 7-3 母語話者と学習者の解答状況(数は件数 **は有意に多いことを示す。以下同じ。)

	命題型	先行文脈型	スキーマ型
日本語母語話者	44	212**	144
N1 日本語学習者	85	159	156
N2 日本語学習者	127**	87	186**
合計	256	458	486

カイ二乗検定の結果、 $\chi^2(4)=97.713, p<.01$ で有意であった。さらに、残差分析の結果、N2 日本語学習者における「命題型」および「スキーマ型」は有意に多く、日本語母語話者における「先行文脈型」は有意に多いことがわかった。つまり、母語話者は、文脈などの情報を利用して相手の発話意図を推測しながら反応しているのに対して、学習者は文字通りに理解したり異なる文化背景スキーマで相手の発話意図を推測したりしている。

岡田 (1991:10) は、日本語自然会話における「言いさし」の多用について、次のような用例を取り上げている。

大学の建物の中で出会った人に「〇〇先生にお会いしたいんですが…」と言われれば、続いて「先生のお部屋はどこでしょうか」、「今、お会いできるでしょうか」と言われなくても、「先生に会える方法を教えて欲しい」という相手の意図を察して、部屋を教えたり、先生を呼んだりする行動を起こすことができるのである。

上のシチュエーションについて、岡田 (1991:10) は「日本語学習者は表現の意図を理解できても、それを自分が実際に使う段になると、戸惑うものが多い。」と述べているが、今回の調査の結果を見ると、中国人日本語学習者は、表現の意図をすべて理解できるとはいえないことがわかる。

7.6.1.3 理解面における中国人学習者の「言いさし」の認知特徴

以上の記述式調査の結果により、中国人学習者における「言いさし」の「けど」

類に関する認知特徴を以下のように用例を上げながらまとめる。

ア) 「実質な意味がない」という認識

調査の結果をみると、「けど」類の意味について明確に文字上に反映されておらず、「命題型」の回答が多く観察された。「けど」類が、初級段階で導入され、「逆接の接続助詞」として定着されることが多いため、学習者は「けど」類の「言いさし」に関する認識が薄くただ意味のない終助詞としてとらえる場合もある。

例えば、下記の回答では、フォローアップ・インタビューによると、学習者は、「けど」類を実質な意味がない終助詞をしてとらえ「命題型」の回答を記入したことがわかる。

(122) (鈴木さんは、王さんのお家で食事をしている。)

鈴木：このケーキ、王さんが作ったんですか。

王：ええ。料理の本に書いてあるとおりに作ったんですけど。

【※王さんは、ここで何を言いたいですか。】

「王さんは、ここで何を言いたいですか。」という質問に対して、「このコロッケはジョンさんが料理の本に書いてあるとおりに作ったものだ。」のような「けど」類の言い換えとなる回答がみられ、「けど」の意味を理解しないことを示している。

(123) (有田と小林は同僚である。)

有田：小林さん、忘年会いくつ出てるんですか。

小林：さあ、いくつかな。

有田：ほんとにもう。ゆうべはあれからどうしたんですか。

小林：あれから3軒はしごしたよ。

今晚、一次会だけならつきあえるだろ？

有田：小林さん強いからいいけど。

【※有田は、ここで何が言いたいのですか。】

また、この会話文において、「有田は、ここで何が言いたいのですか。」という質問に対し、「小林さんはお酒に強いです。とても元気です。」、「小林さんはお酒に強いから飲み会に何回参加しても大丈夫だ。」、「小林さんの考えはいい。」「行くつもりだ。」「小林さんは3軒はしごしたことは強い。」のような回答もみられた。これも「けど」を実質な意味がないものとしてとらえ答えるものである。

イ) 「接続助詞」と「言いさし」の混同

学習者の回答から、「けど」類を中国語の「但是」に訳して「けど」類発話を

解釈する答え方が多く見られた。学習者は、「けど」類をまず「逆接接続助詞」として認識し、そのまま中国語に訳して考える傾向があると推測できる。

例えば、下記の回答は、中国語では「但是」と訳されたため答えたものであると、フォローアップ・インタビューによってわかった。

(124) P：辻さんはいらっしゃいますか。

Q：今席を外しているんですが。

【※Qは、ここで何が言いたいのですか。】

「Qは、ここで何が言いたいのですか。」という質問に対して、「辻さんは来る必要がない。」のような回答は、「けど」類が逆接を表す接続助詞としてとらえ、すべての「けど」類発話の直後に予想外の情報が来るという固有意識があつて記述されたものである。

(125) (田中さんと小林さんは友達である。今話している。)

田中：沖縄とか行ってみない？

小林：沖縄？

田中：なんか、予想外かもしれないね。イギリスとかでもいいけど。

【※田中さんは、下線部の話で何を言いたいのですか。】

また、(125)の「田中さんは、下線部の話で何を言いたいのですか。」という質問に対して、「イギリスより他のところがいい」のような回答は、「けど」類が逆接を表す接続助詞としてとらえ、「けど」類発話の直後に対比を示す発話が来るといふ推測で書かれたものである。

イ) 母語からの「負の転移」が見られる

学習者の回答状況から、中国の文化背景に依存するスキーマが活性化して「けど」類の過推測をしていることがわかる。それは、文化に関する知識および文脈を読み解く能力が足りないためであると考えられる。

以下では、回答例をあげながら分析する。

(126) (鈴木さんは、王さんのお家で食事をしている。)

鈴木：このケーキ、王さんが作ったんですか。

王：ええ。料理の本に書いてあるとおりに作ったんですけど。

【※王さんは、ここで何を言いたいのですか。】

「王さんは、ここで何を言いたいのですか。」という質問に対して、「コロッケは自分でしっかり勉強して作ったものだ。」「本のとおりで作ったので、きっと美味しいに違いない。」のようなアピール的な言い方は中国の文化背景からあ

り得る回答である。

(127) (田中は電話している。)

受付：はい、東京藤木本屋です。

田中：あの、李さん、お願いします。

受付：あの、失礼ですが。

【※受付は、ここで何が言いたいのですか。】

「受付は、ここで何が言いたいのですか。」という質問に対して、多くの学習者は「自分は李さんじゃない」と推測した。ここでは、フォローアップ・インタビューによって「失礼ですが」を「自分は李さんじゃない」という主張を強調する際の話し方という理解からの回答であることがわかった。

7.6.2 フォローアップ・インタビューの結果

アンケートの後に協力者に対して個別的にフィードバックを行った際のフォローアップ・インタビューから、下記の点が明らかになった。

- ①. 意味解釈および意図推測の際に、「けど」類が逆接を表す表現であるという認識から出発した。それは学習者なりの根拠であると考えられる。
- ②. フォローアップ・インタビューでは、このような言い方自体を知らないと考えた学習者が複数いた。初級段階に習ったことがないため、どういう意味がよくわからないというフィードバックも多くみられた。
- ③. 「けど」発話の意図および意味推測を行う際に、まず発話を中国語に訳してから考えるというプロセスを経る学習者がかなりいた。

7.7 結果に関する考察

市川(2011)は、話し言葉の実体を理解する際に、連続音声から音韻や音節を認識し、単語または形態素を切り出し、何万もの語から構成される心的辞書を引いて語彙とその文法的機能を求め、文構造を解析し、「投射」や「係り受け未定文節数」を推定することをしなければならないとしている。学習者は音韻情報の以外に、形態上・統語上・意味上においてどういうものを手がかりとして「けど」類をしているのか、記述式の調査を行った。以下では、三つの仮説を検証しながら考察する。

ア) 学習者における「けど」類の捉え方—仮説 1 の検証

学習者の回答状況およびフォローアップ・インタビューの結果をみると、中国人学習者は、「けど」類を逆接接続助詞として認識し、意味理解および意図予測を行う際に予想外・対比などの情報を使用する傾向がある。

市川 (2011) は、日本語母語話者のコミュニケーションのあり方について、相手の発話が最後まで聞かないでわかるために、入力音声データが最後まで揃わないという状態で、その「予測」処理をするための前提となる一連の言語処理、例えば、単語を切り出し、品詞情報を確定し、構文解析を完了するまでを先取りして実現することが求められる。それにより、学習者が予測処理を行う前に、「品詞情報確定」という段階では、けど類を「逆接の接続助詞」として定着していることがわかる。

イ) 学習者に「言いさし」の理解および接続助詞との判別—仮説 2・3 の検証

学習者の回答から、「言いさし」の理解および接続助詞との判別について明確な基準がなく、中間言語段階における認知の特徴が見られる。

まず、「言いさし」の理解について述べる。第二言語習得における意味理解・言語処理に関するモデルは、競合モデル (The Competition Model) があげられる。このモデルでは、学習者は一つの文の中にある様々なキュー (手がかり) を相互に競い合わせながらその文の意味を理解したり習得したりしようとしていると考えられている (迫田 2011)。このモデルによると、読み手 (聞き手) である学習者は語順、格標識などの手がかりを使用して、言語形式からそれが果たした機能へ関連しつつ文意を理解し能力が習得し、その上、どの手がかりが文理解に一番重要なのか教わる必要がある。

「言いさし」の「けど」類に関連していうと、学習者に「言いさし」という特殊な言語形式および機能に認識させ、発話意図の理解にどの標識を手がかりとして使用するか、あるいは「接続助詞」と区別する際に、どの基準で分ければいいかということ定着させることが極めて重要である。

さらに、学習者にとって「言いさし」が理解にくい理由は、日中のコミュニケーションに根源があるのではないかと考えられる。具体的に井上 (2015) を引用しつつ述べる。

井上 (2015) は、日本語と中国語におけるコミュニケーションの相違点について、「日本語では、話し手の気持ちを表出するだけでも相手とコミュニケーションしていることになるが、中国語では、話を一歩前に進めて文脈の構築に関与しないと相手とコミュニケーションしていることにならない」(2015:5) と述べ、言語化された気持ちが異なることから指摘している。

例えば、(128) では、Bは、予想外の質問を聞いて「え」と反応し、「だって」を使用することにより、「自分には当然の理由がある」という気持ちを表出してから、「寒いんだもん」と話し続けている。

(128) A: どうして外で遊ばないの?

B: え、だって寒いんだもん。

(井上2015:4)

それに対し、井上 (2015) は、同じシチュエーションで中国語によるコミュニケーションであると、以下のようなやり取りとなると述べている。

(129) A:你怎么不到外面去玩儿啊?

B:外面冷嘛。

(井上2015:4)

(129) では、Bは「相手の質問を受けて「当然」という気持ちで“外面冷嘛”」(井上2015:4) と発話している。

つまり、下記の図7-1、図7-2に示すように、日中両言語は、日本語のコミュニケーションは互いに自分の内面にあるものを聞かせるのに対し、中国語のコミュニケーションは互いに情報を提供しあって文脈を構築していくという相違点を有することから、日本語における円滑なコミュニケーションというのは、会話参加者の発話の背景にある気持ちの理解が円滑におこなわれることである一方、中国語における円滑なコミュニケーションというのは、会話参加者の情報のやりとりによる文脈の構築が円滑におこなわれることである(井上2015)。

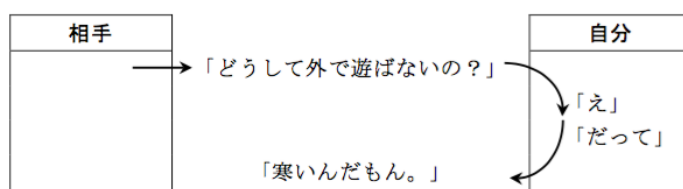


図 7-1 日本語のコミュニケーションの特徴 (井上 2015:4)

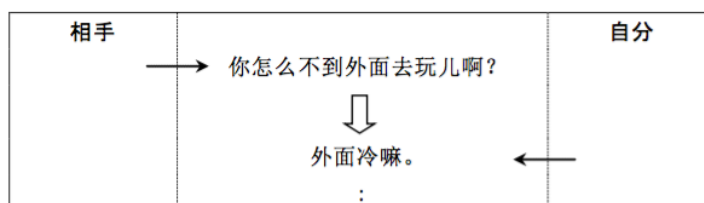


図7-2 中国語のコミュニケーションの特徴 (井上2015:5)

そこで、井上(2015)で指摘された日中の言語コミュニケーションの相違に基づき、「情報のやりとりによる文脈の構築」に依存する中国語母語とする学習者は、日本語のコミュニケーションにおける日本語母語話者の特徴(生駒・志村1993, 柏崎1993)とされた「言いさし」に対して言語処理を行う際に、どれが手かかりとして理解すればいいのかわからない結果、言語化されていない情報を察することができず相手の発話意図を掴むことができなくなってしまうだろう。

それから、「言いさし」と「接続助詞」との二種類の「けど」類の区別ができない点を述べる。今回の調査は「言いさし」のみを絞って出題したため、学習者の回答から直接に「接続助詞」に関する理解度を測れないが、フォローアップ・インタビューを実施することにより、日本語レベルを問わず「「言いさし」と「接続助詞」との二種類の「けど」類に関する区別がわからない」という疑問点を抱える学習者が数多くいることがわかった。それは、日本語教育における「文」お

よび「けど」類のような接続助詞に関する扱い方に問題が存在するからといっても過言ではない。

現在の中国の日本語教育の現場において、「完全文」に関する教育が優先され、話し言葉に多く現れる「言いさし」のような言語形式は、教えられたら混乱を招くため敢えて取り上げていないという考え方を持つ日本語教師が多くいる。菊地・増田（2009）で問題視されているように、学習者には、「完全文ではなく、述語の表現性が活きる文」にも十分に触れさせたいのに、教え方によっては、それらが隠れてしまい、「です・ます完全文」こそが日本語の文のプロトタイプであるかのように、学習者に最初期から印象づけてしまっているのである。このような問題は、母語の言語コミュニケーションのあり方が異なる中国人学習者にとってさらに負の転移をさらに深刻化されてしまう理由であるのではないかと考えられる。

7.8 日本語教育への示唆

まず、シラバスから考えると、「日本語教育の一つの目的が、学習者が日本語話者と会話する能力を養うものであるならば、自然な会話の中に現れた「文」を日本語教育の初期の段階から採用することが有益である」と岩崎・大野（1999: 142）で指摘されているように、「言いさし」を一つの文法項目として初級から提示し定着される必要が有る。

それから、具体的な指導法から考えると、中国語のコミュニケーションの特徴と対照しながら文型練習・会話練習を行い、教室活動から日本語の特徴的なコミュニケーションに触れ、理解の手がかりにも学習者に実感させ、気づかせる能力を育成する。また、「です・ます終結文」が初級で独占的に提示されることの背景には、日本語教育の歴史で長年主流を占めてきたと考えられる。そこで、教授者と学習者の「問答」を基軸にした文型導入の法による影響があるものと菊地・増田（2009）で指摘されたように、「言いさし」と「場面」との関わりから導入を行い、各コミュニケーション場面に使用される「言いさし」を学習者に提示し練習させるべきである。

7.9 本章のまとめ

本章では、中国人学習者と日本語母語話者の「言いさし」の「けど」類の理解状況を全体的に把握するための量的調査としてアンケート調査を実施するとともに、アンケートでは捉えきれない学習者の個別的な側面を補完するためにフォローアップ・インタビュー調査も実施した。

調査した結果、学習者は「言いさし」の「けど」類に対し、「実質的な意味がない」という認識を持っており、「接続助詞」と「言いさし」の混同および母語からの「負の転移」が見られた。

次章では、中国語話者における「言いさし」の使用について調査を行う。

第8章

中国語母語話者が母語での

「言いさし」の認知・産出状況に関する調査.

本章では、断り行為を取り上げ、それに現れうる「理由説明」の要素に注目し、日本語母語話者（以下 JNS とする）と中国語母語話者（以下 CNS とする）の理由説明表現マーカーとしての「言いさし」の使用にどんな傾向および異同があるのかを分析することにする。

構成は以下の通りである。まず、1 節では問題のありかを提示する。2 節では断り行為における「言いさし」を紹介する。3 節で先行研究を述べる。4 節研究課題、調査の仮説、5 節では研究方法を述べる。6 節では結果の分析・考察を述べる。7 節では日本語と中国語における「言いさし」の相違をまとめる。8 節ではまとめおよび日本語教育への示唆を論じる。最後に 9 節で、本章のまとめをする。

8.1 導入

日本語の自然会話においては、下記 (130) の「古い倉庫ですから。」のように、文の後半や主節が省略されていると見られるにもかかわらず、文としての完結性も備わっている発話は、しばしば現れている。一方、中国語の自然会話においては、このような発話が存在するかどうかについて、さまざまな視点（陳美玲 1993、李 2008）から議論されてきたが、まだ確実な結論に到達するに至っていない。

(130) 旅 館の主人：しかし、屋根が飛ぶとはねえ。

味噌屋の主人：古い倉庫ですから。

(NHK 総合テレビ『かりん』 (白川 2008:9))

本研究では、(130) の「古い倉庫ですから。」のような発話を研究対象にし、「言いさし」として取り上げ、中国語における「言いさし」の実態、及びある特定の場面における日中両言語の「言いさし」の異同を明らかにすることを目的とする。

中国語と日本語は、言語の種類が異なるため、複文におけるさまざまな相違点が見られる。最も根本的な相違点は、日本語は、膠着語的特徴として接続表現は従属節への後接が要求されるため、従属節の構文要素への配慮が極めて重要であるに対して、中国語は、孤立語であるため、接続表現は形態的に拘束されずに使われ、「まったく用いなくてもよい」(劉他 1999) ということであろう。

したがって、中国語の複文には、接続表現が使用されるかどうかにより、(131)

(132) (133) のような「有標識構文」と (134) のような「無標識構文」に分類できる (新田 2007)。本研究は、後者の「無標識構文」に注目する。

(131) 因为天气不好, 所以我们没去颐和园。

(天気がよくなかったので、私たちは頤和園に行きませんでした。)

(132) 由于路太远, 病人在半路不幸去世了。

(道のりが遠かったために、病人は不幸にも途中でなくなった。)

(133) 由于他优柔寡断, 以致铸成大错。

(彼が優柔不断であったために、大きなあやまちを犯すことになった。)

(134) 吴广被杀害, 革命力量受到很大损失。

(呉広が殺害されたために、革命勢力は大きな損失を被った。)

(劉他 1991:732-733 により)

その上、「無標識複文」が存在するため、下記 (135) の「不好意思, 好久没画画。(すみません、しばらく絵を描かなかった)」が、「不好意思, 好久没画画, 画得不好。(すみません、しばらく絵を描かなかったので、うまく描けなかった)」の従属節と判断できるだろう。このような発話は、中国語において頻繁に使用されている。

(135) 杨千嬅: 太胖了那个叮当。

(太すぎますね。そのドラえもん)

陈鲁豫: 你说完以后, 你说完以后我觉得。

(あなたが言うてから私はそう思うようになった。)

杨千嬅: 不好意思, 好久没画画。

(すみません、しばらく絵を描かなかった。)

(National Broadcast Media Language Corpus・談話番組『鲁豫有約』)

本研究では、「不好意思, 好久没画画。(すみません、しばらく絵を描かなかった)」のような発話を「無標識従属節」の「言いさし」と定義して中国語の「言いさし」として捉える。

さらに、中国語における「無標識従属節」の「言いさし」の実態、及びある特定の場面における日中両言語の「言いさし」の異同を明らかにすることを目的とする。

8.2 断り行為における「言いさし」

「断り」とは、相手の「依頼」や「誘い」などの要求に対して、「その意に沿えない」という意図を表明し、相手に理解してもらうための発話行為であり、相手との関係維持と「断り」意図の伝達という両方に配慮が求められる言語行為とも言える (尾崎 2006)。断り行為は日常生活でよく行う言語行為であり、どのよ

うに断れば相手との関係を維持しつつ「断り」意図を伝えることができるのか、ということを考えなくてはならない緊張感を有する言語行為である。

そういう発話行為を行う際に、中国語と日本語の両言語において、下記の(136)(137)のように、「ダメ」を表す主節まで言わず、残りは相手の判断に委ねる表現が用いられることがよく見られる。

(136) A: この度は、〇〇シンポジウムへご参加くださり、誠にありがとうございます。土曜日にシンポジウムが終了いたしましたら、懇親会もご用意しておりますが、ご都合はいかがでしょうか。

B: こちらこそ、色々とありがとうございました。懇親会、お邪魔したいんですが、シンポジウム後は他の予定が入ってまして…

(アンケートの発話例)

(137) 周冲: 我正想见你呢。你, 你愿意——跟我拉拉手么? (把右手伸出去)。

(ちょうど会いたいと思っているところです。あ、あなた、私と握手していただけませんか? (右手を出す))

大海: 我不懂得外国规矩。

(外国のルールは知らない)

(『雷雨』)

上記の(136)(137)において、B及び大海の「言いさし」の発話には「行けません」と「だめです」などの意味が言語化されておらず、発話者B及び大海の「言いさし」の使用するにより、「直接的な断わりを避け、地位が上の人に失礼にならないよう気を付けている」(生駒・志村1993)。それは、断り行為の「理由説明」のマーカ―として「言いさし」が使用されることにより、相手の「誘い」や「依頼」などの要求に応じられないという発話意図を直接的に示すことを避けることである。

「言いさし」について、さまざまな研究が行われており、談話機能を中心に考察した研究は白川(1996,2001,2002,2008a,2008b,2009)、荻原(2000,2002,2008,2011)、陳文敏(2000,2001,2004)、朴(2005,2008,2010)などが挙げられるが、言語形式を中心に、ある特定の接続助詞(「カラ」や「ケド」など)による「言いさし」の談話機能を考察しているが、ある発話行為に着目してそれにおける「言いさし」の使用実態に関する研究は、まだ見当たらない。

「言いさし」は、どんな言語においても語用論と関わる部分が大きいため、対照研究を実施する際に、ある場面を中心に行った方が等価となる対象を想定するのにより容易なのではないだろうか。

そのため、本研究では、日本語と中国語の両言語における断り行為の発話に着目し、質問紙調査を実施することにより、日本語母語話者(JNS)と中国語母語話者(CNS)による「言いさし」の使用の共通点と相違点を構造面と待遇面から明らかにする。

8.3 先行研究

8.3.1 ポライトネス理論に関する先行研究

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論は、対人コミュニケーションの実態を決める諸要因を系統的に示したものである。

まず、「フェイス (face)」という概念を用いて人間の言語行為を説明している。

さらに、対人関係の調節における「フェイス」は、「ポジティブ・フェイス (positive face)」と「ネガティブ・フェイス (negative face)」に分けられる。「ポジティブ・フェイス (positive face)」は他者に理解されたい・好かれたいというプラス方向 (外向) への欲求であり、「ネガティブ・フェイス (negative face)」は他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないというマイナス方向 (内向) に関わる欲求である。

このようなフェイスに対して、「相手のフェイスを脅かすか否か」ということを発話行為の枠組みと、「ある種の行為は本質的にフェイスを脅かす恐れがあるため、それを和らげる手段が必要である」というポライトネスの理論に基づいて研究されている。

Brown and Levinson (1987:76) は、人間関係において相手のフェイスを脅かす可能性のある行為を、「フェイス侵害行為 (FTA)」と呼んでおり、話し手の FTA の見積もり (フェイスの侵害度 W_x ; weightiness of the face threatening acts) を測るために、下記のような要素を設定した。

D: 話し手 (Speaker) と聞き手 (Hearer) との「社会的距離 (Social distance)」

P: 聞き手 (hearer) と話し手 (Speaker) との間で生じる「支配力 (Power)」

R_x: ある行動が相手にかかる負荷度

「負担の大きさ (absolute ranking of imposition)」

上記の要素によると、ある行為 x のフェイス侵害度 (W_x) は、ヨコの人間関係における話し手 (S) と聞き手 (H) との社会的距離 (D:distance)、タテの人間関係における聞き手が話し手に及ぼす力 (P:power)、そして x という行為が特定の文化内でもつ負担の度合い (R:rating of imposition) としての R_x の3つの要因で「フェイス侵害行為 (FTA; face threatening acts)」の重さ (weightiness) が決まり、それに応じてストラテジーがされるとしている (滝浦 2005)。

8.3.2 「言いさし」に関するポライトネス視点からの先行研究

上記の分析により、Brown and Levinson (1987:76) は、人間は発話行為において、相手のポジティブ・フェイス (positive face) や、ネガティブ・フェイス (negative face) を傷つけたり、破ることがあり、逆に自分のポジティブ・フェイス (positive

face) やネガティブ・フェイス (negative face) を傷つけたり、破ることもあるとしており、このようなフェイスを傷つける可能性が人間のコミュニケーションには潜在的にあるのだと指摘されている。

そのため、相手または自分のフェイスを脅かす行動 (Face-Threatening Acts : FTA) の可能性を無くすために、会話の参加者は何らかのストラテジー (strategies) を使用するのである。このストラテジーは話し手の選択であり、会話の場でさまざまな要素 (相手・会話内容・置かれた状況など) によって判断される。

また、話し手が聞き手を考慮して、FTA を軽減し、コミュニケーションを円滑にするために、Brown and Levinson (1987) は「ポライトネス・ストラテジー」と呼ばれる方略を提案し、次のように 5 つに分類している。

I. FTA を行わない :

事柄がフェイスを脅かす可能性が極めて高いので、あえてそれを行わない方略である。

II. off record :

事柄に対して直接に言わず、ヒントや連想の手がかりを与える、皮肉・比喩をする、またはほのめかすといった行為により、表に出さない方略である。

III. negative politeness :

他の人に邪魔されたくない、抑えつけられたくないといった欲求に配慮したポライトネスであり、いわゆるネガティブ・フェイス (negative face) に訴えかけるストラテジーである。

IV. positive politeness :

他の人に好かれたい、認められたいといった欲求に配慮したポライトネスであり、いわゆるポジティブ・フェイス (positive face) に訴えかけるストラテジーである。

V. bald on record :

単刀直入に事柄を言う何も緩和策を講じない方略である。

上記の五つのストラテジーの中、「言いさし」と一番関連するのは、「オフ・レコード」であると思われる。そこで、「オフ・レコード」を取り上げ、その概念について具体的に考察していく。

「オフ・レコード」とは、言いたいことを最後まで表さないで省略して、その行為をしていることを明確に示さないストラテジーであり、下記の下位ストラテジーが含まれる (Brown & Levinson 1987)。

「オフ・レコード」の下位ストラテジーは以下のようなものである。

(Brown & Levinson 1987:101-227)

(1) 「会話の含意を引き出せ (Invite conversational implicatures) 」

「ヒントを与えよ (Give hints)」、「連想可能な手がかりを与えよ (Give association clues)」、「想定せよ (Presuppose)」、「控えめに述べよ (Understate)」、「大

げさに述べよ (Overstate)」、「類語反復を用いよ (Use tautologies)」、「矛盾する命題を用いよ (Use contradictions)」、「アイロニーを用いよ (Be ironic)」、「隠喩を用いよ (Use metaphors)」、「修辞疑問文を用いよ (Use rhetorical questions)」
(2) 「曖昧にするか、もしくは、多義的な言い方をせよ：「様態の公理」に違反せよ (Be vague or ambiguous: Violate the Manner Maxim)」、「多義的に表現せよ (Be ambiguous)」、「曖昧に表現せよ (Be vague)」、「過剰に一般化せよ (Over-generalize)」、「聞き手を置き換えよ：聞き手以外の人に FTA を向けよ (Displace H)」、「省略を用い、不完全な文にせよ (Be incomplete, use ellipsis)」

また、Brown & Levinson (1987) は、「省略を用い、不完全な文にせよ」について、依頼するとき、FTA を軽減するために用いるストラテジーであるとし、以下のような例を示している。

Well, if one leaves one's tea on the wobbly table... (Brown & Levinson, 1987:227)

Brown & Levinson (1987) は、このストラテジーは「分かりやすい言い方をしなさい」という Grice (1975) の「様態の公理」に違反するものであり、これを用いることにより、FTA を和らげることができると述べている。Brown & Levinson (1987) はこのことを依頼の言語行動に関して言及しているが、依頼の言語行動に限らず、断わりの言語行動においても同様の現象があると考えられる。

8.3.3 断る言語行為に関する先行研究

日本と中国における断り行為に関する研究は、「断り」という発話行為の習得状況に関する先行研究は数多く存在する。その中、断る理由に関連する研究は藤森 (1995)、西村 (2007)、周 (2009)、都・崔 (2010) しか見られておらず、特に、対照研究の視点から、言語的な側面に注目し、会話の参加者の関係性の異同にある理由の内容や構成の変化を言及している研究はほとんどないはまだ見られない。本研究は、理由説明に関する藤森 (1995)、周 (2009) を挙げる。

まず、藤森 (1995) は、断り行為の中でよく現れる理由説明の表現形式として「ノダ型」、「カラ型」、「ノデ型」、「テ形型」、「命題直示型」、「シ型」の6つを取り上げ、会話参加者の関係による使用頻度の相違について述べている。日本語母語話者と日本語学習者(中国人・韓国人)を対象に、談話完成テスト(DCT)を利用し調査を行った結果、日本語母語話者の場合は親しい相手には「カラ」、目上には「ノデ」の使用が圧倒的に多いが、疎の相手と目下に対してはより多様な選択バリエーションを持っていると指摘している。一方、中国人日本語学習者の場合については、「親しい相手にマーカーを使わない命題直接提示型を使用する」、「一つの回答文に理由を重ね、『弁明』を多用している」という二つの特徴を指摘している。

さらに、周 (2012) は、談話完成テスト(DCT)で資料収集して中国人学習者

の断る際の理由の表現形式が日本語母語話者の相違について考察し、理由の表現形式について、藤森（1995）を踏まえ、「ノダ型」、「カラ型」、「ノデ型」、「テ形型」、「命題直接提示型」、「シ型」さらに「ケド型」「連用中止型」と「省略型」を分類に付け加えた。学習者には、「カラ」「ノデ」の混用、「命題型」「ケド型」「省略型」の多用、「シ型」「ノダ型」の非用など多数の問題が指摘されている。

藤森（1995）、周（2009）は、中国語母語話者への断り行為の習得研究においてはとても重要な指摘と考えられるが、中国語における使用実態及び「言いさし」考察について触れていないため、中国人学習者と日本語母語話者の使用上の相違点に関わる根本的な要因がまだ解明されていないといえる。

8.4 研究目的及び課題

本調査は、日本語と中国語の両言語における断り行為を取り上げ、断り発話を構成する意味公式のうち、最も使用頻度の高い理由説明発話に着目し、理由説明表現マーカ―としての「言いさし」を考察することにより、日本語母語話者（JNS）と中国語母語話者（CNS）による「言いさし」の使用の共通点と相違点を構造面と待遇面から明らかにする。そこで、以下のような研究課題を設ける。

研究課題一：断り行為の理由説明の発話において、JNS と CNS の「言いさし」の全体的使用頻度に差が見られるか。

研究課題二：断り行為の理由説明の発話において、JNS と CNS による「言いさし」の使用は、相手との関係性（親疎上下）に関わりが見られるか。

研究課題三：断り行為の理由説明の発話において、JNS と CNS による「言いさし」の使用は、用件内容に関わりが見られるか。

研究課題四：中国語における「言いさし」には、どんな特徴が見られるか。

8.5 研究方法

8.5.1 予備調査

予備調査は、本調査を行うに先立って 2015 年 3 月に、CNS と JNS の二名ずつ（計四名）に調査紙を用いて自由回答法で実施した。調査紙調査の後、フォローアップインタビューも行った。

予備調査の結果から、断り行為の理由説明表現のマーカ―として使用される「言いさし」は、両言語において親しい目下に対する使用率が一番低いことがわかった。

8.5.2 本調査

8.5.2.1 調査時期

調査は日本国内と中国で実施され、実施期間は、2015年3月下旬から4月下旬までである。

8.5.2.2 実施方法

調査紙を用いて実施した。調査紙の配布と回収は、日本にいる被調査者に対して留置調査法を行い、中国にいる被調査者に対して郵便と電子メールで調査を行った。

8.5.2.3 調査対象者属性

調査対象者は、20歳代から50歳代のJNSとCNSの社会人である。回答は80名から得られた。中国語母語話者平均年齢は35歳7ヶ月(標準偏差は3歳3ヶ月)、日本語母語話者は被調査者の平均年齢は35歳4ヶ月(標準偏差は2歳7ヶ月)であった。

回答の内訳は表のとおりである。男女比は約1対1で、世代別では20歳代・30歳代・40歳代・50歳代はほぼ同数である。20歳代から50歳代は社会を構成する代表的な世代であり、中国と日本の言語的・文化的規範を反映していると言えよう。また、方言の影響も想定されるので、被調査者が共通語の使用年数や出身地も大きなバラツキが生じないように配慮した。

表 8-1 有効回答の内訳（日本語母語話者）

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	合計(名)
男性	5	6	4	4	19
女性	5	5	6	5	21
合計	10	11	10	9	40

表 8-2 有効回答の内訳（中国語母語話者）

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	合計(名)
男性	5	4	5	5	19
女性	6	6	4	5	21
合計	11	10	9	10	40

8.5.2.4 調査方法

調査紙は談話完成テスト(Discourse Completion Test: DCT)である。DCTは場面設定と対話の相手の台詞と、その台詞に対する応えを書き入れる空白欄で構成

されている。

本研究において、DCT を使用した理由は、以下のように考えられる。

I. まず、DCT のような記述式の調査は、「相手の反応をみることかできず、発話行為を相互行為としてとらえることが難しい（朴 2012）」という限界が見られるが、会話参加者の上下親疎などの関係などの「社会的変数を実験的に統制することができる」（朴 2012）。

II. また、被験者が実際コミュニケーションの際に、記入した通りの発話を産出するとは限らないが、「話し手のもつ語用論的知識や社会言語学知識を知る上では有効な手段である」（朴 2012）。

III. ポーズや句末音調などのような音声的要素が観察できないが、本章においては構造面や待遇面について考察し、音声的要素に関する具体的な分析は、次章においては行うことにすると考えられる。

さらに、DCT には、「ある言語の発話行為の典型を観察できること、大量の発話データを短期間で集められること、様々な場面設定が組み込めること」（蒙 2009b）などの特徴がある。その上、DCT では実際の会話で使われる意味公式及びストラテジーを観察することができる（Beebe and Cummings, 1996）と指摘されている。

したがって、本研究ではデータの収集について DCT を採用すると考えられる。

8.5.2.5 調査内容

断り行為において、要求される内容、または相手との上下・親疎関係によって心的負担の度合いが異なるため、「断り」と言っても用件内容と相手との関係性の違いによって心的負担の度合いは大きくなり、さらにそれに伴って表現の形式やそのパターンも異なっていくと推測できる。したがって、下記の要素を配慮して調査内容を考えた。

ア. 要素一：関係性

本研究では、話者同士の関係を細かく具体的に設定した。

I. 社会的、あるいは年齢的に目上か同等か目下か

（以下、[上]、[同]、[下] で表記）

II. 親しいか親しくないか（以下 [親]、[疎] で表記）

の $3 \times 2 = 6$ 通りの相手を、各自で具体的に実在人物を設定してもらおう。その際、それぞれの状況の特質上、家族や親戚以外で、今現在同じ団体に所属している人かどうかについて設定していない。表記上、例えば、「上親」は目上で親しい人、「下疎」は親しくなく目下の人を表す。

今回のアンケートで関係性によって理由説明の違いがみられるかを調査したいため、相手との親疎関係、地位の高低関係、身内対他人の関係を考慮し、勧誘者と回答者との関係性を以下のように設定した。

表 8-3 関係性の概要（括弧 本研究における関係の略称）

	親	疎
目上	両親（上親）	ほとんど話すことのない上司（上疎）
同等	親友（同親）	知り合い（同疎）
目下	弟（下親）	知らない人（下疎）

表 8-3 については、以下のように説明する。

まず、「疎遠」な相手の基準は「ほとんど話すことのない人」とする。（表 8-3 では「疎」、以下「疎」とのみ記す）次に、「親友（友人）」はよく話す仲の良い友人とする。それから、「知り合い」は、会えば挨拶をしたり、軽く話したりする程度の友人とする。最後に、「知らない人」は、これから会うかどうか分からない人とする。

イ. 要素二：要件内容

それぞれの「利益」の所在の相違を考え、「依頼」と「誘い」に分けて基本的に場面を設定しました。設定した場面は被調査者にとって日常生活で遭遇しうるものであり、想像しやすい場面である。すべての依頼場面は日本と中国の社会・文化において起こりうるような自然な場面を選んだ。

以上のような要素を配慮し、以下の 12 個の場面を設定し、「なんとなくやりたくない」という理由で断るように指示し、状況に応じて自分が断る立場だった場合、どのように言うかを回答者の言葉で自由に記述してもらった。

- ①場面 1：両親（上親） 特定の買い物を頼まれた
- ②場面 2：両親（上親） ショッピングを誘われた
- ③場面 3：親友（同親） 特定の買い物を頼まれた
- ④場面 4：親友（同親） パーティーの参加を誘われた
- ⑤場面 5：弟（下親） 特定の買い物を頼まれた
- ⑥場面 6：弟（下親） パーティーの参加を誘われた
- ⑦場面 7：ほとんど話すことのない上司（上疎） 特定の買い物を頼まれた
- ⑧場面 8：ほとんど話すことのない上司（上疎） 食事会の参加を誘われた
- ⑨場面 9：知り合い（同疎） 特定の買い物を頼まれた
- ⑩場面 10：知り合い（同疎） パーティーの参加を誘われた
- ⑪場面 11：知らない人（下疎） アンケートを頼まれた
- ⑫場面 12：知らない人（下疎） 懇親会の参加を誘われた

また、本研究では、断りをするかどうかは議論の対象ではなく、断りストラテジーを考察することが目的であるため、DCT では、「どのように断りますか」

と記載することとした。

さらに、DCT では、取り上げられる場面の順番が回答に影響を与える可能性があると考えられるため、場面の順番を変えたものを作成した。

最後に、「言いさし」の言語形式に関する相違が本当に言語の類型によるか文化の背景によるかという判断を下すため、被調査者にフォローアップインタビューを行った。

8.5.2.6 分析方法

発話内容を分析するに際し、分析は DCT の アンケート回答の発話内容からから意味公式 (semantic formulas) を抽出してからその意味公式を機能別に分類した。

意味公式の分類は、藤森 (1994) を修正・補足した蒙 (2008) 分類に基づくが、意味機能の説明に関して、蒙 (2008) の不適切な部分には必要な修正を施した。具体的に、以下の表 4 のとおりである。

表 8-4 意味公式の分類 (中国語 筆者訳)

意味公式	意味機能	例
① {結論}	相手の意向に添えない旨の表明	行けない、作れない
		不行啊 ; 做不了 ; 无法办到 ; 无能为力 ; 帮不了你
② {理由}	相手の意向に添えない事情の説明	明日どうしてもはずせない用事があるので
		明天有事
③ {詫び}	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明	すみません、ごめんなさい、申し訳ない、悪い、ごめん
		对不起 ; 不好意思 ; 实在抱歉啊
④ {代案}	実際的な問題解決を指向する	日曜日であれば、出られますが。
		他の人に頼んでみたらどう？ 星期天下午来，行吗？ 你问问小李！
⑤ {関係維持}	相手との関係を維持したい旨の消極的な働きかけ	また今度ね、今度やります
		下次吧 ; 下次一定帮忙 ; 希望以后能为你效劳！
⑥ {共感}	相手の意向に添いたい心情の表明	やりたいけど、残念ですが、せっかく言ってくれたのに
		我很想帮你 ; 真不巧呀 ; 如

- (140) 発話例 JNSM09 : 今月のバイト料まだ手に入っていないので、
 A 節{理由}
持っているお金は生活費し。
 B 節{理由}

このような理由のカウントの方法に関して、A 節が B 節の理由なので、A 節と B 節全ては「相手の意向に添えない理由の表明」の 1 つの意味公式機能を働いていると判断される。そのため、これら全てを総合して、断りの 1 つの{理由}とする。

同じく、(141) のように、中国語の場合も同じように、C 節と D 節をすべて {理由} と分類する。

- (141) 発話例 CNSF17 : 谢谢， 这周末事特别多， 都没心情过生日了， 哪天补吧

{感謝} C 節{理由} D 節{理由} {関係維持}

(訳: ありがとう。今週やることがいっぱい誕生日を祝う気分じゃなくなった。今度にしよう)

また、本研究は、意味公式の{理由}部分を主に扱い、{理由}が含まれていない回答は対象外として扱うことにする。

8.6 結果の分析・考察

8.6.1 「言いさし」の全体的な使用頻度

アンケートの回答から理由表現を抜き出し、まず、理由表現マーカとしての「言いさし」の全体的な使用頻度を計算し、表 8-5、図 8-1 にまとめる。

表 8-5 理由表現マーカとしての「言いさし」の使用数 (数 : 件数 ** : 有意に多い)

	上親	上疎	同親	同疎	下親	下疎
中国語	**139	297	173	221	**120	408
日本語	72	216	144	**216	58	288

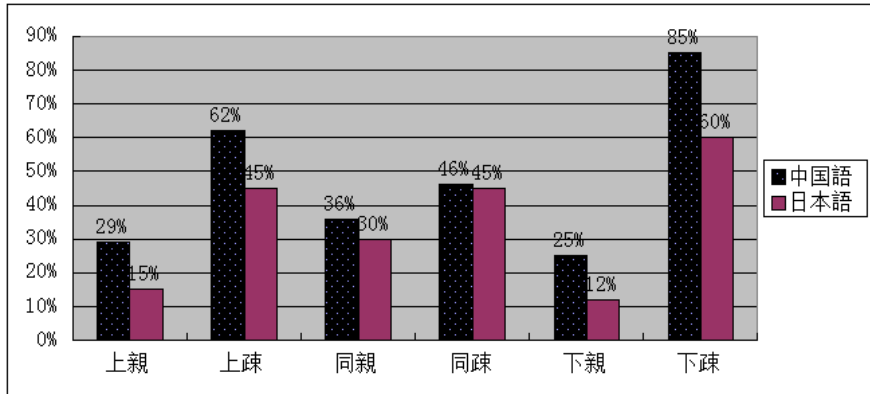


図 8-1 理由表現マーカとしての「言いさし」の使用率

表 8-5 のデータに基づき、カイ二乗検定をかけた結果、 $\chi^2(5) = 23.284$, $p < .01$ で有意であった。さらに、残差分析の結果、中国語における「上親」・「下親」、日本語における「同疎」に有意が多いことがわかる。そこで、中国語と日本語の両言語の断り発話において、「言いさし」は理由表現のマーカとして頻繁に使用され、日本語の場合より疎遠である相手に対してよく使用されるのに対し、中国語の場合、より親しい相手に対して使用される傾向がある。

例えば、「知らない年下の人からアンケートの依頼を断る場面」について、以下 (142) - (145) のような回答があった。

- (142) 発話例 JNSM20：すみません。待ち合わせに遅れてしまうので。
- (143) 発話例 JNSF23：すみません。今急いでるんで…
- (144) 発話例 CNSM11：不好意思现在有点急事。
(訳：すみません今急用がある。)
- (145) 発話例 CNSM18：对不起，我在抢救病人。
(訳：すみません応急手当をしている)

この場面において、中国語母語話者と日本語母語話者は「直接的断り」を避け、理由を述べるだけで断り行為を完成した。

一方、相手との関係が親しくなると、特に目下の相手に対して、「直接的断り」の使用率が高くなり、「言いさし」は使用されなくなる傾向も見られた。特に「下親」の相手からの要求を断る場合では使用率は一番低いことがわかる。(中国語 25%、日本語 12%)

たとえば、弟から旅行先で特定の買い物の依頼を断る場面において、以下 (146) - (149) のような回答があった。

- (146) . 発話例 JNSF03 : 家電量販店みたいなのところに行く時間がないの！
だから買えないかも・・・ごめんね
- (147) . 発話例 JNSM15 : ごめん。アメリカ人とはなるべく話しをしたくないから、他の人に頼んで。
- (148) . 発話例 CNSM01 : 我东西太多了，直接给你寄过去吧。
(訳: 荷物が多すぎるんで、そのまま国際郵便で送るか。)
- (149) . 発話例 CNSM05 : 真心不好带，你饶了我吧。
(訳: 本当に無理です。勘弁して！)

また、両言語において、相手との関係が疎である場合は、相手との上下関係に関わらずに、「謝罪+「言いさし」の理由表現」が多いことがわかった。

以下、それぞれ発話例を挙げる

- (150) . 発話例 CNSF05 : 不好意思，现在很忙。
{詫び} {理由}
(すみません、今忙しい。)

- (151) . 発話例 JNSM34 : すみません！急いでいるので！
{詫び} {理由}

8.6.2 相手と関係性による影響

図 8-1 から、中国語も日本語もが上下関係より親疎関係を重視するのではないかと推測できるだという。そのため、「上下関係」及び「親疎関係」に分けて考察する。図 8-2 は「上下関係」(目上・同等・目下)によってまとめたものであり、図 8-3 は「親疎関係」によってまとめたものである。

表 8-6 「上下関係」からの「言いさし」の使用率

	目上	同等	目下
中国語	206	206	202
日本語	144	134	125

表 8-6 のデータに基づき、カイ二乗検定をかけた結果、 $\chi^2(2)=0.611, ns$ で有意差はなかった。

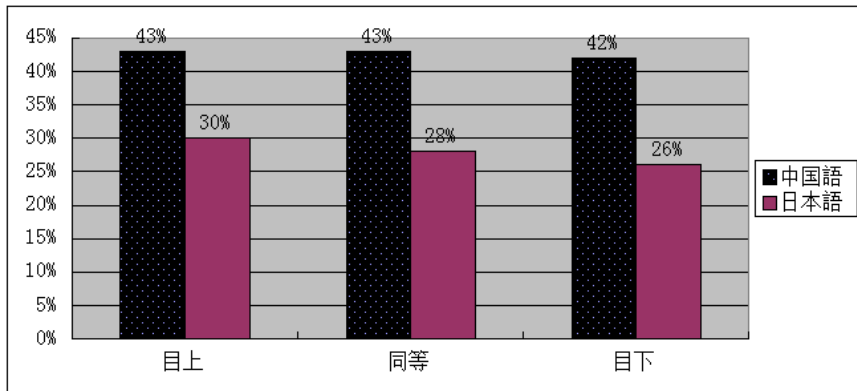


図 8-2 「上下関係」からの「言いさし」の使用率

表 8-7 「親疎関係」からの「言いさし」の使用率

	親	疎
中国語	139	298
日本語	120	250

表 8-7 のデータに基づき、カイ二乗検定をかけた結果、 $\chi^2(1) = 0.013$, ns で有意差はなかった。

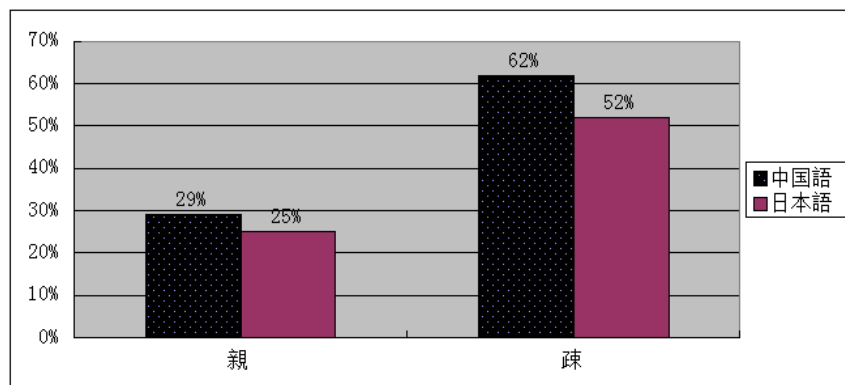


図 8-3 「親疎関係」からの「言いさし」の使用率

表 8-6 から、相手が「目上」・「同等」・「目下」という三つの場合では、「言いさし」の使用に差が小さいことがわかる。日本語には、「目上」の相手に対して「同等」の相手と「目下」の相手より使用率がすこし高いが、中国語には、そういう傾向は見られない。

以下は、ショッピング／食事会の誘いを断る場面における発話例である。

(152) . 発話例 JNSF19 : (母親に対して)

うーん、買い物かー。土曜はあんまり行きたくないかなあ。服はいいから、また今度行こうよ。

- (153) . 発話例 CNSF08 : (母親に対して)
妈, 我最近不需要衣服, 你和姐去逛, 你们买点。
(訳: 母さん、最近服要らない。
お姉ちゃんと一緒に買いに行こう)
- (154) . 発話例 JNSF27 : (親友に対して)
ありがとう。でも、土曜日は家族と約束があるから、
申し訳ないけど別の日でもいい??
- (155) . 発話例 CNSF21 : (親友に対して)
谢谢妞, 我周六要打工, 改周日吧, 来我家
(訳: ○○ちゃん、ありがとう。土曜バイトがある。
日曜にしよう! 家に来て!)
- (156) . 発話例 JNSM35 : (弟に対して)
土曜日は友達と予定が入ってるから、別の日に行こう
- (157) . 発話例 CNSM30 : (弟に対して)
估计费劲, 没时间啊。下次给你过生日吧
(訳: 難しいかも。時間がないの!
次回君の誕生日を祝おう)
- (158) . 発話例 JNSF12 : (ほとんど話すことのない上司に対して)
お気遣いいただいてすみません。ただ土曜は前から予定が入ってまして…せっかくのご厚意を、申し訳ありません。今回はお気持ちだけありがたく…すみません。
- (159) . 発話例 CNSF09 : (ほとんど話すことのない上司に対して)
非常感谢科长, 但是那天我要去打工请不了假
(科長、ありがとうございます。
しかしその日仕事があって休みが取れません。)
- (160) . 発話例 JNSF26 : (普通の知り合いに対して)
ありがとうございます! お祝いの会なんて嬉しいです。
ただ、土曜日は前から予定が入ってまして…
このところちょっと立て込んで…
- (161) . 発話例 CNSF17 : (普通の知り合いに対して)
抱歉我约了男朋友。
(ごめんなさい。彼氏とデートがあります。)

(162) . 発話例 JNSF17 : (初めて会う後輩に対して)

ありがとう。せっかくなのですがー、参加したいけど、土曜日は前から予定が入ってまして…

(163) . 発話例 CNSM27 : (初めて会う後輩に対して)

不好意思啊，周六和朋友约好了，谢谢啊 (CF09)
(すみません、土曜日は友達と約束があります。
ありがとう。)

上記の例文では、同じ状況の「誘い」について、中国語と日本語は、「母親」・「弟」・「親友」に対して「直接的断り」が使用されることが多く、一方、「知らない上司」・「普通の知り合い」・「初対面の後輩」に対して、上下に関係なく「言いさし」がより多用していることがわかる。

生駒・志村 (1993) では、日本語母語話者は文を途中で切ることにより、直接的な断りを避ける傾向があり、特に自分より地位の高い人への断りに多く使われるとしている。これに対して、アメリカ人日本語学習者はこの傾向がわずかな程度であると述べている。けれども、本研究の調査では、中国語母語話者と日本語母語話者が断る際に、「上下関係」より、「親疎関係」を基準にして「言いさし」を使用する傾向があると言えよう。

荻原 (2015) は、日本語母語話者が一対一で行う 15 分間の自由会話を調査した結果、性別による有意な差はないが、「親しい者同士の会話より、距離感のあるペアの方が言いさしを使用している。」としているが、今回の調査の結果は、荻原 (2015) と一致している。

8.6.3 要件の内容による考察

本調査は、要件を「依頼」と「誘い」に分けてそれぞれ場面設定を行ったので、それによる日中両言語の異同について考察したい。使用頻度を図 8-4 に示す。

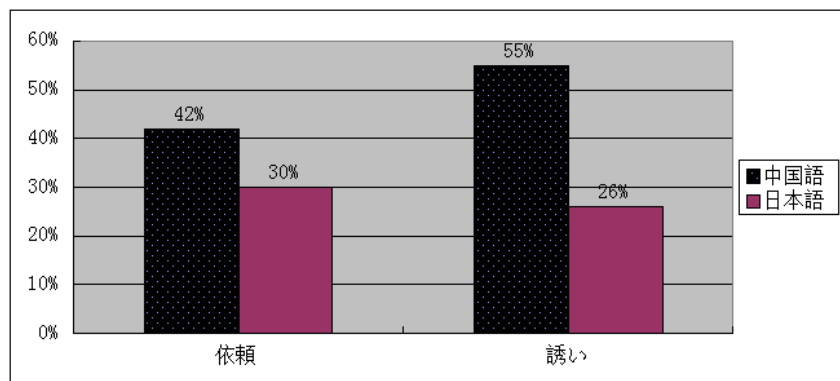


図 8-4 「依頼」を断る行為と「誘い」を断る行為における「言いさし」

図 8-4 を見てわかるように、中国語では、「誘い」を断る行為は、「依頼」を断る行為より、「言いさし」が多用されており、一方日本語では、「依頼」を断る行為は、「誘い」を断る行為より、「言いさし」が多用される。

以下、まず、「誘い」を断る発話例を挙げる

- (164) . 発話例 JNSM29 : ありがとうございます。大変ありがたいのですが、
土曜日は予定があるので、別日にしていただけませんか。
従属節 主節

- (165) . 発話例 CNSM13 : 好主意，是该聚聚，放松一下，太遗憾了，
我国内同学来了，周六来我家
従属節のみ
(訳：いい提案だね！皆集まって気分転換する必要があるんだね。残念だけど、同級生が中国から来ていて土曜日家に泊まる予定だ。)

上記の例から分かるように、日本語母語話者は、「～ので、～いただけませんか」のように、理由を説明してから「別日にしていただけませんか」と代案や関係維持的な情報を提供しているが、中国語話者の発話にも「这周六已经被约了，请问星期天可以吗？」のように「理由+代案提供/関係維持発話」とのパターンが見られるが、「依頼」を断る発話と比べると多くない。

次に、「依頼」を断る発話例を挙げる。

- (166) . 発話例 JNSF26 : Apple Watch 人気みたいですね～。
でも、道中に AppleStore が無いんで...ごめんなさい！
従属節のみ

- (167) . 発話例 CNSF20 : 我这次行李太多啦，下回给你带。
従属節 主節
(訳:今回荷物がいっぱいなんで、今度買ってくるね。)

上記の例から分かるように、中国語母語話者は、「我这次行李太多啦，下回给你带」(訳:今回荷物がいっぱいなんで、今度買ってくるね。)のように、理由を説明してから「下回给你带(訳:今度買ってくるね)」と代案や関係維持的な情報を提供しているが、日本語話者の発話にも「うーん、買い物かー。土曜はあんまり行きたくないかなあ。服はいいから、また今度行こうよ。」のように「理由+代案提供」とのパターンが存在するが、「下親」「同親」「上親」の場合しか見られなく、特に家族内の発話によく現れることがわかる。

以上の考察により、「誘い」場面と「依頼」場面における使用上の異同は、以下のような理由に関連するのではないだろうか。

まず、「誘い」と「依頼」の特徴をまとめる。依頼は、自分のために相手に時間、労力や金銭などを欠けさせるものであり、話し手が聞き手に何かの「依頼」をする発話行為の根本的な目的は、「依頼」という発話行為を通してその目標を達成することにある。この発話行為は、話し手にとって利益があり、自身の利益のために、聞き手に行為を求める「働きかけ」表現である。

そのため、「依頼」という発話行為は、「他者に邪魔されたくない」(Brown & Levinson 1987) というネガティブ・フェイス (negative face) を脅かす行為と考えられている。

一方、「誘い」は、話し手だけでなく、会話参加者のいずれも利益がある発話行為である。川口他 (2002:21) は、待遇表現としての「誘い」は、①「相手」と一緒に行くことで「自分」にもまた「相手」にも利益がある行為を、②「自分」と「相手」が一緒に行くよう持ちかけ、③それによって「自分」と「相手」との人間関係を設定／維持／強化する行動展開表現であると述べている。

「誘い」と「依頼」に対して、「断り」は、言語行為における「断り」は、相手の要求（「誘い」と「依頼」）に応じないという否定的な意味表現で行う行為のため、誤解やトラブルを招きやすい。フェイスを脅かす行為が起こす誤解やトラブルを最小化するため、さまざまなポライトネス・ストラテジーを使用しており、発話例における「言いさし」による「理由説明」や「提案提供」も含まれていると想定できる。

したがって、日本語母語話者と中国語母語話者が「誘い」と「依頼」に対する捉え方に関わっているのではないかと考えられる。また今度の課題として文化面で考察していきたい。

8.7 日本語と中国語における「言いさし」の相違

下記の (168) (169) は、知らない年下の人からのアンケートの依頼を断る時の回答である。理由表現においていずれも構造的な「不完全文」が使用されているが、中国語には接続のマーカーがなく、「無標識従属節」の「言いさし」が使用されていることがわかる。

(168) 発話例 JNSF23 : すみません。今急いでるんで...

(169) 発話例 CNSM11 : 不好意思现在有点急事。
(訳 : すみません今急用がある。)

同じ例は他の場合にも見られる。

(170) 発話例 CNSM30 : 科长, 不好意思, 我回国两天日程很紧不太有时间

(訳：科長、申し訳ありません。帰国中はスケジュールが詰まっており、時間はあまりない。)

このような例文は、断り行為の理由表現のマーカ―としてすべての CNS 被調査者によって使用され、一方、下記のような接続表現がつく「非完全文」は、一例もなかった。

(171) ? 不好意思, 因为现在很忙。

(訳：すみません、今忙しいので。)

(172) ? 科长、不好意思、因为我回国两天日程很近 不太有时间。

(訳：科長、申し訳ありません。帰国中はスケジュールが詰まっており、時間があまりないので。)

接続表現による「非完全文」について、フォローアップインタビューで容認度について尋ねた結果、80%の非調査者は「断りの時に優先しない」「主張が強く聞こえるので使用しない」「発話が終わっていないように聞こえる」など、不使用という意見が伺えた。また、「どうして」と聞かれる場合は使用する可能性が比較的に高いという母語話者の認識も伺えた。

中国語と日本語は、言語の類型が異なるため、複文におけるさまざまな相違点が見られる。最も根本的な相違点は、日本語は、膠着語的特徴として接続表現は従属節への後接が要求されるため、従属節の構文要素への配慮が極めて重要であるに対して、中国語は、孤立語であるため、接続表現は形態的に拘束されずに使われ、「まったく用いなくてもよい」(劉他 1991) というような特徴がある。そこで、形態を重視して形態的な標識が豊かな日本語と語順を重視して形態的標識に乏しい中国語と、同じ場面で使用されて焦点の位置が同じであっても、言語の類型が異なるため、マーカ―の位置で相違が生じてくることが予想される。

中国語の複文において、「節」と「節」の組み合わせは、語順による組み合わせ方と接続表現による組み合わせ方との2種類に分けられる。前者は「無標複文」(「意合複文」／「無標識複文」)と呼ばれ、一方、後者は「有標複文」(「形合複文」／「無標識複文」)と呼ばれる。

また、「無標識複文」に関して、趙恩芳(1998:33)において、次のように定義されている。

分句与分句组合时不借主关联词语的帮助，分句之间的语义关系和逻辑事理主要通过语序表现出来。这种组合方法叫做“直接组合法”，也叫“意合法”。用这种方法组合成的复句叫做“无标志复句”，也叫“意合复句”。

(訳：分句と分句を組み合わせる際に、関連詞語の助けを借りずに、分句の間の語義関係や論理などについて主として語順を通じて表現する。このような組み合わせ方は「直接組み合わせ法」と呼ばれ、「意合法」とも呼ばれている。した

がって、こうした方法で組み合わせられた複文は「無標識複文」と称され、「意合複文」とも言われている。)

上記の分析により、「無標識従属節」の「言いさし」は「言いさし」として判断でき、中国語も、日本語と韓国語と同じように「言いさし」が存在するといえる。具体的な談話機能についてまた次回の課題として解明していきたい。

8.8. まとめおよび日本語教育への示唆

本研究では、中国語の不完全文を「無標識従属節」の「言いさし」として捉え、中国語における「言いさし」の実態、及びある特定の場面における日中両言語の「言いさし」の異同を明らかにすることを試みた。

具体的に、日本語と中国語の両言語における断り行為を取り上げ、断り発話において最も使用頻度の高い理由説明発話に着目し、理由説明表現マーカーとしての「言いさし」を考察した。日本語母語話者（JNS）と中国語母語話者（CNS）による「言いさし」の使用の共通点と相違点を構造面と待遇面から明らかにした。具体的に、下記の通りである。

(1) 全体的な使用頻度をみると、「言いさし」は、断りの理由表現のマーカーとして日中両言語のいずれも頻繁に使用され、中国語における使用率が日本語より多いことが分かった。

(2) 断る相手との「関係性」をみると、両言語において、いずれも「親疎」が「上下」より重視される傾向が見られた。中国語では、相手が「目上」・「同等」・「目下」という場合において「言いさし」の使用頻度がほぼ同じであるが、日本語では、「目上の相手に対して「同等」の相手と「目下」の相手より使用率がすこし高いことが論じられた。つまり、日本語母語話者は「上下関係」及び「親疎関係」に、中国語母語話者は「親疎関係」のみに敏感に反応することがわかった。

(3) 用件の内容をみると、中国語では「誘い」を断る行為は「依頼」を断る行為より「言いさし」が多用されるが、一方、日本語では「依頼」を断る行為は「誘い」を断る行為より「言いさし」が多用されることがわかった。

(4) 最後に、形態を重視して形態的な標識が豊かな日本語と語順を重視して形態的標識に乏しい中国語の特徴をまとめた。さらに、中国語における「言いさし」の存在を主張し、「無標識従属節」の「言いさし」は「標識従属節」より丁寧で多用されることを論じ、構造面から中国語における「言いさし」を考察した。

張（2011:18）で「意味的に対応すると考えられる言語形式（A）の、目標言語における「語用論の顕著性」よりも母語におけるそれが高ければ、母語転移が起りやすい。一方、目標言語における「語用論的顕著性」よりも母語におけるそれが低ければ、母語転移は起りにくい」と示唆されているように、「語用論の顕著性」などのような目標言語におけるその言語形式の扱い方を明らかにしなけ

れば、母語転移による原因であるかどうかについて、判断できないのではないだろうか。

また、現在の日本語文法教育において、構造上の「完全文」に重点が置かれているため、これから、「言いさし」を導入する際に、円滑なコミュニケーションを図るための1つのポライトネス・ストラテジーとして学習者に認識させる必要がある。さらに、日本語の授業では、「断り」などの特定場面の言語行為を取り上げる際に、それにおける「言いさし」の使用を関連させて指導して会話練習をさせることも効果的であろう。

「言いさし」の種類について、楠本(2015:56)は、注意・要求・断りの場面に使用される「けど」類・「から／ので」類の「言いさし」に待遇的に表現効果が異なり、ケド文においては聞き手に対し認識の改変を求めるというケド本来の機能による聞き手への能動的な要求が含意されるため、聞き手の感情的反応を誘発し待遇性が低められた表現効果をもたらす。一方、ノデ文は事情説明を表すというノデの機能により、「こういう事情である」と話し手のおかれている状況を訴えることで聞き手の理解を求めるという懇願的行為が暗示され、聞き手の認識改変を求めるとケド文と比べ談話効果として待遇的に高められたものとなっている。しかし、中国語において「けど」類・「から／ので」類の「言いさし」に当たる表現形式が乏しいため、中国人学習者が習得する際に工夫する必要がある。

8.9 本章のまとめ

本章では、両言語使用者にそれぞれの言語で談話完成テストを実施した結果、(1)「言いさし」は、断りの理由表現のマーカースとして日中両言語のずれも頻繁に使用され、中国語における使用頻度が日本語より高いこと、(2)日本語母語話者は「上下関係」及び「親疎関係」に、中国語母語話者は「親疎関係」に敏感に反応すること、(3)中国語では「誘い」を断る行為は「依頼」を断る行為より「言いさし」が多用され、日本語では「依頼」を断る行為は「誘い」を断る行為より「言いさし」が多用されることがわかった。最後に、形態を重視して形態的な標識が豊かな日本語と語順を重視して形態的標識に乏しい中国語の特徴をまとめ、中国語において「無標識従属節」の「言いさし」は「標識従属節」より丁寧で多用されること論じた。

次章では、「言いさし」に関して音声面から学習者への聴取実験を実施する内容を述べる。

第9章

中国人学習者における「言いさし」

の聴覚情報処理に関する実験

柴田 (2012) で「第二言語の韻律習得において、発話産出過程に関する自己モニターを可能にするためには、韻律の知覚能力の習得が不可欠である。」と指摘されているように、「言いさし」の認識および「接続助詞」との判別基準を学習者に提示するために、知覚能力に関する訓練も必要となってくる。それを行う前に、学習者の知覚特徴を解明し、今の問題点を掘り出す必要がある。

そこで、本章では、学習者における「言いさし」の「けど」類と接続助詞の「けど」類の知覚状況を日本語母語話者と比べながら解明していく。構成は以下の通りである。まず、1節では問題のありかを提示する。2節では先行研究を紹介する。3節では研究課題、4節では実験仮説、5節では実験の流れを述べる。6節では実験結果の分析を述べる。7節では考察を述べ、8節ではまとめおよび日本語教育への示唆について論じる。最後に9節で、本章のまとめをする。

9.1 導入

話し言葉において、「けど」類が現れる発話は、「言い切り」であるかどうかにより、以下のような2種類に分けられると考えられている。(白川 2009)

(173) 「黒でもいいけど、あんまりきれいじゃないでしょう。」

(174) 「言っていていいかわかりませんが。」

「文の切れ目の判断には音声はかなり重要な役割を果たしている」(郡 1996) ため、第6章では、2種類の「けど」類を判別するためのモデル構築を試みるために、「日本語話し言葉コーパス」(以下:CSJ)を使用し、それぞれに現れる韻律的要素を考察した。その結果、「接続助詞」の「けど」と「言いさし」の弁別に関する重要な要素として、発話末の下降(final lowering)、句末音調、及び句末の長さが関係することがわかった。

このような特徴は、種類の「けど」類を判別する際の参照基準として位置づけられる。言語コミュニケーションを行う際に、母語話者同士は音声からの感情や表現意図の認知は一般的に高いと言えるが、第2言語学習者がこの能力を目標言語に転移させるためには、個々の言語文化特有の規則が目標言語への理解を困難にさせているという報告も多い(福岡 2012)。このことから、母語話者の音声的な判断基準および認知の参照点を学習者に提示することが重要視されている。

しかし、「長い間、語学教育は「正しい」音声情報を与えれば学習者は「正しく」生成するという黙然の了解のもとで進められてきたことの背後には、学習者の聴覚処理系と脳の言語処理系は、あたかもマイクロフォンで取り入れた外界の音そのまま録音されると同様に機能するという思い込みがある」という林他(2011:73)で指摘されているように、音声規則をそのまま学習者に提示するのではなく、その項目に対して学習者の聴覚処理系と脳の言語処理系がどのように働いているかを考察する必要がある。しかしながら、実際のコミュニケーションにおいて日本語母語話者が「けど」の発話を聞いて知覚上でどのような要素に依存して判別しているか、また、その情報は日本語学習者は身につけているか、ということはまだ明らかになっていない。

その上、中国の日本語教育現場を見ると、日本語の発音指導および聴解指導において、アクセントは重要視されている一方、それ以外の韻律的特徴は、重視されていないため、指導がほとんど行われていないことがわかる。中国人学習者は、日本語授業で日本語の発音、特に韻律的特徴について時間をかけて学ぶ機会は少なく、関心も高くない(張 2015)という現状が存在する。この問題が放置されてしまうと、中国人学習者は、プロソディの習得が遅れてしまう恐れがあり、文法と音声の接点に位置される「言いさし」の習得、および日本語コミュニケーションにも支障が生じる。

そこで、第2言語習得において、発音は運動指令のプログラミングに依存しているのに対し、知覚は音声の流れにおける言語学的に意義のある単位のカテゴリ化によるものである(清水 2008)ことから、本章では、二種類の「けど」類の聴取実験を行い、日本語母語話者と日本語学習者の知覚上における判別要素及び日本語学習者の理解状況を考察し、話し言葉に多用される「言いさし」の「けど」類の韻律的特徴を知覚の面から記述する。

9.2 先行研究

学習者を対象とするプロソディの知覚実験に関する研究は、河野(1992)、大塚(1998)、昇地他(2007)、林他(2011)があげられるが、2種類の「けど」類および「言いさし」の音声知覚に関する考察は、管見の限り、見当たらない。以下では、知覚実験に関する研究を紹介する。

河野(1992)は、日本語の「疑問文」と「平叙文」の文末音調の音響的特徴を分析した上で、その音響分析を踏まえて作成した合成音声で、「疑問文」／「平叙文」を判別できるかどうかについて、日本語母語話者と外国人日本語学習者を対象に知覚実験を行った。その結果、日本語母語話者と外国人日本語学習者とで知覚の仕方に差異があること、日本語学習者レベルが上がっても知覚の仕方は日本語母語話者のそれには必ずしも近づいておらず、文末音調の習得には意識的学習が必要であることを指摘している。

また、大塚（1998）は、中国語・韓国語を母語とする中・上級日本語学習者に聴取実験を行い、表現意図（同意要求・非難・否定）を判断する能力の習得に関する考察を行った。その結果、イントネーションから表現意図を判断する能力の習得には母語と学習レベルが影響すること、中国語母語話者は上昇と非難について区別できず、否定→同意要求→非難の順で習得する可能性があること、表現意図とイントネーションは自然に習得できないことを明らかにした上で、表現意図とイントネーションの関係は、意識的な学習が必要であると指摘している。

昇地他（2007）は、フランス語母語話者と日本語母語話者を対象に、日本語の発話態度をどう認識するかについて実験を行った。その結果、韻律的特徴によって表現される様々な発話態度は、言語文化を共有する母語話者の間では共通の認識が存在するが、異文化環境や非母語環境では、異なった発話態度として認識される可能性があり、特に、文化的側面の強い発話態度は、学習者の日本語の運用能力が向上しても、母語の知覚パターンの干渉が強く残り、認識のズレが生じることを指摘している。

林他（2011）は、母語の音声習慣が知覚に与える影響について日本語母語話者と中国人日本語学習者に聴取実験を行った結果、声調言語を母語とする中国人日本語学習者は、日本語母語話者よりも発話末のピッチの知覚が鋭敏である現象が観察され、母語の影響による「知覚の転移」が予想されると示唆している。

最後に、張（2015）は、中国人日本語学習者の日本語韻律理解力について、聞き取り実験を実施した結果、統語的あいまい文のイントネーションに関する理解力は非常に低く、日本語学習年数や日本在住期間などと関係が少なく、個人差も大きいことがわかった。

以上の先行研究とみると、母語の音声習慣が目標言語の知覚に影響を与えること、日本語学習者のレベルが上がっても知覚の仕方は日本語母語話者のそれには必ずしも近づいていないこと、中国人学習者が発話意図とイントネーションの関係、および統語構造とイントネーションの関係についての理解力が低いことがわかる。そこで、以下では、2種類の「けど」類を取り上げ、中国人学習者における音声による知覚状況を考察し、先行研究の指摘を検証する。

9.3 研究課題

「話し手は時間的制約の中で音声によって発話した要素を記憶しつつ、文法規則に照らし合わせながら次の要素を付けくわえていくという形で表現されていく」（佐藤 1994:70）という話しことばの発話メカニズムは、学習者が理解できるかどうかということを検証する必要がある。そこで、筆者は CSJ における考察結果を踏まえ、CSJ に収録された音声資料を音声分析ソフト Praat により刺激

文を作成し、日本語母語話者と中国語母語とする学習者という 2 つの被験者グループに提示して聴き取り実験を行うことにした。そこで、本研究では、以下の研究課題を解明する。

(1) 二種類の「けど」類に対して、日本人母語話者はどのように知覚しているか。

(2) 二種類の「けど」類に対して、中国人日本語学習者はどのように知覚しているか。日本語母語話者の知覚と何か相違点があるか。

(3) 習熟度及び学習環境により、中国人学習者における知覚のカテゴリーは異なるか。

9.4 実験仮説

上述した 3 つの研究課題に基づいて、以下のように 3 つの実験仮説が立てられる。

(1) 第 6 章では、CSJ をデータとして二種類の「けど」類の音韻的な特徴を考察し、発話末の下降 (final lowering) の有無、句末音調、及び句末の長さの三つの要素において異なる傾向がみられた。そこで、本実験では、下降音調 (L%) の最小 F0 値、句末音調、及び最終モーラ長をパラメータとして、音声刺激を作成した。これにより、カテゴリー知覚の傾向がある程度見られ、日本語母語話者は発話末の下降、句末音調及び句末の引き伸ばしを要素として「言いさし」の「けど」類を判断することが予想される。

(2) 現在の日本語教育現場において、学習者にとっては、命題だけの表現の習得よりも、文末、或いは発話末の表現を適切に使用することのほうが難しいと指摘され (池田 1995)、特に、日本語において述語が存在する文末、発話末は極めて重要な部分であるため、中国の日本語教育の現場では、文末まで明確に言うことを要求することが多い。最後まで言い切らなかったり、ポーズを入れたりすることで、「言語の適性が低い」「言語能力が不十分である」と言われる学習者も多く見られるため、多くの中国人日本語学習にとって文末の習得はかなり難しいといっても過言ではない。そのため、本実験では、「接続助詞」の「けど」類より、「言いさし」のほうがさらに判断しにくく、二種類の「けど」類の判断基準が分からないことが予想される。

(3) 学習者の目標言語音に対する知覚様式には、母語ばかりでなく、目標言語の学習経験も影響を与え、目標言語の学習が深まるにつれ、目標言語の音範疇が新たに構築され、知覚様式に変化をもたらす (Best and Tyler 2007) ため、言語学習には、習熟度と学習環境に影響を与えられることが多いと考えられている。

そこで、本実験では、二種類の「けど」類に対しても習熟度が高いほど中国人学習者の知覚カテゴリー化の程度が高くなることが予想される。

9.5 実験の流れ

9.5.1 発話データの収集

音声分析ソフト Praat を使用して、CSJ に収録された音声資料（対話資料と講演資料）から「けど」類が含まれる発話を抽出し刺激文を作成した。また、対話・独話、言いさし・接続助詞（筆者と日本語母語話者三名と判断の結果）、下降調（L%）・上昇調（H%）・上昇下降調（HL%）のバランスを考え、刺激数は50にした。なお、上昇下降調の「けど」類発話には、接続助詞の「けど」しか見られないので、10とした。具体的に表1にまとめる。

独話データと対話データと両方取り上げる理由は、「対話音声の特徴は話し手と聞き手に顕著かつ複雑な交互作用が存在することだが、だからと言って独話音声には交互作用が存在しないと考えるはならない。独話音声にも聞き手が存在しており、話し手に対する影響も明瞭にみてとることができる。」と前川（2014:7）で指摘されているように、異なる発話スタイルのデータを比較することにより、日本語母語話者および学習者の知覚特徴がさらに明らかになるのではないかと考えるためである。

表 9-1 刺激文の内訳（数：件数）

発話スタイル	句末音調	タイプ	刺激数
独話	下降調（L%）	接続助詞	5
		言いさし	5
	上昇調（H%）	接続助詞	5
		言いさし	5
	上昇下降調（HL%）	接続助詞	5
	対話	下降調（L%）	接続助詞
言いさし			5
上昇調（H%）		接続助詞	5
		言いさし	5
上昇下降調（HL%）		接続助詞	5
合計			50

9.5.2 ExperimentMFC ファイルの準備

ExperimentMFC ファイルは、選択肢として 2 つのボタンに表示する文字列を順に明記する。本実験では、一回目に提示される際に「継続」という選択肢を画面左側のボタンに、「終了」という選択肢を右側のボタンに表示し、二回目に提示される際に、「継続」という選択肢と「終了」という選択肢との位置が変わるように設定する。

また、「numberOfDifferentResponses」によって、各刺激は、それぞれ合計 2 回提示することを設定する。

さらに、ExperimentMFC ファイルの中「PermuteBalancedNoDoublets」では、全ての刺激が一回ずつランダムな順序で提示され、その後別のランダムな順序で一回ずつ呈示される、ということを繰り返す。その際、同じ刺激が連続して現れることがないように調整する。

このように、「接続助詞」としての「けど」類発話と「言いさし」としての「けど」類発話について、それぞれ 50 個 (2 回の繰り返し×25 個の刺激) の音声サンプルと実験用の ExperimentMFC ファイルを作成した。

9.5.3 実験の実行

9.5.3.1 被験者

本実験の被験者は、表 1 に示すように、関東圏在住の日本語母語話者 10 名、日本の日本語学校及び大学、大学院に在籍している中国人日本語学習者 20 名、及び中国の厦門大学に在籍している中国人日本語学習者 20 名である。(すべて非聴覚障害者)

また、日本語母語話者、JFL 上級学習者、JFL 中級学習者、JSL 上級学習者、JSL 中級学習者、それぞれ JPN、CHNFH、CHNFM、CHNSH、CHNSM と記す。

表 9-2 被験者の内訳 (数字 : 実数)

被験者			
日本語母語話者 (JPN)			10 人
中国人 学習者	JSL 学習者	N1 レベル (CHNSH)	10 人
		N2~N3 レベル (CHNSM)	10 人
	JFL 学習者	N1 レベル (CHNFH)	10 人
		N2~N3 レベル (CHNFM)	10 人
合計			50 人

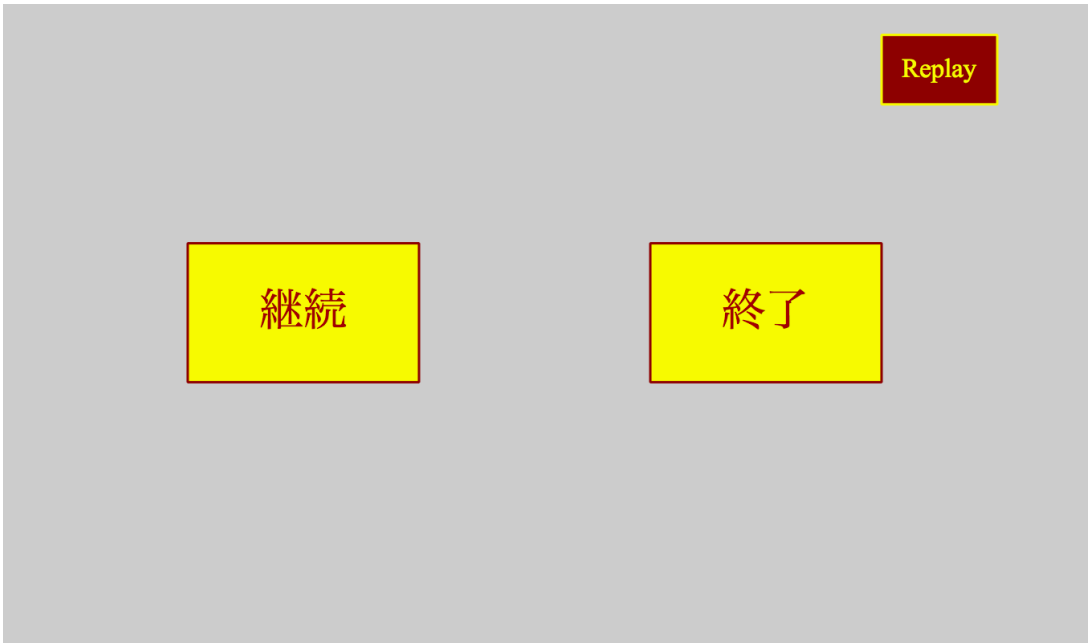
9.5.3.2 提示方法

実験の前に、スピーカーやヘッドフォンを付けて無理なく聴けるようにパソコンの音量を調節した。被験者に口頭で説明してから、「けど」類発話に関する聴取実験が行われた。

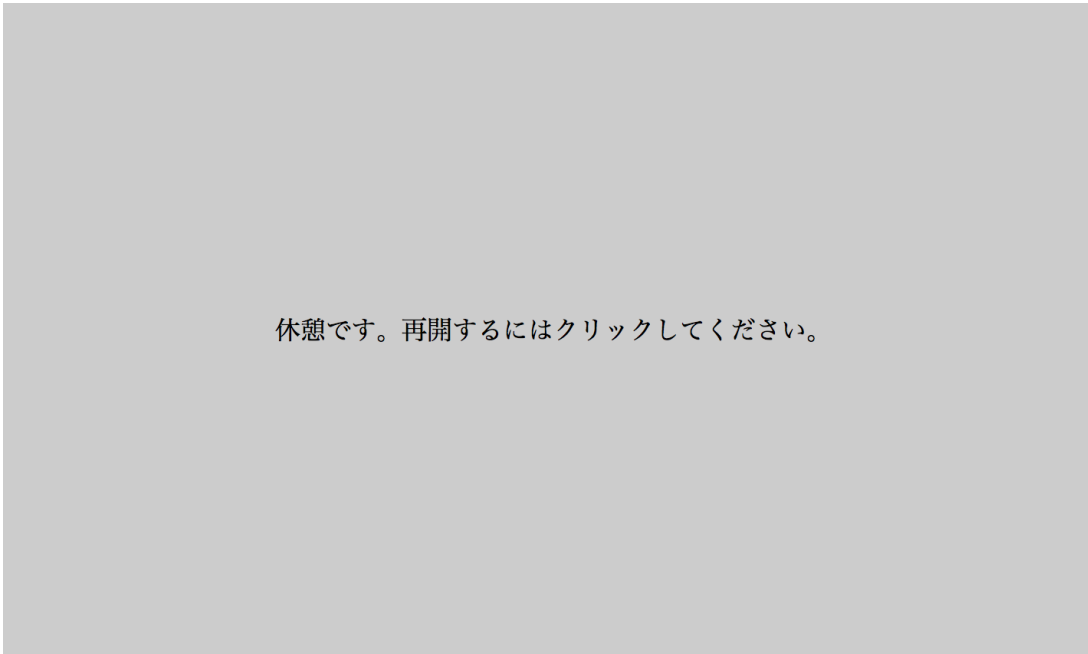
聴き取り実験では、被験者に音声サンプルをランダムに聞かせながら、画面上に選択肢のボタンを提示し、判断してもらった。また、刺激 20 個おきに被験者に休憩を入れた。実験の画面は以下のようになっている。

話し手が、この発話のあと、
発話をそのまま継続すると思うかか、それとも
終了すると思うかか、回答してください。

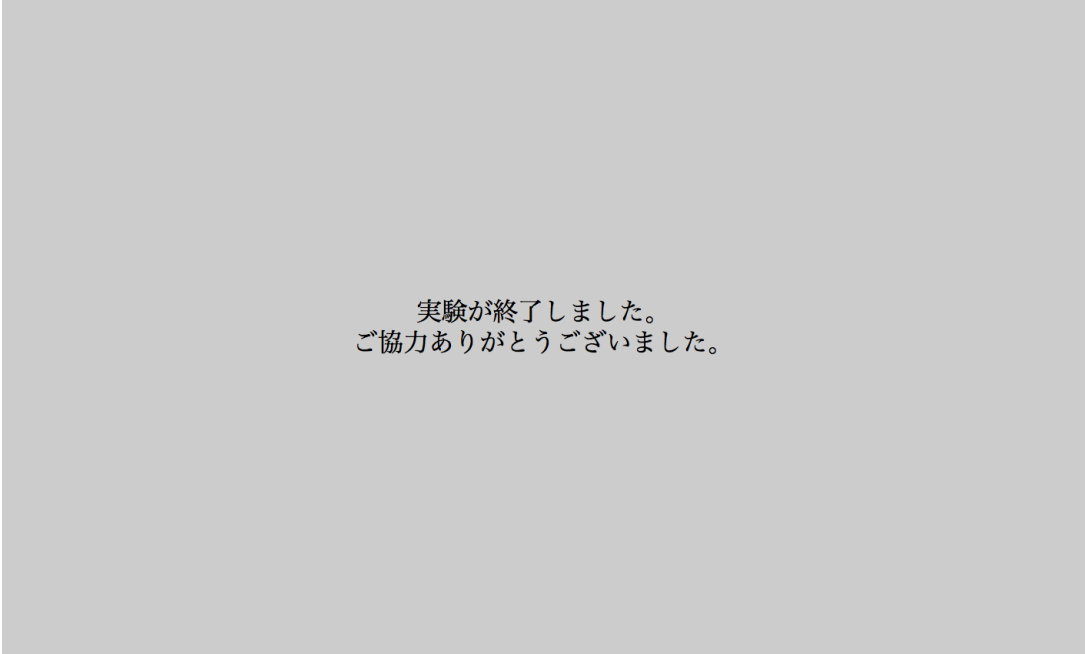
クリックして実験を始めてください。



2



3



実験が終了しました。
ご協力ありがとうございました。

4

図 9-1 実験に用いた画面

9.6 実験結果の分析

9.6.1 一回目及び二回目の回答結果統計

実験に用いた音声刺激は、CSJの音声資料の一部である。具体的には、独話および対話のそれぞれの50発話を音声刺激として用意し、これらの刺激をランダムに2回繰り返し提示した。したがって、実験プランは、発話(50)*反復(2)で、各協力者の回答数は100となった。

表9-3は、全体の一回目及び二回目の回答結果である。一回目の選択数と二回目の選択数はほぼ同じ数字のため、すべて分析データとして扱うことにした。また、日本語母語話者の7割一致している刺激文を取り出し、それぞれ学習者はどのように判断したのか詳しく考察する。

それから、10名の母語話者のうち7割、つまり7名以上の判断が一致する刺激文は、840件であり、総件数1000の84%を占めていることがわかる。つまり、84%の回答が一致しており、今回判断基準としたデータは妥当なものであるとみなせるだろう。

表 9-3 一回目と二回目の結果（数：件数）

受験者	タイプ	回答	一回目	二回目
JPN	接続助詞	終了	6	5
		継続	294	295
	言いさし	終了	107	110
		継続	13	10
CHNFH	接続助詞	終了	95	95
		継続	205	205
	言いさし	終了	87	87
		継続	33	33
CHNFM	接続助詞	終了	144	143
		継続	156	157
	言いさし	終了	97	96
		継続	23	24
CHNSH	接続助詞	終了	91	83
		継続	209	217
	言いさし	終了	88	89
		継続	32	31
CHNSM	接続助詞	終了	94	96
		継続	206	204
	言いさし	終了	79	81
		継続	41	39

9.6.2 学習者の正答率

表 9-4 学習者の正答率（数：件数）

被験者	接続助詞の「けど」類			言いさしの「けど」類	
	下降調 (L%)	上昇調 (H%)	上昇下降調 (HL%)	下降調 (L%)	上昇調 (H%)
CHNFH	93(52%)	150(68%)	167(84%)	87(78%)	70(65%)
CHNFM	76(42%)	109(50%)	128(64%)	104(83%)	111(77%)
CHNSH	109(61%)	159(72%)	158(79%)	71(77%)	61(70%)
CHNSM	110(61%)	154(70%)	146(73%)	70(75%)	66(55%)

表 9-4 には、二種類の「けど」類発話の下降調 (L%)・上昇調 (H%)・上昇下降調 (HL%) の刺激文に対する学習者の正答率を示す。発話意図が「上昇・下降・平板などというピッチ感覚を生む基本周波数 (F0)、音圧・持続時間の変動といった音響のパラメータ、音域・音色・表現機能など」(西沼・代田 2007:55-57) に関係しており、「発話末の韻律的特徴の変異から、発話者の心理や態度を聞き取っている様子が伺われた」(林他 2011:91) と述べられているように、イントネーションは、発話意図および相手の意味理解に深く関わるものといえるが、表 9-4 によると、学習者の正答率がかなり低いことがわかる。

また、日本語レベルの向上に従い、正答率は高まる傾向がみられるが、それにしては正しく知覚していないことも観察される。谷部他 (2010) は、異なる韻律的特徴を有する発話末の聴取実験を行い、中国人日本語学習者は、日本語母語話者よりも発話末のピッチの知覚が鋭敏であると報告しているものの正しく知覚できないということは、学習者は二種類の「けど」類の判別、特に「言いさし」の「けど」類の理解に困難が生じていると言える。

しかし、句末音調のようなプロソディ情報は、対話言語において極めて重要視されており、市川 (2011:34-35) により、「対話言語における言語的情報が音声という物理的実体の上で実現されていることを考えるならば、おそらくは、プロソディや身体動作 (視線など) に予告情報が存在し、それらと文脈や言語的情報がマルチモーダルに機能している」と指摘されているように、対話参加者の予告に関連しており、誤判断をしてしまうと誤解などを引き起こし、コミュニケーションに支障を来す恐れがある。

一方、現在の日本語教育現場では、時間的制約があることや、教師が音声指導に自信がないということから、「音声指導では単音が中心で、プロソディに関しては重要視されていないのが一般的な傾向である」(大山 2016)。特に「けど」類に関する指導を受ける際に、単なる逆接を示す接続助詞と習い、プロソディへの関連について一切習得できないままとなり、学習者がわからないまま授業が終わってしまうことにより、結局相手の「けど」類発話が終わるかどうかに関する判断ができなくなってしまう。

そこで、この問題を解決するために、まず、学習者は認知上で「けど」類についてどのように認識しているのかを考察する必要がある。そこで、以下では、母語話者の知覚状況の相違を踏まえた上、学習者が知覚した二種類の「けど」類発話の特徴を観察する。

9.6.3 日本語母語話者の知覚特徴

本実験では、2種類の「けど」類に関する知覚状況を明らかにするために、9.5.3.1と同様の被験者を対象とし、それぞれ聴取実験を行った。母語話者の知覚が一致している刺激の分布を下記の表 9-5 にまとめる。

表 9-5 日本語母語話者の知覚が一致している刺激文の数

	下降調 (L%)	上昇下降調 (HL%)	上昇調 (H%)
独話継続型「けど」類 (KM)	4	5	5
独話終了型「けど」類 (SM)	4	0	3
対話継続型「けど」類 (KD)	5	5	6
対話終了型「けど」類 (SD)	3	0	2

表 9-5 から、今回の実験における分析用の刺激文がかなり少ないことがわかる。よって、これに基づいて統計をかけることができないが、第 6 章考察した音声的な特徴を検証するために、本実験日本語母語話者の知覚状況をまとめる。

9.6.3.1 発話末の F0 の基本統計値からみる母語話者の知覚特徴

日本語母語話者が知覚した発話の 2 種類の「けど」類の下降音調 (L%) の最小 F0 値 (下降調 L% の下降しきった点、及び上昇調 H% と上昇下降調 HL% の上昇成分の起点、) (Z スコア) は図 9-2 のようになる。

また、「Response_JPN_L%_F0」、「Response_JPN_HL%_F0」、「Response_JPN_H%_F0」は、下降調 (L%)、上昇下降調 (HL%)、上昇調 (H%) の場合を示す。それぞれ横軸は独話継続型の「けど」類 (KM)、独話終了型の「けど」類 (SM)、対話下降調継続型の「けど」類 (KD)、対話終了型の「けど」類 (SD)、というタイプを示している。縦軸は下降音調 (L%) の最小 F0 値を話者ごとに正規化して標準得点の Z スコアを表している。

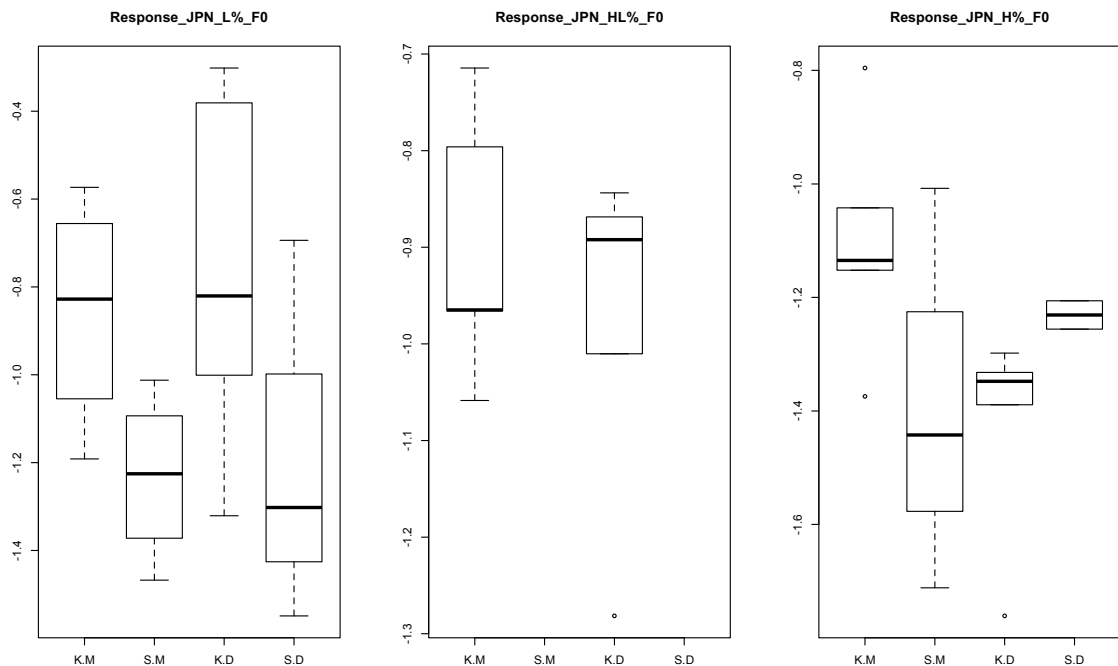


図 9-2 独話データ (M) と対話データ (D) における日本語母語話者が知覚した継続型の「けど」類発話 (K) と終了型の「けど」類発話 (S) における発話末の F0 (Z スコア) の基本統計値 (縦 F0 : F0 の Z スコア)

図 9-2 に示したように、独話上昇調、独話および対話の下降調の「けど」類の下降音調 (L%) の最小 F0 値 (Z スコア) は外れ値が多く、「言いさし」の場合には顕著な下降が見られ、対話データに比べて final lowering が影響を与えていることがわかる。これは、第 6 章の結論と一致している。

9.6.3.2 最終モーラ長 (Z スコア) の基本統計値からみる母語話者の知覚特徴

日本語母語話者が知覚した発話の 2 種類の「けど」類の最終モーラの持続時間 (Z スコア) は図 9-3 のようになる。

「Response_JPN_L%_MoraDur」、「Response_JPN_HL%_MoraDur」、「Response_JPN_H%_MoraDur」は、下降調 (L%)、上昇下降調 (HL%)、上昇調 (H%) の場合を示す。それぞれ横軸は独話継続型の「けど」類 (KM)、独話終了型の「けど」類 (SM)、対話下降調継続型の「けど」類 (KD)、対話終了型の「けど」類 (SD)、というタイプを示している。縦軸は最終モーラの持続時間を話者ごとに正規化して標準得点の Z スコアを表している。

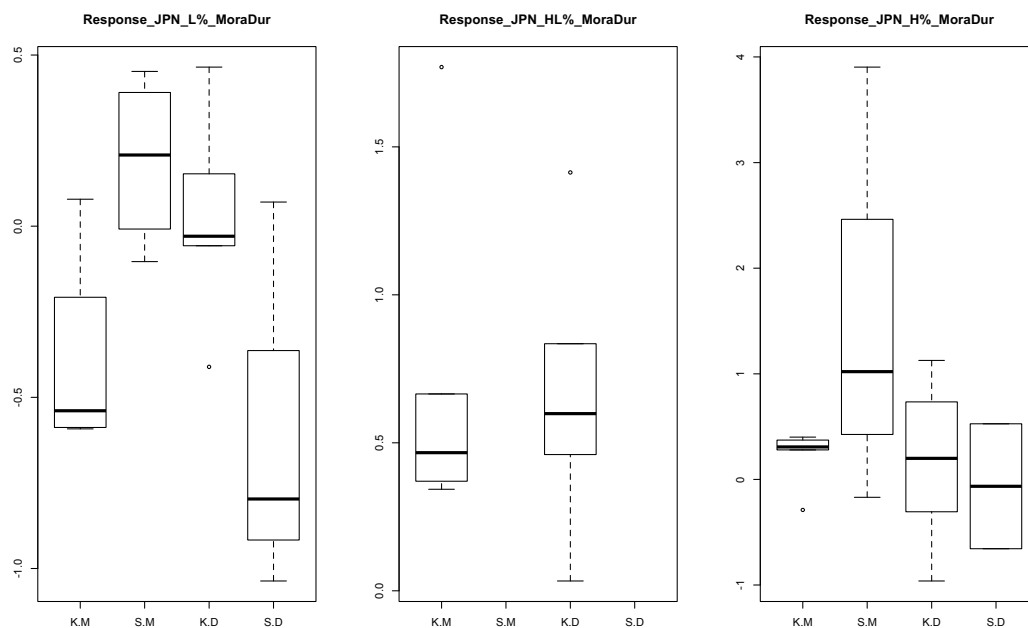


図 9-3 日本語母語話者が知覚した 2 種類の「けど」・「けれど」発話における発話末の最終モーラ長 (Z スコア) の基本統計値 (縦 MoraDur : 最終モーラ長 の Z スコア)

図 9-3 に示したように、下降調の「けど」類の下降音調 (L%) の最終モーラ長 (Z スコア) は、独話の場合に終了型に比べて継続型の方が長く、対話の場合に継続型に比べて終了型の方が長いことが観察される。さらに、句末音調の上昇に従って最終モーラの持続時間も伸ばされることもわかる。これも、第 6 章の結論と一致している。

9.6.4 学習者と母語話者との判断のずれ

本節では、日本語母語話者および中国人学習者が二種類の「けど」類を判断する上で、どのような特徴量に着目しているかを明らかにする。

具体的には、反応「継続」「終了」の二値を従属変数、発話末の F0、発話の最終モーラ長、および句末音調を独立変数とするロジスティック回帰分析を行った。

具体的に、本実験では、同じ刺激に対し、全ての被験者が二回ずつ判定するという繰り返いを伴うデータであるため、その影響を考慮する必要がある。そこで、刺激と被験者によるクラスターを考慮した一般化線形混合効果モデルを用いた。ランダム効果としてはランダム切片のみ考慮した。

表 9-6 ロジスティック回帰分析の結果

パラメータ	母語話者		学習者 FH		学習者 FM		学習者 SH		学習者 SM	
	推定値	p 値	推定値	p 値	推定値	p 値	推定値	p 値	推定値	p 値
(切片)	-15.22	<.01	-1.33	<.1	-0.70	n.s.	-1.56	<.05	-1.57	<.001
F0 値	-16.01	<.01	-2.08	<.01	-1.75	<.01	-1.98	<.01	-1.84	<.001
モーラ長	5.84	<.05	0.37	n.s.	0.14	n.s.	0.47	<.1	0.08	n.s.
BPM	-16.80	<.001	-2.34	<.001	-1.39	<.001	-1.94	<.001	-1.38	<.001

また、分析には R の `glmer` 関数を用い、二項分布とロジットリンクを指定した。なお、日本語母語話者のデータでは、上昇下降調 (HL%) の場合の反応が全て「継続」で「終了」が 0 件であり、分析上問題が生じることから、二種類の「けど」に対し類似した傾向を示す上昇調・上昇下降調を「上昇成分を伴う音調」

(Boundary Pitch Movement, BPM) として一つにまとめて分析した。結果を表 9-6 にまとめて示す。

日本語母語話者の結果を見ると、すべての特徴量 (パラメータ) が有意である。まず F0 値を見てみると、負の係数を持っており、F0 値が低くなるほど終了と判断される確率が高まることを意味する。モーラ長は正の係数であることから、発話の最終モーラ長が長いほど終了と判断される確率が高まる。句末の音調については、上昇成分を伴う BPM の場合に終了と判断される確率が低くなる (継続と判断される確率が高まる) ことが、つまり下降調の場合に終了と判断される確率が高まるのが分かる。この結果は、第 6 章で見てきた傾向と一致しており、日本語母語話者はこうした特徴量を利用して継続か終了かを判断していることが示唆される。

一方、中国人学習者の結果を見てみると、日本国内で N1 を持っている学習者 SH 以外は有意差が見られず、また SH においても有意傾向しか見られない。つまり中国人学習者は、日本国内か中国国内か、上級か初級か、どの学習環境・学習レベルにおいても、発話末のモーラ長を発話の終了・継続の判断にほとんど用いていないことが示唆される。

また、推定値の絶対値の大小を日本語母語話者と比較すると、いずれの特徴量の係数についても、日本語母語話者よりもかなり小さな値を示している。このことは、発話の終了・継続の判断に関してこれらの特徴量の影響が相対的に小さいことを意味する。

以上の分析は、日本語母語話者および中国人学習者がどのような特徴量に着目しているかを明らかにするために行ったものであり、学習者のデータには、正解・誤解がすべて含まれている。次節では、中国人学習者の誤解を絞ってみる。つまり、どういう特徴量が誤判断を引き起こしたのか、詳細に分析する。

9.6.5 学習者の誤判断から見る知覚特徴

学習者の知覚状況を明らかにするため、まず、学習者の全体的な判断状況を見てみる。各刺激に対して、各学習環境・レベルの学習者（SM・SH・FM・SM）の「10名」＊「二回ずつ判定するという繰り返し」＝20の回答が得られた。まず、継続型「けど」類に関する刺激データを表9-7にまとめる。

表 9-7 継続型（K）の刺激に対する正答数（数：人数）

刺激番号	FH	FM	SH	SM
D1	14	8	17	14
D2	12	12	15	18
D3	11	16	17	18
D4	18	14	20	16
D5	12	7	9	14
D11	13	14	13	12
D12	14	15	11	14
D13	11	2	10	10
D14	12	12	9	12
D21	17	9	10	14
D22	20	18	17	16
D23	12	14	17	18
D24	19	16	19	12
D25	12	4	13	14
S1	14	9	12	12
S2	17	14	18	12
S3	13	8	17	16
S4	12	6	12	16
S5	14	7	9	6
S8	13	8	13	12
S11	5	7	14	15
S12	10	6	13	11
S13	6	4	14	12
S14	6	6	10	11
S15	16	10	15	13
S21	19	16	20	18
S22	18	10	17	12
S23	14	19	14	15
S24	16	10	16	10
S25	20	12	15	17

それから、終了型「けど」類に関する刺激データを表 9-8 にまとめる

表 9-8 継続型 (K) の刺激に対する正答数 (数 : 人数)

	刺激番号	FH	FM	SH	SM
	D8	6	8	15	9
	D9	16	16	18	10
	D10	16	18	11	16
	D15	15	18	14	14
	D16	16	14	14	17
	D17	11	16	13	9
	D20	15	14	14	18
	S6	8	18	10	10
	S10	19	17	16	10
	S17	16	20	17	15
	S19	20	16	17	16
	S20	16	18	18	16

誤判断である発話の音声的な特徴を考察するために、学習者の正答率が低い、つまり誤解率が高いものを取り出して、どのような特徴量 (パラメータ) が知覚状況に影響を与えたのか観察する。なお、「誤解率が高い」と判断した基準として、各刺激に対して、各環境・レベルの学習者 (SM・SH・FM・SM) の「10名」*「二回ずつ判定するという繰り返し」=20の回答のうち、正答率 50%以下、つまり 10以下 (10も含まれる) の刺激を取り出して観察する。

まず、各学習環境・レベルの学習者 (SM・SH・FM・SM) の正答率が 50%以下である刺激数を表 9-9 にまとめる。

表 9-9 学習者 (SM・SH・FM・SM) の正答率が 50%以下である刺激数 (数 : 刺激の個数)

タイプ	SM	SH	FM	FH
継続型	3	6	17	4
終了型	5	0	1	2
合計	8	6	18	6

表 9-9 のデータに基づいた Fisher 検定の結果、 $p < 0.05$ で有意であった。また、SH および FH の誤った刺激文が一番少ない一方、FM の誤った刺激文が一番多いことが観察される。そこで、学習環境・日本語レベルの異同が「言いさし」の知覚および二種類「けど」類の判別結果に影響を与えていることがいえるだろう。

それから、各学習環境・レベルの学習者 (SM・SH・FM・SM) の正答率が 50%以下である刺激の発話末の F0、発話の最終モーラ長、および句末音調を独立変数

として平均値を計算して母語話者と比べる。

ア) 「継続型」(接続助詞)の「けど」類の刺激

表 9-10 正答率が 50%未満である継続型 (K) の刺激文の各特徴量の平均値

タイプ	JPN	SM	SH	FM	FH
F0	-1.02	-1.41*	-1.17	-1.06	-0.88
最終モーラ長	0.25	-0.14	-0.11	0.19	-0.01

表 9-11 正答率が 50%未満である継続型 (S) の刺激文の句末音調の分布
(数：刺激の個数)

タイプ	SM	SH	FM	FH
L%	1	3*	6*	4*
HL%	1	2	7	0
H%	1	1	4	0

表 9-10 および表 9-11 に示すように、継続型 (K) であるものの「終了」と判断された刺激は、下降調が多く、F0 がより低く、最終モーラ長がより長いものであると予想されるが、音調以外の特徴量はほとんど反映されておらず、特徴量の影響は相対的に小さい。下記では、学習者の知覚状況をグループごとに観察する。

表 9-12 日本国内の中級学習者 (SM) の判断による正答数が半分以下である刺激

刺激番号	wordForm	TalkType	type	fbt	F0zSubj	MoraDur	正答数
S24	けれども	D	K	HL	-1.28*	0.46*	10
S5	けど	D	K	H	-1.76*	-0.96	6
D13	けど	M	K	L*	-1.19	0.08	10
日本語母語話者が知覚した平均値				F0zSubj	-1.02 最終モーラ長 : 0.25		

表 9-13 日本国内の上級学習者（SH）の判断による正答数が半分以下である刺激

刺激番号	wordForm	TalkType	type	fbt	F0zSubj	MoraDur	正答数
D21	けど	M	K	HL	-1.05	0.47*	10
D5	けど	M	K	H	-0.80	0.37*	9
S5	けど	D	K	H	-1.76*	-0.96	9
D13	けど	M	K	L*	-1.19	0.07	10
D14	けど	M	K	L*	-0.92	-0.58	9
S14	けれども	D	K	L*	-1.32*	-0.03	10

日本語母語話者が知覚した平均値 F0zSubj : -1.02 最終モーラ長 : 0.25

表 9-14 中国国内の中級学習者（FM）の判断による正答数が半分以下である刺激

刺激番号	wordForm	TalkType	type	fbt	F0zSubj	MoraDur	正答数
D1	けど	M	K	H	-1.04	-0.29	8
D13	けど	M	K	L*	-1.19	0.08	2
D25	けど	M	K	HL	-0.79	0.34*	4
D5	けど	M	K	H	-0.80	0.37*	7
S1	けれども	D	K	H	-1.30*	1.13	9
S11	けれども	D	K	L*	-0.38	0.46*	7
S12	けれども	D	K	L*	-0.82	-0.06	6
S13	けど	D	K	L*	-1.00	-0.41	4
S14	けれども	D	K	L*	-1.32*	-0.03	6
S15	けど	D	K	L*	-0.30	0.15	10
S22	けど	D	K	HL	-0.90	0.83*	10
S24	けれども	D	K	HL	-1.28*	0.46*	10
S3	けれども	D	K	H	-1.39*	-0.31	8
S4	けど	D	K	H	-1.33*	0.73*	6
S5	けど	D	K	H	-1.76*	-0.96	7
S8	けれども	D	K	H	-1.34*	0.23	8

日本語母語話者が知覚した平均値 F0zSubj : -1.02 最終モーラ長 : 0.25

表 9-15 中国国内の上級学習者（FH）の判断による正答数が半分以下である刺激

刺激番号	wordForm	TalkType	type	fbt	F0zSubj	MoraDur	正答数
S11	けれども	D	K	L*	-0.38	0.46*	5
S12	けれども	D	K	L*	-0.82	-0.05	10
S13	けど	D	K	L*	-1.00	-0.41	6
S14	けれども	D	K	L*	-1.32*	-0.03	6

日本語母語話者が知覚した平均値 F0zSubj : -1.02 最終モーラ長 : 0.25

表 9-12～表 9-15 では半数以上の日本国内の中級学習者 (SM) が誤判断をした刺激を示す。(wordForm : 「けど」類の形式 ; TalkType : 発話スタイル D : 対話 M : 独話 ; type : 「継続型 (K)」または「終了 (K)」 ; fbt : 句末音調 ; F0zSubj : F0 値の Z スコア ; MoraDur : 最終モーラ長)

*が付いた測定値は、予想した通り、下降調 (L%) であるもの、F0 値が日本語母語話者による知覚した平均値 (-1.02) より低いもの、あるいは最終モーラ長がより日本語母語話者による知覚した平均値 (0.25) より長いものである。表 9-12～表 9-15 から、学習者のレベルが高ければ高いほど句末音調 (L%) であると、「終了」と誤判断する傾向が大きい傾向が大きい。一方、上昇成分を伴う音調 (H%・HL%) である場合に、F0 の低下、あるいは最終モーラ「も」・「ど」の引き伸ばしを感じられれば、「終了」と誤判断をした可能性もあると推測できる。しかし、学習者は、F0 の低下を感じて判断するケースが多く、最終モーラ長に引き連れられ判断した刺激数は相対的に少ない傾向も見られた。

ア) 「終了型」(「言いさし」)の「けど」類の刺激

表 9-16 正答率が 50%未満である終了型 (S) の刺激文の各特徴量の平均値

タイプ	JPN	SM	SH	FM	FH
F0	-1.25	-1.24*		-1.44	-1.32
最終モーラ長	0.3	1.05		1.02	0.77

表 9-17 正答率が 50%未満で終了型 (S) の刺激文の句末音調の分布 (数 : 刺激の個数)

タイプ	SM	SH	FM	FH
L%	1	0	0	0
HL%	4*	0	1*	2*
H%	0	0	0	0

表 9-16 表 9-17 に示すように、終了型 (S) であるものの「継続」と判断された刺激は、上昇成分を伴う句末音調 (H%・HL%) が多く、F0 が相対的に高く、最終モーラ長が短いものであると予想されるが、句末音調の影響が見られた一方、他の特徴量がほとんど反映されておらず、特徴量の影響は相対的に小さい。

下記では、学習者の知覚状況をグループごとに観察する。

表 9-18 日本国内の中級学習者 (SM) の判断による正答数が半分以下である刺激

刺激番号	wordForm	TalkType	type	fbt	F0zSubj	MoraDur	正答数
D8	けど	M	S	H*	-1.44	1.02	6
S6	けれども	D	S	H*	-1.20	0.53	8
D9	けど	M	S	H*	-1.01*	3.90	10
S10	けど	D	S	H*	-1.26	-0.66*	10
D17	けど	M	S	L	-1.28	0.45	9

日本語母語話者が知覚した平均値 F0zSubj : -1.25 最終モーラ長 : 0.3

表 9-19 中国国内の中級学習者 (FM) の判断による正答数が半分以下である刺激

刺激番号	wordForm	TalkType	type	fbt	F0zSubj	MoraDur	正答数
D8	けど	M	S	H*	-1.44	1.02	8

日本語母語話者が知覚した平均値 F0zSubj : -1.25 最終モーラ長 : 0.3

表 9-20 中国国内の上級学習者 (FH) の判断による正答数が半分以下である刺激

刺激番号	wordForm	TalkType	type	fbt	F0zSubj	MoraDur	正答数
D8	けど	M	S	H*	-1.44	1.02	6
S6	けれども	D	S	H*	-1.20	0.53	8

日本語母語話者が知覚した平均値 F0zSubj : -1.25 最終モーラ長 : 0.3

継続型の場合と同様に、表 9-18～表 9-20 には中国人学習者の判断による正答数が半数以下である刺激を示す。(wordForm : 「けど」類の形式 ; TalkType : 発話スタイル D : 対話 M : 独話 ; type : 終了 (S) ; fbt : 句末音調 ; F0zSubj : F0 値の Z スコア ; MoraDur : 最終モーラ長)

終了型 (S) であるものの「継続」と判断された刺激は、上昇成分を伴う句末音調 (H%・HL%) が多く、F0 が相対的に高く、最終モーラ長が短いものであると予想される*が付いた測定値は、予想した通り、下降調 (L%) であるもの、F0 値が日本語母語話者による知覚した平均値 (-1.25) より低いもの、あるいは最終モーラ長がより日本語母語話者による知覚した平均値 (0.3) より長いものである。表 9-18～表 9-20 から、学習者のレベルと関係なく、上昇成分を伴う音調 (H%・HL%) であると、「継続」と誤判断されやすくなる傾向が見られる。音調言語である中国語を母語とする学習者は、句末音調に関する敏感さがうかがえる。一方、下降調 (L%) である場合に、F0 の低下、あるいは最終モーラ「も」・「ど」の引き伸ばしに関連する特徴量は着目されていない可能性がみえる。データ量が少ないため結論づけることできないが、今度の課題としてさらに観察したい。

9.7 考察

本章では、中国人日本語学習者における二種類「けど」類発話の判別に関する知覚と日本語母語話者のそれとの相違を明らかにし、日本人学習者が混同しやすい「接続助詞」の「けど」類および「言いさし」の「けど」類に対する知覚のモードと知覚のカテゴリー境界の解明を目的とする。

小熊（1984:60-61）は、話しかけられた発話を聞き手が解釈する時、その解釈には聞き手の心的過程の中で関わる要因について、以下の五つを挙げている。

- ①. 話し手についての認知
- ②. 聞き手の行動傾向
- ③. 聞き手にとっての話材の行動的意味、話されている内容が聞き手にとってどのような意味を持つか
- ④. 文脈 聞き手が対話の流れをどのように認知しているか
- ⑤. 事態 聞き手が今置かれている状況をどのように認知しているのか。

小熊（1984:60-61）に関連し、談話中に与えられた「けど」類発話に関する音声面からの理解・判別は、おそらく上記の「④. 文脈」と深くかかわるだろう。

「対話の流れ」を判断する際に、プロソディ、ピッチの高さ、文末の延伸などの指標が関わりと考えられる。「学習者は、母語の音韻的特徴の意味付けとの違い、そして何よりそれに先立つ韻律情報の知覚の違いから、日本語母語話者との間にズレが生じる可能性がある。」（林他 2011:91）と指摘されているように、学習者と母語話者との知覚モードにどのような相違があるのかについて、日本語母語話者と日本語学習者に聴取実験を実施し、その結果に対して、一元配置分散分析を行った。下記では、仮説を検証しながらデータを考察する。

9.7.1 母語話者の知覚状況の考察—仮説 1 の検証

日本語母語話者に対する聴取実験の結果（図 9-2、図 9-3）を観察すると、日本語母語話者は発話末の下降、句末音調及び句末の引き伸ばしを要素として「けど」類発話を知覚することがわかる。それは、「平調でも音を延ばすと言いさしであることを示す印になっている。文節末にどの音調を使うかで、聞き手が話し手に対して持つ印象はかなり変わる。」という郡（2008）の指摘と一致している。

具体的に、日本語母語話者の被験者においては、上昇下降調（HL%）には発話末の延伸に伴う接続助詞の「けど」類発話が多く知覚され、下降調（L%）にはF0値の急激な下降に伴う「言いさし」の「けど」類が多く知覚され、上昇調（H%）には、独話の場合に発話末の延伸に伴う接続助詞の「けど」類発話、対話の場合に発話末の延伸に伴う「言いさし」の「けど」類発話を知覚される傾向がみられる。それは、仮説1の裏付けにもなると考えられる。

「日常会話の場面で、われわれがなんの意識的努力を費やすこともなく行って

いる発話の生成や、その発話文に与える韻律の決定には、しかしながら途方もなく大量の複雑な心的過程が関与している」（往住 1992:50）ため、母語話者は、その発話生成に関わる発話意図を音声的な情報などを利用して相手の発話予測および理解を行っている。

市川（2011:33）は、対話音声が行われる際に、聞き手は、相手の言葉を理解する時に様々な知識を活用していることを指摘した上、常識や使用している言語の知識、今話している話題に関連した知識、展開してきた対話の流れ（文脈）、そしてそれらの知識によって限定され「予期」された世界の下で、まさに今聞いている言葉の理解処理を進めていることになる」と示唆している。

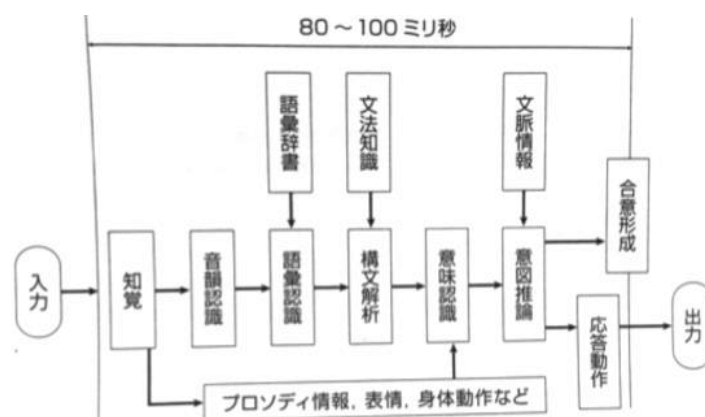


図 9-4 対話言語の受け手の処理の流れ（市川 2011:34）

発話の受け手における処理は図 9-4 のような流れで行なわれている。その理解処理のプロセスは、80～100 ミリ秒という非常に高スピードで行われており、ほぼ無意識的に進んでいるが、図 9-4 に示すように、まず、音声的な情報から知覚されることになる。

市川（2011:33）は、図 9-4 について、「音声は聴覚などの知覚器官で知覚され、音韻を認識し、その組み合わせによって、脳内の言語辞書から語彙を検索して語彙を決め、その組み合わせから構文解析を行う文の構造を求め、その文の構造から文の意味を認識する。それまでの対話の流れから得られた文脈やプロソディからの各種情報を組み合わせて発話の意図を推論する。そして、その結果により応答を行う。また得られた情報を利用して相手に関するモデルの精緻化を行い、合意形成などが図られる。」と述べている。その指摘から、発話の発話末の延伸やプロソディなどの音韻情報は、発話理解の出発点となると言える。

特に、接続助詞の「けど」類と「言いさし」の「けど」類とのような形式上で区別できない言語表現は、実際の話し言葉において母語話者は知覚した音韻情報から推測し、話し手の発話が終わっているかどうかと判断している。そこで、判断の参照点となる発話の発話末の延伸やプロソディなどの音韻情報を帰納して日本語教育現場において学習者に提示する必要がある。

9.7.2 学習者による実験結果の考察—仮説 2 の検証

学習者の正答率および知覚状況に関する分析を踏まえ、二種類の「けど」類に関する判別基準および「言いさし」の「けど」類に関する認識は、まだ明確ではないことがわかる。

大塚 (1998) は、中国語・韓国語を母語とする中・上級日本語学習者に聴取実験を行い、表現意図 (同意要求・非難・否定) を判断する能力の習得に関する考察を行った結果、イントネーションから表現意図を判断する能力の習得には母語と学習レベルが影響すること、中国語母語話者は上昇と非難について区別できず、表現意図とイントネーションは自然に習得できないことを明らかにした。

また、張 (2015) は、中国人日本語学習者の日本語韻律理解力について、聞き取り実験を実施した結果、統語的あいまい文のイントネーションに関する理解力は非常に低く、日本語学習年数や日本在住期間などとの関係が少なく、個人差も大きいことがわかった。

今回の実験結果は、大塚 (1998)、張 (2015) と一致しており、仮説 2 の裏付けとなると考えられる。

第二言語における聞く教育について、学習者である聞き手が実際のコミュニケーション活動でどのように聞いているのかを明確に記述した研究は非常に少ないが、第一言語における聞くプロセスについて Anderson (1983, 1985) があげられる。

Anderson (1983, 1985) は、ある情報が時間の流れの中でどのように処理されていくかという問題意識から第一言語における聴解の過程について考察した結果、下記のような 3 段階のモデルを指摘している。

- ①. 知覚処理の過程 (*perceptual processing*)
- ②. 分析の過程 (*parsing*)
- ③. 活用の過程 (*utilization*)

具体的に、まず、第 1 段階「知覚処理の過程」について、エコイック・メモリー (聴覚情報の感覚記憶) の形でインプット情報の要素を保持する過程であると特徴づけている。それから、第 2 段階「分析の過程」は統語的な解析をして、意味のある表象を生成する過程であり、第 3 段階「活用の過程」はこの表象を既存の知識に関連づけて解釈する過程であるとしている。

Anderson の 3 段階モデルは、第二言語における聞く教育に大きな示唆を与えており、学習者が目標言語に接触してインプットされる際に、同様に「知覚処理」→「分析」→「活用」というプロセスで処理しているのではないかと考えられる。つまり、最初に知覚器官で音声情報を感知し、予測などを經由し、心的辞書を引いて語彙とその文法的機能を求め、文構造を解析していると推測できる。はじめの一步である「知覚処理」が間違ってしまうと、文構造の解析および発話の理解もできなくなると言える。

そこで、学習者における知覚状況を把握する必要がある。以下では、今回の実験で明らかになった二種類の「けど」類の判別における学習者の知覚特徴をまとめる。

特徴 1：最小 F0 値の変化・句末音調と発話意図の関連性が定着されておらず、母語からの転移、「過剰般化」がみられる。

9.6 節における「中国人学習者と母語話者との知覚相違」および「中国人が誤判断した刺激文の F0 値」をみると、中国人学習者は、F0 の変化と発話意図の関連性が定着されておらず、F0 値の高い刺激文も「言いさし」として知覚していることがわかる。

「学習者は、母語の音韻的特徴の意味付けとの違い、そして何よりそれに先立つ韻律情報の知覚の違いから、日本語母語話者との間にズレが生じる可能性がある」（林他 2011:91）。但し、学習者は、そもそも刺激文の発話末のピッチを日本語母語話者と同じように知覚できるのだろうか。フォローアップ・インタビューの結果によると、学習者は確かに発話末の高低が知覚できることがわかる。

フォローアップ・インタビューの結果に関連し、谷部他（2010）は、異なる韻律的特徴を有する発話末の聴取実験を行い、中国人日本語学習者は、日本語母語話者よりも発話末のピッチの知覚が鋭敏であると報告している。その理由は、母語の中国語が音調言語であるため、中国人学習者は母語で話す際に、音の高さの変化によって単語の意味が変わるという知覚処理に慣れているからである。そのため、ピッチの知覚が鋭敏であることは当然となると考えられる。

学習者の耳が、第一言語である母語を習得する際に、自分の母語に重要な特徴に的確に反応するための言わば「精密機器」として訓練されており、「物理量である基本周波数変化と持続時間長を「高さ」と「長さ」という心理量として知覚するにあたっては、「知覚の移転」が生じる様子が観察された」（林他 2011:89）ため、目標言語を習得する際に、聴解面においても母語転移が生じると判断できる。日本語母語話者よりも発話末のピッチの知覚が鋭敏であることから、音調言語である中国語を母語とする日本語学習者は、日本語を習得する時に、ピッチの知覚に関して正の転移が起こることがわかる。

しかし、中国人学習者は、発話末のピッチの知覚が日本語母語話者より鋭敏であるにもかかわらず、正しく知覚できないということは、学習者は二種類の「けど」類の判別、特に「言いさし」の「けど」類の理解がまだ明確に定着していないのではないかと考えられる。その理由は、発話末のピッチの変化と発話意図との関連性が定着していないためではないだろうか。



図 9-5 韻律形の語用論的選択 (往住 1992:56)

発話末プロソディの変化と発話意図について、往住 (1992:54) で指摘されているように、伝達内容が発話生成機構において、統語構造の決定、音調コードの決定を経て、音声プラン化され、それが調音機構に引き渡されて発話音声として実現されるといったものが考えられる (図 9-5) ため、極めて密接な関係である。しかし、中国語では、発話末において局部に急激な下降が必ずしも観察できず、音調言語であるため、発話末の上昇も言い終わりを表すため、「音調と表現意図が日本語と異なる」 (大塚 1998)。そのような相違により、学習者が日本語を習得する際に母語からの負の転移が生じる可能性がある。

また、福岡 (2012) は、勧誘と否定の音声の区別について日本語学習者に聞かせた結果、勧誘か否定かの微妙な範疇知覚の境界域となると、学習者にとって判別が難しく、僅かなピッチの上昇で過敏に勧誘と判断してしまう「過剰般化」(overgeneralization)の習得プロセスが見られたことを述べているが、今回の二種類の「けど」類に関する聴取実験の結果からも、特に学習者の誤判断した刺激を見ると、多くの学習者は、下降音調を唯一の手がかりとして判断していることから、発達上のプロセスの一つである「過剰般化」という習得プロセスを使っていることと言えるだろう。

特徴 2：最終モーラ長に関する理解が定着しておらず、判断の手がかりとして使用していない。

9.6 節における「中国人学習者と母語話者との知覚相違」をみると、中国人学習者は、どの学習環境・学習レベルにおいても、発話末のモーラ長を発話の終了・継続の判断にほとんど用いていないことが示唆される。

しかし、第 6 章で述べたように、日本語母語話者は、下降調 (L%) には発話末の延伸に伴う発話は「言いさし」の「けど」類発話として知覚されるが、上昇調 (H%) では、独話の場合に発話末の延伸を伴う接続助詞の「けど」類発話、対話の場合に発話末の延伸を伴う「言いさし」の「けど」類発話として知覚される傾向がみられた。また、森山 (2004:250) は、話し手自身が話し手自身の範囲で発話する場合にも、引き延ばし音調が出現し、考え中であることや、その感情について時間をかけて認識・反芻という意味などを前面に出すように使用されると述べている。そして、心的な情報処理プロセスを言語的にモニターする形式が感動詞であるとすれば、そのモニターは基本的に実時間的に行われ、心的プロセス

にかかる時間の持続が、引き延ばしによって、音声的に表示されるのであるとしている。

しかし、学習者は、どうして発話末の引き伸ばしを「言いさし」「接続助詞」の判断パラメータとして認識しないのだろうか。これは日本語教育現場における「言いさし」の「けど」類の扱い方に関係すると考えられる。現在の日本語初級文法教育では、「言いさし」の「けど」類を会話文で取り上げることが多いが、「お願いがあるのですけど」のように、文字上の提示しか行われておらず、音声面に関する指導および音声・文法の関連性について重要視されていない。

一方、「ます」・「です」のような完全文に生じた「母音の無声化」が重要視されているため、必ず提示されている。そこで、学習者は、アニメやドラマなど、様々なメディアを通して現実の日本語発話に接触する機会もあり、「です」・「ます」で終わる際に軽く発音されることは定着している。一方、他の形式で終わる文への接触は少ないため、文末の音の引き伸ばしに注意しないかもしれない。従って、初級段階以降で「言いさし」を一つの項目として取り上げたり、バリエーションに関する説明・練習をしたりすることが行われないため、文末の引き伸ばしとの関係は、学習者の中で定着していない可能性がある。

9.7.3 習熟度と知覚判断との関係に関する考察—仮説 3 の検証

仮説 3 として、習熟度が高いほど中国人学習者の知覚カテゴリー化の程度が高くなることが予想されるが、実験を実施して 9.6 節における「中国人学習者と母語話者との知覚相違」および「中国人が誤判断した刺激文の特徴」をみると、予想とは違い、中国人学習者は、日本滞在期間には影響されるが、習熟度が高くなっても知覚判断は必ずしも高いわけではないことがわかる。

河野 (1992) は、日本語の「疑問文」と「平叙文」の文末音調の音響的特徴を分析した上で、その音響分析を踏まえて作成した合成音声で、「疑問文」／「平叙文」を判別できるかどうかについて、日本語母語話者と外国人日本語学習者を対象に知覚実験を行った。その結果、日本語母語話者と外国人日本語学習者とで知覚の仕方に差異があること、日本語学習者のレベルが上がっても知覚の仕方は日本語母語話者のそれには必ずしも近づいていないことを指摘している。今回の実験結果は、河野 (1992) の指摘と一致している。

また、「けど」類に関する学習者の知覚状況は、習熟度より文脈の共有が影響することが大きいという傾向がある。

市川 (2011:17) は、音声コミュニケーションについて、音声などの言語メディアによって、日本語などの言語ツールを用いて意味表現を行い、それとプロソディ上の発話者の個人性や感情、体調などの情報が束となって表出され、文脈などと相まって発話者の意図を伝えようとする旨を指摘している (図 9-6)。

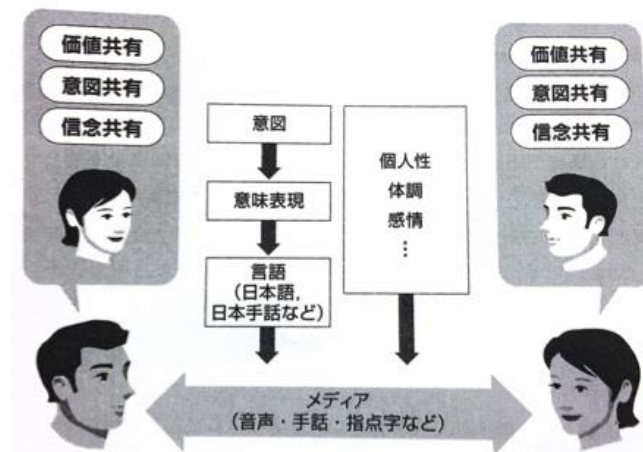


図 9-6 対話を通じた合意形成の構造 (市川 2011:17)

図 9-6 から、音声などの言語メディアによって、日本語などの言語ツールを用いて意味表現を行うのは道具に過ぎなく、相手の発話を理解してさらに対話を進めるためには、「文脈の共有」がさらに重要のではないかと考えられる。

9.8 まとめおよび日本語教育への示唆

本章では、日本語母語話者と中国人学習者に「けど」類の判別聴取実験を行った結果、学習者は、最小 F0 値の変化と発話意図との関連性が定着しておらず、母語からの転移がみられること、文末の引き伸ばしと発話意図の関連性が定着しておらず、習得上における「過剰般化」がみられることがわかった。さらに日本語学習者のレベルが上がっても知覚状況は日本語母語話者と相違が見られた。

実験結果を踏まえ、現在の日本語教育における「けど」類の指導について下記のように提案したい。

まず、聞き方の指導に工夫する必要がある。初級段階においても「けど」類に 2 種類があることを提示し、どのような点に留意して聞くと日本語の「言いさし」であることに気付けるかといった「聞き方」指導の工夫をしなければならない。聞き取った韻律的特徴に基づいて、「言いさし」に含まれた話者の心的態度をどう理解するかといった発話の意味付けについても取り立てて説明・練習を加える必要がある。

また、日本語学習者の中で最も多くの割合を占める中国語母語話者は、聴解が困難であると言われている(日本国際協会・国際交流基金 2004)。特に、中国人日本語学習者のうち、中国在住の日本語学習者の聴解力は 4 技能の中で最も上達しにくいものであると指摘されている(尹 2001)。さらに、中国人学習者は、「音声の特徴を手がかりに聴く」、「テープの中の人これから何を言うか考えながら聴く」というストラテジーの使用頻度が低い(尹 2011)。

以上のことから、中国人学習者に対して「けど」類の指導を行う際に、発話の理解を助けるストラテジーとしてプロソディ情報や発話末の引き伸ばしの応用も提示すべきである。

Major (1987) の第2言語習得モデルによると、学習者の中間言語の発達過程について、母語からの負の転移と発達上のプロセスの影響力の変化の関係について、習得の早い段階で負の転移が優勢で発達プロセスの出現を妨げるが、次第に発達プロセスが優勢になり、その発達プロセスの頻度も次第に減少し、やがて第2言語が獲得されるという習得過程を経ることになっている。本章の実験により、学習者が発話末最終モーラの引き伸ばしを過剰に「言いさし」と判断する「過剰般化」の習得プロセスが優勢化していたが、習得過程の中で、学習者に聞き方の指導を取り立てて行えば、「過剰般化」という習得プロセスから次のステップに進めるのではないかと考えられる。

それから、中国人学習者の予測する能力の養成に力を入れるべきである。実際のコミュニケーションにおいて、「日本語母語話者がなぜ最後まで相手の発話を聞かないでわかるのであろうか。」について、市川 (2011:8) は、「聞き手は対話の流れ(文脈)からある程度の次の展開を事前に『予期』することに行っている。しかしながら、入力音声データが最後まで揃わないという状態で、その『予期』処理をするための前提となる一連の言語処理、例えば、単語を切り出し、品詞情報を確定し、構文解析を完了するまでを先取りして実現することが求められる。」と指摘している。

さらに、横山 (2005) は、対面聴解の理解過程を分析した結果、まず、効果的な聞き手だと思われる調査対象者の聴解には、「テキスト」レベルのモニター、ストラテジーの連鎖的使用、既有知識や文脈知識の活用など、効果的な聴解の要素がしっかりと組み込まれて理解が構築されている過程が観察された。そこから、理解過程とテキスト再生率および聴解テスト結果との相関関係を調べたところ、「テキスト」レベルのモニターや「予想」「発展」など、効果的な聴解過程の要素は、聴解テスト得点と関連していることがわかった。

中国人学習者は、母語に「言いさし」のような言語形式がかなり少ないため、習得上に知覚の転移が生じがちであり、予測する能力は日本語母語話者より下回っていると考えられる。そこで、初級段階では日本語を教える際に、相手の発話の次の展開を予測して「テキスト」レベルのモニターをする練習を教室で行い、学習者にその予測する能力を身につけさせる必要がある。

最後に、音声理解からコミュニケーションのための産出への発展を目指して指導することという心がけが必要である。

正しく理解できなければ適切な産出もできないと考えられるが、日本語教育の教室活動では、「限られた時間内に文法や語彙を扱うことが優先され、勢い『発音が少々不正確でも、意味が通じればいい』と韻律の細かい指導が省かれがち」(林他 2011:90) という現状が存在するため、自然なプロソディ産出のための教

育の推進は、極めて難しいと思われる。

接続助詞の「けど」類は、日本語教育のすべての教科書において初級段階で導入されている一方、「言いさし」の「けど」類は教科書で文法項目として取り上げられることは少なく、それに関する会話指導も行なわれていないと考えられる。特に現在の中国国内の日本語教育現場では、日本語能力試験の合格率の向上だけを目標として教育を進める機関も少なくないため、教師および学習者の韻律の重要性が認識されていなければ、効果が薄いことが想像出来る。

さらに、すでに韻律教育の必要性は初級段階から頻繁に指摘されているとしても、現場においてプロソディおよびモーラ長に関する指導はあまり行われておらず、結果として、学習者が何か問題に直面するといった体験を通して重要性を痛感し、独習して自然習得に任せられている。しかし、2種類の「けど」類、特に「言いさし」の「けど」類は、発話される際にプロソディおよびモーラ長の変化に依存しているため、特に「中国語話者のように母語の音調と表現意図が日本語と異なる学習者」（大塚 1998）には、自然習得に任せ、学習者に気づかせるようなことは、かなり難しいことが想像出来る。そこで、日本語教育現場において、プロソディおよびモーラ長について取り上げるべきだと考えられる。

以上に述べたように、本研究では、日本語母語話者と中国人日本語学習者の「継続」／「終了」の判断の仕方が異なることの一部を明らかにした。この知見を日本語教育に応用することが最終目標であるが、そのためには、外国人日本語学習者の「継続」／「終了」の判断の仕方を日本語母語話者の判断の仕方に近づけるための教授法を開発する必要もある。

9.9 本章のまとめ

ラルフ・G・ニコルス（影山訳 1978:114）では、聞き手が話し手の発話を受け取り、かつ十分に理解しようとする際、聞き手の心の中において、以下のような心理的なプロセスが働いていると指摘されている。

- I. 聞き手は話し手の先回りをして、話がどういう方向に進むのか、そこ瞬間に話し手の発話から、どんな結論が引き出されるかを考える。
- II. 聞き手は話し手が論点を補強するために引用した例を吟味する。
- III. 聞き手は、時々それまでの話の内容を振り返ってみる。
- IV. 話全体を通して、聞き手は「言外の意味」をつかみ、隠されている言葉がなにかどうかを考える。

以上の指摘から、音声的に「けど」類の「言いさし」がどんな特徴があるか、どのように続くかというような問題を明らかにしなければ、日本語学習者である聞き手は発話を受け取っても、心理的なプロセスの作用が起こらずスムーズにコミュニケーションが取れない恐れがある。

そこで、本章では、中国人日本語学習者における二種類「けど」類発話の判別

に関する知覚と日本語母語話者のそれとの相違を明らかにし、日本人学習者が混同しやすい「接続助詞」の「けど」類および「言いさし」の「けど」類に対する知覚のモードと知覚のカテゴリー境界の解明を行った。

日本語母語話者と中国人学習者に「けど」類の判別聴取実験を行った結果、具体的に、日本語母語話者の結果を見ると、すべての特徴量（パラメータ）が有意である。まず **F0** 値を見てみると、負の係数を持っており、**F0** 値が低くなるほど終了と判断される確率が高まる。モーラ長は正の係数であることから、発話の最終モーラ長が長いほど終了と判断される確率が高まる。句末の音調については、上昇成分を伴う **BPM** の場合に終了と判断される確率が低くなる（継続と判断される確率が高まる）ことが、つまり下降調の場合に終了と判断される確率が高まることが分かった。この結果は、第6章で見てきた傾向と一致しており、日本語母語話者はこうした特徴を利用しながら継続か終了かを判断していることが示唆された。

一方、中国人学習者の結果を見ると、日本国内で **N1** を持っている学習者 **SH** 以外は有意差が見られず、また **SH** においても有意傾向しかなかった。つまり中国人学習者は、日本国内か中国国内か、上級か初級かという、どの学習環境・学習レベルにおいても、発話末のモーラ長を発話の終了・継続の判断にほとんど用いていないことが示唆された。

また、学習者は、最小 **F0** 値の変化と発話意図の関連性が定着しておらず、母語からの転移、「過剰般化」がみられたこと、文末の引き伸ばしと発話意図の関連性が定着しておらず、知覚の手がかりとして使用していないことがわかった。さらに日本語学習者のレベルが上がっても知覚状況は日本語母語話者との相違が見られた。

以上の結果から、日本語教育において「けど」類の指導を行う際に、予測する能力の養成、自然発話の産出に力を入れるべきであると提案した。

次章では、本研究の総括を行った上で、日本語教育への示唆および今後の課題について述べる。

第四部

本研究のまとめ

第四部では、本研究の結論、日本語教育への示唆および今後の課題を述べる。

第10章

結論および日本語教育への示唆

本章は、本研究の全体内容と今後の課題に関するまとめである。まず、10.1で全体の内容をまとめた後、10.2で日本語教育への示唆を提示し、最後に10.3で残された課題について述べる。

10.1 本研究のまとめ

本研究では、「日本語教育の役に立つ」文法研究（庵 2011a,2011b,2012a）を目指して「言いさし」を取り上げ、統語的・意味的・音韻的な面から、コーパスを使用して考察を行った上で学習者における知覚処理状況を明らかにすることを目的として実験、考察を行った。

本研究は、四つの部分に分けて展開してきた。第一部は「第1章」、「第2章」、および「第3章」からなり、第二部「第4章」、「第5章」、「第6章」からなり、第三部は「第7章」、「第8章」、「第9章」の三章からなり、第四部は、第10章である。各章の概要は、次の通りである。

第一部 本研究の前提

まず、「第一部 本研究の前提」には、以下のような内容について述べた。

第1章では、日本語の話し言葉における「言いさし」の多用と日本語教育現場における「言いさし」の扱い方を述べ、本研究の動機と問題の所在を指摘し、研究目的及び課題を記述した上で、本研究の構成、概要、本研究の意義を述べた。

第2章では、本研究の前提として、「言いさし」の捉え方、定義、範囲、分類、形成理由、文法論・意味論・音韻論における位置付けについて具体例をあげながら示した。具体的に、まず、先行研究をまとめた上で本研究における話し言葉の「文」について「構文的に陳述を担う述語または独立語1つを持ち、機能的に社会習慣によって完結性を有して言い切るもの」と定義した上で、「言いさし」を一つの独立文として考えることができることを述べた。それから、「言いさし」の形成要因を論じ、「言いさし」の文法論における位置付けを述べた上で、本研究の研究対象を明示した。

第3章では、「日本語教育文法」及び「言いさし」に関する先行研究について述べた。具体的に、「日本語教育文法」に関する研究をまとめた後、まず、定義・機能に関する先行研究を明確にし、それから出現理由に関する先行研究を述べ、最後に、学習者における習得状況に関する先行研究をまとめた。しかし、これらの先行研究には、研究データが小説や映画のシナリオが多く、自然談話から離れ

ているものである、特定の母語の学習者における習得状況が明らかになっていないこと、音声的な分析が足りないことなどの問題点が存在する。

第二部 コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察

次に、「第二部 コーパスにおける「言いさし」の使用実態に関する考察」には以下のような内容が含まれている。

第4章では、日本語における「言いさし」の「けど」類の統語的・意味的な使用実態を明らかにするために、『名大会話コーパス』を使用して考察を行った。その結果、「言いさし」の「けど」類は「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という二つの発話機能を果たしていること、接続助詞の「けど」類に比べて「言いさし」の「けど」類のほうがより多く使われていること、「言いさし」の「けど」類と接続助詞の「けど」類はいずれも特定の述語に偏っているものの、前接語が違っていること、「言いさし」の「けど」類の中で、「言い終わり」の「けど」類が「言い残し」の「けど」類よりかなり使用頻度が高いことが明らかになった。さらに、「言いさし」の「けど」類は、教育現場で以前より扱われるようになってきたものの、文法項目として取り上げられていないという現状がある。本章の結果から、「言いさし」が明示的に取り上げられていない現在の日本語教育は見直す必要があるという示唆も得られた。

第5章では、中国語における「言いさし」の「けど」類の使用実態を明らかにするために、日本語の会話文に使用された「けど」類による「言いさし」が、中国語において、同じ文脈でどのように扱われているかについて中国語のコーパスを使用して考察を行った。その結果、日本語の会話文について全体的にまとめると、「言い終わり」と「言い残し」とは、ほぼ同じ頻度で使用された。次に、同じ文脈で使用された中国語の会話文を考察してみると、「けど」類による「言い残し」の場合は、「けど」類の代わりに、接続表現を使用しない「省略型」及び接続表現を残す「省略型」の用例が多く見られた。一方、「けど」類による「言い終わり」の場合は、接続助詞を除いて内容だけを述べる以外、語気助詞「啊/呢」を使用する例文も存在することが明らかになった。本章の結果から、中国人学習者に「言いさし」を教えるために、「言いさし」について学習者がどのように理解して知覚しているのかを解明する必要があるという示唆も得られた。

第6章では、日本語における「言いさし」の「けど」類の音韻的な使用実態を明らかにするために、『日本語話し言葉コーパス』を使用して「けど」類の「言いさし」の音声的な特徴、「接続助詞」の「けど」類との音韻的な相違を考察した。その結果、(1)話し言葉では、ある種のイントネーションが加わることによって文末に相当する切れ目が生じることがある(小磯 2008)ため、「接続助詞」の「けど」類は上昇下降調(HL%)、「言いさし」の「けど」類は下降調(L%)を伴うことが多いこと、(2)「言いさし」の「けど」類の発話末に final lowering に相当する著しい下降が見られ、発話の終了を意味していること、(3)対話の場合、終助詞「ネ」が付かない下降調(L%)及び上昇調(H%)の発話において、「言いさし」機能を果たす「言いさし」の「けど」類は、「接続助詞」の「けど」

類に比べてより長く、外れ値が多く存在する傾向が見られるが、それに対し、独話の場合、下降調(L%)の発話において対話の場合と同じであるが、上昇調(H%)の発話において、対話と違い、「接続助詞」の「けど」類発話は、「言いさし」の「けど」類に比べてより長く、最終モーラ長に外れ値が多く存在することがわかった。以上のような要素は、発話の継続・終了を予測するためのリソースとして、会話参加者に利用されている可能性が十分にあるといえよう。日本語教育の現場では、「言いさし」を導入する場合、それぞれの接続助詞で終わる言いさし表現の機能などを十分に考慮して音声面の指導にも配慮して指導していかなければならないという示唆が得られた。

第三部 中国人日本語学習者に対する「言いさし」の認知処理状況に関する実験調査

さらに、「第三部 中国人日本語学習者に対する「言いさし」の認知処理状況に関する実験調査」には以下のような内容が含まれている。

第7章では、中国人学習者の統語的・意味的な知覚状況を明らかにするために、「言いさし」の「けど」類の理解状況を全体的に把握するための記述調査を実施するとともに、アンケートでは捉えきれない学習者の個別的な側面を補完するためにフォローアップ・インタビュー調査を実施した。その結果、学習者は「言いさし」の「けど」類に対し、「実質的な意味がない」という認識を持っており、「接続助詞」と「言いさし」の混同および母語からの「負の転移」が見られた。それを踏まえ、今後の日本語教育において、中国語のコミュニケーションの特徴と対照しながら文型練習・会話練習を行い、教室活動から日本語の特徴的なコミュニケーションに触れ、理解の手がかりについても学習者に実感させ、気づかせる能力を育成する必要があるという示唆が得られた。

第8章では、中国語及び日本語の両言語使用者による具体的なコミュニケーション場面における「言いさし」の知覚・使用状況の相違を明らかにするために、中国語と日本語とそれぞれの言語で談話完成テストを実施した。その結果、(1)「言いさし」は、断りの理由表現のマーカースとして頻繁に使用され、中国語における使用頻度が日本語より高いこと、(2)日本語母語話者は「上下関係」及び「親疎関係」に、中国語母語話者は「親疎関係」に敏感に反応すること、(3)中国語では「誘い」を断る行為は「依頼」を断る行為より「言いさし」が多用され、日本語では「依頼」を断る行為は「誘い」を断る行為より「言いさし」が多用されることがわかった。最後に、形態を重視して形態的な標識が豊かな日本語と語順を重視して形態的標識に乏しい中国語の特徴をまとめ、中国語において「無標識従属節」の「言いさし」は「標識従属節」より丁寧で多用されること論じた。それを踏まえ、「言いさし」を導入する際には、円滑なコミュニケーションを図るための1つのポライトネス・ストラテジーとして、「言いさし」を学習者に認識させる必要があるという示唆が得られた。

第9章では、中国人日本語学習者における「言いさし」の「けど」類の音韻的な知覚状況を明らかにするために、音声聴取実験を実施し、「言いさし」の音韻的な知覚状況「接続助詞」の「けど」類および「言いさし」の「けど」類に対する知覚のモードと知覚のカテゴリー境界の解明を行った。日本語母語話者の結果を見ると、まず F0 値は低くなるほど終了と判断される確率が高まる。発話の最終モーラ長が長いほど終了と判断される確率が高まる。句末の音調については、上昇成分を伴う BPM の場合に継続と判断される確率が高まり、下降調の場合に終了と判断される確率が高まることが分かる。この結果は、第6章で見てきた傾向と一致しており、日本語母語話者はこうした特徴を利用しながら継続か終了かを判断していることが示唆される。

一方、中国人学習者は、日本国内か中国国内か、上級か初級か、どの学習環境・学習レベルにおいても、発話末のモーラ長を発話の終了・継続の判断にほとんど用いていないことが示唆される。さらに、母語からの転移がみられること、習得上における「過剰般化」がみられること、日本語学習者のレベルが上がっても知覚状況は日本語母語話者と相違があった。これらの結果から、日本語教育における「けど」類の音声的な指導は、聞き方の指導、予測する能力の養成、自然発話の産出に力を入れるべきであるということをも提案した。

最後に、第四部（第10章）は、全体のまとめと今後の課題について述べた。

10.2 日本語教育への示唆

本論文は中国人日本語学習者を対象として、日本語教育文法の視点から、「言いさし」に関する研究を行ったものである。「日本語教育文法を単なるアジェンダで終わらせないためには、データベースな議論を積み重ねていく必要がある」（庵 2012a:5）ため、さらに、「第二言語習得の真の意義は、こうした学習者の言語能力のそれぞれの相（phase）を丹念に記述し、そこに通底する体系を明らかにすることである」（大関 2012）ため、コーパス調査及び習得研究を通じて「言いさし」の使用実態及び学習者の認知状況・習得状況の解明を行った。

また、庵（2011a:5-8）は、「日本語教育文法が目指すもの」について、「理解から産出へ」、「体系の記述からコミュニケーションのための記述へ」、「学習者のレベルに即した文法シラバスへ」、「その他（教科書分析など）」との四つを指摘している。ここでは、庵（2011a:5-8）を踏まえ、今回の研究結果から得られた日本語教育への示唆を、「産出ための知覚処理」、「コミュニケーションのための文法記述」、「学習者のレベル・母語に即したコース・デザイン」の三つに分けて述べる。

I. 産出のための知覚処理

野田 (2005) は、日本語教育について 4 技能それぞれに特化した文法を考えており、4 技能は表 10-1 のように 2×2 の変数からなるものであるとしている。

表 10-1 4 技能とそれぞれ必要な能力 (野田 2005)

	音声	文字
理解	聞く	読む
産出	話す	書く

本研究で実施した「言いさし」に関する知覚調査は、学習者の知覚処理状況を考察するためのものであったため、野田 (2005) の「聞く」、つまり「音声・理解」というレベルに属している。また、松崎 (2005:128) は、野田 (2005) を踏まえ、コミュニケーションにおける聞き手である学習者が、聞いてもわからなかった情報や省略された情報を瞬時に推測し、会話のように即時的な反応が求められる活動で前もって言いそうなことを予測しながら聞く必要が生じるため、「聞くための文法」は、従来の狭義の文型・談話だけでなく、音声・語彙・ストラテジーも含んだ存在であるべきであると指摘している。

また、本研究で取り上げた「言いさし」は、松崎 (2005:128) で指摘された推測・予測に深く関係しており、日本語自然会話に頻出して学習者がコミュニケーションを取る際によく遭遇する言語形式であるため、「日本語の対話を観察すると、半数近くの対話では話し手が話し終わらないうちに聞き手は始めている。これが可能とためには、聞き終わらないうちに言語処理が終わり、予測が行われていなければならない」(市川 2011:33) ことから、学習者もこのような対話のあり方に慣れて適切に対応する必要があるものとなっている。

しかし、今回の調査結果を見ると、中国人学習者は、「言いさし」の言語化されていない情報の推測・予測の能力が低下しており、文章処理の際に、手がかりもわからない状態である。

このような「言いさし」に関する知覚処理の欠如は、「言いさし」表現の産出にも影響を与えている。

なぜなら、現在の日本語教育現場では、学習者における「言いさし」の使用上の回避がしばしば指摘されている。柏崎 (1993) は、日本語学習者の発話末の表現を調査した結果、母語話者の発話で特徴だった「～(ん)ですけど／ですが」という言い切らない表現があまりなかったことを指摘している。これは、発話のぎこちなさや違和感を生じて唐突な印象を与えてしまうと評価している。こうしたことは、中国人日本語学習者、特に初級の学習者が認知上で「言いさし」の知覚処理ができず、インプットがインテイクになっていないため、産出にも影響しているのではないだろうか。

それに関連し、往住 (1992:52) が、人間の発話の実現には、韻律手掛かりが

起動する推論が語彙的、統語的知識に基づく推論や語用論的知識に基づく推論に近い水準にあると示唆しているように、話し言葉における対話では、文を完結させないうちに話し手の交代が起こり、複数の人間の共同作業で談話を構成するという現象が見られる（丸山 1996a）ため、対話における学習者の発話産出は、学習者の自らの音韻的な知覚状況と関わると言える。



図 10-1 発話生成の構造的モデル（往住 1992:54）

さらに、庵（2010）は、産出（特に、話す場合）においては、「（省略されている）主語は何であるか」、「話題は何であるか」、「聞き手との関係はどのようなものであるか（聞き手をどのように待遇すべきか）」などのように、様々な情報を同時に処理しなければならないことを指摘している。さらに話し言葉における発話産出について言うと、市川（2011:13）は、実時間で対話をする時に、相手がそのような人で、どのような感情や体調なのかなど対話者の情報（発話者情報）を無意識に勘案しながら、言っていること（言語的情報）を実時間で理解し、並行して自分が発話しようとする内容を無意識に計画し、発話を行っていると言っている。そこで、「言いさし」に関する知覚処理は、学習者の対話における発話産出にも影響を与えると判断できる。

もちろん、学習者の発話産出と文法産出は、同一視することはできないが、「言いさし」に関する文法教育について言うと、「言いさし」に関する知覚処理・理解情報は、その運用面にもつながると考えられる。庵（2011a）は、言語表現（文法・語彙）には、意味がわかればよいもの（理解レベル）と、意味がわかった上で使える必要があるもの（産出レベル）があるとしており、日本語教育文法は、産出レベルに着目した「産出のための文法」とされている。現在の日本語文法教育において、「言いさし」、特に「けど」類の「言いさし」は産出レベルの項目として位置付けられてきており、実際のコミュニケーションにおいて、相手が全部言葉で言わなくてもこちらの意図を察すことのできる発話参加者であると認めて、相手に負担をかけるようなことはなるべく言葉にせず、こちらの窮状を表す事実のみを示して、相手の反応を持つという「共話的」な会話の姿勢が、相手を尊敬すべき一人前の大人として待遇することにつながるのである（岡田 1991:12）。

そこで、「言いさし」に関する「産出のための文法」（庵 2011a）記述を考える際に、学習者の知覚処理の特徴および「言いさし」に関する認知状況を考慮する必要があると考えられる。

Ⅱ. コミュニケーションのための文法記述

野田(2005)は、学習者の多様化という背景から、コミュニケーション活動が成功することを目的として「聞く・話す・読む・書く」の4技能それぞれの文法を別々に作ることを示唆している。また、庵(2010)は、学習者にとってより重要なのは産出レベルの文法記述であり、その意味で日本語教育文法は産出のための文法を目指す必要があると示唆した上で、日本語教育文法、つまり「非母語話者のための文法」は、「母語話者のための文法」のように「100%を目指す文法」であってはならないと指摘している。そこで、「言いさし」のような産出(「話す」)が必要である文法表現について、「言いさし」の「けど」類を例として取り上げ、「産出レベル」の記述を考える上で統語的・意味的・音韻的に用法記述を行いつつ、使い分けが問題になる接続助詞の「けど」類との異同も合わせて記述した後、日本語母語話者および学習者に調査・実験を行い、用法記述の検証および学習者における知覚・生成の問題点を掘り出す。最終目的は、学習者の知覚情報処理の特徴を考慮し上で、「言いさし」が使えるようになる文法記述をすることである。本論文は、そのステップの完成を目指して調査を行ったものである。

市川(2011)は、母語話者が話し言葉における「言いさし」のような言語形式を知覚する際に、まず、連続音声から音韻や音節を認識して単語または形態素を切り出し、それから、何万もの語から構成される心的辞書を引いて語彙とその文法的機能を求めて文構造を解析し、最後に、「投射」や「係り受け未定文節数」を推定することをしなければならないとしている。さらに、「なぜ最後まで聞かないでわかるのであろうか」ということについて、聞き手は対話の流れ(文脈)からある程度の次の展開を事前に「予期」することを行っているためであると指摘した上で、入力音声データが最後まで揃わないという状態で、その「予測」処理をするための前提となる一連の言語処理、例えば、単語を切り出し、品詞情報を確定し、構文解析を完了するまでを先取りして実現することが求められる。つまり、母語話者は「言いさし」を知覚してテキスト処理を行う際に、音韻的な情報以外に、統語的に共起する表現や形態的な特徴などの情報も手がかりとして認識している。

そこで、本研究の調査・実験により、「言いさし」の「けど」類は、意味論的に「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という機能を果たすこと、統語論的に否定形の「思わない」「よくない」「分からない」「知らない」と更に多く共起すること、また、音韻論的に句末音調が下降調だったり、あるいはF0値の急激な下降に伴ったり、発話末の延伸に伴ったりすることが見られ、このような知見は、二種類「けど」類の判別および「言いさし」に関する産出のための記述に考える手がかりを与えることができる。

Ⅲ. 学習者のレベル・母語に即したコース・デザイン

ア) シラバス

まず、シラバスから考えると、庵(2013:15)は現行の初級シラバスについて、「過剰」である一方、「過小」な部分もあると述べ、具体的に「一方では不要不急のものを導入して学習者に無駄な努力を課し、もう一方では「文法」は初級で終わり」という枠組みを作り上げることで、学習者が真に必要な日本語力を身につける機会を与えていないという二重の意味で問題」を批判している。現在の日本語初級において、「けど」類は初級前半に導入されているが、「接続助詞」として取り入れる場合が多い。そこで、初級シラバスについて考える際に、「言いさし」を文法項目として提示する必要があると考えられる。

「言いさし」を日本語教育への取り入れることについて、様々な視点から示唆されているが、一つの文法項目として提示するような示唆は、管見の限り、まだ見当たらなかった。

岡田(1991)は、「～ました」「～ます」と言い切る表現は、真面目で正確な返答であるが、あくまでも受身的な発話姿勢であるため、日本語の会話においてほとんど現れないと指摘した上で、文が不完全であればあるほど、相手との話を進める上での協力姿勢は強まり、楽しく積極的な会話になると述べている。さらに、日本語教育の現状では、「～です」「～ます」で相手への応答を終える文例・会話例を素材としている教材が多いが、それは、消極的なコミュニケーションの姿勢を育成しているとも見られると批判し、「言いさし」のような「言い切らない」表現を文例・会話例として取り入れることを示唆している。

また、柏崎(1993)は、日本語において、「依頼の意図を表すとすると「～ただいただけませんか」が教室で提示されることが多いが、実際の談話ではそれ以外にも心的態度や場面状況によって、様々な表現が選ばれており、「ちょっとわからないことはあるんですが」などのような間接的な言い方は、察しの言語と言われる日本語では特によく見られるため、指導する必要があるとしている。

しかし、「言いさし」は、話し手と聞き手による前提である共有知識に支えられた察しの働きに依存しており(本名 1997)、多くの情報を共有し背景や文脈に依存する割合が高い日本的コミュニケーションの特徴とされてきた。母語に「言いさし」があまり見られない中国語学習者に対する日本語文法教育を行う際には、「言いさし」が文例・会話例であるとして重要視されないため、一つの文法項目として取り上げ、それが果たす機能および共起表現などを一緒に提示する必要がある。

庵(2013:55)は、現在の日本語文法教育における「外国語教育は一般的(generic)にしなければならない」現象を批判し、「シラバスは何語の話者に対しても使えるように作らなければならない、特定の話者に対しての教育ということは考えるべきではない」とした上、「日本語学習者の7割を中国語話者が占めるという現実に鑑みれば、母語をタブー視しないで母語の転移を積極的に利用することが重要

なのである」と指摘している。

イ) 教授法

それから、教授法についてみよう。

まず、「言いさし」に関する聞く教育は、予測・推測能力を高める練習問題が望ましい。松崎（2007:145）は、聞くための日本語教育文法を行うために、省略や発話意図などの、明示されない情報の推測」「能力不足や雑音などで偶発的に聞けなかった情報の推測」「一文単位の予測。後が省略された言いさし表現の理解」「2文以上の談話単位の展開予測」という4点を支える知識の習得が必要であるとしている。「言いさし」の知覚に関わる音韻的・統語的・形態的・意味的情報、共起表現からの推測・予測などの諸要素などは、文法練習の際に取り上げて練習することで学習可能となると考えられる。

さらに、松崎（2007:145）は、聞くための教育文法を的確に再構築をするためには、空欄補充練習や後続文完成練習を通じて、推測力・予測力を高めることが重要であると指摘しているように、「言いさし」に関する応答完成練習や「接続助詞」との判別練習などを行うことにより、聞き取った音声形態と意味理解に結びつきを実感させる必要がある。

特に中国国内の日本語教育の場合、聞く練習の材料として、ニュースや、説明文などの独話が多いため、コミュニケーションを目標とする聞くための文法教育とは離れてしまう。今後、複数の人間と共同作業で構成するような対話も取り入れ、input≠intakeであることを常に意識しながら、学習者が「言いさし」の「聞き方」を育成していく必要がある。

それから、話すための練習では、現在中国の日本語教育現場では、書き下ろされた会話モデルを読む、あるいはそのモデルを基に会話を創作してみる（森 2015）のような活動が多く行われており、実際の会話参加者にとっての核とも言える逐次性、偶発性という側面を欠いている（森 2015）ため、「言いさし」が使用される場面を提示し、学習者の主体性を発揮させるロールプレイなどのような授業活動も活用する必要がある。

ウ) シラバスと教授法との結び付き

シラバスと教授法との結び付きから考えると、庵（2013:11）は現在日本語教育取り巻く外的状況は多いく変化しているにもかかわらず、日本語教育が変わらない大きな原因の一つに、「教授法における What と How の問題」があることを指摘した上で、What の部分で学習者に対して、当該の項目をどのように説明すべきかについて検討し、その議論を踏まえて、そうした説明をどのように教室活動に落とししていくかを How の部分で検討するというのが「What と How の望ましい関係」である。その上で、両者を有機的に結びつけた教室活動のデザインや教科書の内容についてさらに議論を深めていくべきであるとしている。

庵(2013:11)に従うと、「言いさし」という文法項目について、取り立てて教えた後、「聞く」・「話す」という二種類の練習が必要であると考えられる。まず、中国語母語話者は、日本語学習者の中で最も多くの割合を占めており、かつ聴解が困難であると言われている(日本国際協会・国際交流基金, 2004)。特に、中国在住の日本語学習者の聞く能力は、4 技能の中で最も上達しにくいものであると指摘されている。中国語は音調言語であるため、韻律に関する知覚が敏感であるはずである中国人学習者は、今回の実験においては、「言いさし」に関する知覚に過剰般化が見られ、韻律知覚と意味機能との結びつきに困難がみられることがわかった。

そこで、授業で「言いさし」に関する知覚処理および予測・推測の手がかりを提示した後、各場面における「言いさし」を提示して聞き方を活用できるかどうかを観察し、また「言いさし」の使用機能も提示し、ロープレイ、ペアワークなどの活動を通じて「言いさし」の運用力を高める必要がある。

本研究から得られた結果は、まず、「言いさし」に関する知覚処理・意味理解、およびこれからの第 2 言語習得における知覚構築につながると考えられる。さらに、「言いさし」の知覚情報処理に役に立つ音響的・統語的・意味的・形態的なパラメータによって、聞く面から「言いさし」に関する知覚トレーニングが改善され、学習者に理解やすい産出のための文法記述が開発されることを期待する。

10.3 今後の課題

本研究は学習者の「言いさし」の習得難点に焦点を当てて、韻律的・統語的・意味的・形態的に母語話者と学習者の使用実態を考察し、知覚に影響を与える要因を明らかにした。本節では、各章で残された問題点をまとめ、本論文を終えることにする。

第 4 章では、『名大会話コーパス』を使用して母語話者における「言いさし」の統語的・意味的・形態的な使用実態を考察した。しかし、日本語教育における「けど」類による「言いさし」の研究は、名大会話コーパスを用いた文字面上の研究だけでは十分ではない。その理由は次の通りである。まず、20 代の若者同士の雑談が多く含まれている名大会話コーパスは全年齢層をカバーしているわけではないので、職場の会話及び 40 代~60 代の中高齢層の談話資料も必要となってくる。

次に、名大会話コーパスは雑談が中心となっており、発話場面や発話者の背景などが限られているため、考察された使用実態の傾向が偏っている恐れがある。そのため、考察の結果を日本語教育へ応用するには若干の修正が必要である。したがって、今後は、より多様なデータを収集し、さらに考察を行うことが課題である。

また、庵(2011:79)が日本語教育文法について、「日本語記述文法と比較した場合の日本語教育文法の最大の特徴は、後者が(第一義的には)産出を目的とするも

のであるという点にある。産出を目指す場合、記述は使いこなしやすいものである必要がある。」と述べているように、本稿の研究結果を具体的にいかに「言いさし」に関する指導現場につなげればいいのかという問題も今後の課題として解決する必要がある。

第5章では、中国語コーパスを使用して中国語における「言いさし」の使用実態を考察した。しかし、中国語では「言いさし」の存在について様々な議論がなされており、その実態はまだ明らかになっていない。今後日本語と中国語のそれぞれの言語における「言いさし」の使用実態について、音声面も含めてさらに考察していきたい。また、中国語における接続表現の機能、「けど」類と語気助詞との対応について、今後も課題として考察していきたい。

第6章では、『日本語話し言葉コーパス』を使用して母語話者における「言いさし」の韻律的な使用実態を考察した。しかし、ポーズに関する考察は、まだ行われていない。郡(1996)では、ポーズの長さが文の切れ目の判断基準として決定的に重要であることを指摘した上で、「ポーズが0.5秒を超えるあたりから急激に文末という判断が増え、1.2秒以上になるとほぼ確実に文末と判断されている。文末かどうかの境目は0.85秒あたりである。」と述べているが、コーパスに基づいた研究ではないため、今後コーパスを使用して検証する必要がある。

第7章では、中国人学習者と日本語母語話者に対して「言いさし」に関する情報処理および理解手がかりについてアンケート調査を実施した。調査問題が少ないため、手がかりがまだ明らかになっていない部分も存在する。今後発話思考法などの研究方法を使用してさらに解明していく。

第8章では、中国語及び日本語の両言語話者における「言いさし」の使用状況を調査した。しかし、各場面における中国語話者における「言いさし」の使用情報がまだ明らかになっていないため、今後さらなる調査が必要である。

第9章では、中国人学習者と日本語母語話者に「言いさし」の音声知覚を明らかにするために、聴取実験を行った。引き延ばしの音調に関する知覚状況は最終モーラ長しか観察していないため、対話および独話における相違が大きく見られた。今後母音長にも視野に入れて考察する。

以上のような課題を遂行するためには、実験音声学や認知心理学、および言語学の融合の手法が必要となると考えられる。今後、本研究を発展させ、日本語教育文法における「言いさし」に関する研究の全容を明らかにしていきたい。

謝辞

本論文は、筆者が一橋大学大学院言語社会研究科第二部門博士後期課程在学中に、同大学院言語社会研究科庵功雄教授のご指導の下に行ったものです。本論文をまとめるにあたり、終始暖かい激励とご指導を頂いた庵功雄先生に心より感謝申し上げます。庵功雄先生にご指導頂いたからこそ学際研究を行うことが可能となりました。

また、第6章および第9章研究に関して、小磯花絵先生に本研究の音声学的なご意見を頂きました。さらに、本論文の音声刺激の作成に関する音声・音響的なアプローチ、Rの使い方、統計の知識、関連文献を紹介していただき、厚くお礼申し上げます。

本論文を提出するにあたり、石黒圭先生に副査をお願いして明晰かつ厳密にそして丁寧で温かいご指導をいただくことを通して、私自身の至らなさを実感することができたことは今後の努力の糧になるものであります。石黒圭先生には、一橋大学に入学した時から研究やキャリアデザインなどについて有益なご指摘や心温まる励ましをいただき、研究に対する姿勢や妥協せずに頑張ることの大切さを教えてくださいました。研究者として大切なことを学ばせていただいたと深く感謝しております。

在学中、西谷まり先生に常に暖かい激励をいただき、感謝申し上げます。庵ゼミの修了生の宮部真由美先輩には、論文の修正、本論文の完成に至るまでご協力頂き、心より深く感謝いたします。そして、庵ゼミおよび小磯ゼミの皆さまにご助言や暖かい激励を頂き、ここに厚く御礼申し上げます。

筆者が本研究の重要性を感じ興味を持つようになったのは、当時、愛媛国際日本語研究会（えひめJASL）を見学した時でした。学部時代に日本語教育専攻だったことから、えひめJASLで日本語教師の卵として教育現場に触れたお陰で日本語教師になる決意が固まりました。卒業した後、夢を追って一人で上京し、一橋大学大学院に進学でき、進学後博士後期課程までこのテーマを持って庵功雄先生の下で研究できたことは、今までの人生の中で、一番幸運であったことだと思います。入学後、音声学に関する知識、コーパスの使用や統計処理の仕方がわからない状態でしたので、自分に落胆した日々は数えきれないほどです。そのような覚えのない私に、博士論文を提出する直前までご指導ご鞭撻を賜った庵先生に感謝いたします。

実験・調査を行うにあたっては、様々な方々からの協力、ご支援により可能となりました。実験の実施にご協力して頂いた、一橋大学の大学院、江南大学、TA第一学研の雍婧先生、廈門大学嘉庚学院の林筱先生、行知学園日本語学校・行知学園株式会社人事部の黄帆怡部長、および学生の皆様に感謝いたします。

大学院に入ってからこの論文を完成するまで、あっという間に6年半も経ちました。「好きこそもの上手なれ」「末路哀れは覚悟の前やで」を肝に銘記して研究生活を続けてきましたが、経済的・体調的な苦境などの様々な試練に直面し

ながら、論文に攻められ、書いては修正してまた書いては修正するという繰り返しの苦痛もあり、一本の論文を完成した瞬間の満足は言葉で表せないほど幸せな時もありました。

最後に、今まで異国における 10 年間の留学生生活をいつも応援し、温かく見守ってくれた両親、同大学院の先輩である夫に心から深く感謝いたします。いつも心身ともに支えてくれている両親と、夫に本論文を捧げたいと思います。

付録 聴取実験の ExperimentMFC ファイル

```
"ooTextFile"  
"ExperimentMFC 5"  
stimuliAreSounds? <yes>  
stimulusFileNameHead = "Sounds/"  
stimulusFileNameTail = ".wav"  
stimulusCarrierBefore = ""  
stimulusCarrierAfter = ""  
stimulusInitialSilenceDuration = 0.5 seconds  
stimulusMedialSilenceDuration = 0  
numberOfDifferentStimuli = 100
```

"D1" "| 終了 | 継続"

"D1" "| 継続 | 終了"

"D2" "| 終了 | 継続"

"D2" "| 継続 | 終了"

"D3" "| 終了 | 継続"

"D3" "| 継続 | 終了"

"D4" "| 終了 | 継続"

"D4" "| 継続 | 終了"

"D5" "| 終了 | 継続"

"D5" "| 継続 | 終了"

"D6" "| 終了 | 継続"

"D6" "| 継続 | 終了"

"D7" "| 終了 | 継続"

"D7" "| 継続 | 終了"

"D8" "| 終了 | 繼續"

"D8" "| 繼續 | 終了"

"D9" "| 終了 | 繼續"

"D9" "| 繼續 | 終了"

"D10" "| 終了 | 繼續"

"D10" "| 繼續 | 終了"

"D11" "| 終了 | 繼續"

"D11" "| 繼續 | 終了"

"D12" "| 終了 | 繼續"

"D12" "| 繼續 | 終了"

"D13" "| 終了 | 繼續"

"D13" "| 繼續 | 終了"

"D14" "| 終了 | 繼續"

"D14" "| 繼續 | 終了"

"D15" "| 終了 | 繼續"

"D15" "| 繼續 | 終了"

"D16" "| 終了 | 繼續"

"D16" "| 繼續 | 終了"

"D17" "| 終了 | 繼續"

"D17" "| 繼續 | 終了"

"D18" "| 終了 | 繼續"

"D18" "| 繼續 | 終了"

"D19" "| 終了 | 繼續"

"D19" "| 繼續 | 終了"

"D20" "| 終了 | 繼續"

"D20" "| 繼續 | 終了"

"D21" "| 終了 | 繼續"

"D21" "| 繼續 | 終了"

"D22" "| 終了 | 繼續"

"D22" "| 繼續 | 終了"

"D23" "| 終了 | 繼續"

"D23" "| 繼續 | 終了"

"D24" "| 終了 | 繼續"

"D24" "| 繼續 | 終了"

"D25" "| 終了 | 繼續"

"D25" "| 繼續 | 終了"

"S1" "| 終了 | 繼續"

"S1" "| 繼續 | 終了"

"S2" "| 終了 | 繼續"

"S2" "| 繼續 | 終了"

"S3" "| 終了 | 継続"

"S3" "| 継続 | 終了"

"S4" "| 終了 | 継続"

"S4" "| 継続 | 終了"

"S5" "| 終了 | 継続"

"S5" "| 継続 | 終了"

"S6" "| 終了 | 継続"

"S6" "| 継続 | 終了"

"S7" "| 終了 | 継続"

"S7" "| 継続 | 終了"

"S8" "| 終了 | 継続"

"S8" "| 継続 | 終了"

"S9" "| 終了 | 継続"

"S9" "| 継続 | 終了"

"S10" "| 終了 | 継続"

"S10" "| 継続 | 終了"

"S11" "| 終了 | 継続"

"S11" "| 継続 | 終了"

"S12" "| 終了 | 継続"

"S12" "| 継続 | 終了"

"S13" " | 終了 | 継続"

"S13" " | 継続 | 終了"

"S14" " | 終了 | 継続"

"S14" " | 継続 | 終了"

"S15" " | 終了 | 継続"

"S15" " | 継続 | 終了"

"S16" " | 終了 | 継続"

"S16" " | 継続 | 終了"

"S17" " | 終了 | 継続"

"S17" " | 継続 | 終了"

"S18" " | 終了 | 継続"

"S18" " | 継続 | 終了"

"S19" " | 終了 | 継続"

"S19" " | 継続 | 終了"

"S20" " | 終了 | 継続"

"S20" " | 継続 | 終了"

"S21" " | 終了 | 継続"

"S21" " | 継続 | 終了"

"S22" " | 終了 | 継続"

"S22" " | 継続 | 終了"

"S23" "| 終了 | 継続"

"S23" "| 継続 | 終了"

"S24" "| 終了 | 継続"

"S24" "| 継続 | 終了"

"S25" "| 終了 | 継続"

"S25" "| 継続 | 終了"

numberOfReplicationsPerStimulus = 1

breakAfterEvery = 20

randomize = <PermuteBalancedNoDoublets>

startText = "話し手が、この発話のあと、

発話をそのまま継続すると思うかか、それとも

終了すると思うかか、回答してください。

クリックして実験を始めてください。"

runText = "発話が「継続」するか「終了」するか教えてください。"

pauseText = "休憩です。再開するにはクリックしてください。"

endText = "実験が終了しました。

ご協力ありがとうございました。"

maximumNumberOfReplays = 3

replayButton = 0.8 0.9 0.8 0.9 "Replay" ""

okButton = 0 0 0 0 "" ""

oopsButton = 0 0 0 0 "" ""

responsesAreSounds? <no> "" "" "" "" 0 0

numberOfDifferentResponses = 2

0.2 0.4 0.4 0.6 "" 40 "" "left"

0.6 0.8 0.4 0.6 "" 40 "" "right"

numberOfGoodnessCategories = 0

本稿の各章と既発表論文・口頭発表との関係

【第1章】序論

書き下ろし

【第2章】本研究における「言いさし」の捉え方

書き下ろし

【第3章】日本語教育文法と「言いさし」に関する先行研究

書き下ろし

【第4章】『名大会話コーパス』における「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴

田昊 (2013) 「『言いさし』の『けど』類の使用実態に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」『日本語教育』156, pp. 45 - 51, 日本語教育学会

【第5章】現代中国語コーパスにおける中国語の「言いさし」の形態・統語・意味的な特徴

田昊 (2015) 「中国語における「けど」類で終わる「言いさし」の扱い方」『一橋大学国際教育センター紀要』6, pp. 95-108, 一橋大学国際教育センター

【第6章】『日本語話し言葉コーパス』における「言いさし」の音声的な特徴

田昊 (2016) 「話し言葉に現れる2種類の「けど」類の判別：日本語話し言葉コーパスの分析を通して」『一橋日本語教育研究』4, pp. 107-116, ココ出版

【第7章】中国人学習者における「言いさし」の視覚情報処理状況に関する調査

書き下ろし

【第8章】中国語母語話者が母語での「言いさし」の認知・産出状況に関する調査

田昊 (2015) 「日中両言語における「言いさし」の使用実態に関する一考察：「断り」場面に注目して」第七屆漢日対比語言学研討会, 中国上海, 上海外国語大学

【第9章】中国人学習者における「言いさし」の聴覚情報処理に関する実験

田昊 (2017) 「中国人学習者の二種類の「けど」類に関する知覚—聴取実験に基づく検討—」言語処理学会第23回年次大会 (NLP2017), 筑波大学

【第10章】結論および日本語教育への示唆

書き下ろし

引用文献

【日本語文献】

- 秋元実治 (2001) 『文法化—研究と課題—』 英潮社
- 庵功雄 (1998) 「テキスト言語学の理論的枠組みに関する一考察」 『一橋大学留学生センター紀要』 01、pp.33-52
- (2000) 「教育文法に関する覚え書き—「スコープの「のだ」」を例として—」 『一橋大学留学生センター紀要』 03、pp.33-41
- (2010) 「産出のための日本語教育文法—「は」と「が」の使い分けを例として—」 『台湾日本語文学報』 28、pp.40-55
- (2011a) 「日本語記述文法と日本語教育文法」 森篤嗣・庵功雄 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』、ひつじ書房、pp.1-12
- (2011b) 「100%目指さない文法」の重要性」 森篤嗣・庵功雄 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』、ひつじ書房、pp.79-94
- (2012a) 「日本語教育文法の現状と課題」 『一橋日本語教育研究』 01、pp.1-12
- (2012b) 『新しい日本語学入門』 スリーエーネットワーク
- (2013) 『日本語教育・日本語学の「次の一手」』 くろしお出版
- (2014) 「日本語学と日本語教育の関係について—日本語教育の役に立つ研究とは?—」 『日本語学研究』 40、pp.111-124
- 庵功雄・森篤嗣 (2011) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 ひつじ出版
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法バンドブック』 スリーエーネットワーク
- 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄 (2006) 「第七章 韻律情報」 『報告書 日本語話し言葉コーパス構築法』
- 池田裕 (1995) 「文末表現の重要性」 『月刊言語』 24(13)、pp.128-129
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断わり」という発話行為について」 『日本語教育』 79号、pp.41-52
- 石川智 (2005) 「文末表現「けど」のポライトネス—OPIから見た母語話者と学習者の使用状況—」、鎌田修他編 『言語教育の新展開: 牧野成一教授古稀記念論集』、pp.349-364、ひつじ書房
- 市川薫 (2011) 『対話のことばの科学—プロソディが支えるコミュニケーション—』 早稲田大学出版部
- 石黒圭 (2014) 「講義の談話における「が」「けれども」の用法」 『一橋大学国際教育センター紀要』 05、pp.3-15
- 石原慎一郎 (2014) 「日本語の統語とイントネーション」 『日本語学』 33(7)、pp.16-27

- 石本祐一・小磯花絵 (2012) 「日本語話し言葉コーパスを用いた統語境界におけるイントネーション句変動の分析」 『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp. 239-246
- (2013a) 「自発発話におけるイントネーション句単位の F0 変動の特徴」 『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.333-342
- (2013b) 「日本語話し言葉コーパスを用いた対話音声のイントネーション句の分析」 『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.159-166 国立国語研究所
- (2014) 「独話音声と対話音声の発話末の F0 変化」 『第5回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.181-188.
- 伊藤亜紀 (2016) 「日本語学習者の使う『言いさし文』の傾向」 『〔2016 (平成28年度) 第2回日本語教育学会研究集会 (中部地区・愛知県立大学) 発表要旨〕』
- 佐藤勢紀子 (1993) 「言いさし『…が／けど』の機能—ビデオ教材の分析を通じて—」 『東北大学留学生センター紀要』 01、 pp.39-48
- (1994) 「中上級日本語教育における中断文『…が／けど』の扱い方」 『東北大学留学生センター紀要』 02、 pp.17-26
- 井上優 (2003) 「文接続の比較対照—日本語と中国語—」 『言語』 32-3、 pp.54-59
- (2015) 「「気持ちの言語化」の日中対照」 『中日理論言語学研究会第40回記念大会資料』
- 岩崎勝一・大野剛 (1999) 「「文」再考—会話における「文」の特徴と日本語教育への提案」 佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育—実用的言語理論の構築を目指して—』 くろしお出版、 pp.129-144
- 岩田一成 (2011) 「数量表現における初級教材の「傾き」と使用実態」 庵功雄・森篤嗣 (編) 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 ひつじ出版、 pp.101-122
- 尹松 (2001) 「日本語学習者のビリーフについての意識調査—中国首都師範大学の場合—」 『日本語教育研究』 41、 pp.115-129、 言語文化研究所
- 上村昂史 (2014) 「『言いさし文』における『という』の諸用法—終助詞的用法に関する一考察—」 『言語科学論集』 20号、 pp.31-48
- 上村幸雄 (1989) 「日本語のイントネーション」 『ことばの科学』 03、 pp.193-220
- 元智恩 (2000) 「断わりとして用いられた日韓の『言いさし文』についての語用論的分析」 『日語日文学』 13、 pp.81-95、 大韓日語日文学会
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」 『学苑』 662、 pp.27-42
- 内田安伊子 (2001) 「「けど」で終わる文についての一考察—談話機能の視点から—」 『日本語教育』 109、 pp.40-49
- 大岩正伸 (1949) 「文の定義」 『国語学』 3、 pp.1-24

- (1971) 『話しことば論』 明治書院
- 大河内康憲 (1967) 「複文における分句の接続関係」『中国語学』176、pp.1-12
- 大関浩美 (2012) 「「誤用分析」「習得順序研究」から抜け出すことの必要性—SLA 研究は学習者言語から何を明らかにしようとしているのか—」『2012年度第二言語習得研究発表会予稿集』
- 大島 デイヴィッド義和 (2013) 「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」『国際開発研究フォーラム』43、pp.47-63
- 大塚淳子 (1998) 「日本語学習者の音調から表現意図を判断する能力の習得について—中国語・韓国語母語話者の聴取実験より—」『言語文化と日本語教育』16、pp.34-45
- 大槻文彦 (1897) 『広日本文典』大槻文彦出版
- 大堀壽夫 (2000) 「言語的知識としての構文—複文の類型論に向けて—」坂原茂編『認知言語学の発展』、ひつじ書房、pp.281-31
- (2002) 『認知言語学』東京大学出版会
- 大山理恵 (2016) 「日本語学習者におけるアクセント句の習得—音声指導を重視した授業実践の効果—」『同志社大学 日本語・日本文化研究』14、pp.91-103
- 岡崎眸・岡崎敏雄 (2001) 『日本語教育における学習の分析とデザイン—言語習得過程の視点から見た日本語教育—』凡人社
- 岡田安代 (1991) 「日本人はなぜ文末まで言わないのか?—会話を成り立たせる「共話」の原理—」『月刊日本語』4(1)、pp.9-13
- 沖裕子 (2008) 「談話論からみた「文」と「発話」」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『シリーズ文と発話2「単位」としての文と発話』、ひつじ書房、pp.45-69
- 荻原稚佳子 (2000) 「日本人の言いさし表現に対する察しの現れ方」『講座日本語教育』36、pp. 69-86、早稲田大学日本語研究教育センター
- (2002) 「日本語インタビューにおける『言いさし』の連鎖—対人コミュニケーションの観点から—」『異文化コミュニケーション研究』14 (3)、pp.57-77
- (2008) 『言いさし発話の解釈理論—「会話目的達成スキーマ」による展開—』春風社
- (2011) 「日本語母語話者による自由会話における「言いさし」の使用と解釈」『明海大学外国語学部論集』23、pp. 1-17
- (2015) 「話し手の言いさし使用の実態と聞き手の解釈—会話の目的を基にした推量を中心に—」『日本語学』34(7)、pp.52-65 明治書院
- 小熊均 (1984) 「日本語の対話に関する心理学的研究」『日本語学』3 (8)、pp.60-66
- 尾崎喜光 (2006) 「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」国立国語研究所 (著) 『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版 pp.89-114
- 海寶康臣 (2010) 「話し手の論理と聞き手の論理は日本語にどのように反映されているのか—英語との比較を通して—」『立命館言語文化研究』22(2)、pp.113-128

- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に－」
『日本語教育』79、pp.53-63
- 加藤重広 (2013) 『日本語統語特性論』北海道大学出版社
- 鳥井克之 (2004) 「再論中国語の複文について」『外国語教育研究』08、pp.75-97、
関西大学
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (2002) 「待遇表現としての「誘い」」『早稲田大学
日本語教育研究』創刊号、pp.21-30、早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 河野俊之 (1992) 「日本語母語話者と外国人日本語学習者の文末音調の知覚の差
違」『日本語の韻律に見られる母語の干渉 (3) －音響音声学的対照研究－』
(文部省重点領域研究『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育
に関する総合的研究』研究成果報告書) pp.113-130.
- 金城克哉 (2002) 「文末表現「けれども」の機能についての再考」『琉球大学欧
米文化論集』46、pp.43-63、琉球大学法文学部
- 菊地康人・増田真理子 (2009) 「初級文法の現状と課題」『日本語学』(9) pp.64-74、
明治書院
- 楠本徹也 (2015) 「中途終了型発話文「～けど」「～ので」の要求・断り行為
場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センタ
ー論集』41、pp.47-60、東京外国語大学留学生日本語教育センター
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろし
お出版
- 郡史郎 (1996) 「音声の特徴からみた文」『日本語学』15(9)pp.60-70、明治書院
—— (2008) 「話し言葉の文法と韻律」『日本語学』28(5)pp.142-152、明治
書院
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) －対話資料による研究 (国立
国語研究所報告 18) 』秀英出版
—— (1963) 『話しことばの文型(2)－独話資料による研究(国立国語研究
所報告 21)』秀英出版
- 小磯花絵 (2008) 「音声談話における発話の終了性を備えた単位に関する一考察」
串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『シリーズ文と発話 2 「単位」としての
文と発話』ひつじ書房、pp.95-131
—— (2010) 「話者交替における統語的・韻律的特徴の役割－日本語三者会話
の定量的分析に基づく考察－」『音声研究』14(3)、pp.13-26
—— (2013) 「日本語話し言葉における複合境界音調の役割」『国語研プロジ
ェクトレビュー』4(2)、pp.110-117
—— (2014) 「『日本語話し言葉コーパス』に見るフィラーの特徴」『日本語
学』33(15)、pp.88-93
—— (2015) 「『日本語話し言葉コーパス』に見る句末境界音調の特徴」『日
本語学』34(13)、pp.62-66
- 小磯花絵・石本祐一 (2012) 「日本語話し言葉コーパスを用いた「発話」の韻律
的特徴の分析－イントネーション句を切り口として－」『第1回コーパス日

- 本語学ワークショップ予稿集』 pp.167-176
- 小林ミナ (2005a) 「日常会話にあらわれた「ません」と「ないです」」『日本語教育』 125、 pp.9-17
- (2005b) 「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、 pp.23-42
- 三枝令子 (2007) 「話し言葉における「が」「けど」類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』 10、 pp.11-27
- (2011) 「書評論文 白川博之著 『「言いさし文」の研究』」『日本語文法』 11(2)、 pp.137-144、日本語文法学会
- 佐久間まゆみ (2002) 「3 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (編) 『日本の文法 4 複文と談話』岩波書店 pp.119-189
- 迫田久美子 (2011) 『第二言語習得研究』アルク
- 定延利之 (2006) 「文節と文のあいだー末尾上げをめぐるー」音声文法研究会 (編) 『文法と音声V』くろしお出版、 pp.107-133.
- 佐藤勢紀子 (1994) 「中上級日本語教育における中断文「・・・が/けど」の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』 02、 pp.17-26
- 佐藤雄一 (1994) 「話しことばの文の諸相から」『国文学 解釈と鑑賞』 59(1)、 pp.70-77
- 鮫島重喜 (1998) 「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程ー中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」の場合」『日本語教育』 98、 pp.73-84
- 柴田智子 (2012) 「日本語学習者の韻律習得ー統一的調査ー」畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文 (編) 『第二言語習得研究と言語教育』くろしお出版、 pp.214-236
- 清水克正 (2008) 「L2 音声学習とその理論的背景」『名古屋学院大学論集「言語・文化篇」』 19、 pp.81-87
- 周升干 (2012) 「断る場面における理由の表現形式ー中国の日本語学習者と日本語母語話者を比較してー」『言語文化学研究 言語情報編』 07、 pp.27-44
- 昇地崇明・Veronique Auberge・Albert Rilliard (2007) 「発話態度の文化的特性と『偽の友達』ー日仏語対照研究を通してー」定延利之・中川正之 (編) 『音声文法の対照』くろしお出版、 pp.55-78
- 白川博之 (1990) 「「カラ」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要第 2 部』 39、 pp. 249-255
- (1996) 「『けど』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』 06、 pp.9-17
- (2002) 「記述的研究と日本語教育：「語学的研究」の必要性和可能性」『日本語文法』 2-2、 pp.62-80 日本語文法学会
- (2005) 「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』、くろしお出版、 pp.43-62
- (2008) 「『言いさし文』の談話機能」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編)

- 『シリーズ文と発話2「単位」としての文と発話』ひつじ書房、pp.1-25
- (2009) 『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- (2015) 「「言いさし文」の文法」『日本語学』34(7)、pp.2-13 明治書院
- 高木文也 (2012) 「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる「中途終了発話文」の出現とその機能」『社会言語科学』15(1)、pp.89-101
- 高津楯三郎 (1891) 『日本中文典』金港堂
- 高橋太郎 (1993) 「省略によってできた述語形式」『日本語学』12(10)、pp.18-26
- 田中章夫 (1973) 「終助詞と間投助詞」鈴木一彦・林巨樹(編)『品詞別日本文法講座9 助詞』、明治書院、pp.209-247
- 曹英南 (1998) 「『けど』で言い終わる発話の語用論的研究:場面における言いさしの『けど』を中心に(第16回日本言語文化学会発表要旨)」『言語文化と日本語教育』16、pp.80-83、お茶の水女子大学日本言語文化学会
- (1998) 「「けど」で言い終わる発話の語用論的研究:場面における言いさしの「けど」を中心に(第16回日本言語文化学会発表要旨)」『言語文化と日本語教育』16、pp.80-83
- (2000) 「『けど』で終わる発話の語用論的研究—『言い終わり』の『けど』を中心に—」『言語文化と日本語教育』19、pp.89-100、お茶の水女子大学
- (2002) 「韓国語母語話者における言いさし表現の意識調査—述部まで述べた言い切り表現との比較を通して—」『言語文化と日本語教育』23、pp.25-37、お茶の水女子大学
- (2004) 「字幕付き映画における韓日の言いさし表現の対応関係:「述部有り」の言いさし表現を中心として(村松賢一先生退官記念号)」『言語文化と日本語教育』27、pp.102-115 お茶の水女子大学
- 張若星 (2015) 「中国人日本語学習者の韻律理解力について」『大阪大学言語文化学』24、pp.87-100
- 張麟声 (2011) 『中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語出版社
- 陳宜萱 (2013) 「台湾人中上級日本語学習者における文末省略の使用状況—日本語母語話者と比較して—」銘傳大学応用日語学系碩士論文
- 陳美玲 (1993) 「日本語の「けど」「が」と中国語の"但是"系の比較研究:翻訳小説を例として」『言語文化と日本語教育』6、pp.47-58、お茶の水女子大学日本言語文化学会
- (2002) 「台湾人日本語学習者の文末における「けど」「が」の習得についての一考察」(第23回日本言語文化学会発表要旨)『言語文化と日本語教育』23、pp.107-111、お茶の水女子大学
- 陳文敏 (2000) 「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話—表現形式及びその生起の理由—」『言葉と文化』1、pp.125-141、名古屋大学大学院国際文化研究科日本語文化専攻

- (2001) 「接触場面の会話に見られる『中途終了型発話』—台湾人上級日本語学習者の場合—」『言語と文化』2、pp.175-191、名古屋大学大学院国際文化研究科日本語文化専攻
- (2004) 『同年代の初対面同士の会話に見られるスピーチレベル・シフト—日本語母語話者と台湾人上級学習者との比較—』名古屋大学大学院博士学位論文
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- (1981) 『日本語の文法 (下)』財務省印刷局
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店
- 往住彰文 (1992) 「韻律生成の認知的メカニズム」『月刊言語』249号、pp.50-57
- 戸田貴子 (2008) 『日本語教育と音声』くろしお出版
- 都恩珍・崔善美 (2010) 「「断り」に対する「応答」の意味公式—日本語母語話者と中国人・韓国人日本語学習者の事例比較—」『桜花学園大学人文学部研究紀要』12、pp.65-76
- 永田良太 (2015) 「談話展開から見た接続助詞ケドの言いさし表現—トピック展開とターン・テークキングに着目して—」『日本語学』34(7)、pp.14-24
- 成田麻衣子 (2004) 「現代語における文末表現の分析—「ケド」で終わる文を中心に—」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』2、pp.83-89
- 新田小雨子 (2007) 『因果関係を表す接続表現の日中対照研究』早稲田大学博士学位申請論文
- 日本国際教育協会・国際交流基金 (2004) 『日本語能力試験の概要 2003年版 (2000年度試験結果の分析)』国際交流基金
- ネウストプニー, J.V. (1994) 「日本研究の方法論—データ収集の段階—」『待兼山論叢日本学篇』28、pp.1-24、大阪大学
- 野田尚史 (1989) 「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』くろしお出版、pp.131-157
- (2005a) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- (2005b) 「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp.1-20
- (2001) 「日本語学の解体と再生」『日本語言語学会第122回大会予稿集』、pp.29-34、日本語学会
- (2011) 「新日本語研究者列伝 寺村秀夫」『日本語学』30(10)、pp.84-93
- (2014) 「日本語学と日本語教育」曹大峰 (編) 『日語言語学与日语教育』pp.2-19、高等教育出版社
- 朴仙花 (2005) 「接続助詞で終わる日本語の言いさし表現—対人関係を中心に—」名古屋大学院国際言語文化研究科修士論文
- (2008) 「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について—『けど』『から』を中心に—」『言葉と文化』09、pp.253-270、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻

- (2010) 「OPI データにみる日本語学習者と日本語母語話者による文末表現の使用—接続助詞で終わる言いさし表現を中心に—」『言葉と文化』11、pp.217-235 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
- (2012) 「中国人日本語学習者による文末表現の使用に関する考察：断り発話を事例として」『言葉と文化』13、pp.95-113、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
- 畠弘巳 (1987) 「話しことばの特徴—冗長性をめぐって—」『国文学解釈と鑑賞』52 (7)、 pp.22-34
- 浜田麻里 (2010) 「〔書評〕白川博之著『「言いさし文」の研究』」『日本語の研究』6 (4)、 pp.137-142 日本語学会
- 林博司・水口志乃扶・小川曉夫 (2005) 「項の「文的」解釈と「発話的」解釈—呼びかけ詞の対象言語学的考察—」串田秀也・定延利之・伝康晴『シリーズ文と発話1 活動としての文と発話』ひつじ書房、pp.253-288
- 林明子・西沼行博・谷部弘子 (2011) 「日本語の発話末韻律の産出と知覚」『文法記述の諸相』、pp.65-97、中央大学出版部
- 原田松三郎 (1985) 「日本語と中国語における因果関係を表わす複文について」『神戸市外国語大学外国学研究』16、 pp.143-154、神戸市外国語大学外国語研究所
- 福岡昌子 (2012) 「韻律の知覚習得における方言別中国人学習者の中間言語研究」『三重大学国際交流センター紀要』07、 pp.13-26
- 藤森弘子 (1995) 「日本語学習者にみられる『弁明』意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』87、 pp.79-90
- 古田暁監修 (1996) 『異文化コミュニケーション「改訂版」』有斐閣選書
- 彭飛 (2004) 『日本語の配慮表現に関する研究—中国語との比較研究における諸問題—』和泉書院
- ポリー・ザトラウスキー (2005) 「情報処理、相互作用、談話構造からみた倒置と非言語行動との関係」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『シリーズ文と発話1 活動としての文と発話』ひつじ書房、pp.159-208
- 堀江薫・プラシャント・パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』研究社
- 堀江薫 (2014a) 「言語類型論・対照言語学の観点から見た日本語複文研究の動向と課題」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房、pp.545-558
- (2014b) 「主節と従属節の相互機能拡張現象と通言語的非対称性—日本語と他言語の比較を通じて—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房、pp.673-694
- 本名信行 (1997) 「言語教育と異文化間リテラシー：日本人が当面する問題点の社会言語学的考察」『異文化間教育』11号、pp.52-65 異文化間教育学会
- 前川喜久雄 (2013) 「日本語自発音声における final lowering の生起領域」『第27回音声学会全国大会予稿集』 pp.61-65

- (2014) 「『日本語話し言葉コーパス』の X-JToBI アノテーションから抽出される韻律上の発話スタイル」『音声研究』18(1)、pp.70-82
- 前川喜久雄・五十嵐陽介・菊池英明・米山聖子・小磯花絵 (2011) 「『日本語話し言葉コーパス』のイントネーションラベリング」『日本語話し言葉コーパス』DVD 付属マニュアル 国立国語研究所
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版
- 松崎寛 (2003) 「聞くための日本語教育文法」『2003 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.32-35
- (2005) 「聞くための日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp.127-146
- 丸山岳彦 (2007) 「デスネ考」『串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『シリーズ文と発話3 時間の中の文と発話』、ひつじ書房、pp.35-65
- (2008) 「『日本語話し言葉コーパス』の節単位情報」『日本語学』27(5)、pp.82-89、明治書院
- 丸山岳彦・柏丘秀紀・熊野正・田中英輝 (2004) 「日本語節境界検出プログラム CBAP の開発と評価」『自然言語処理』11(3)、pp.39-68、言語処理学会
- 丸山岳彦・高梨克也・内元清貴 (2006) 「第5章 節単位情報」小磯花絵・小椋秀樹 (編) 『日本語話し言葉コーパスの構築法(国立国語研究所報告 124)、pp.225-232、国立国語研究所
- 丸山直子 (1996a) 「話しことばにおける文」『日本語学』15(9)、pp.50-59、明治書院
- (1996b) 「話しことばの諸相」『第2回年次大会チュートリアル資料』 pp.41-58. 言語処理学会.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院
- (1959) 『続・現代語法序説—主語廃止論—』刀江書院 (復刊くろしお出版 1972)
- (1963) 『日本語の論理』くろしお出版
- 水谷信子 (1989) 『日本語教育の内容と方法：構文の日英比較を中心に』アルク
- (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』4(12)、pp.4-10、明治書院
- (2001) 『続日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- (2008) 「話し言葉の文法—英語との対照を中心に—」『日本語学』27(5)、pp.16-22、明治書院
- 水野義道 (1985) 「接続表現の日中対照—「主従複句」と「条件の接続」—」『日本語教育』56、pp.79-92
- 三牧陽子 (2015) 「言いさしに見るポライトネス」『日本語学』34(7)、pp.26-37、明治書院
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- (1987) 『敬語』岩波書店
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 峯布由紀 (1995) 「日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研

- 究』『日本語教育』86号、pp.65-80
- 三原嘉子(1995)「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』02 pp.79-89
- 村中淑子(1995)「句末・文末のイントネーションの機能と分類」『音声言語』05、pp.49-59
- 蒙韞(2008)「中国人日本語上級学習者の語用的転移の一考察—依頼に対する断り表現のポライトネスの表し方から—」『国際開発研究フォーラム』36、pp.241-254
- (2009b)「中国人日本語上級学習者の語用論的特徴の一考察—依頼に対する断りパターンから」『小出記念日本語教育研究会論文集』17、pp.53-71
- 森篤嗣(2011)「日本語教育文法のための研究手法」、森篤嗣・庵功雄(編)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』、pp.13-55、ひつじ書房。
- 森岡健二(1973)「文章展開と接続詞・感動詞」『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院
- 森純子(2015)「「言いさし」の事例から考える「文」と「行為」：日本語学習者は何を学ぶのか」『日本語学』34(7)、pp.38-50、明治書院
- 森田良行(1988)『基礎日本語1』角川書店
- 森山卓郎(1989)「文の意味とイントネーション」宮地裕(編)『講座日本語と日本語教育』第1巻、明治書院、pp.172-196
- (2004)「引き伸ばし音調について」音声文法研究会(編)『文法と音声IV』、くろしお出版、pp.231-255
- 森庸子(2001)「アクセントの final lengthening への影響」『音声研究』5(1)、pp.92-106
- 矢部弘子・西沼行博・林明子(2010)「中国人日本語学習者にみる発話末韻律の知覚：イントネーションとリズムの聴取実験」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』61(2)、pp.279-288
- 山本富美子(1989)「待遇表現としての文体」『日本語教育』69、pp.77-92
- 横森大輔(2005)「逆接表現の拡張用法とその語用論的效果に関する構文文法的考察—ケドの終助詞的用法を例に—」『日本語用論学会第8回大会発表論文集』1巻、pp.137-144、日本語用論学会
- (2006)「接続助詞の文末用法をもたらす要因—相互行為における参与者の認知の観点から—」『言語科学論集』12、pp.59-78、京都大学
- 横山紀子(2005)「「過程」重視の聴解指導の効果—対面場面における聴解過程の分析から—」『第二言語としての日本語の習得研究』8号、pp.44-63、凡人社
- 吉本啓(1996)「文の成り立ち」『日本語学』15(9)、pp.13-21、明治書院
- ラルフ・G・ニコルス影山裕子訳(1978)『聞き方で成功する』産能短大出版部
- 李曉博(2008)「日中両言語における言いさし表現の使用状況についての考察—発話機能とスピーチレベルの観点から—」『文体論研究』54、pp.1-16
- 劉曉萃(2014)「未完結文の使用における語用論的条件」『北海道大学大学院文

- 学研究科研究論集』14、pp.143-160
 —— (2016) 「未完結文における語用論的選好に関する研究」北海道大学博士論文
 劉月華・潘文娛・故韡著、相原茂監訳 (1988) 『現代中国語文法総覧 (上)』くろしお出版
 _____ (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』くろしお出版
 林茜茜 (2008) 「ブログにおける言いさし文」『大学院論文集』05、pp.47-65、杏林大学大学院国際協力研究科

【英語文献】

- Anderson, J.R. (1983) *The architecture of cognition*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Anderson, J.R. (1985) *Cognitive psychology and its implications*, (2nd Ed.) NY: W.H. Freeman.
- Best, C.T. and M.D. Tyler (2007) "Nonnative and second language speech perception: Commonalities and complementarities" In O. Bohn and M.J. Munro (eds.) *Language experience in second language speech learning: In honor of James Emil Flege*, 13-34. Amsterdam: John Benjamins.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, London: Longman.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness—Some Universals in Language Usage*. New York: Cambridge University Press. (田中典子(2011)監訳『ポライトネス言語使用におけるある普遍現象』研究社)
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the theory of syntax*, Cambridge: The MIT Press.
- Evans, Nicholas. (2007). "Insubordination and its uses", In Nikolaeva, Irina (ed) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, Oxford: Oxford University Press. pp. 366-431
- Flege, James Emil (1987). The production of 'new' and 'similar' phones in a

foreign language: Evidence for the effect of equivalence classification.
Journal of Phonetics 15:pp.47-65.

Hinds, John, (1982) *Ellipsis in Japanese*. Edmonton, Alberta. Linguistic Research

Iwasaki Shoichi (1993) "The Structure of the Intonation Unit in Japanese"
In Choi, Soonja(ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol3, pp.39-51.

Kato, Shigehiro. (2014). "Insubordination types in Japanese: What facilitates them?." *Asian and African Languages and Linguistics*, Vol.8. pp.9-30

Koiso Hanae Yasuo Horiuchi, Syun Tutiya, Akira Ichikawa, and Yasuharu Den. (1998) "An Analysis of Turn-Taking and Backchannels Based on Prosodic and Syntactic Features in Japanese Map Task Dialogues"
Language and Speech, Vol.41, Nos.3-4, pp.295-321

Kuno Susumu (1978) *Japanese: A characteristic OV language*, Lehmann, Winfred P. ed. *Syntactic Typology: Studies in the Phenomenology of Language*, Austin: University of Texas Press, pp.57-138

Major, R. C. (1987) "A model for interlanguage phonology," *Interlanguage phonology: the acquisition of a second language sound system*, Cambridge, MA: Newbury House, 101-124.

Ohori, Toshio. (1995) "Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology." In Masayoshi Shibatani & Sandra A. Thompson (eds.), *Essays in Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. pp.201-218.

Ohori, Toshio. (2000) "Framing effect in Japanese non-final clauses: toward an optimal grammar-pragmatics interface". *Berkeley Linguistic Society* 23. pp.471-480.

Pierrehumbert, Janet B. & Mary E. Beckman (1988) *Japanese tone structure* Cambridge: MIT Press.

Taguchi, Naoko. (2014) "Development of interactional competence in Japanese as a second language : use of incomplete sentences as interactional resources." *The Modern Language Journal* 98 pp.518-535

Umeda, Noriko (1982) "F0 declination is situation dependent," *Journal of Phonetics* 10, pp. 279-290.

【中国語文献】

黄成穩 (1990) 『複句』 人民教育出版社

乔承伟 (1997) 「外语听力技能的培养」 『短期外语强化教学论集』 04、
pp. 102-109 北京语言文化大学出版社、

邢福义 2001 《汉语复句研究》 商務印書館

赵恩芳 唐雪凝 《现代汉语复句研究》 山东教育出版社, 1998